

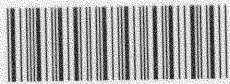
学位論文

民家展示施設における観覧者の観覧行動に関する研究

2007.3

横浜国立大学大学院

横浜国立大学附属図書館



11911018

江水是仁

平成 18 年度横浜国立大学学位請求博士論文

民家展示施設における観覧者の観覧行動に関する研究

A Study on the Visitor's Behaviour on the House Exhibition in Museum

横浜国立大学附属図書館



11911018

大学院工学府社会空間システム学専攻

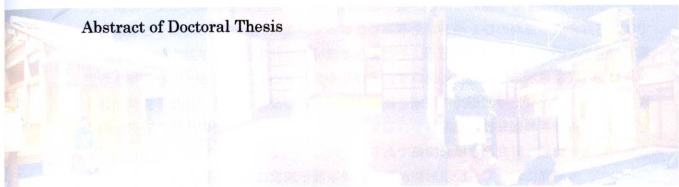
建築学コース博士後期課程

江水是仁

02SC202



論文要旨



Abstract of Doctoral Thesis



民家展示施設における観覧者の観覧行動に関する研究

論文要旨

1 研究の背景と目的

近年、ミュージアムにおいて、室内野外問わず、民家を展示する傾向がある。民家には、三次元空間に内在する学際的な情報が盛り込まれており、観覧者を学際的な視点に誘う上では、格好の展示資料のひとつといえる。したがって、効果的に民家に内在する情報を観覧者が感じているかどうか、評価し、そのような環境を整備することが重要と考える。

今まで、民家を展示する施設において、イロリやカマドの火入れなどといった行為が、観覧者にとってどれだけ積極的に民家を観覧する行動につながるかといった研究が行われてきたが、観覧者の観覧行動に注目し、観覧行動から、三次元空間に内在する情報を感じる展示環境を論じた研究などは未開拓である。

そこで、本研究において、展示形態が異なる民家展示施設における観覧者の観覧行動から、民家という三次元空間に内在する情報を、効果的に引き出すための環境について考察することを目的とする。

2 研究の方法

本研究では、同じ調査手法・分析手法を用いて、展示環境が異なる民家展示施設の観覧者の観覧行動を分析し、三次元空間に内在する情報を感じ取る観覧行動が発生する要因を分析する。

本研究では、建築物が環境に与える影響を軽減する住まいを展示する目的で、室内で茅葺、OMソーラー、緑化屋根、京都町屋、沖縄の間などの民家が再現展示されている日本科学未来館環境共生型住宅、八王子に存在した千人同心の住まいを展示する目的で、野外に移築して展示している八王子千人同心組頭の家を、調査対象民家展示施設とした。なお野外環境では、温度環境などが大きく観覧行動に影響を与えていると考えられるので、組頭の家では、寒冷期と温暖期の2回にわたって調査を行った。

調査手法は、調査対象民家展示施設の敷地内に足を踏み入れた観覧者が、民家を観覧し、敷地から出るまでの間、観覧行動を追跡し、どの場所で、どのくらいの時間をかけて、どの展示物を観覧したか、その際解説人員からの解説の有無などを、調査員が記録をする観覧行動追跡調査を用いた。その際、観覧者の視覚以外の感覚器官で、展示空間の中にある情報を感じようとする行動（＝参加体験）、解説人員からの解説を受け、解説人員と交流する行動（＝臨地解説）を、本研究では民家という三次元空間に内在する情報を感じ取る観覧行動（＝空間把握行動）として評価し、それらの観覧行動がどのような展示環境で発生したのか、観覧時間と観覧回数で分析・比較・考察をおこなう。

本研究では、以下のような研究課題を設定した。

研究課題 1：観覧者の興味・関心の違いによる観覧行動の差

民家という三次元空間に内在する情報には、民家という建物自体に興味関心を持つ人と、その空間の中で営まれた人々の生活に興味関心を持つ人がいると考えられる。本研究では、興味関心の違いにより、観覧場所や観覧行動の特徴を、野外で民家が展示されている組頭の家での観覧行動追跡調査から分析する。

研究課題 2：観覧場所の選択行動の違いによる観覧行動の差

野外に展示されている民家の場合、室内に上がって観覧する観覧者、野外から建物を観覧する観覧者と、観覧者によって観覧場所を選択する。したがって、観覧者が主に外観を中心に観覧する場合と、靴を脱いで室内に上がって観覧する観覧者の観覧行動の特徴を、野外で民家が展示されている組頭の家での観覧行動を、寒冷期と温暖期での観覧行動追跡調査から分析、比較、考察する。

研究課題 3：解説人員の介入の有無による観覧行動の差

解説人員からの介入により、観覧者の観覧行動にどのような影響を与えているのか、また解説人員の介入が起こりやすい展示環境などを、室内で民家が展示されている環境共生型住宅、温暖期と寒冷期における組頭の家での観覧行動追跡調査から分析、比較、考察する。

3 論文構成

各民家展示施設における、空間把握行動が観覧者の全観覧行動の中でどのくらい出現するのか、また空間把握行動の割合による属性の特徴を明らかにし(第2章)、観覧者の中で、事前に民家展示に対する興味・関心を表明した観覧者の観覧行動を追跡調査することで、観覧者の要求と観覧行動の関係性を明らかにする(第3章)。また主に野外から民家を観覧する観覧者と、室内に靴を脱いで観覧する観覧者による、観覧場所の選択の違いによる観覧行動の特性を明らかにし(第4章)、解説人員からの介入が多く発生する環境やその要因を分析、考察する(第5章)。これらから、三次元空間に内在する情報が効果的に引き出すことができる展示環境などを、考察し、結論とする。

4 研究課題 1：観覧者の興味・関心の違いによる観覧行動の差

解説人員との交流意思の無い観覧者は、全観覧時間と空間把握行動時間が短いこと、解説人と交流意思があり、興味関心を持って観覧する観覧者は、全観覧時間と空間把握行動時間は比較的長いこと、観覧回数は、交流意思・興味関心の違いによる差はないことがわかった。

解説人員との交流意思の無い不干涉型の観覧者は、交流意思のある交流希望型と比べて土間や廊下で多く観覧行動が発生するが、観覧時間はあまり長くないことがわかった。一

方、交流希望型と比べて室内パネルや居間で多くの観覧行動が発生し、観覧時間も交流希望型と比べると長いことがわかった。また交流希望型の観覧者は、不干涉型と比べて座敷で多く観覧行動が発生しており、観覧時間も長く発生していることがわかった。

不干涉型では、全観覧時間に占める空間把握行動時間は小さく、その際の空間把握行動は、参加体験に相当するものが多いこと、交流希望型では、全観覧時間に占める空間把握行動時間は大きく、その際の空間把握行動は、参加体験だけでなく、臨地解説に相当するものも多くなること、交流希望型の中で、生活興味型、建物興味型、生活興味+建物興味型では、参加体験、臨地解説、参加体験+臨地解説に相当する観覧行動が大きく異なることがわかった。

5 研究課題2：観覧場所の選択行動の違いによる観覧行動の差

寒冷期において解説人員が不在の場合、室内に上がっての観覧者が増え、屋外からの観覧は減ること、温暖期における室内で解説人員からの実演がある場合、室内に上がっての観覧者が減り、屋外からの観覧は増えること、室内に上がる直前の観覧行動、屋外からの観覧直前の観覧行動が発生した場所は、それぞれ土間が多いこと、寒冷期温暖期間問わず、室内に上がっての観覧行動、屋外からの観覧行動は、観覧者の観覧行動の中でも最後に出現する傾向があること、室内に上がって観覧した観覧者の属性は、比較的若い年齢層であり、屋外から観覧した観覧者の属性は、比較的年齢層が高い傾向があること、寒冷期温暖期間問わず、室内に上がって観覧した観覧者は、親子連れが多く、屋外から観覧した観覧者は、友人同士と一人が多いということがわかった。

6 研究課題3：解説人員の介入の有無による観覧行動の差

室内で民家を展示している場合、臨地解説に相当する観覧行動が発生する場所および観覧時間が長くなる場所の特徴には、参加体験して欲しい展示物があるにもかかわらず、観覧者がそれに気づかないような環境である場合、または観覧者の視線を大きく動かさないと見えないところにある展示物に、解説人員からの介入が発生し、臨地解説につながっていることがわかった。一方、屋外民家展示施設において、寒冷期の場合、靴を脱がなくてもいい場所で、かつ暖をとることができる場所での傾向があること、温暖期の場合、靴を脱がなくてもいい場所で、かつ解説人員が作業をする光景を見ることができる場所においてその傾向があることがわかった。

7 結論

本研究により明らかになったことを下に考察を行い、以下の点を指摘した。

① 観覧者と解説人員との接触のタイミング

観覧者の観覧行動初期の段階で、解説人員と接触すると、観覧時間が減少する傾向があった。その要因として解説人員と個人的な関係ができないと考えられることから、観覧者

の観覧行動中、自然と解説人員と関係が出来上がるような展示環境の整備、観覧者に参加体験が発生してから、解説人員の接触があることが有効であると考えられる。

② 観覧者と多くの関係が築ける実演の開発

実演に参加できた観覧者は、かなり長い時間その実演に費やすことができるが、参加できない観覧者は、参加している観覧者が退席しない限り参加することはできない。したがって、できるだけ多くの観覧者が、実演に参加できるような運営が必要と考えられる。また、実演の様子も、できるだけ多くの観覧者に認知できるように、見通しの良い環境下で行うことが必要であるとする。

③ 生活環境再現展示の充実

生活環境を再現する展示において、多くの観覧者が民家展示に内在する様々な情報を感じていることが推測できたので、生活環境を再現する展示の開発が急務であると思われる。室内で民家を展示する施設でも、防災上難しい点も多々あるかとは思われるが、室内に再現した民家に内在する情報を効果的に引き出すためにも、生活環境を再現する展示を実施すべきであるとする。

④ 観覧実態の検証と展示計画～新しいミュージアム活動への可能性

近年、展示物評価を導入するミュージアムが多くなったが、民家展示施設でも、民家特有の三次元空間に内在する情報が、観覧者に伝わる環境を評価し、展示計画に活かしていく必要がある。今後施設間で統一した指針の下、展示評価を実施し、施設間で比較することで、より効果的に民家展示の可能性を見出すことが急務である。

A Study on the Visitor's Behaviour on the House Exhibition in Museum

EMIZU, Tadahito

Thesis summary

1. Background and purpose of this study

Recently, the museum tends to exhibit of the house not only open field but also inside of the museum exhibition rooms. The House exhibition is including much kind of interdisciplinary information, and it is one of the best exhibitions to promote of the visitor for interdisciplinary viewpoint. Therefore, the author thinks that it is necessary to evaluate the effect of the visitor's learning from information that was integrated in the house exhibition. And it is necessary to improve the exhibition environment.

To date, many studies were analysed that how to observe the house exhibition for the visitor and influence of the visitor's behaviour action under the living situation. But it was unexplored field that the exhibition environment which was efficiently to feel the exhibition information according to the analyse of the visitor's behaviour action.

Therefore, the author attempts to elucidate the best house exhibition environment to draw of the much of information that was including great knowledge and techniques in the date of house.

2. Research method

In this thesis, the author analyse that the factor of appearance that was the visitor's feeling behaviour of the information include of the house exhibition. So it is necessary to compare the different type of the house exhibition.

In this thesis, the author selected that was the best museum to analysis of the visitor's behaviour action. One is the National Museum of Emerging Science and Innovation (Miraikan) in Odaiba, Tokyo, and the other is the Edo-Tokyo Open Air Architectural Museum (Tatemono-en) in Koganei, Tokyo. Miraikan's house exhibition's purpose is mainly understood how architecture was influenced of environment, and how to create symbiotic house. Miraikan's the house exhibition including Japanese traditional thatched roof house, traditional Okinawa style house, traditional Kyoto's house, the tree-planting roof house (including some eco-products material), passive solar heating system house, etc. These were so-called 'Environmentally Symbiotic Housing'. There are exhibited inside of Miraikan's exhibition room. Tatemono-en's house exhibitions purpose is mainly

understood ancient era's people's lifestyle and technique of architecture. In this thesis, the author chooses "House of the Leader of the Hachioji Guards". That was exhibited open air. The open air environment, there were very different condition of warm season to cold season, so the author surveyed at warm season and cold season.

The method of survey is visitor's follow-up survey which were include where the visitor stop and observe, how long the visitor spend the time to observe, and what kind of the exhibition was observed during the visitor enter the exhibition area to leave. During follow-up survey, the researcher especially evaluates the visitor's behaviour actions that were included to feeling much information without the organ of vision (participate and experience action), to accept the interpreter's interpretation and talked each other (interpret on the site). And in this thesis, the author evaluates these actions and analyse what kind factors will be need to appear these actions.

In this thesis, the author set of research subjects,

Research subject 1: The difference of the visitor's behaviour action whose difference of the interested in

The visitor's interests are mainly sort out of two types. One is the visitor who was interested in the building techniques and science. The other is the visitor who was interested in the ancient people's lifestyle and history. The author analyse the visitor's behaviour action that difference of the interests. In this subject, the survey field was Tatemono-en during warm season.

Research subject 2: The difference of the visitor's behaviour action who choose the observe place

The open air house exhibition, the visitor choose to observe place where observed outside of the house, or to put off shoes and observed from camber. The author analyse the feature of the visitor's behaviour action that was the difference of the observe place. In this subject, the survey field was Tatemono-en and compare with the cold season and warm season.

Research subject 3: The difference of the visitor's behaviour action whether the interpreter's interpretation was appeared or not

Tatemono-en and Miraikan's house exhibition prepared of the condition to get the interpreter's interpretation. The author analyse how to influence of the interpreter's interpretation for the visitor, and what factor will be need to appear to interpretation. The author analyse the visitor's behaviour action whether they accept the interpreter's

interpretation or not, and compare with the different condition of the house exhibition-Miraikan, Tatemono-en (cold season and warm season).

3. Thesis composition

The author consider the visitor's attribute of the difference of behaviour action's classification and how many evaluate behaviour action were appeared (in chapter 2), and elucidate the relationship between the visitor's interest to behaviour action (in chapter 3), and elucidate the feature of the visitor's behaviour action between observed from outside of the house exhibition to observed from inside of the house exhibition (in chapter 4), and consider the environment and factor of easily to appeared the interpretation (in chapter 5), finally, the author conclude the house exhibition's environment which were more effective to draw of the information and to support these activities, museum management, and interpreter's interpretation methods.

4. Research subject 1: The difference of the visitor's behaviour action whose difference of the interested in

According analysis, the author elucidate that the visitor who was not want to contact with the interpreter, whole of observation time and total observation time that evaluate behaviour action was short, and the visitor who wanted to contact with the interpreter, whole of observation time and total observation time that evaluate behaviour action was relatively long, and the number of the total observation action is not different between the visitor who want to contact with the interpreter or not.

The visitor who was not want to contact with the interpreter, the observation action were appeared in earthen floor and corridor many times, but observation times is not so long, and living room and explanation panel were appeared many observation action and observation times, and also so long. On the other hand, the visitor who wants to contact with the interpreter, the observation action was appeared in the Japanese-style drawing room, and observation time was also long.

The visitor who was not want to contact with the interpreter, the ratio of the total time of the evaluate behaviour action to whole of observation time was small. And the detail of the total time of the evaluate behaviour action were shared by participate and experience action. The visitor who wanted to contact with the interpreter, the ratio of total time of the evaluate behaviour action to the all observation time was large. And the detail of the total time of the evaluate behaviour action were shared by participate and experience action and interpret on the site.

5. Research subject 2: The difference of the visitor's behaviour action who choose the observe place

During cold season and no interpreter condition, the visitor who put off their shoes and observed from camber was increase, but the visitor who observed outside of the house was decrease. During warm season and operated the interpreter's demonstration in camber, the visitor who put off their shoes and observed from camber was decrease, but the visitor who observed outside of the house was decrease. Many visitors observed in the earthen floor just before to observe from camber and outside of the house. Any seasons, the behaviour actions that were observed from camber and observed outside of the house was tend to appear the last time of the visitor's observation. The attribute of the visitor who was put off shoes and observed camber was relatively young age, and the visitor who was observed outside of the house was relatively elder age. Any seasons, the attribute of the visitor who was observed from camber was mainly appeared of the parents with their children, and the visitor who was observed outside of the house was with companions and oneself.

6. Research subject 3: The difference of the visitor's behaviour action whether the interpreter's interpretation was appeared or not

The house exhibition where was exhibited inside of the museum, the feature of the interpretation action's appearance were that the visitor could not to recognize Hands-On exhibition, and they could to observe some exhibition from the difficult position to observe to move for easily to observe. On the other hand, the open air house exhibition, during cold season, the feature of the interpretation action's appearance was that the visitor could put on their shoes, and around the place of fireplace. During warm season, it were that the visitor could put on their shoes, and the place where was easily to observe for the interpreter's working.

7. Conclusion

From these subject analyses, the author considered and pointed out the following points.

• The timing to contact with the interpreter

If the visitor contacted with the interpreter at the first periods, the visitor's total observation time tended to decrease. The factor of this, it was very difficult for the visitor to create the relation with the interpreter. The author would like to propose that improve the environment to create the relation with the interpreter naturally. And also, it is more effective way for the interpreter's contact after appearance of the visitor's Hands-On

behaviour.

· To develop the demonstration that were easily to participate for the many visitors

The visitor who participated to the demonstration was spent many times on the place, but the visitor who could not participate, they did not spent many times there. The author would like to propose that it is necessary to develop the demonstrations that were easily to participate for the many visitors. And also, it is necessary to improve the environment to easily recognize for the visitor that the state of the demonstration.

· Enrichment of recreate the living environment exhibition

The exhibition to recreate the living environment, it can suppose that many visitors recognized much information that were include of the house exhibition. So, it is necessary to improve to develop of the exhibition that recreate of the living environment.

· To verify of the actual situation of the visitor's behaviour and apply this result to exhibition planning – the possibility of the new museum activities and new museology

Recently, many museums introduced the exhibition evaluation and visitor studies. It is necessary to develop of the evaluation method that adapted to each type of the museums. Especially, the house exhibition were integrated much kind of the information. In the future, it will be have to create the evaluation method and evaluate each museum activity. And to compare with the museum, it will be able to detect more effective method to the house exhibition.

民家展示施設における観覧者の観覧行動に関する研究

目次

■序論

第1章 研究の背景・目的・方法 1

1 研究の背景	1
1-1 民家展示施設をめぐる課題	1
1-2 ミュージアム活動の多様化	2
1-3 民家とミュージアムの関係性	3
1-4 関連既往研究	4
2 研究の目的と視点	7
2-1 研究の目的	7
2-2 研究の視点1. 興味・関心の違いによる観覧行動の差	7
2-3 研究の視点2. 観覧場所の選択行動の違いによる観覧行動の差	7
2-4 研究の視点3. 解説人員の介入の有無による観覧行動の差	8
3 研究の方法	8
3-1 研究の課題と考察の方法	8
3-2 研究構成	10
3-3 研究の対象	12
3-4 研究の特色	12
3-5 本研究の有効範囲	13
3-6 用語の定義	14

■本論

第2章 空間把握行動による各民家展示施設観覧者の特性 25

1 はじめに	25
1-1 調査の目的	25
1-2 考察の方法	25
1-3 調査対象民家展示施設の概要	25

1-4	調査の方法	30
2	観覧者の属性の特徴	35
2-1	各民家展示施設における空間把握行動時間の割合の特徴	35
2-2	各民家展示施設における空間把握行動時間の 割合のヒストグラムによる特徴	35
2-3	各民家展示施設における観覧者の年齢別空間 把握行動時間の割合の特徴	37
2-4	各民家展示施設における観覧者の同伴者別空間把握 行動時間の割合の特徴	39
3	空間把握行動時間と全観覧時間・観覧回数の特徴	42
3-1	各民家展示施設における空間把握行動時間と 全観覧時間との関係	42
3-2	各民家展示施設における空間把握行動時間と 観覧回数との関係	42
4	観覧行動の内訳による各民家展示施設の特徴	46
4-1	各民家展示施設における観覧回数の内訳	46
4-2	各民家展示施設における全観覧時間の内訳	46
5	まとめ	47
第3章 観覧者の交流意思・興味関心の違いによる観覧行動の特性		53
1	はじめに	53
1-1	調査の目的	53
1-2	考察の方法	53
1-3	調査の概要	53
1-4	調査協力者の属性・性別の特徴	55
2	交流意思・興味関心の違いによる観覧者の観覧行動の特徴	57
2-1	交流意思・興味関心の違いによる観覧者の観覧動線の特徴	57
2-2	交流意思・興味関心別空間把握行動時間と 全観覧時間・観覧回数の関係	58

2-3	交流意思の違いによる観覧行動発生場所の特徴	61
2-4	興味関心の違いによる観覧行動発生場所の特徴	62
3	交流意思・興味関心の違いによる空間把握行動時間の割合の特徴	65
3-1	交流意思の違いによる空間把握行動時間の割合の特徴	65
3-2	興味関心の違いによる空間把握行動時間の割合の特徴	66
4	興味関心別観覧者の観覧行動記述	69
4-1	生活興味型観覧者の観覧行動記述	69
4-2	建物興味型観覧者の観覧行動記述	72
4-3	生活興味+建物興味型観覧者の観覧行動記述	75
5	まとめ	78
第4章 観覧場所の選択行動の違いによる観覧行動の特性		83
1	はじめに	83
1-1	調査の目的	83
1-2	考察の方法	83
1-3	調査の概要	83
2	寒冷期と温暖期における観覧場所の選択行動の違いによる特徴	85
2-1	調査期間の違いによる観覧場所の観覧時間の特徴	85
2-2	寒冷期・調査実施日別の室内に上がって 観覧した人の観覧時間の特徴	87
2-3	寒冷期・調査実施日別の屋外から観覧した人の観覧時間の特徴	89
2-4	寒冷期における観覧場所の選択行動の要因	90
2-5	温暖期・調査実施日別の室内に上がって 観覧した人の観覧時間の特徴	91
2-6	温暖期・調査実施日別の屋外から観覧した人の観覧時間の特徴	93
2-7	温暖期における観覧場所の選択行動の要因	93
3	内部重点・外観重点型観覧行動選択直前の観覧場所と観覧行動の特徴	96
3-1	内部重点型観覧行動選択直前の観覧場所と観覧行動	96
3-2	外観重点型観覧行動選択直前の観覧場所と観覧行動	98

4	内部重点・外観重点型観覧行動が出現するタイミングの特徴	101
4-1	寒冷期における内部重点・外観重点型観覧行動 が出現する観覧順序	101
4-2	温暖期における内部重点・外観重点型観覧行動 が出現する観覧順序	101
5	観覧場所の選択による属性の特徴	105
5-1	寒冷期における内部重点観覧・ 外観重点観覧型観覧の属性の特徴	105
5-2	温暖期における内部重点観覧・ 外観重点観覧型観覧の属性の特徴	106
6	まとめ	109
第5章 解説人員の介入による観覧行動の特性		113
1	はじめに	113
1-1	調査の目的	113
1-2	考察の方法	113
1-3	調査の概要	113
2	各民家展示施設における観覧行動の実態	114
2-1	臨地解説が発生する観覧行動の実態	114
2-2	環境共生型住宅における臨地解説が発生する 展示物の特徴	116
2-3	江戸東京たてももの園・八王子千人同心組頭の家 (寒冷期)における臨地解説が発生する展示物の特徴	120
2-4	江戸東京たてももの園・八王子千人同心組頭の家 (温暖期)における臨地解説が発生する展示物の特徴	122
3	各民家展示施設における観覧時間の実態	125
3-1	環境共生型住宅における臨地解説による観覧時間の実態	125
3-2	江戸東京たてももの園・八王子千人同心組頭の家 (寒冷期) における臨地解説による観覧時間の実態	126

3-3 江戸東京たてもの園・八王子千人同心組頭の家（温暖期） における臨地解説による観覧時間の実態	128
4 各民家展示施設における観覧行動1回あたりの観覧時間の実態	131
4-1 環境共生型住宅における観覧行動1回あたりの観覧時間の実態	131
4-2 江戸東京たてもの園・八王子千人同心組頭の家 （寒冷期）における観覧行動1回あたりの観覧時間の実態	133
4-3 江戸東京たてもの園・八王子千人同心組頭の家 （温暖期）における観覧行動1回あたりの観覧時間の実態	135
5 まとめ	139

■結論

第6章 まとめと考察	145
1 空間把握行動による各民家展示施設観覧者の属性・ 観覧時間・観覧回数の特徴	145
2 観覧者の交流意思・興味関心の違いによる観覧行動の特徴	147
3 観覧場所の選択行動の違いによる観覧行動の特徴	150
4 解説人員の介入による観覧行動の特徴	151
5 目指すべき方向性と今後の課題	153

参考文献リスト

付録資料

研究業績一覧

後書きと謝辞

図・表・写真一覧

第1章 研究の背景・目的・方法

- 図 1-1 民家を取り巻く要因の概要
- 表 1-1 既往研究の内訳
- 図 1-2 興味・関心の違いに対応する学問分野の関係の概念図
- 図 1-3 環境の違いによる民家展示施設の概念図
- 図 1-4 観覧者の興味・関心の違いや、観覧場所の選択の違いによる観覧行動の特徴の概念図
- 図 1-5 展示環境が異なる民家展示施設における観覧行動の特徴の概念図
- 図 1-6 本研究の枠組み

第2章 空間把握行動による各民家展示施設観覧者の特性

- 写真 2-1 日本科学未来館の位置と環境共生型住宅の様子
- 写真 2-2 江戸東京たてもの園の位置と八王子千人同心組頭の家の様子
- 写真 2-3 環境共生型住宅の内部の様子
- 図 2-1 江戸東京たてもの園建造物配置図
- 写真 2-4 組頭の家内部の様子
- 表 2-1 各民家展示施設における大まかな調査概要
- 表 2-2 空間把握行動の定義
- 図 2-2 環境共生型住宅の平面図
- 図 2-3 組頭の家平面図
- 表 2-3 未来館観覧行動分類コード
- 表 2-4 千人同心組頭の家観覧行動分類コード
- 表 2-5 各民家展示施設における空間把握行動時間
- 図 2-4 日本科学未来館・環境共生型住宅におけるヒストグラム
- 図 2-5 八王子千人同心組頭の家（寒冷期）におけるヒストグラム
- 図 2-6 八王子千人同心組頭の家（温暖期）におけるヒストグラム
- 表 2-6 各民家展示施設における空間把握行動時間の割合別該当者数
- 図 2-7 環境共生型住宅における観覧者の年齢別空間把握行動時間の割合の特徴
- 図 2-8 組頭の家（寒冷期）における観覧者の年齢別空間把握行動時間の割合の特徴
- 図 2-9 組頭の家（温暖期）における観覧者の年齢別空間把握行動時間の割合の特徴
- 図 2-10 環境共生型住宅における観覧者の同伴者別空間把握行動時間の割合の特徴

- 図 2-11 組頭の家（寒冷期）における観覧者の同伴者別空間把握行動時間の割合の特徴
- 図 2-12 組頭の家（温暖期）における観覧者の同伴者別空間把握行動時間の割合の特徴
- 表 2-7 各民家展示施設における全観覧時間・空間把握行動時間・観覧回数の平均
- 図 2-13 環境共生型住宅における全観覧時間と空間把握行動時間の関係
- 図 2-14 組頭の家（寒冷期）における全観覧時間と空間把握行動時間の関係
- 図 2-15 組頭の家（温暖期）における全観覧時間と空間把握行動時間の関係
- 図 2-16 環境共生型住宅における観覧回数と空間把握行動時間の関係
- 図 2-17 組頭の家（寒冷期）における観覧回数と空間把握行動時間の関係
- 図 2-18 組頭の家（温暖期）における観覧回数と空間把握行動時間の関係
- 図 2-19 各民家展示施設における観覧回数の内訳
- 図 2-20 各民家展示施設における全観覧時間の内訳

第 3 章 観覧者の交流意思・興味関心の違いによる観覧行動の特性

- 表 3-1 調査実施日の気象条件・概要
- 写真 3-1 掲示板の様子
- 図 3-1 観覧者の交流意思・興味関心の違いを表すシール
- 表 3-2 調査協力者の概要
- 図 3-2 調査協力者における年齢別興味関心の違い
- 図 3-3 調査協力者における性別興味関心の違い
- 図 3-4 不干涉希望型動線
- 図 3-5 生活興味型動線
- 図 3-6 建物興味型動線
- 図 3-7 生活興味型＋建物興味型動線
- 表 3-3 分類別全観覧時間・空間把握行動時間・観覧回数の平均
- 図 3-8 分類別全観覧時間と空間把握行動時間との関係
- 図 3-9 分類別観覧回数と空間把握行動時間との関係
- 図 3-10 交流意思の違いによる観覧行動発生回数
- 図 3-11 交流意思の違いによる観覧行動時間
- 図 3-12 興味関心の違いによる観覧行動発生回数
- 図 3-13 興味関心の違いによる観覧行動時間
- 図 3-14 交流意思の違いによる空間把握行動時間の割合
- 図 3-15 交流意思の違いによる空間把握行動時間の詳細

図 3-16	興味関心の違いによる空間把握行動時間の割合
図 3-17	興味関心の違いによる空間把握行動時間の詳細
表 3-4	生活興味型観覧者 A
表 3-5	生活興味型観覧者 B
表 3-6	生活興味型観覧者 C
表 3-7	生活興味型観覧者 D
表 3-8	生活興味型観覧者 E
表 3-9	生活興味型観覧者 F
表 3-10	生活興味型観覧者 G
表 3-11	生活興味型観覧者 H
表 3-12	生活興味型観覧者 I
表 3-13	生活興味型観覧者 J
表 3-14	生活興味型観覧者 K
表 3-15	建物興味型観覧者 A
表 3-16	建物興味型観覧者 B
表 3-17	建物興味型観覧者 C
表 3-18	建物興味型観覧者 D
表 3-19	建物興味型観覧者 E
表 3-20	建物興味型観覧者 F
表 3-21	建物興味型観覧者 G
表 3-22	生活興味+建物興味型観覧者 A
表 3-23	生活興味+建物興味型観覧者 B
表 3-24	生活興味+建物興味型観覧者 C
表 3-25	生活興味+建物興味型観覧者 D

第 4 章 観覧場所の選択行動の違いによる観覧行動の特性

表 4-1	調査期間中の気象条件・概要
図 4-1	寒冷期・組頭の家における室内に上がる・屋外からの観覧時間（秒）
図 4-2	温暖期・組頭の家における室内に上がる・屋外からの観覧時間（秒）
表 4-2	寒冷期・温暖期における観覧場所の選択による観覧時間の平均
図 4-3	室内に上がって観覧した観覧者割合と室内に上がっての観覧時間割合（寒冷期）
表 4-3	室内に上がって観覧した観覧者数と室内に上がっての観覧時間（寒冷期）
図 4-4	屋外から観覧した観覧者割合と屋外からの観覧時間割合（寒冷期）

- 表 4-4 屋外から観覧した観覧者数と屋外からの観覧時間（寒冷期）
- 図 4-5 室内に上がって観覧した観覧者割合と室内に上がっての観覧時間割合（温暖期）
- 表 4-5 室内に上がって観覧した観覧者数と室内に上がっての観覧時間（温暖期）
- 図 4-6 屋外から観覧した観覧者割合と屋外からの観覧時間割合（温暖期）
- 表 4-6 屋外から観覧した観覧者数と屋外からの観覧時間（温暖期）
- 図 4-7 寒冷期・室内に上がる直前の観覧行動発生場所
- 図 4-8 温暖期・室内に上がる直前の観覧行動発生場所
- 図 4-9 寒冷期・室内に上がる直前の観覧行動の実態
- 図 4-10 温暖期・室内に上がる直前の観覧行動の実態
- 図 4-11 寒冷期・屋外からの観覧直前の観覧行動発生場所
- 図 4-12 温暖期・屋外からの観覧直前の観覧行動発生場所
- 図 4-13 寒冷期・屋外からの観覧直前の観覧行動の実態
- 図 4-14 温暖期・屋外からの観覧直前の観覧行動の実態
- 図 4-15 寒冷期における室内に上がる・屋外から観覧する観覧者の観覧行動の発生傾向
- 図 4-16 温暖期における室内に上がる・屋外から観覧する観覧者の観覧行動の発生傾向
- 図 4-17 寒冷期における室内に上がる・屋外から観覧する観覧者の年齢別属性
- 図 4-18 寒冷期における室内に上がる・屋外から観覧する観覧者の同伴者別特徴
- 図 4-19 温暖期における室内に上がる・屋外から観覧する観覧者の年齢別属性
- 図 4-20 温暖期における室内に上がる・屋外から観覧する観覧者の同伴者別特徴

第5章 解説人員の介入による観覧行動の特性

- 図 5-1 各民家展示施設における観覧回数の内訳
- 図 5-2 各民家展示施設における観覧時間の内訳
- 図 5-3 環境共生型住宅展示物配置図
- 表 5-1 環境共生型住宅展示物一覧
- 図 5-4 環境共生型住宅観覧行動分類別観覧行動発生場所
- 写真 5-1 環境共生型住宅・夏間の様子
- 写真 5-2 環境共生型住宅・テラスの様子
- 写真 5-3 組頭の家・カマドから土間の様子
- 図 5-5 写真 5-3 の撮影位置および解説シートの配置図
- 図 5-6 組頭の家（寒冷期）観覧行動分類別観覧行動発生場所

- 写真 5-4 座敷でのお手玉実演の様子
- 図 5-7 組頭の家（温暖期）視覧行動分類別視覧行動発生場所
- 図 5-8 お手玉実演が無い 20 日における視覧行動分類別視覧行動発生場所
- 図 5-9 お手玉実演がある 21 日における視覧行動分類別視覧行動発生場所
- 図 5-10 環境共生型住宅視覧行動分類別視覧時間発生場所
- 写真 5-5 環境共生型住宅・冬間の様子
- 図 5-11 組頭の家（寒冷期）視覧行動分類別視覧時間発生場所
- 図 5-12 組頭の家（温暖期）視覧行動分類別視覧時間発生場所
- 図 5-13 お手玉実演が無い 20 日における視覧行動分類別視覧時間発生場所
- 図 5-14 お手玉実演がある 21 日における視覧行動分類別視覧時間発生場所
- 図 5-15 環境共生型住宅における視覧行動分類別 1 回あたりの視覧行動発生時間
- 写真 5-6 環境共生型住宅・茅葺住宅の様子
- 図 5-16 組頭の家（寒冷期）における視覧行動分類別 1 回あたりの視覧行動発生時間
- 図 5-17 組頭の家（温暖期）における視覧行動分類別 1 回あたりの視覧行動発生時間
- 図 5-18 お手玉実演が無い 20 日における視覧行動分類別 1 回あたりの視覧行動発生時間
- 図 5-19 お手玉実演がある 21 日における視覧行動分類別 1 回あたりの視覧行動発生時間



第1章 研究の背景・目的・方法

1 研究の背景

- 1-1 民家展示施設をめぐる課題
- 1-2 ミュージアム活動の多様化
- 1-3 民家とミュージアムの関係性
- 1-4 関連既往研究

2 研究の目的と視点

- 2-1 研究の目的
- 2-2 研究の視点 1. 興味・関心の違いによる観覧行動の差
- 2-3 研究の視点 2. 観覧場所の選択行動の違いによる観覧行動の差
- 2-4 研究の視点 3. 解説人員の介入の有無による観覧行動の差

3 研究の方法

- 3-1 研究の課題と考察の方法
- 3-2 研究構成
- 3-3 研究の対象
- 3-4 研究の特色
- 3-5 本研究の有効範囲
- 3-6 用語の定義

序論

第1章 研究の背景・目的・方法

1 研究の背景

人間がその環境をどのように理解し、日々の生活の中に反映させることで、地域ごとに特色のある生活を築くことができた。その地域の環境への適応なくして生活は成立しないからである。

しかしながら、戦後の高度経済成長期において、経済性・効率性を優先するあまり、従来のような生活を維持することが難しくなった。ガス・上下水道・電気といったものが生活の中に入ってくることで、人々の生活はその地域の環境から切り離されてしまった。したがって、その地域に適応して営まれた生活は、急激に画一化し、地域ごとの生活の差というものが消滅してしまったのである。

また、私たちは急激な国際化・情報化社会の中で生活している。自分たちの生活や価値観が異なる世界の国々の様子が、リアルタイムで日本に伝えられるようになった。それゆえに、自分たちの生活や価値観が異なる人々のことを理解しようとする機運は高くなっている。

この機運は、画一化されてしまった地域社会への関心の高まりのひとつとして現れた。自分たちの生活している地域はどんな特徴を持っているのか、かつてその地域で営まれていた生活を再評価し、その地域の独自性を見つけ出そうとする動きなどがそうである。この動きのひとつに、その地域に長年立地し、画一化する前の生活様式が残っている民家を展示し、その地域の様々な環境を学ぼうとする動きがある。そこで、ここでは民家を展示する施設に関する動向を俯瞰してみたいと思う。

1-1 民家展示施設をめぐる課題

民家を展示する施設のほとんどは、いわゆるミュージアム¹⁾が中心となって管理・運営がされている。ミュージアムでは、民家という展示資料を収集し、保存し、調査研究し、その成果を公開する、という方法で運営されていたものがほとんどであるといえよう。

民家を資料という形で捉えると、そこには、その民家があった地域の中にある材料で民家を造り、またその地域の気候に適応した形で間取りなどを造ることから、構造物から、その地域の気候や、伝統的な建造技術などを理解することができる資料であるといえよう。また一方では、その民家の中で営まれた人間の生活を、家具や調度品など、その民家で人々が生活していた当時のものの復原・再現などを通して、伝統的な文化を理解することができる資料であるともいえる。すなわち、民家を資料として捉えると、建築技術という自然科学的な側面と、生活文化という人文科学的・社会科学的な側面を兼ね備えていることから、民家が立地していた地域全体の理解には、極めて有効であると考えられる(図1-1)。

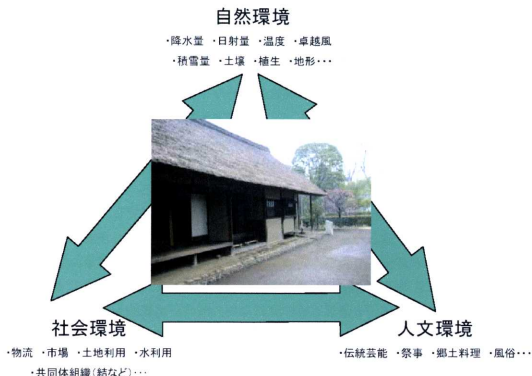


図1-1 民家を取り巻く要因の概要

近年、展示資料として様々な情報が盛り込まれている民家を保存し、活用しようとする機運が高まっている^{注2)}。この動きは、民家が立地している地域住民が、その地域を理解するための格好の資料としての活用が期待されており、資料のつながりが広範囲におよぶので、最終的には、民家が立地していた地域社会の特徴を理解することが可能になると考えられる^{注3)}。

しかしながら、民家の持っている資料価値が、その地域住民の思いという主観に基づいたものによって判断されるので、学術的な担保というのが不十分な場合が多いと考えられる。それゆえに住民たちは、自主的に有志などが勉強会などを開催し、学術性を高めるための活動などが散見できるが、形になるまでにはかなりの時間がかかる場合が多いと思われる。また、これらの活動は、その地域で完結してしまっている感がある。このことは、その地域のことを良く知ることができたとしても、比較する対象が無いために、その地域の特徴を、客観的に捉えることが難しいといえるだろう。

1-2 ミュージアム活動の多様化

一方ミュージアムでは、伊藤（1993）がまとめたように、近年その活動が劇的に変化しつつある。ミュージアムの専門的職員である学芸員たちが、ミュージアムの専門性に基づいて資料を収集し、資料を保存し、資料を調査研究し、その結果わかった成果を展示とい

う活動を通して観覧者に公開する活動自体は一貫しており、変わることはないミュージアム活動の本質である。しかし、従来はどちらかという、学芸員の興味・関心によって資料を収集し、研究を行うといった感があり、ミュージアムは学芸員の研究のための場である感が否めない。またその成果を観覧者に公開したとしても、観覧者にはその成果が伝わらず、または学芸員の研究成果を押し付ける場となってしまうたりして、結局観覧者は飽きてしまい、ミュージアムのリピーターにはならないことが多かったと考えられる。

近年において、これらの反省から、ミュージアム側も、観覧者を意識した運営活動に主眼をおく活動が徐々に増えてきていると思われる。専門的職員である学芸員も、学芸員の興味・関心によって資料を集め、研究するというスタンスから、そのミュージアムが立地する地域の住民が抱える課題などを、住民たちと一緒に調査研究し、その成果をミュージアムという場で発表するという機会が増えているように思える。つまりミュージアムの機能を、地域住民とともに活用し、その成果を地域住民と共有するという、新しいミュージアム活動が散見できるようになった（浜口 2000、瀧端 2004、布谷 2005 など）。

そのような中で、現在ミュージアムの運営などで関心が比較的大きくなっているのは、展示資料に内在する情報が、どのように観覧者に受け取られているのか、また効果的にその情報を観覧者が受け取るためには、どのような環境を設定したらいいのか、という視点で展示資料を評価する動きがある。滋賀県立琵琶湖博物館（2000a）では、「博物館を評価する視点」というタイトルで、研究調査報告や、「入門ミュージアムの評価と改善」（村井良子編著、ミュゼ 2002）といった出版物のほか、ミュージアムの利用実態に関する研究が、日本建築学会、全日本博物館学会、日本ミュージアム・マネジメント学会などで散見する機会が多くなっている。

1-3 民家とミュージアムの関係性

ミュージアムにおいて民家を展示する代表的な例として、野外博物館や民家園などと呼ばれる施設であろう。有名なところでは、「北海道開拓の村」（札幌市）、川崎市立日本民家園（川崎市）、博物館明治村（犬山市）などがあげられる。また、どのような形式であれ、民家を展示しているミュージアムの実態はすべて把握することはできないが、1997年に開館した滋賀県立琵琶湖博物館では、「農村のくらしと自然」という常設展示場に、琵琶湖東岸にあった富江家住宅を展示室内にそのまま移築、1964年当時の人々の暮らしを再現し、当時の水利用の工夫や、人と身近な自然とのかかわり方などを、農村の日常の暮らしにひたるなかで、情報を感じとることを目的にしたものがある（滋賀県立琵琶湖博物館 2000b）。また 2003年には、トヨタ自動車株式会社が、メセナ活動の一環として、豊田市の里山モデル林「トヨタの森」にて、「里山学習館エコの森ハウス」を開館し、環境と共生するための技術を、その建物を展示物の一つとしながら、来館者に感じてもらうことを目的にしたものもある^{註4)}。いずれにせよ、近年民家を展示資料として公開展示する施設は、設立者の多種多様な思いを人々に伝えるべく、活用されているといっても間違いは無いだろう。

確かに、近年になって、民家をミュージアムなどの展示資料とし、活用する機運は、上記のような背景から、比較的容易に想像することはできる。しかしながら、民家を展示資料とする新しい試みが、どれほど観覧者に影響を与えているのかが、新しいゆえに未開拓であると思われる。また絵画や出土品を展示するようなミュージアムでは、観覧者調査や展示評価などを実施し、その結果をミュージアム運営にフィードバックさせるのと同じように、展示されている民家も、同様な調査などを実施し、展示場での利用実態を明らかにすることが必要であると考え。そうすることで、民家を展示する施設において、観覧者により効果的な展示観覧体験が促進できるような運営が可能になるだろう。

1-4 関連既往研究

近年、多様な活動によってミュージアムが運営されている。そこで筆者は、展示資料として非常に多くの情報が含まれており、それゆえに様々な視点を観覧者に提供することができると考えられる、民家を展示する施設における観覧者の観覧行動に注目した。そして、二次元の展示資料とは異なり、三次元の展示資料である民家を観覧者が観覧することで発生する観覧行動がどのような条件で発生するのか、重視した。

そこで、これらの視点に基づいた既往研究の動向を分析してみた。分析の視点として、ミュージアムの観覧者に関する既往研究と、民家に関する既往研究を中心にした。

最初にミュージアムの観覧者に関する既往研究をあげると、著者が調べた限りではあるが、博物館学、建築学、認知科学、環境行動論、教育学、教育工学、地理学・歴史学などの分野に見られる。表 1-1 に、分野別に関連する既往研究の内訳を示し、詳細は章末に文献リストとしてあげた。

まず博物館学の分野では、ミュージアムの各機能が、ミュージアムを支える行政機関や観覧者にとって効果的に機能しているのかといった、主にミュージアム活動全体の評価に関するものがあるが、(文 1~3) それを可能にするためには、ミュージアムの各機能の実態を十分に把握しなければならず、現状では理論が先行し、実態がなかなか伴っていない場合が多い。ミュージアムの各機能の実態と考察という意味では、展示物の評価に関するもの(文 4~8)、ミュージアム来館者に関する研究(文 9~12)がある。これらは、対象とする展示物・ミュージアムにおいて、展示物が観覧者にどのように見られているのかということ、観覧行動などを通して分析し、展示物が観覧行動に与える影響などを論じている。しかし対象以外の展示物・ミュージアムとの比較がなされておらず、有効範囲も限られると思われる。同様に、ミュージアムの展示物を教材とし、観覧者の学習効果などを、教育的・教育工学的に分析したもの(文 13~28)があるが、こちらも対象とした展示物・ミュージアムのみに有効で、展示環境や目的の異なるミュージアム施設との比較まで至っていない。

一方でミュージアムの各機能を、学芸員だけでなく、ミュージアムが立地している地域住民(≒観覧者)を巻き込むワークショップなどの活動の有効性などを扱ったもの(文 29

～36)、地域づくりにミュージアムの各機能を活かすための考察(文 37～43)などもあるが、その多くは事例研究にとどまっており、その後ミュージアムの各機能にその成果がどのように反映されたかがない。

地理学・歴史学の分野では、地域を理解するうえで地理学的歴史学的視点は重要であり、その視点でミュージアムの各機能を検証したものがあるが(文 44-57)、ミュージアムとして扱う対象が「地域」に限定されている場合が多く、それゆえに歴史系や民俗系のミュージアムの研究事例からの分析に偏っている。またミュージアム来館者の居住地を明らかにし、地域住民にミュージアム活動がどれだけ浸透しているのかを分析したものもあるが(文 58-59)、こちらも対象としているミュージアムは、いわゆる地域博物館の事例であり、有効な範囲が限られていると思われる。

さらに認知科学・環境行動論の分野において、科学系博物館の利用形態を分析したもの(文 60)、展示環境などが観覧者の観覧行動など、ミュージアム内での行動にどのような影響を与えているのかを分析したもの(文 61-68)があるが、これらも調査を実施したミュージアムでの事例研究にとどまっており、他のミュージアムとの比較や、個々の展示物が観覧行動にどのような影響を与えているのかといった、詳細な分析まで及んでいない。

さて建築学の分野では、ミュージアムのおかれている状況を把握し、分類することで、ミュージアムが抱えている問題点を分析したものがあるが(文 69-72)、それらは問題点の整理でとどまっており、また展示室の空間認知や観覧者の観覧行動の分析をしたもの(文 73-83)があるが、壁面展示などの二次元の展示資料を対象とすることと、調査を実施したミュージアムでの事例研究に留まっており、他のミュージアムとの比較がなされていない。

次に、民家に関する既往研究をあげると、古民家の活用を図るべく、古民家が移築する背景を明らかにしたもの(文 84-85)、地域資源として古民家を転用して活用する研究(文 86-91)、古民家を展示する施設の研究(文 92-96)、民家野外博物館の歴史と現状をまとめたもの(文 97)がある。古民家の活用を模索する上で重要な研究ではあるが、古民家観覧者に関する分析や、観覧者の観覧行動に関する深い分析にはまだ至っていない。

以上のことから、類似した展示資料を展示するミュージアムにおける、展示目的や展示手法、展示環境が異なる条件において、観覧者の観覧行動から、展示資料に内在する情報がどのように伝わっているのか、分析比較することで、ミュージアムの種類を越えた効果的な展示計画、展示手法を明らかにするような研究は未開拓であることがわかる。また、民家という三次元空間に内在する多種多様な展示資料と、それを利用する観覧者の関係性に注目し、展示形態・手法などが異なる民家展示施設における観覧行動の発生を比較し、民家という情報が観覧者に効果的に伝える方法と、それを可能にする民家展示施設の運営・手法のあり方を明らかにする研究が未開拓であることがわかる。

表 1-1 既往研究の内訳

分野	部門	本数
博物館学	ミュージアム活動全般の評価	3
	展示物評価	5
	来館者研究	4
	展示理解・学習効果	16
	地域住民との連携	8
	地域づくりとの連携	7
	地理学・歴史学	地域・歴史の展示方法 観覧者の利用圏域
認知科学・環境行動論	展示環境と観覧行動	9
建築学（ミュージアム）	設備・運営	4
	観覧行動分析	11
建築学（民家活用）	民家移築条件	2
	古民家活用	6
	古民家展示	5
	民家野外展示博物館の歴史と現状	1
合計		97

2 研究の目的と視点

2-1 研究の目的

ミュージアムの活動が多様化することで、その活動を評価し、ミュージアムの活動にフィードバックするような動きが見られるが、三次元空間をも展示資料とする民家を展示する施設においては、まだその動きはわずかにしか見られない。また、近年展示資料の持つ情報を、観覧者に理解してもらうだけでなく、その情報をもとに、観覧者とのコミュニケーションを図ろうとする目的で、解説人員を展示場に配置して運営するミュージアムが比較的多くなってきている^{注5)}。民家展示施設においても、民家という三次元空間の下、当時の人々の生活を再現するためにも、カマドへの火入れなどの行為を解説人員がすることによって、生活していた人たちと同じ環境を作り出し、観覧者のより積極的な観覧行動を促そうとする動きも見られる^{注6)}。しかしながら、本格的に民家展示施設において、解説人員の影響によって観覧行動がどのように変化したかといった研究がまだ見られない。

よって、本研究の目的は、三次元空間の展示資料である、民家に内在する情報を効果的に観覧者に引き出すために、観覧者の興味・関心の違いによって、観覧行動にどのような特徴があるのか、また民家を展示する環境や解説人員が、観覧者にどのような影響を与えているのかを明らかにし、展示資料をより効果的に展示する方法の模索とその活動を実現するための条件と課題を、観覧者の観覧行動の分析を中心にして明らかにすることとする。

本研究を遂行するにあたり、新しい研究の視点を以下の通りとする。

2.2 研究の視点 1. 興味・関心の違いによる観覧行動の差

従来、ミュージアムでの観覧行動を扱う研究では、観覧者は一体何に興味を持っているのか、意思表示することなく観覧するので、観覧者個人レベルのコンテキストによる違いと観覧行動との比較ができなかった^{注7)}。本研究では、この点を明確にたく、調査員が観覧者に研究の目的を述べ、了解が得られた観覧者に、民家に対する興味・関心を表明してもらい、観覧行動を調査分析した。なおここでいう民家に対する興味・関心とは、民家という展示資料を扱う上で、極めて重要な要素といえる、構造や材料といった、建築物自身に興味・関心がある場合と、民家という空間の中で展開された人々の営みといった、生活や文化に興味・関心がある場合という2点である（図1-2）。

2-3 研究の視点 2. 観覧場所の選択行動の違いによる観覧行動の差

上述した通り、民家を展示資料として扱う上で、極めて重要な要素であると考えられるものに、建築物自身に興味・関心がある場合と、民家という空間の中で展開された人々の営みである生活・文化に関心がある場合があると指摘した。そしてそれが観覧行動として現れるものとして、民家の外側から建築物を眺めるといった観覧行動と、室内を中心に観覧し、靴を脱いで室内に上がるといった観覧行動が考えられる。つまり観覧場所を選択し

たことで、特徴的な観覧行動やその行動が発生する要因は何なのか、明らかにすることは、民家の持つ情報を効果的に展開する上では必要不可欠なものである。本研究において、観覧者が主に外観を中心に観覧する場合と、室内で靴を脱いで観覧する場合を観覧場所の選択とし、外観から観覧した観覧者の行動の特徴、また室内で靴を脱いで観覧した観覧者の行動の特徴を調査分析した。

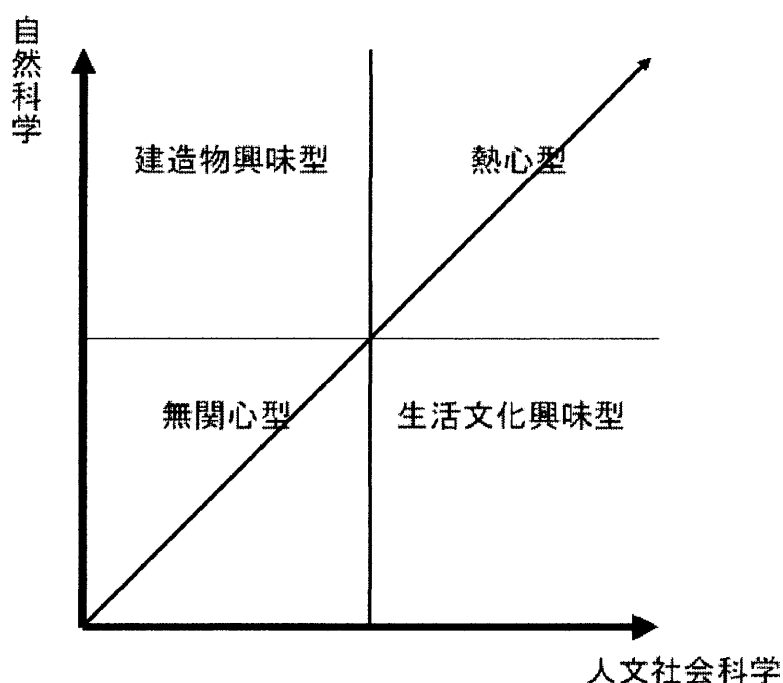


図 1-2 興味・関心の違いに対応する学問分野の関係の概念図

2-4 研究の視点 3. 解説人員の介入の有無による観覧行動の差

最後に、「インタープリター」、「展示解説員」、「展示交流員」など、名称はともかく、展示資料の持つ情報を、観覧者の様々な要求に合わせてコミュニケーションを図ろうとする、解説人員の影響が、観覧行動に与える影響についても重要な要素であろう。本研究においても、解説人員からの介入が、観覧者の観覧行動にどのような影響を与えているのか、展示環境の違いなどを通して、その特徴を調査分析した。

3 研究の方法

3-1 研究の課題と考察の方法

上述の目的を達成するために、研究を進める上で以下の課題が挙げられる。

課題 1 では、設置目的・形態が全く異なる民家展示施設における観覧者の観覧行動の比較を通し、民家展示であるがゆえに発生する観覧行動が、設置目的や形態が全く異なる条

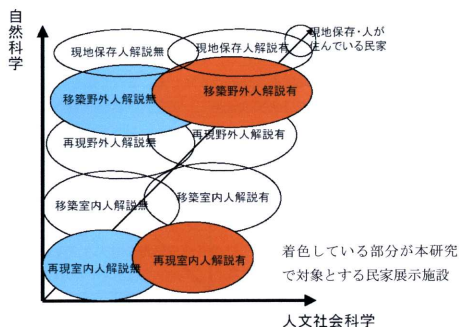


図 1-3 環境の違いによる民家展示施設の概念図

件でどのように発生するか、また観覧者の属性別で観覧行動の特徴を明らかにする (図 1-3)。

課題 2 では、観覧者のコンテキストにより焦点をあて、観覧者の興味・関心の違いや、観覧場所の選択の違いによって、観覧行動の特徴を明らかにする (図 1-4)。

課題 3 では、課題 2 を踏まえ、解説員からの介入が、観覧者の観覧行動にどのような影響を与えるのか、展示環境が異なる民家展示施設において、観覧者の観覧行動からその特徴を明らかにする (図 1-5)。

考察の方法として、課題 1 については、第 2 章において、設置目的・形態などが異なる民家展示施設における観覧行動の中から、三次元空間に内在する情報を観覧者が感じ取る行動、または解説員からの介入によって見られる行動を基準に、それらの行動が見られる観覧者の特性を捉える。

課題 2 については、第 3 章において、観覧者の興味・関心と展示資料との関係を、観覧行動を通して明らかにし、第 4 章において、観覧者の観覧場所の選択行動から見た観覧行動の特徴を、同じ民家展示施設で季節が異なる時期に比較することで、環境の変化が観覧行動に与える影響を明らかにする。

課題 3 については、第 5 章において、解説員からの介入が、観覧行動にどのような影響を与えているのかを、民家展示環境が異なる施設で観覧行動を比較し、その影響力を明らかにする。

第 6 章は、これらの総括として、観覧者の観覧行動に影響を与える要因を整理し、民家を展示することで、ミュージアムとしてどのような展開が可能になるのか、提言と課題を明らかにしていきたい。

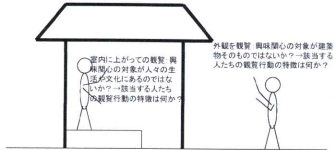


図 1-4 観覧者の興味・関心の違いや、観覧場所の選択の違いによる観覧行動の特徴の概念図

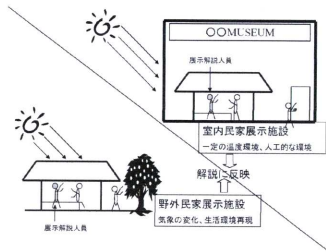


図 1-5 展示環境が異なる民家展示施設における観覧行動の特徴の概念図

3.2 研究構成

研究の構成は、図 1-6 の通りである。

第 1 章では、民家を展示する施設の可能性を唱え、研究目的として、民家展示施設の観覧者の観覧行動を明らかにし、その要因を整理し、ミュージアムの展開の可能性への提言と課題が必要であることを述べる。

第 2 章では、展示環境が異なる民家展示施設である、日本科学未来館内環境共生型住宅と、江戸東京たてももの園内八王子千人同心組頭の家において、観覧行動追跡調査を実施した。三次元空間に内在する情報を、観覧者が感じ取ろうとする行動の割合から、それぞれの民家展示施設の特徴と属性で見られる特徴を明らかにする。

第3章では、観覧者の中で、事前に民家展示に対する興味・関心を表明した観覧者の観覧行動の追跡調査をすることで、観覧者の要求と観覧行動の関係性を明らかにする。

論文の構成

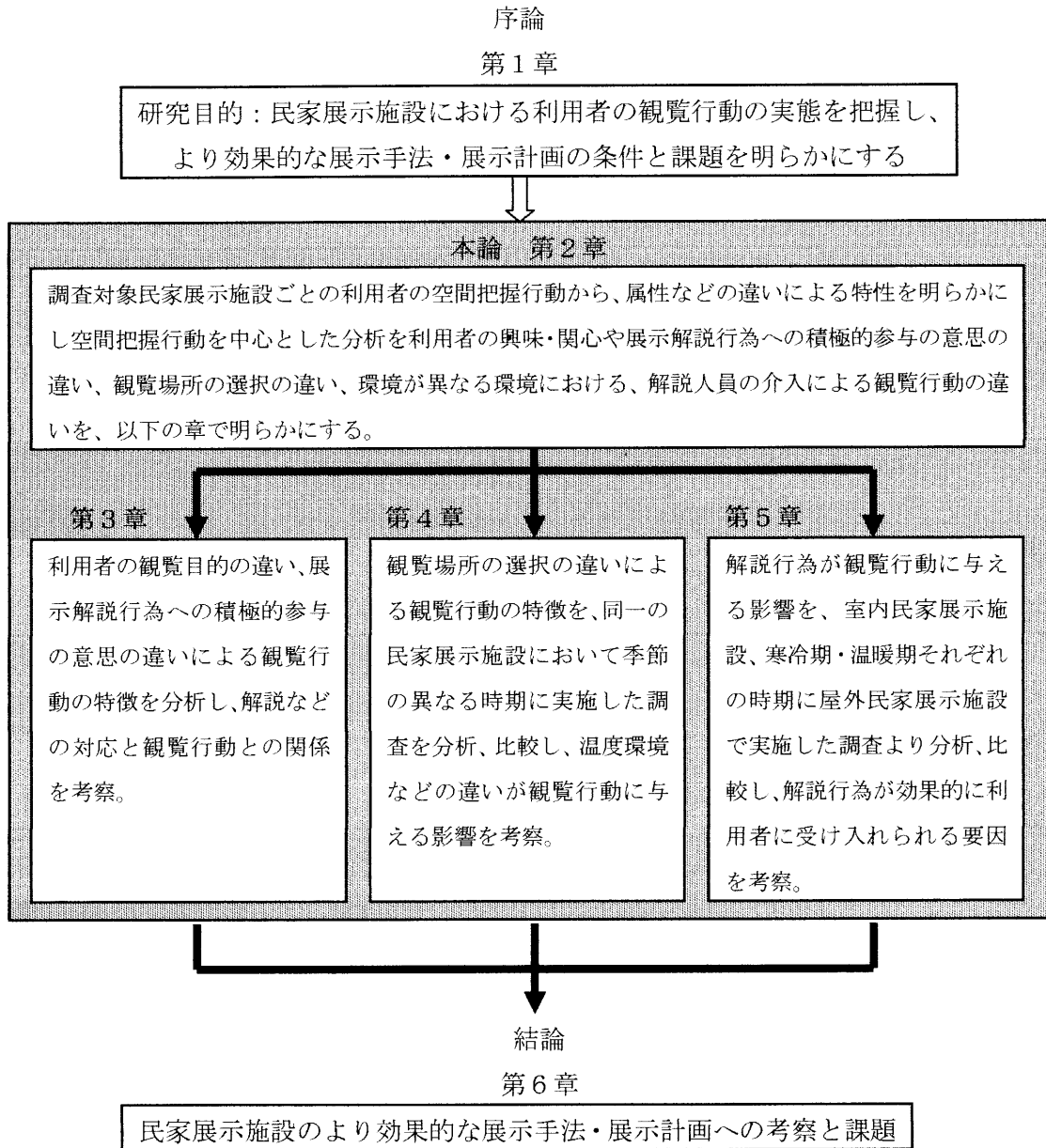


図 1-6 本研究の枠組み

第4章では、民家を展示する際の観覧行動の特徴として、建物の躯体を観覧するため、外側から民家を観覧する観覧者と、室内に靴を脱いで上がりこんで観覧する観覧者が挙げられる。このように、観覧場所の選択の違いによる、観覧行動の特性を明らかにする。

第5章では、解説人員が観覧行動に与える影響を明らかにするべく、室内における民家

展示施設、野外における民家展示施設における観覧行動から、その特性を明らかにする。

第6章では、総括として、各章の分析結果をまとめて、民家を展示する際、観覧者の観覧行動に対して、有益に働きかける展示運営・手法を可能にするためにはどのような条件が必要であり、どのような課題があるのかを明らかにする。

3-3 研究の対象

本研究において、建築物としての民家そのものを展示している施設で、その展示環境は、野外にあるものと室内にあるものの比較において可能である。また、野外に立地している場合、温度環境も大きな要素と考えられるので、季節ごとの比較において可能になる。さらに、解説人員を要するという意味では、それを可能にするための、ある程度民家に対する知識など、研修などを通して一定レベル持ち合わせている人員が展示場に居ることが必要となる。

これらの要素を満たしている民家展示施設として、江戸東京たてもの園内にある八王子千人同心組頭の家と、日本科学未来館内環境共生型住宅が挙げられる。前者は、野外に立地し、実際人々が長年暮らしていた民家を移築して展示している施設である。また、ボランティアの解説人員がほぼ常駐し、民家の中で展開していた生活環境を再現するための、カマドへの火入れや、その環境を最大限に活かすためのイベントなどを実施している。カマドの火入れなどを担当する解説人員は、観覧者に対する解説も行っており、そのための研修なども積んでいる人たちが運営に当たっている。一方後者は、日本科学未来館という建物の中に民家を再現し、躯体にかかる熱負担や伝統的な暮らし方が環境に与える影響などを中心に展示物が構成されている。また千人同心組頭の家と同様に、一定の研修を受けたインタープリターと呼ばれる、解説を専門とする職員やボランティアが常駐し、観覧者への解説が見られる施設である。

この2施設を研究対象民家展示施設として取り上げ、観覧者の観覧行動の分析を中心とした分析を進めることとする。

3-4 研究の特色

本研究の特色は、対象と方法にある。民家を展示資料として捉えると、その資料に内在する情報は、熱環境やリサイクル・リユース技術、建築技術といった、極めて自然科学的な情報と、民家という空間の中で展開された人々の生活・文化様式といった、社会科学・人文科学的な情報両方持ち合わせている資料といえよう。従来のミュージアムでは、そのミュージアムが所属する館の特性（科学系博物館か歴史系博物館かなどといった分類）によって、資料の中にある情報が切り取られていたものが多かった。しかし民家自体は、極めて学際的な情報が内在している資料であると考え、館の特性の壁を越えた視点で民家展示を捉えることができる。それゆえに、民家の持つ情報を、より発展的に展開させ、まさしく民家という資料を基に、観覧者を学際的な視点に誘う可能性がある。したがって、観

観者の観覧行動を通して、従来は人文科学的・社会科学的資料として展示・運営されていたものが、観覧行動を分析することで、自然科学的資料としての情報を引き出し、またはその逆に、自然科学的資料として展示・運営されていたものが、観覧行動を分析することで、人文科学的・社会科学的資料としての情報を引き出し、まさしく民家という展示物から、総合的な視点への涵養に昇華することができるのではないかと考える。その判断を、観覧者の観覧行動の中に求めるという視点が、今までにないものであると考える。

同様に、民家展示空間という、三次元空間で構成される展示資料の中に、観覧者が身を置き、三次元空間であるがゆえに発生する観覧行動に注目することも、今までにない分析の方法である。三次元空間であるがゆえに発生する行動とは、その空間を、主に視覚以外の感覚器官を使って感じ取ろうとする観覧行動を中心に行っているが、この視点に基づく研究は、従来にないものである。この点は後ほど説明を設ける。

以上のことから、民家という資料を、観覧者がどのように観覧しているのか、その中でも特に民家という情報が観覧者に伝わる際の特徴を明らかにすることにより、資料を学際的に展示すること、そしてそれを可能にする運営手法を考察する研究というものは、これまで試みられていなかった。これらの点が、従来の研究にはなかった、非常に特色のあるものであると考える。

3-5 本研究の有効範囲

本研究において、該当する対象は、図 1-3 から、

- ・ 移築し、野外で展示し、解説員がいる場合の民家展示施設
- ・ 移築し、野外で展示し、解説員がいない場合の民家展示施設
- ・ 再現し、室内で展示し、解説員がいる場合の民家展示施設
- ・ 再現し、室内で展示し、解説員がいない場合の民家展示施設

を対象としている。したがって、自然環境が比較的整っている環境下で民家を展示する場合と、自然環境が整っていない環境下で民家を展示する場合において、比較し考察することで分析をすすめる。よって、本研究による有効範囲は、データの分析ができた、上述した範疇に該当する民家展示施設であり、考察などによって得られた知見などは、現地保存し、民家に住んでいる人によって解説がなされる施設以外のすべてに応用が効くものと思われる。

3-6 用語の定義

本研究において用いる用語を、以下のように定義する。

・民家展示施設

現地保存されて展示されている民家、移築され野外で展示されている民家、民家を建物の中に再現し展示されている民家など、その形態は様々であるが、しかしいずれも民家全体を展示資料として扱っている施設がある。ここでは、民家全体を資料として展示し、活動している施設のことをいうこととする。

・解説人員

インタープリター、展示解説員、展示交流院などといった名称で呼ばれる場合が多いが、ここでは資料に関する基礎的な知識などを、民家展示施設で研修などを受け、一定以上の知識をもち、観覧者に民家に内在する情報を解説・交流する人員のことをいう。その際、有給無給は問わない。

・観覧行動

調査対象施設にやってきた人たちが、調査対象とした民家からの情報を受けて発生する行動の総称。行動は調査員によって記録されるが、調査員は、あらかじめガイダンスをうけ、観覧行動の定義を明確化した者で構成されているので、調査員間での誤差は少なくなるようにする。

・空間把握行動

観覧行動の中でも、民家という三次元空間に内在する情報を、視覚以外の感覚器官を伴って積極的に感じ取ろうとする行動のことを指す。また解説人員がいなければ、その情報を知る可能性が低くなると思われる。よって、ここでは解説人員との接触も、民家という三次元空間を知るために影響を与えていると判断し、解説人からの接触によって発生した観覧行動もここに含むこととした。

引用・参考文献

Falk, J.H. & Dierking, L.D. 1992 'The Museum Experience' Washington D.C., Whalosback Books (高橋順一訳 1996, 『博物館体験』雄山閣出版.)

伊藤寿朗 1993, 『市民のなかの博物館』吉川弘文館.

江戸東京たてもの園・スタジオジブリ 1995, 『江戸東京たてもの園物語』東京都江戸東京博物館.

Dean, D. 1996 'Museum Exhibition Theory and Practice' Routledge (北里桂一監訳 2004, 『美術館・博物館の展示 理論から実践まで』丸善.

第1章 研究の背景・目的・方法

- 野村東太 1996,『生涯学習のための水族館の教育機能に関する建築計画的な研究』平成6、7年度科学研究費補助金総合研究(A)研究成果報告書(課題番号06301079).
- 加藤有次・鷹野光行・西源二郎・山田英徳・米田耕司編 1999『新版博物館学講座シリーズ』雄山閣出版.
- 大堀哲編 1999『博物館学シリーズ』樹村房.
- 大原一興 1999,『エコミュージアムへの旅』鹿島出版.
- Diamond,J.1999 'Practical Evaluation Guide-Tools for Museums and Other Informal Educational Settings' Altamira Press.
- 浜口哲一 2000,『放課後博物館へようこそ』地人書館.
- 滋賀県立琵琶湖博物館 2000a,『琵琶湖博物館研究調査報告 17号 ワークショップ&シンポジウム 博物館を評価する視点』琵琶湖博物館・滋賀県博物館ネットワーク協議会編.
- 滋賀県立琵琶湖博物館 2000b,『琵琶湖博物館研究調査報告 16号 生活再現の応用展示学的研究-博物館のエスノグラフィーとして-』嘉田由紀子・古川彰編.
- 秋田県博物館等連絡協議会事務局編 2001,『秋田県立博物館解説員テーブル-秋田県博物館叢書~博物館からの贈りもの~1』秋田県博物館等連絡協議会.
- Stocklmayer,S.M,Gore,M.M&Bryant,C.2001 'Science Communication In Theory and Practice' Kluwer Academic Publishers (佐々木勝浩他訳 2003,『サイエンス・コミュニケーション 科学を伝える人の理論と実践』丸善プラネット.)
- 青木豊 2003,『博物館展示の研究』雄山閣出版.
- 全国重文民家の集い編 2003,『重文民家と生きる』学芸出版社.
- 瀧端真理子 2004,『博物館における市民参加に関する歴史的研究』平成14年度~15年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))(課題番号14510316)研究成果報告書.
- 布谷知夫 2005,『博物館の理念と運営 利用者主体の博物館学』雄山閣出版.
- 矢野勝巳 2005,「武蔵野(野川流域)の水車経営農家の保存と活用」『法政大学地域研究センター叢書5 歴史的環境の形成と地域づくり』名著出版. pp.321-340.
- 青木豊編 2006,『史跡整備と博物館』雄山閣出版.
- 日本科学未来館 2006,『平成17年度未来館年報』,pp.24-27.
- 濱島正士監修・清水慶一・三浦彩子編 2006,『建築「見どころ」博物館ガイドブック』彰国社.

既往研究一覧

博物館学

- 文献1) 守井典子 1997.3,「博物館における評価に関する基礎研究」『日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要』,創刊号,pp.31-40.
- 文献2) 佐々木亨 1999.3,「公立博物館における行政評価-評価手法構築に向けて-」『日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要』,第3号,pp.13-24.

- 文献3) 蓑原謝恵・寺澤達夫・橋本修左・登石久美子 2000.3, 「行動科学的アプローチによるミュージアム評価手法の提案」『日本ミュージアム・マネージメント学会研究紀要』, 第4号, pp.93-101.
- 文献4) 川嶋ベルトラン敦子 2000.3, 「美術館のオリジナル作品が持つ影響力 - ルーブル美術館における観客調査の事例から -」『日本ミュージアム・マネージメント学会研究紀要』, 第4号, pp.49-63.
- 文献5) 川嶋ベルトラン敦子 2001.3, 「博物館展示における文字情報の展示方法とその評価 - 調査方法論を中心として -」『日本ミュージアム・マネージメント学会研究紀要』, 第5号, pp.1-11.
- 文献6) 田代英俊・中村隆・谷本嗣英・奥野光・藤原真・秋田博文・石村源生・柳澤溢恵 2001.3, 「既設展示の評価とフィードバックについて」『日本ミュージアム・マネージメント学会研究紀要』, 第5号, pp.33-39.
- 文献7) 松岡葉月 2006.3, 「歴史展示の主体的利用に関する考察 - 国立歴史民俗博物館を活用した構成主義に基づく学習プログラムの評価 -」『日本ミュージアム・マネージメント学会研究紀要』, 第10号, pp.19-26.
- 文献8) 高井芳昭 1986.12, 「展示をわかりやすくするための2つの提案」『博物館学雑誌』, 第12巻第1号, pp.7-14.
- 文献9) 秋山えみ 1998.3, 「美術館観覧者に関する一考察 - 文化資本論に着目して -」『日本ミュージアム・マネージメント学会研究紀要』, 第2号, pp.1-13.
- 文献10) 諸岡博熊 1998.10, 「博物館観覧者の館内行動の観察」『博物館学雑誌』, 第24巻第1号, pp.47-54.
- 文献11) 坪山幸王・佐藤信治 1995.5, 「展示水槽に対する来館者の観覧行動 - 水族館の観覧空間に関する建築計画的な研究1 -」『博物館学雑誌』, 第20巻第1・2号合併号, pp.10-21.
- 文献12) 坪山幸王 1995.5, 「低・高密度下の個水槽に対する来館者の観覧行動 - 水族館の観覧空間に関する建築計画的な研究2 -」『博物館学雑誌』, 第20巻第1・2号合併号, pp.22-30.
- 文献13) 緒方泉 2003.3, 「高齢者と子どもたちをつなぐ博物館の実践 - 福岡県太宰府市文化ふれあい館の事例を通して -」『日本ミュージアム・マネージメント学会研究紀要』, 第7号, pp.25-34.
- 文献14) 伊藤博 2005.3, 「博物館学習における体験を学びに発展させる事前学習についての考察」『日本ミュージアム・マネージメント学会研究紀要』, 第9号, pp.49-55.
- 文献15) 井上由佳 2006.4, 「歴史型博物館における子どもの学びの評価 - 事前・事後調査を中心に -」『博物館学雑誌』, 第31巻第2号, pp.75-99.
- 文献16) 高田浩二・岩田知彦・堀田龍也・中川一史 2005.1, 「水族館教育における学校教育を対象にしたIT機器の活用とデジタル教材の開発」『博物館学雑誌』, 第30巻第1号, pp.1-20.
- 文献17) 高田浩二・岩田知彦・森奈美 2004.3, 「環境保護における水族館の役割を学ぶ教材開発と授業実践」『博物館学雑誌』, 第29巻第2号, pp.27-42.
- 文献18) 並木美砂子 2001.3, 「来園者相互の「交わり」を重視したコミュニケーションモデルと来園者調査における当モデルの適用」『博物館学雑誌』, 第26巻第2号, pp.21-32.
- 文献19) 並木美砂子 2000.12, 「来館者研究における「コミュニケーション論」の検討」『博物館学雑誌』, 第26巻第1号, pp.1-16.
- 文献20) 川嶋ベルトラン敦子 2003.3, 「美術館における鑑賞体験 - パーソンの美的感受性発達論の適用に関する一考察 -」『博物館学雑誌』, 第25巻第2号, pp.33-50.

- 文献 21) 並木美砂子 1999.9, 「動物園における「生きている動物」の教材化 - 子ども動物園を中心としてその4 - 来館者研究の発達過程および「動物との触れ合い」の活動評価試論」『博物館学雑誌』, 第25巻第1号, pp.19-34.
- 文献 22) 並木美砂子 1998.10, 「動物園における「生きている動物」の教材化 - 子ども動物園を中心としてその3 - 子どもの認識に依拠した教育的機能とその配置デザイン」『博物館学雑誌』, 第24巻第1号, pp.11-22.
- 文献 23) 布谷知夫 1998.3, 「参加型博物館に関する考察 琵琶湖博物館を教材として」『博物館学雑誌』, 第23巻第2号, pp.15-24.
- 文献 24) 並木美砂子 1998.3, 「動物園における「生きている動物」の教材化 - 子ども動物園を中心としてその2 - 実践プログラミングおよび展示プログラム例 - 」『博物館学雑誌』, 第23巻第2号, pp.1-14.
- 文献 25) 柘植千夏 1998.3, 「子どもの博物館の機能的特徴に関する一考察 - メッセージ伝達機能を中心に - 」『博物館学雑誌』, 第23巻第2号, pp.25-36.
- 文献 26) 並木美砂子 1997.12, 「動物園における「生きている動物」の教材化 - 子ども動物園を中心としてその1 - 教材化の視点 - 」『博物館学雑誌』, 第23巻第1号, pp.11-22.
- 文献 27) 長畑実 1994.3, 「博物館学習の教育的効果に関する一考察」『博物館学雑誌』, 第19巻第1・2号合併号, pp.1-13.
- 文献 28) 高井芳昭 1988.3, 「博物館における体験学習について - 歴史系博物館の体験学習室を中心に - 」『博物館学雑誌』, 第13巻第1・2号合併号, pp.7-18.
- 文献 29) 嵯峨創平 1997.3, 「市民提案型の博物館ワークショップの可能性について」『日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要』, 創刊号, pp.11-20.
- 文献 30) 飯田郷介 1999.3, 「地域に根ざしたミュージアムづくり - 北海道六花亭ミュージアムの計画に参加して - 」『日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要』, 第3号, pp.33-37.
- 文献 31) 中島宏一 2002.3, 「地域社会における博物館の役割 - 住民参加による博物館事業の一事例 - 」『日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要』, 第6号, pp.39-50.
- 文献 32) 向井田善朗・熊谷智義・広田純一 2003.3, 「平塚市博物館における地域づくりとの関わり」『日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要』, 第7号, pp.83-94.
- 文献 33) 小野直紀・梅本勝博 2005.3, 「価値創造ミュージアムの提言 - 知識創造自治体の住民参画の場として - 」『日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要』, 第9号, pp.15-23.
- 文献 34) 瀧端真理子 2003.3, 「大阪市立自然史博物館における市民参加の歴史的検討 2 - 長居公園移転以降 - 」『博物館学雑誌』, 第28巻第2号, pp.1-22.
- 文献 35) 瀧端真理子 2002.3, 「大阪市立自然史博物館における市民参加の歴史的検討 1」『博物館学雑誌』, 第27巻第2号, pp.1-18.
- 文献 36) 重盛恭一 1998.3, 「市民とミュージアムのパートナーシップ構築に向けて - 最近のミュージアム主導の市民参加について - 」『日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要』, 第2号, pp.15-25.
- 文献 37) 石川宏之 2000.3, 「エコミュージアムにおける社会的役割と住民参加のあり方に関する考察 - フランスにおけるエコミュージアムの現状について - 」『日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要』,

第4号,pp.1-12.

- 文献 38) 若月憲夫 2001.3, 「地域ミュージアムの活性化をめざして - 子どもや家族対応を軸とした活動や展示のあり方 - 」『日本ミュージアム・マネージメント学会研究紀要』, 第5号, pp.55-67.
- 文献 39) 石川宏之 2002.3, 「地域遺産に対する住民の認知・訪問・保全意識から見た地域運営に関する考察」『日本ミュージアム・マネージメント学会研究紀要』, 第6号, pp.15-21.
- 文献 40) 石川正行 2005.3, 「市民と地域博物館による遺跡公園づくり - みんなでつくろう! 下宅部遺跡はっけんのもり - 」『日本ミュージアム・マネージメント学会研究紀要』, 第9号, pp.37-48.
- 文献 41) 杉本豪 2005.3, 「イギリス最古の野外博物館 - 地域保存と包括的マネージメント」『日本ミュージアム・マネージメント学会研究紀要』, 第9号, pp.103-116.
- 文献 42) 藤澤まどか 2006.3, 「ミュージアム・マネージメントの確立と地域づくりに関する一考察」『日本ミュージアム・マネージメント学会研究紀要』, 第10号, pp.53-60.
- 文献 43) 金山喜昭 1999.3, 「「まちづくり」と市民意識の形成に関する地域博物館の可能性」『博物館学雑誌』, 第24巻第2号, pp.37-50.

地理学・歴史学

- 文献 44) 鷹野光行 1984.10, 「博物館の現状をめぐる」『月刊地理』, 第29巻, pp.9-16.
- 文献 45) 中田幹雄 1984.10, 「野外博物館のあり方 - 北海道開拓の村 - 」『月刊地理』, 第29巻, pp.17-25.
- 文献 46) 橋本直子 1994.1, 「博物館と地理学」『歴史手帖』, 第22巻第1号, pp.13-17.
- 文献 47) 白井哲哉 1994.1, 「博物館の調査研究をめぐる」『歴史手帖』, 第22巻第1号, pp.24-25.
- 文献 48) 小野一之 1997.2, 「新たな「博物館づくり」を考えるネットワーク - 博物館問題研究会の活動から - 」『歴史手帖』, 第25巻第2号, pp.9-12.
- 文献 49) 澤博勝 1997.2, 「博物館学芸員のネットワークに期待するもの - 二年の経験から - 」『歴史手帖』, 第22巻第2号, pp.13-19.
- 文献 50) 長谷川賢二 1997.2, 「四国における学芸員交流の試み」『歴史手帖』, 第22巻第2号, pp.20-25.
- 文献 51) 浜田弘明 1985.11, 「現代的視点に立った博物館を - 相模原市立博物館(仮称) - 」『月刊地理』, 第30巻, pp.18-25.
- 文献 52) 上田洋行 1985.11, 「地域史をどう表現するか - 兵庫県立歴史博物館 - 」『月刊地理』, 第30巻, pp.26-37.
- 文献 53) 丹治輝一 1985.11, 「「北海道」の表現法 - 北海道開拓記念館 - 」『月刊地理』, 第30巻, pp.38-47.
- 文献 54) 浜田弘明 1996, 「博物館における「現代」の地理的表現 - 展示「地域の変貌」から - 」『相模原市立博物館研究報告』, 第5集, pp.13-33.
- 文献 55) 辰己眞知子 1996, 「博物館の現状と地理学の役割」『立命館地理学』, 第8号, pp.19-38.
- 文献 56) 額田雅裕 1996, 「地域博物館・学芸員の現状と博物館活動の地理的分野」『立命館地理学』, 第8号, pp.39-79.

第1章 研究の背景・目的・方法

文献 57) 福田珠己 1997.5, 「地域を展示する - 地理学における地域博物館論の展開 - 」『人文地理』, 第 49 巻第 5 号, pp.24-46.

文献 58) 浜田弘明 1987, 「地域博物館における観覧者構造の分析 - 平塚市博物館の 10 年 - 」『平塚市博物館 研究報告「自然と文化」』, No.10, pp.39-51.

文献 59) 浜田弘明 1990, 「新設博物館における観覧者圏域の分析 - 羽村町郷土博物館の 1 年 - 」『学際研究』, 創刊号, pp.13-26.

認知科学・環境行動論

文献 60) 石黒広昭・岩舘美枝・児玉奈美 2000.12, 『科学博物館はどのように利用されるのか - 仙台市科学館入館者観覧行動調査報告』, 日本認知科学会テクニカルレポート.

文献 61) Stephen C. Bitgood・Ross J. Loomis 1993.11, "Environmental Design and Evaluation in Museums" *Environment and Behavior* Volume 25, No.6, pp.683-697.

文献 62) Roger Miles・Giles Clarke 1993.11, "Setting Off on the Right Foot: Front-End Evaluation" *Environment and Behavior* Volume 25, No.6, pp.698-709.

文献 63) Marilyn G. Hood 1993.11, "Comfort and Caring: Two Essential Environmental Factors" *Environment and Behavior* Volume 25, No.6, pp.710-724.

文献 64) Stephen Kaplan・Lisa V. Bardwell・Deborah B. Slakter 1993.11, "The Museum as a Restorative Environment" *Environment and Behavior* Volume 25, No.6, pp.725-742.

文献 65) Janet Frey Talbot・Rachel Kaplan・Frances E. Kuo・Stephen Kaplan 1993.11, "Factors that Enhance Effectiveness of Visitor Maps" *Environment and Behavior* Volume 25, No.6, pp.743-760.

文献 66) Stephen C. Bitgood・Donald D. Patterson 1993.11, "The Effects of Gallery Changes on Visitor Reading and Object Viewing Time" *Environment and Behavior* Volume 25, No.6, pp.761-781.

文献 67) Hans-Joachim Klein 1993.11, "Tracking Visitor Circulation in Museum Settings" *Environment and Behavior* Volume 25, No.6, pp.782-800.

文献 68) Rosalyn Rubenstein・Andrea Paradis・Leslie Munro 1993.11, "A Comparative Study of a Traveling Exhibition at Four Public Settings in Canada" *Environment and Behavior* Volume 25, No.6, pp.801-820.

建築学 (ミュージアム施設)

文献 69) 野村東太・池田千春・柳沼良一 1985.7, 「全国博物館の運営・施設の一般的状況 - 博物館に関する建築計画的な研究 I 」『日本建築学会計画系論文報告集』, 第 353 号, pp.50-56.

文献 70) 野村東太・池田千春・柳沼良一 1986.4, 「資料から見た新たな博物館類型化の試み - 博物館に関

- する建築計画的研究Ⅱ』『日本建築学会計画系論文報告集』,第362号,pp.87-93.
- 文献71) 野村東太・柳沼良一 1986.11,「博物館における諸活動・利用の特性とこれに即した総合的な類型化の試み - 博物館に関する建築計画的研究Ⅲ』『日本建築学会計画系論文報告集』,第369号,pp.38-46.
- 文献72) 野村東太・朴光範・平野暁巨・藤田祐三 1991.11,「博物館職員からみた各部空間の建築的問題点の考察 - 博物館に関する建築計画的研究Ⅳ』『日本建築学会計画系論文報告集』,第429号,pp.93-103.
- 文献73) 林采震・栗原嘉一郎 1991.12,「展示方式による美術館の類型化とその展示手法 - 美術館の建築計画に関する研究その2-』『日本建築学会計画系論文報告集』,第430号,pp.77-86.
- 文献74) 野村東太・朴光範・平野暁巨・藤田祐三 1993.3,「博物館の展示・解説が来館者行為に与える影響 - 博物館に関する建築計画的研究Ⅴ』『日本建築学会計画系論文報告集』,第445号,pp.73-81.
- 文献75) 加野隆司・松本哲俊 1993.12,「展示方式と観覧行動から見た博物館の建築計画に関する研究 - 展示レイアウトおよび展示室の形態に関する研究 - 』『日本建築学会計画系論文報告集』,第454号,pp.55-64.
- 文献76) 坪山幸王・佐藤信治・小林美夫 1997.7,「観覧室における滞留密度と展示水槽の規模が観覧者行動に与える影響 - 水族館の個水槽全面における観覧領域に関する研究1 - 』『日本建築学会計画系論文報告集』,第497号,pp.95-102.
- 文献77) 坪山幸王・佐藤信治 1998.9,「水族館の観覧空間における展示水槽・展示物に対する入館者の観覧行動に関する研究』『日本建築学会計画系論文報告集』,第511号,pp.107-114.
- 文献78) 中山豊・仙田満・矢田努・佐々木省悟 1999.2,「観覧者の満足度よりみた科学博物館の建築・展示計画に関する研究』『日本建築学会計画系論文報告集』,第516号,pp.123-128.
- 文献79) 仙田満・篠直人・矢田努・鈴木裕美 1999.3,「美術館展示室の建築計画的な研究 - 展示壁面の配置方法と観覧者の評価について』『日本建築学会計画系論文報告集』,第517号,pp.145-149.
- 文献80) 徐華・西出和彦 2003.6,「経路選択の類型 - 展示空間における経路選択並びに空間認知に関する研究その1』『日本建築学会計画系論文報告集』,第568号,pp.53-60.
- 文献81) 朴鍾来・花里俊廣 2005.7,「科学系博物館における展示手法と観覧者の行動特徴からみた展示の分析』『日本建築学会計画系論文報告集』,第593号,pp.57-63.
- 文献82) 徐華・西出和彦 2005.10,「「認知空間」の構造 - 展示空間における経路選択並びに空間認知に関する研究その2 - 』『日本建築学会計画系論文報告集』,第596号,pp.35-41.
- 文献83) 石川宏之・大原一興 1997.12,「展示順序と観覧者の認知における差異の考察』『日本建築学会計画系論文報告集』,第502号,pp.111-116.

建築学（民家活用関係）

- 文献84) 大野敏 2004.8,「横浜市保土ヶ谷区内に所在する茅葺き民家について - 個人による伝統的民家移築保存事例とその建築的特徴』『日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2』,pp.187-188.
- 文献85) 平山育男 2006.6,「東京都と神奈川県に移築民家における移動の理由、移築の移動距離、移築の行われた時代とその相互関係』『日本建築学会計画系論文報告集』,第604号,pp.145-150.

- 文献 86) 大野敏 2001.6, 「民家保存メニュー拡大と民家野外博物館への期待」『建築雑誌』, 第 116 号, pp.116.
- 文献 87) 中田悟・金田綾佳・勝又英明 2006.8, 「関東地方を中心とした 1 都 9 県における古民家の転用に関する研究 - 地域資源としての古民家の公共的利活用に関する研究 - 」『日本建築学会計画系論文集』, 第 606 号, pp.79-84.
- 文献 88) 民家研究委員会 2001, 『古民家の保存・活用のための方法論的研究 - 古民家の地域内保全と民家展示施設の考察 - 』, 財団法人住宅総合研究財団.
- 文献 89) 大原一興・大月敏雄・大野敏 1999, 『古民家の保存・活用のための方法論的研究 - 古民家の地域内保全と民家展示施設の考察 - 』, 住総研研究年報第 26 号, pp.263-274.
- 文献 90) 松島崇典・小滝一正・大原一興・大月敏雄 1999.9, 「古民家の保全手法と住まい方に関する研究」『日本建築学会大会学術講演梗概集 E-2』, pp.79-80.
- 文献 91) 金守美・大原一興・郭喜碩・田中賢太郎 2006.2, 「韓国の「伝統民俗村」における歴史的民家の住まい方 - 済州道城邑村の経年的住まい方の考察 - 」『日本建築学会計画系論文集』, 第 600 号, pp.73-80.
- 文献 92) 久保田百年・野村東太・大原一興 1994.9, 「民家展示施設における活動内容に関する考察 - 民家展示施設の建築計画に関する研究その 1 - 」『日本建築学会学術講演梗概集 E 分冊』, pp.629-630.
- 文献 93) 大原一興・野村東太・久保田百年 1994.9, 「民家展示施設における観覧行為のケーススタディ - 民家展示施設の建築計画に関する研究その 2 - 」『日本建築学会学術講演梗概集 E 分冊』, pp.631-632.
- 文献 94) 加茂慎司・野村東太・大原一興 1995.8, 「民家展示施設における展示解説手法の効果に関する考察 - 民家展示施設の建築計画に関する研究その 3 - 」『日本建築学会学術講演梗概集 E-1』, pp.419-420.
- 文献 95) 大原一興・石川宏之・山方桂 1998.9, 「歴史的建造物を利用した博物館における活用手法の実態 - 歴史的建造物の保全活用に関する研究その 1 - 」『日本建築学会大会学術講演梗概集 E-2』, pp.109-110.
- 文献 96) 石川宏之・大原一興・山方桂 1998.9, 「歴史的建造物の転用による博物館施設運営上の課題 - 歴史的建造物の保全活用に関する研究その 2 - 」『日本建築学会大会学術講演梗概集 E-2』, pp.111-112.
- 文献 97) 大野敏 2005.5, 「民家野外博物館の歴史と現状を俯瞰して」, 住宅第 54 巻 5 月号, pp.20-25.

注釈

注 1) ミュージアムに関する定義は、ここでは 1951 年に制定された博物館法第 2 条にある、「歴史・芸術・民俗・産業・自然科学等に関する資料を収集し、保管（育成含む。以下同じ）し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養・調査研究・レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関」とする。

注 2) 従来、野外博物館や民家園といった、民家の実物を一ヶ所に集め、公開展示するものが多かったが、近年は、北名古屋歴史民俗資料館、大阪くらしの今昔館、福井県立歴史博物館のように、室内に民家やまちなみを再現し、公開展示するミュージアムが見られるような動きである。

注 3) エコミュージアムの概念に基づいた活動に散見できる。例えば、山形県朝日町における、佐竹家住宅の活用方法などが該当する。

注 4) 以下のホームページを参照。里山学習館エコの森ハウス、

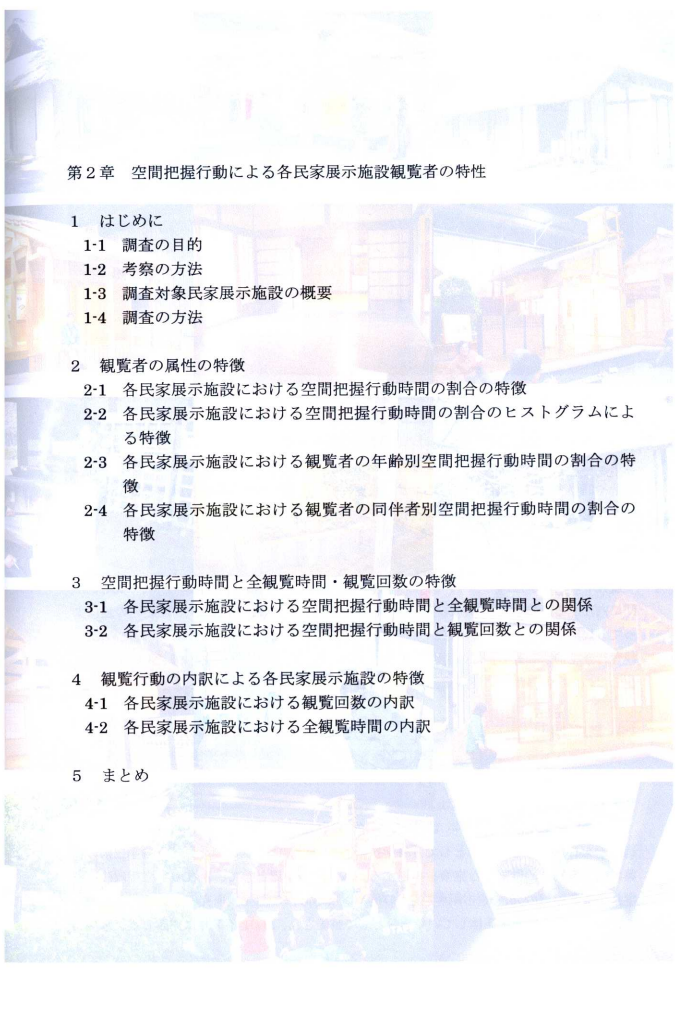
http://www.toyota.co.jp/jp/social_contribution/forest_of_toyota/ecohouse/index.html

注 5) 例えば、滋賀県立琵琶湖博物館では、観覧者の気持ちを察しながら、その人の発見をお手伝いするのがミュージアム側の展示室での考え方にに基づき、解説人員を展示場に配置している（布谷 2005 pp172-177）。また、日本科学未来館では、対話という手段で展示物や科学者の研究を観覧者に伝える科学コミュニケー

ターと呼ばれる解説人員を展示場に配置している（日本科学未来館 2006 pp.24-27）。

注6) 例えば、川崎市立民家園では、民家や暮らしに関する公開講座や体験メニューの豊富さ、ボランティアグループの「炉端の会」によるイロリへの火入れと解説が行なわれていたり、北海道開拓の村では、伝統技術の実演、お祭りや郷土芸能などの再現がされている（濱島ほか 2006）。

注7) Falk, J.H. & Dierking, L.D. 1992 は、ミュージアムでの体験を理解することを試みてはいるものの、より具体的に、どの分野に興味がある観覧者は、どのような展示物を観覧し、その際の観覧行動にはどのような特徴があるのか、といったところまでは踏み込んではいない。



第2章 空間把握行動による各民家展示施設観覧者の特性

1 はじめに

- 1-1 調査の目的
- 1-2 考察の方法
- 1-3 調査対象民家展示施設の概要
- 1-4 調査の方法

2 観覧者の属性の特徴

- 2-1 各民家展示施設における空間把握行動時間の割合の特徴
- 2-2 各民家展示施設における空間把握行動時間の割合のヒストグラムによる特徴
- 2-3 各民家展示施設における観覧者の年齢別空間把握行動時間の割合の特徴
- 2-4 各民家展示施設における観覧者の同伴者別空間把握行動時間の割合の特徴

3 空間把握行動時間と全観覧時間・観覧回数の特徴

- 3-1 各民家展示施設における空間把握行動時間と全観覧時間との関係
- 3-2 各民家展示施設における空間把握行動時間と観覧回数との関係

4 観覧行動の内訳による各民家展示施設の特徴

- 4-1 各民家展示施設における観覧回数の内訳
- 4-2 各民家展示施設における全観覧時間の内訳

5 まとめ

本論

第2章 空間把握行動による各民家展示施設観覧者の特性

1 はじめに

1-1 調査の目的

展示目的が多様であっても、展示資料としての民家には、極めて学際的な情報が含まれている。よって、民家を展示する環境などの違いにより、観覧者に効果的に学際的な情報が伝わっているかどうか、比較検証し、その特性を明らかにすることは必要不可欠である。ここでは、民家という三次元空間に内在する情報を、主に視覚以外の感覚器官を用いて観覧する行動＝空間把握行動が、学際的な情報を感じ取る行動として評価した上で、観覧者の全観覧行動のうち、この割合がどのくらいを占めているのかを、展示目的や展示環境が異なる民家展示施設において比較する。特に、民家において観覧者のコンテキストに内在する経験の差などによって、観覧行動に大きな影響を与えていると考えられる。すなわち、年齢や居住地、同伴者の有無などにより、空間把握行動の割合に差があると考えられる。

第2章では、調査対象施設における、観覧者の観覧行動の中から空間把握行動を抽出し、まず全観覧時間のなかで空間把握行動に費やした時間がどのくらいの割合かを明らかにし、年齢や同伴者などの属性の違いにより、観覧行動、なかでも空間把握行動との間に見られる特性を明らかにすることを目的とする。

1-2 考察の方法

観覧者の属性に焦点を当て、調査対象民家展示施設観覧者の観覧行動の中で、三次元空間に内在する情報を感じる、民家特有の観覧行動である空間把握行動が、属性^(注1)の差によって各民家展示施設によってどのくらい異なっているのかを明らかにする。このために、観覧行動を追跡調査し、どの場所でどのような観覧行動が、どのくらいの時間かかって発生したのかを記録用紙に記録し、MS エクセルや SPSS に記録を入力、数値化し、分析した。

1-3 調査対象民家展示施設の概要

調査対象民家展示施設は、東京都江東区青海にある、日本科学未来館（写真 2-1）館内環境共生型住宅と、東京都小金井市小金井公園内にある、江戸東京たてもの園（写真 2-2）内八王子千人同心組頭の家とした。

日本科学未来館は、1995 年 11 月に、科学技術の振興を進めることにより、科学技術創造立国を目指すことを目的として「科学技術基本法」が成立したのを受け、科学技術の振興に関する総合的計画的な施策を推進する基本計画の一環として、現在の独立行政法人科学技術振興機構の元、最先端科学技術の展示、展示方法の開発、研究者の交流などを通して、科学技術の情報を発信していく施設として整備され、2001 年 7 月に開館した。敷地面



日本科学未来館エントランス付近



環境共生型住宅



日本科学未来館

写真 2-1 日本科学未来館の位置と環境共生型住宅の様子



江戸東京たてももの園エントランス付近



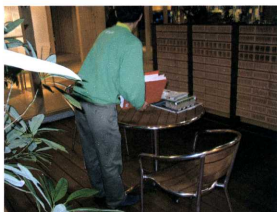
八王子千人同心組頭の家



江戸東京たてももの園

写真 2-2 江戸東京たてももの園の位置と八王子千人同心組頭の家の様子

積 19636 m²、建築面積 8881 m²、延床面積 40589 m²、地上8階地下2階、高さ 45mの大規模な施設である。展示テーマは「地球環境とフロンティア」、「生命の科学と人間」、「技術革新と未来」、「情報科学技術と社会」であり、テーマに沿った最先端の研究内容が展示されている。民家を展示している部分は、「地球環境とフロンティア」をテーマとした、1階常設展示場の中に「環境共生型住宅」として、ほぼ原寸大の大ききで展示されている。展示の狙いとして、「最先端のエコハウスと伝統的な住まいを対比し、それぞれの中にちりばめられた環境共生の知恵・技術をもとに知ることによって、未来に向けたより住宅環境・都市環境のあり方を考えてもらう」としている。また、観覧者の興味・関心に応じて、展示物などの解説などを行うインタープリター¹⁾やボランティア²⁾といった解説人員が常駐し、積極的に観覧者に解説交流を図っている(写真2-3)。



解説人員



環境共生型住宅の内部(壁にはパネル解説)



環境共生型住宅・夏間の様子



環境共生型住宅・京都町屋の様子

写真2-3 環境共生型住宅の内部の様子



カマドの火入れの様子



解説人員（左側の女性）



千人同心由来の解説パネル



居間の様子

写真 2-4 組頭の家の内部の様子

1-4 調査の手法

データの採り方は、調査対象民家展示施設の敷地に、足を踏み入れた人を対象とした。調査員は、あらかじめ配布した、民家の見取図に動線を記入し、行動が見られた場所を見取図に記入し、その行動の内容を詳細に別欄に記入する方法を取った。またその行動が持続した時間も同様に記録した。

採取したデータは、著者自身が、観覧秒数といった定量化できるデータと、観覧行動の質的データをコード化し、分類表によって数値化したものを表計算ソフト（エクセル）やSPSSに入力し、分析を進めた。したがって、入力された数値に基づく分析は統計的に行われているので、数値などが示すものは、信頼性に足りうるものと考えられる。

第2章 空間把握行動による各民家展示施設観覧者の特性

採取したデータを数値化し、その中で、三次元空間に内在する情報を感じ取ろうとする行動や、インタープリターやボランティアからの解説や交流によって発生する観覧行動を抽出し、その行動が、観覧者一人あたりの全観覧行動の中でどのくらいの割合を占めたのかを明らかにする。そしてその割合の差と、民家展示施設間や属性の特徴を明らかにする。

なお、調査期間および有効サンプル数は、表 2-1 にまとめた。また、環境共生型住宅および組頭の家¹の平面図を、図 2-2 と図 2-3 として示す。

観覧者の観覧行動から、民家展示施設観覧者の観覧行動を分析することが必要である。その方法として、まず調査員に対して、観覧行動の定義を正確に理解するためのガイダンスをあらかじめ行い、観覧行動の記述の標準化の徹底をはかった。観覧行動の定義²は、表 2-2 に示す。そのためにここでは、行動分類表（表 2-3～表 2-4）をあらかじめ理解してもらい、調査に臨んでもらった。また同時に、具体的な観覧行動事例と記入例を配布したので、調査員間の観覧行動の解釈の差は小さいと考えられる。よって採取されたデータは信頼性に足りうるものと考えられる。

表 2-1 各民家展示施設における大まかな調査概要

	日本科学未来館	組頭の家（寒冷期）	組頭の家（温暖期）
調査実施日	2003年12月15. 17.19.21.22日（5日間）	2005年3月 12.13.16.17日（4日間）	2006年5月20.21日 （2日間）
有効サンプル数	200	187	149

表 2-2 空間把握行動の定義

【臨地解説】...ボランティアからの解説を受ける。ボランティアと会話をする。
 （例：観覧者がパネルを観覧中に、ボランティアが観覧者に近づき、組頭の家の由来や歴史などを解説。幼少期に茅葺住宅で生活したことのある観覧者が、懐かしさのあまりボランティアに話しかけ、会話が始まるなど）

【参加体験】...観覧者が、あるものを見ようと思って視線を大きく動かす。視覚以外の感覚器官で、展示空間の中にある情報を知ろうとする行動。（例：観覧者が天井を見上げながら歩く。カマドの火にあたる。畳に座る。屋外から組頭の家の屋根を見上げる。室内から屋外の庭を眺める。大黒柱に触るなど）

【普通観覧】...観覧者の視線が大きく動かすことなく展示物を眺める。パネルに書いてある文章を読む行動。（大黒柱の前で大黒柱を見る。パネルを読むなど）

*【普通観覧】以外の観覧行動を、ここでは空間把握行動として定義する。

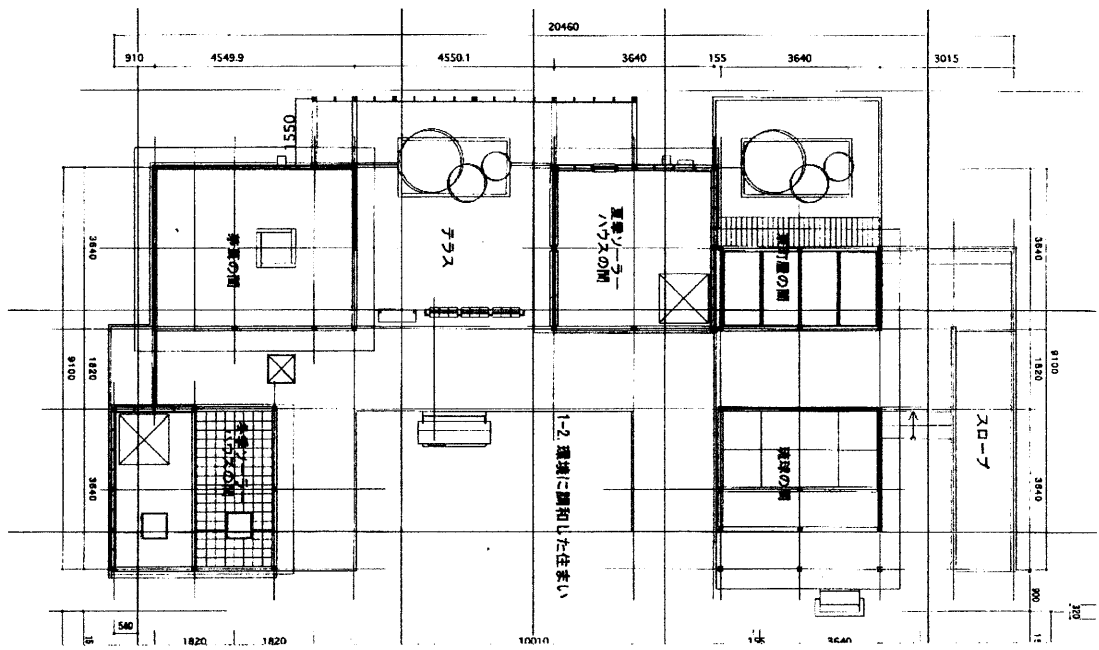


図 2-2 環境共生型住宅の平面図

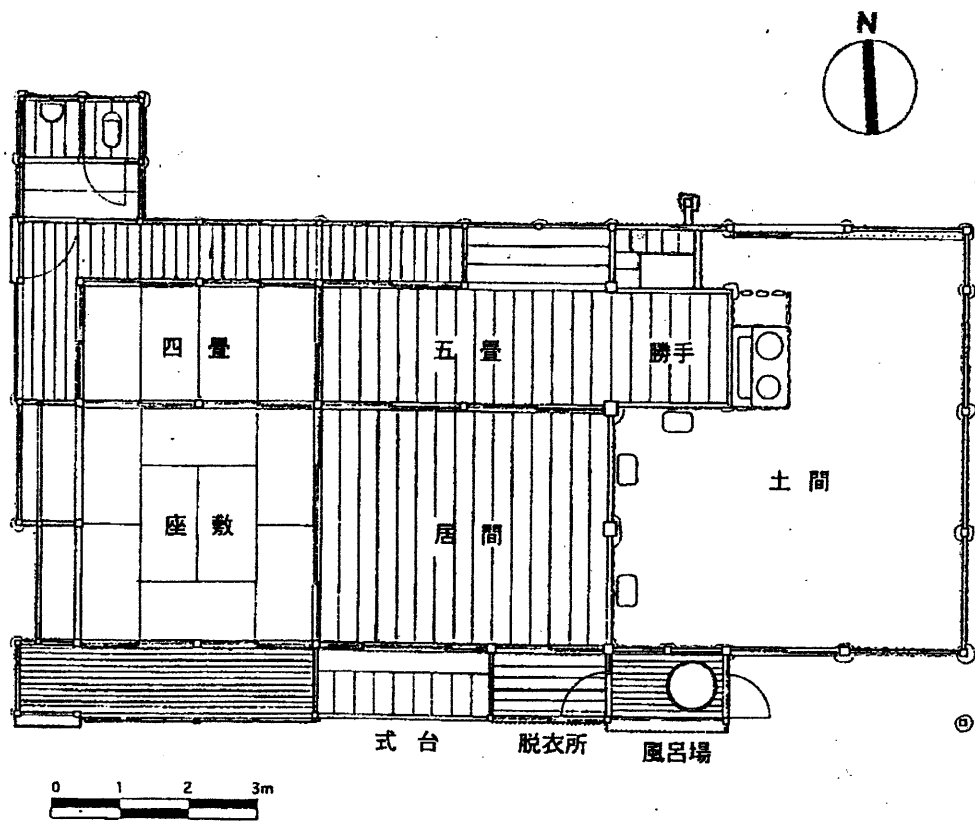


図 2-3 組頭の家 of the plane diagram

表 2-3
未来館観覧
行動分類コ
ード

展示場コード(1)		展示物コード(2)		行動コード(3)	
下駄箱	10	パネル	実物	展示物を眺める	31
京都町屋	11	町屋	111 町屋植栽	1151 展示物を見る	32
沖縄の間	12	強風	121 町屋すだれ	1152 展示物をノート	33
環境夏間	13	寒暖	122 町屋漆喰	1153 展示物を撮る	34
テラス	14	エコフロ	131 町屋畳	1154 展示物を指差す	35
茅葺	15	エコフロ	132 町屋縁側	1155 展示物に触る	36
環境冬間	16	夏快適	133 町屋その他	1156 パネルを眺める	41
場外沖縄	17	パンプ	141	パネルを読む	42
場外凸部分	18	廢材	151 沖縄天井	1251 パネルをノート	43
場外冬間	19	エコ文化	152 沖縄屋根	1252 パネルを撮る	44
町屋廊下	21	茅葺しさ	153 沖縄壁	1253 パネルを指差す	45
沖縄廊下	22	エネ自給	161 沖縄畳	1254 VIと写真を撮る	54
夏間廊下	23	冬快適	162 沖縄縁側	1255 VIと話す	55
テ前廊下	24	蓄熱	163 沖縄その他	1256 VIの解説を聞く	56
茅葺廊下	25	あらし	171	友人と話す	58
冬間廊下	26	屋根カメラ	181 環境夏天井	1351 寝転がる	61
		共生まち	191 環境夏屋根	1352 立ち止まる	71
			環境夏壁	1353 座る	81
			環境夏窓	1354 歩く	91
			環境夏床	1355 小走り	92
			環境夏机上	1356 走る	93
			環境夏椅子	1357	
			環境夏すだれ	1358 行動付随コード(4)	
			環境夏その他	1359 その行動単独	71
					72
			テラス植栽	1451 話しながら	73
			テラス床	1452 聞きながら	74
			水壁	1453 眺めながら	75
			テラス机上	1454 指差しながら	76
			テラス椅子	1455 写真を撮りながら	77
			テラスその他	1456 ノートをとりながら	78
				資料を読みながら	79
			茅葺天井	1551	
			茅葺屋根	1552 行動参与コード(5)	
			茅葺囲炉裏	1553 なし	0
			茅葺床	1554 VIP	1
			茅葺壁	1555 HON	2
			茅葺障子	1556 VIP+HON	3
			茅葺その他	1557	
				人との関係(6)	
			環境冬天井	1651 単独なし	10
			環境冬屋根	1652 単独V	11
			環境冬床	1653 単独I	12
			環境冬石	1654 学校団体なし	20
			環境冬ベ	1655 学校団体V	21
			環境冬壁	1656 学校団体I	22
			環境冬机上	1657 カップルなし	30
			環境冬椅子	1658 カップルV	31
			その他	1659 カップルI	32
				ファミリーなし	40
				ファミリーV	41
				ファミリーI	42
				友人なし	50
				友人V	51
				友人I	52

軌跡コード	
右中心型	1
中央中心型	2
左中心型	3
全体詳細型	4
全体駆足型	5
部分型	6
両脇型	7
補足コード	
下駄箱	1
沖縄の間	2
あらし横	3
凸	4
冬の間	5
カメラ横	6

年齢コード		形態コード	
幼児	11	両親子ども	11
小低	12	父親子ども	12
小高	13	母親子ども	13
中学生	14	父母子ども	21
高校生	15	祖父子ども	22
大学生	16	祖母子ども	23
20代	20	夫婦	31
30代	30	カップル	41
40代	40	友人同士	51
50代	50	一人	61
60代	60		
それ以上	70		

表 2-4 千人同心組頭の家覧行動分類コード

①年齢コード		④大項目	⑤行動場所コード		⑥行動コード	
幼児	11	入口	かまど	311	外を眺める	4111
小学低学	12	土間	天井	312	周囲から室内眺める	4112
小学高学	13	室内パネル	滝し	313	土間から室内眺める	4113
中学	14	勝手	風呂	314	展示物眺める	4114
高校	15	居間	水がめ	315	展示物ノート	4115
大学	16	風呂場	たらい	316	展示物撮影	4116
20歳代	20	脱衣所	柱	317	展示物指差	4117
30歳代	30	式台	解説シート	318	展示物触る	4118
40歳代	40	座敷	火鉢	319	パネル読む	4119
50歳代	50	四畳	押入れ	320	パネルノート	4120
60歳代	60	五畳	床の間	321	パネル撮影	4121
70歳以上	70	外周	鍋蓋	322	ボランティアを撮影	4122
		縁側	調理道具	323	ボランティアと話す	4123
②性別コード		廊下	ふすま	324	ボランティアの解説聞く	4124
男性	1	便所	軒下・屋根	325	友人・他の人と話す	4125
女性	2		ボラ作業	326	寝転がる	4126
③形態コード			石臼	327	座る	4127
両親子	11		庭の梅	328	走る	4128
父子	12		梁	329	立ち止まる	4129
母子	13		まき	330	火にあたる	4130
祖父母子	14		火吹く樽	331	火吹く樽吹く	4131
祖父子	15		大黒柱	332	まきをくべる	4132
祖母子	16		柵	333	石臼をまわす	4133
夫婦	17		風呂扉	334	その他	4134
カップル	18		石段	335		
友人同士	19		床下	336		
団体	20		壁	337		
一人	21		入口案内	338		
その他	22		室内パネル	300		
			土間全体	11		
			勝手全体	12		
			居間全体	13		
			風呂場全体	14		
			脱衣所全体	15		
			式台全体	16		
			五畳全体	17		
			座敷全体	18		
			縁側全体	19		
			廊下全体	20		
			四畳全体	21		
			便所全体	22		
			外周	23		
			入口全体	24		
⑦見学状況						
なし	0					
HON	1					
VIP	2					
1+2	3					

2 観覧者の属性の特徴

2-1 各民家展示施設における空間把握行動時間の割合の特徴

ここでは、調査対象施設である、日本科学未来館環境共生型住宅、江戸東京たてもの園八王子千人同心組頭の家（寒冷期）、江戸東京たてもの園八王子千人同心組頭の家（温暖期）における、それぞれの観覧者の全観覧時間^⑤に占める空間把握行動時間^⑦の割合を求めた（表 2-5）。

表 2-5 各民家展示施設における空間把握行動時間

	空間把握行動時間の割合の平均	標準偏差
環境共生型住宅	64.0%	32.55
組頭の家（寒冷期）	63.3%	37.86
組頭の家（温暖期）	57.9%	38.66

各民家展示施設とも、全観覧時間のうち、空間把握行動時間の割合の平均が 50%後半から 60%前半であることがわかった。また標準偏差から、各民家展示施設間で見られる空間把握行動時間のばらつきも、ほぼ同じような傾向があることがわかった。

次に、各民家展示施設における空間把握行動時間の割合と、該当する人数をヒストグラムに表した。これをもとに、各民家展示施設の特徴を分析する。

2-2 各民家展示施設における空間把握行動時間の割合のヒストグラムによる特徴

各民家展示施設におけるヒストグラムを、図 2-4～図 2-6 に示した。なお、全観覧時間のうち、空間把握行動時間の割合の違いによってグループ化し、グループ間の比較を行った。

環境共生型住宅の場合（図 2-4）、空間把握行動時間が 100%と 0%の割合がやや突出している。また、空間把握行動時間の割合が大きくなるにつれて、人数が増える傾向がある。

組頭の家（寒冷期）の場合（図 2-5）、空間把握行動時間が 100%と 0%の割合がかなり突出している。それ以外は、少数ながら満遍なく分散している傾向がある。

組頭の家（温暖期）の場合（図 2-6）、空間把握行動時間が 100%と 0%の割合が突出しているが、寒冷期の場合ほど極端ではない。また比較的特定の割合に人数が固まる傾向がある。

次に、空間把握行動時間の割合による観覧者の特徴を分析するため、空間把握行動時間の割合により、それぞれ以下のように便宜的に定義し、グループ化した。

環境共生型住宅では、平均値±標準偏差分の値である、31.4、96.7 を目安として、空間把握行動の割合が 96.7%以上の、全観覧行動時間のうち、ほとんどが空間把握行動を詳細空間把握型、64.0%～96.6%を熱心空間把握型、31.4%～63.9%を普通空間把握型、0.0%～31.3%を駆逐空間把握型とした。

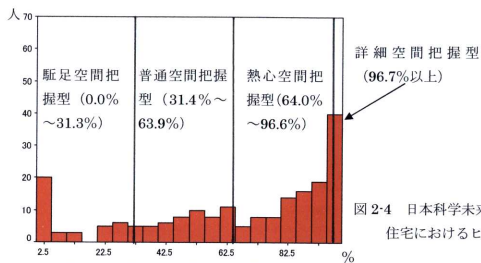


図2-4 日本科学未来館・環境共生型住宅におけるヒストグラム

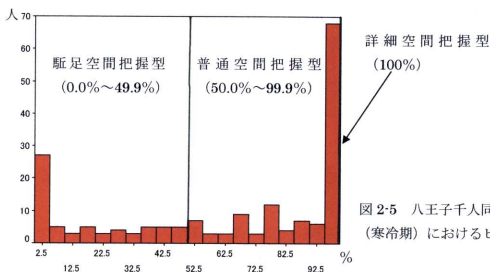


図2-5 八王子千人同心組頭の家(寒冷期)におけるヒストグラム

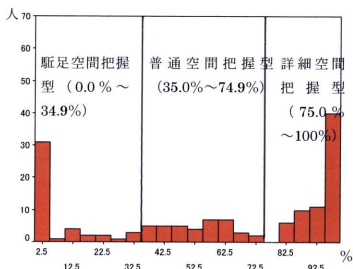


図2-6 八王子千人同心組頭の家(温暖期)におけるヒストグラム

組頭の家（寒冷期）では、空間把握行動時間の割合が突出している 100%を詳細空間把握型とし、空間把握行動時間の割合が 50.0%以上を普通空間把握型、0.0%～49.9%を駆足空間把握型とした。

組頭の家（温暖期）では、空間把握行動時間の割合が 0.0%～5.0%をモードとするグループ、45.0%～50.0%をモードとするグループ、95.0%～100%をモードとするグループに別けられることから、空間把握行動時間の割合が 75.0%以上を詳細空間把握型、35.0%～74.9%を普通空間把握型、0.0%～34.9%を駆足空間把握型とした。

それぞれに該当する観覧者は、表 2-6 の通りである。

表 2-6 各民家展示施設における空間把握行動時間の割合別該当者数

	環境共生型住宅	組頭の家（寒冷期）	組頭の家（温暖期）
詳細空間把握型	36 人	63 人	67 人
熱心空間把握型	76 人	-	-
普通空間把握型	51 人	58 人	38 人
駆足空間把握型	37 人	66 人	44 人

これらのグループに属する観覧者の特徴を分析する。

2-3 各民家展示施設における観覧者の年齢別空間把握行動時間の割合の特徴

各民家展示施設における観覧者の年齢別空間把握行動時間の割合^{註 8)}を示したものを図 2-7～図 2-9 に示す。

環境共生型住宅の場合（図 2-7）、詳細空間把握型では、20 歳代には皆無で、30 歳代でも、他の年齢層と比べると低調である。幼児小学生と 60 歳代以上では、他の年齢層と比べると、ややその割合は大きい。

熱心観覧型では、幼児小学生と中学高校大学生と 40 歳代以上の年齢層でその割合は大きい、20 歳代と 30 歳代では、ほかと比べると低調である。

普通空間把握型では、20 歳代と 30 歳代でその割合は大きい。また、50 歳代以上の年齢層でも、ややその割合は大きい。一方、幼児小学生、中学高校大学生、40 歳代では、その割合が低調である。

駆足空間把握型では、50 歳代以上では皆無で、30 歳代でも、その割合は他と比べると低調である。比較的割合が大きいのは、中学高校大学生、20 歳代、そして 40 歳代である。

組頭の家（寒冷期）の場合（図 2-8）、詳細空間把握型では、幼児小学生と 60 歳代以上でその割合は大きく、50 歳代も比較的大きな割合を占めている。20 歳代から 40 歳代までは、その割合は比較的低調で、中学高校大学生では皆無であった。

普通空間把握型では、中学高校大学生の全員が該当し、20 歳代も他の年齢層と比較すると、その割合は大きい。それ以外の年齢層は、ほぼ同じくらいの割合を占めている。

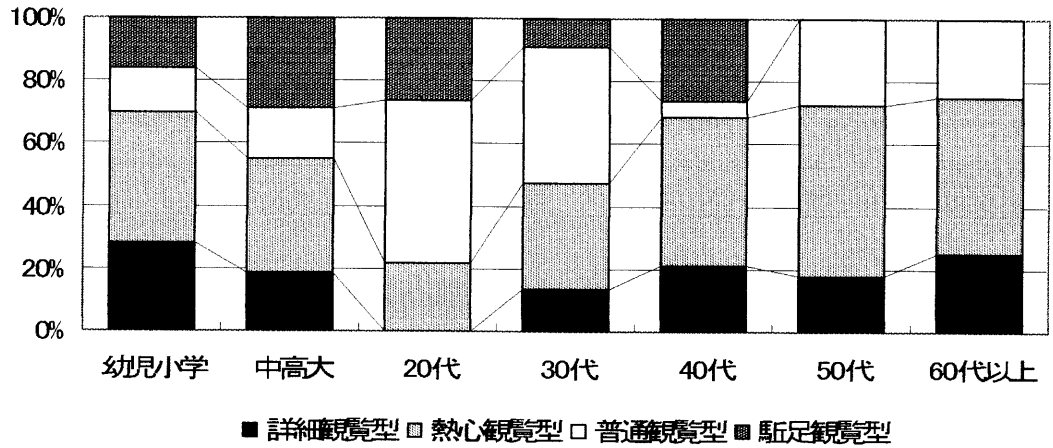


図 2-7 環境共生型住宅における観覧者の年齢別空間把握行動時間の割合の特徴

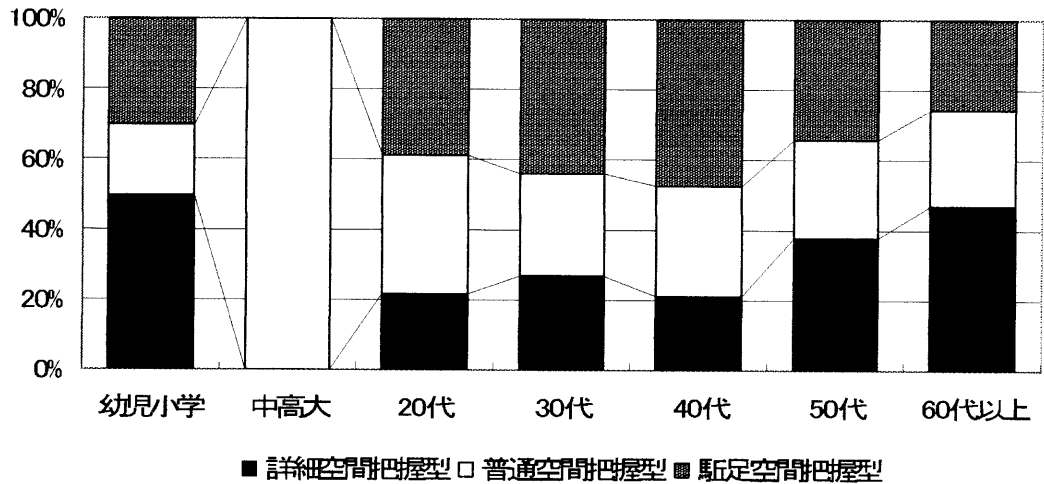


図 2-8 組頭の家（寒冷期）における観覧者の年齢別空間把握行動時間の割合の特徴

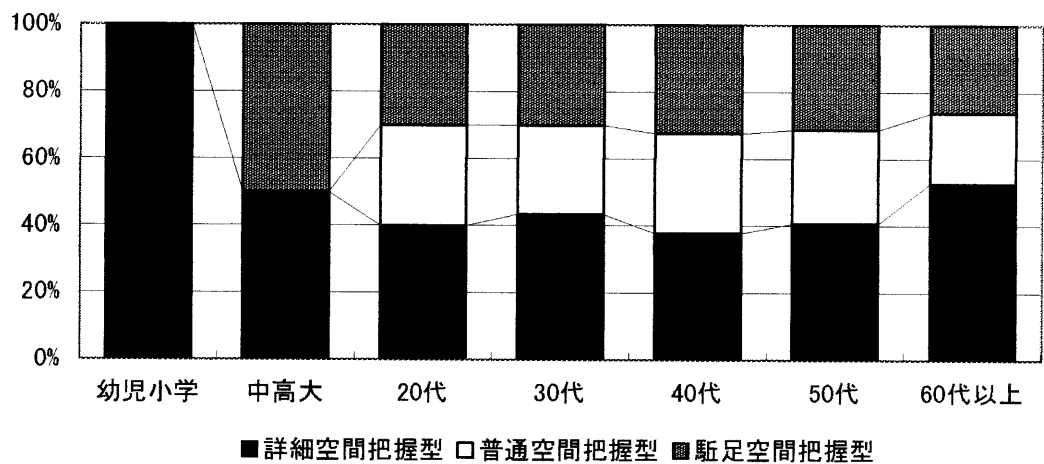


図 2-9 組頭の家（温暖期）における観覧者の年齢別空間把握行動時間の割合の特徴

駆足空間把握型では、20歳代から40歳代までは、その割合が大きく占めているが、幼児小学生と50歳代以上の年齢層では、比較的その割合は小さい。

組頭の家（温暖期）の場合（図 2-9）、詳細空間把握型では、幼児小学生において、全員が該当し、中学高校大学生と60歳代以上でも、その割合が大きい。それ以外の年齢層も、だいたい同じくらいの割合を占めている。

普通空間把握型では、20歳代以上の年齢層で発生しており、その割合もほぼ同じで、年齢別による差はあまりないものの、60歳代以上では、ややその割合が小さい。

駆足空間把握型では、中学高校大学生でその割合が大きい、20歳代以上の年齢層では、その割合はほぼ同じで、年齢別による差もあまりない。

以上により、環境共生型住宅、組頭の家（寒冷期）、組頭の家（温暖期）における観覧者の年齢別空間把握行動時間の割合の特徴を分析した結果、

- ・ 幼児小学生と50歳代以上の年齢属性では、いずれの民家展示施設でも、空間把握行動時間の割合が大きい傾向がある。
- ・ 中学高校大学生に該当する年齢属性では、各民家展示施設における空間把握行動時間の割合が極端に異なっている。
- ・ 環境共生型住宅と組頭の家（寒冷期）では、20歳代から40歳代において、空間把握行動時間の割合は比較的低調である。
- ・ 組頭の家（温暖期）では、空間把握行動時間の割合は、20歳代以上の年齢による差はあまりない。

ということがわかった。

2-4 各民家展示施設における観覧者の同伴者別空間把握行動時間の割合の特徴

各民家展示施設における観覧者の同伴者別空間把握行動時間の割合を示したものを図 2-10～図 2-12 に示す。

環境共生型住宅の場合（図 2-10）、詳細空間把握型では、夫婦において、その割合が大きく、友人同士と一人の属性において、その割合がやや大きい。一方で、両親祖父母と子ども、父親または母親と子ども、カップルにおいてその割合が小さい。

熱心空間把握型では、父親または母親と子ども、夫婦、友人同士において、その割合がやや大きい。それ以外の同伴者別属性では、ほぼ同じ割合で発生している。

普通空間把握型では、カップルでその割合が大きい。一方で夫婦や友人同士でその割合が小さい。それ以外の同伴者別属性では、ほぼ同じ割合で発生している。

駆足空間把握型では、夫婦では皆無であり、父親または母親と子ども、カップルでその

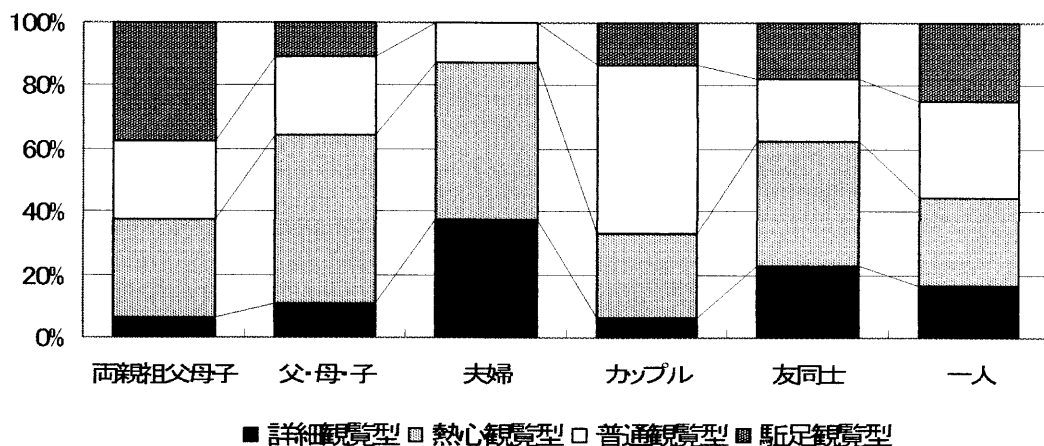


図 2-10 環境共生型住宅における観覧者の同伴者別空間把握行動時間の割合の特徴

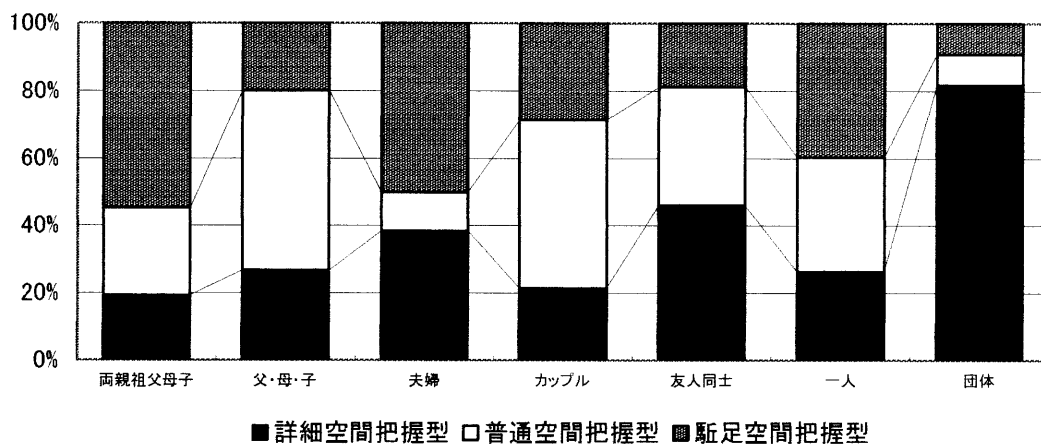


図 2-11 組頭の家（寒冷期）における観覧者の同伴者別空間把握行動時間の割合の特徴

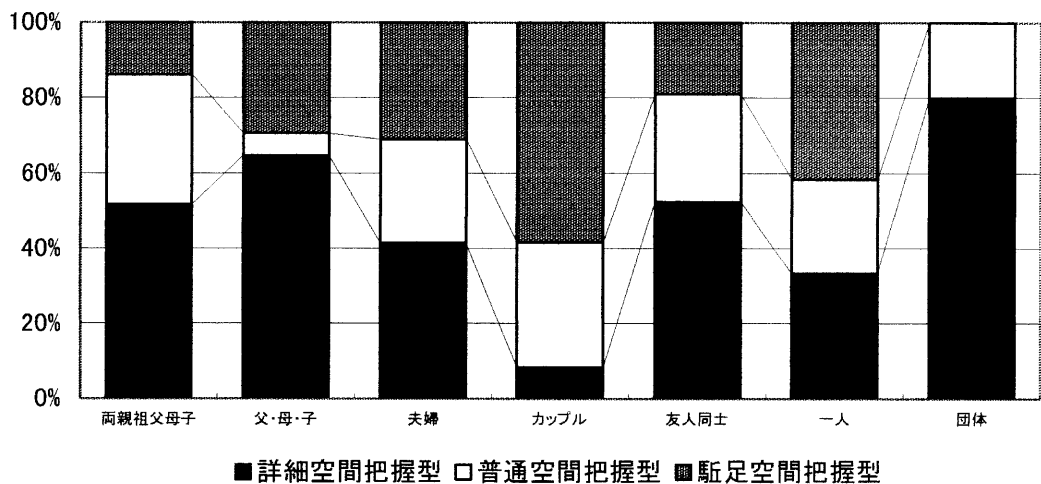


図 2-12 組頭の家（温暖期）における観覧者の同伴者別空間把握行動時間の割合の特徴

割合が小さいが、両親祖父母と子ども、一人において、比較的その割合は大きい。

組頭の家（寒冷期）の場合（図 2-11）、詳細空間把握型では、団体でその割合が極めて大きく、友人同士と夫婦でも、その割合が大きい。一方、両親祖父母と子ども、カップルと一人ではその割合が比較的小さい。

普通空間把握型では、父親または母親と子ども、カップルでその割合が大きく、夫婦、団体でその割合は小さい。それ以外の同伴者別属性では、ほぼ同じ割合で発生している。

駈足空間把握型では、両親祖父母と子ども、夫婦ではその割合が大きく、一人の割合も比較的大きい。一方団体ではその割合が小さく、それ以外の同伴者別属性では、ほぼ同じ割合で発生している。

組頭の家（温暖期）の場合（図 2-12）、詳細空間把握型では、団体、父親または母親と子どもでその割合が大きく、両親祖父母と子ども、友人同士でもその割合が比較的大きい。一方カップルではかなり低調であり、割合の差が大きい。

普通空間把握型では、父親または母親と子どもの割合が低い、それ以外の同伴者別属性では、ほぼ同じ割合で発生している。

駈足空間把握型では、カップルでその割合が大きく、また一人での割合も比較的大きい。一方団体では皆無である。両親祖父母と子どもでその割合は小さいが、父親または母親と子ども、夫婦、友人同士において、ほぼ同じ割合で発生している。

以上により、環境共生型住宅、組頭の家（寒冷期）、組頭の家（温暖期）における観覧者の同伴者別空間把握行動時間の割合の特徴を分析した結果、

- ・ カップルと一人の形態では、いずれの民家展示施設でも、空間把握行動時間の割合が小さい。
- ・ 夫婦の形態では、環境共生型住宅と組頭の家（寒冷期）において、空間把握行動時間の割合が比較的大きい。
- ・ 組頭の家では、団体の形態において、空間把握行動時間の割合が大きい。
- ・ 組頭の家では、父親または母親と子どもの形態において、寒冷期では空間把握行動時間の割合は比較的小さいが、温暖期において大きい。

ということがわかった。

3 空間把握行動時間と全観覧時間・観覧回数の特徴

ここでは、調査対象施設である、日本科学未来館環境共生型住宅、江戸東京たてももの園八王子千人同心組頭の家（寒冷期）、江戸東京たてももの園八王子千人同心組頭の家（温暖期）における、それぞれの観覧者の全観覧時間に占める空間把握行動時間および観覧回数^{注9)}の特徴を明らかにする。

3-1 各民家展示施設における空間把握行動時間と全観覧時間との関係

各民家展示施設における空間把握行動時間と全観覧時間との関係を、図 2-13～図 2-15 に示す。

環境共生型住宅の場合（図 2-13）、組頭の家（寒冷期）の場合（図 2-14）、組頭の家（温暖期）の場合（図 2-15）、それぞれ全観覧時間が長くなるにつれ、空間把握行動時間も長くなる傾向がある。また、環境共生型住宅と組頭の家（温暖期）において、全観覧時間が長い傾向があるが、組頭の家（寒冷期）において、全観覧時間が短い傾向がある。また、環境共生型住宅と組頭の家（寒冷期）において、全観覧時間に比べて空間把握行動時間がやや短いグループがあるが、組頭の家（温暖期）では、空間把握行動時間がやや短いグループの出現はほとんどないことがわかった。

3-2 各民家展示施設における空間把握行動時間と観覧回数との関係

各民家展示施設における空間把握行動時間と観覧回数との関係を、図 2-16～図 2-18 に示す。

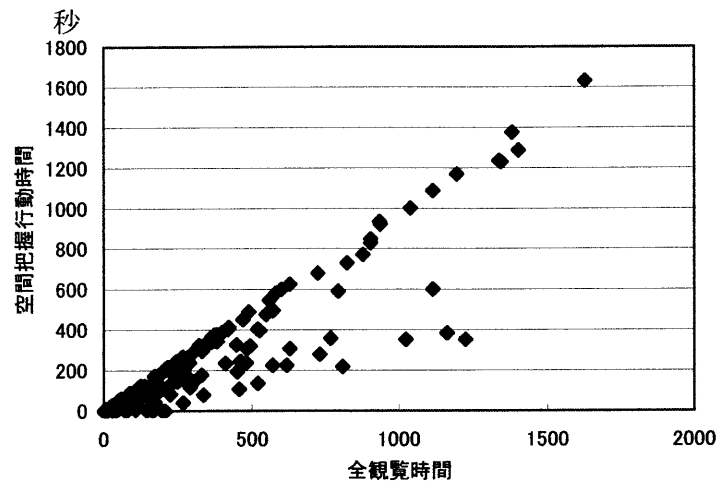
環境共生型住宅の場合（図 2-16）、組頭の家（寒冷期）の場合（図 2-17）、組頭の家（温暖期）の場合（図 2-18）、それぞれ空間把握行動時間が長い場合、観覧回数は比較的少ない傾向がある。特に環境共生型住宅と組頭の家（温暖期）において、空間把握行動時間が最も長いグループにおいて、観覧回数はそれぞれ 10 回前後、5 回前後に出現していることから、特にその傾向が強い。一方、組頭の家（寒冷期）において、空間把握行動時間そのものがあまり長く続いていないことがわかるが、観覧回数も、比較的少ない。

各民家展示施設における、全観覧時間、空間把握行動時間、観覧回数の平均を、表 2-7 にまとめた。

表 2-7 各民家展示施設における全観覧時間・空間把握行動時間・観覧回数の平均

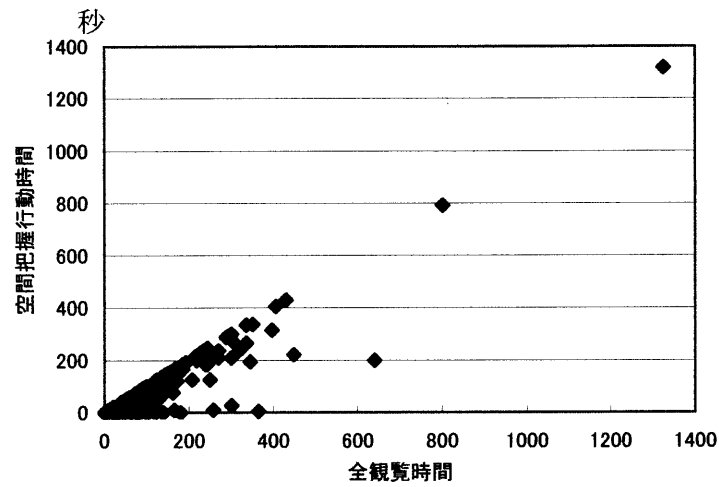
	全観覧時間	空間把握行動時間	観覧回数
環境共生型住宅	283.5 秒	210.1 秒	7.2 回
組頭の家（寒冷期）	127.0 秒	91.7 秒	3.5 回
組頭の家（温暖期）	217.2 秒	177.6 秒	3.7 回

* 小数点以下第 2 位を四捨五入



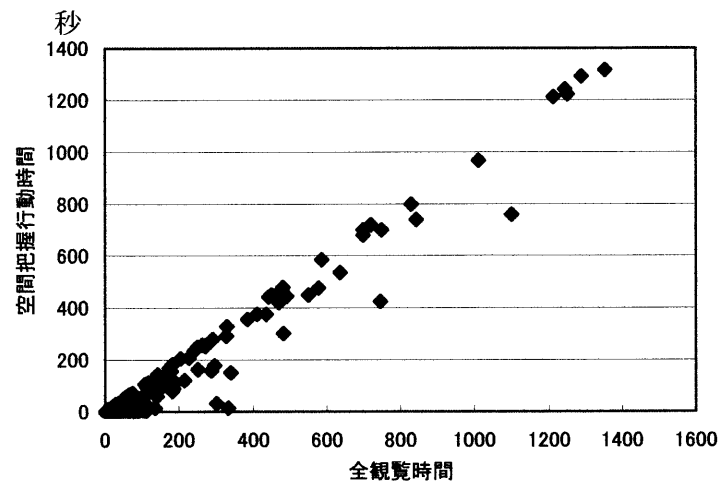
秒

図 2-13 環境共生型住宅における全観覧時間と空間把握行動時間の関係



秒

図 2-14 組頭の家（寒冷期）における全観覧時間と空間把握行動時間の関係



秒

図 2-15 組頭の家（温暖期）における全観覧時間と空間把握行動時間の関係

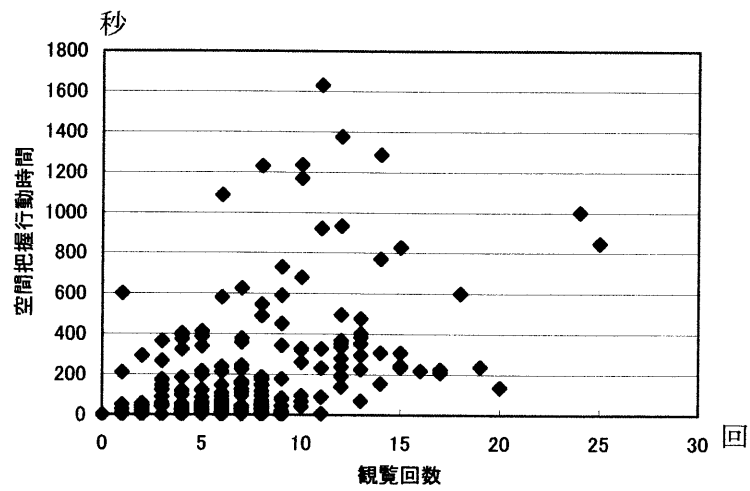


図 2-16 環境共生型住宅における観覧回数と空間把握行動時間の関係

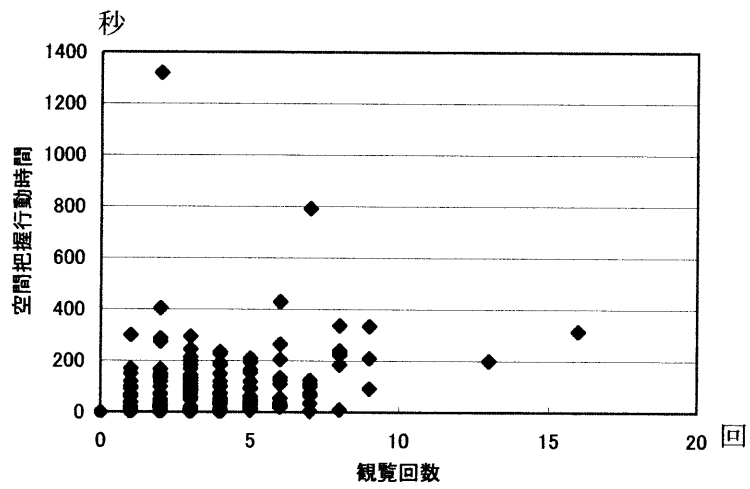


図 2-17 組頭の家（寒冷期）における観覧回数と空間把握行動時間の関係

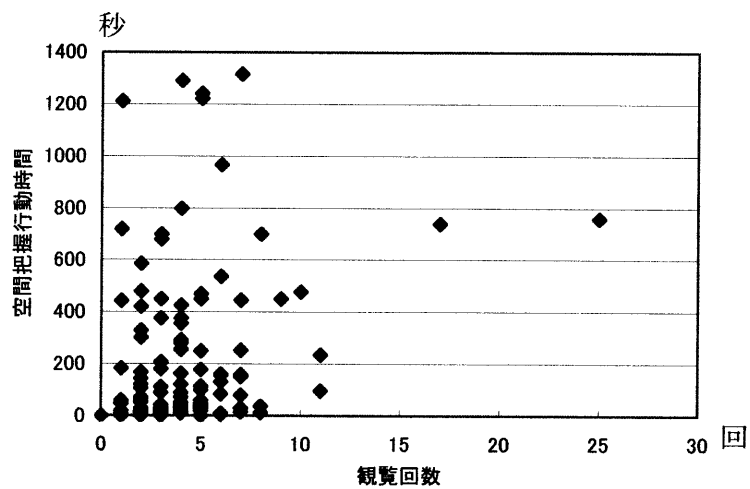


図 2-18 組頭の家（温暖期）における観覧回数と空間把握行動時間の関係

表 2・7 より、展示面積などが大きい環境共生型住宅において、すべての項目の値は大きい。一方、組頭の家（寒冷期）と組頭の家（温暖期）では、観覧回数において、ほとんど顕著な差はないが、全観覧時間と空間把握行動時間において、秒数の値が倍近くあることがわかった。

組頭の家の子節による差は、温度環境などの違いも大きいが、解説人員による環境再現展示（カマドの火入れや、座敷での実演など）による差も大きいと考えられる。

4 観覧行動の内訳による各民家展示施設の特徴

4-1 各民家展示施設における観覧回数の内訳

各民家展示施設における観覧回数の内訳を、図 2-19 に示す。

普通観覧の割合は、環境共生型住宅で大きく、環境共生型住宅の観覧回数の半分以上を占めていることがわかる。組頭の家（寒冷期）では、その割合は施設間で小さい。空間把握行動である臨地解説は、組頭の家（温暖期）において、比較的大きな割合を占めている。また、参加体験は、組頭の家（寒冷期）において、その割合は比較的大きい。臨地解説+参加体験の割合は最も小さく、施設間による違いはない。

観覧回数では、組頭の家（寒冷期）において、空間把握行動の割合が大きい傾向があることがわかった。

4-2 各民家展示施設における全観覧時間の内訳

各民家展示施設における全観覧時間の内訳を、図 2-20 に示す。

普通観覧の割合、施設間を比べると、その割合の差は比較的小さく、空間把握行動時間が長いことがうかがえる。空間把握行動である臨地解説では、組頭の家（温暖期）でその割合は大きい。参加体験では、組頭の家（寒冷期）でその割合は大きい。臨地解説+参加体験の割合は、組頭の家（温暖期）において、その割合は大きい。

観覧回数と全観覧時間を比べると、全体的に、普通観覧に該当する観覧行動に費やす時間は短く、空間把握行動である臨地解説+参加体験に該当する観覧行動は、回数自体は少ないが、観覧回数1回あたりにかける観覧時間は長いことがわかった。また、参加体験は、観覧回数と観覧時間と比べると、ほぼ同じ割合であることから、観覧回数1回あたりにかける観覧時間は短いことがわかった。

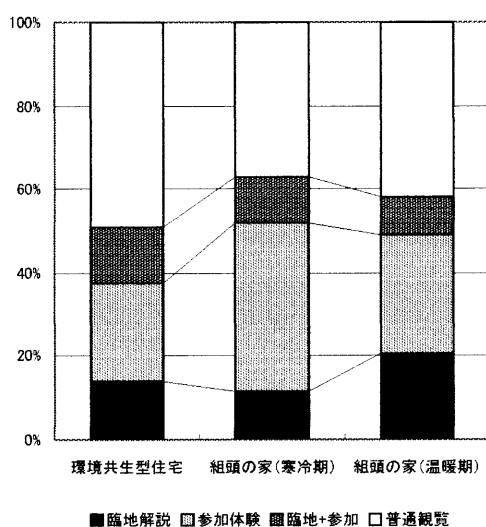


図 2-19 各民家展示施設における観覧回数の内訳

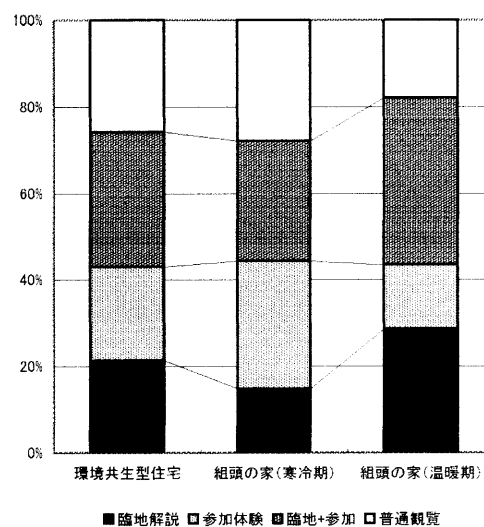


図 2-20 各民家展示施設における全観覧時間の内訳

5 まとめ

室内に民家が展示されている日本科学未来館・環境共生型住宅、屋外に民家が展示されている江戸東京たてももの園・八王子千人同心組頭の家（寒冷期および温暖期）における、観覧者の空間把握行動時間による属性の分析、全観覧時間と空間把握行動時間の分析、観覧回数と空間把握行動時間の分析を行った。

その結果、全観覧時間のなかで空間把握行動時間の割合は、民家展示施設の違いによる差はあまりないことがわかった。また、空間把握行動時間の割合と、その割合に該当する人数を分析すると、いずれの民家展示施設でも、全く空間把握行動時間が発生していないグループと、全観覧時間のほとんどが空間把握行動時間で占められているグループに二極化する傾向があった。

年齢の違いによる空間把握行動時間の割合を分析すると、幼児小学生、50歳代、60歳代以上では、いずれの民家展示施設でも、空間把握行動時間の割合が大きい傾向があった。また、中学高校大学生では、各民家展示施設で比較すると、空間把握行動時間の割合が極端に異なっている傾向があった。さらに同伴者の違いによる空間把握行動時間の割合を分析すると、カップルと一人では、空間把握行動時間の割合が小さい傾向があった。

全観覧時間と空間把握行動時間との関係を分析すると、各民家展示施設における全観覧時間が長くなるにつれて、空間把握行動時間が長くなる傾向があること、観覧回数と空間把握行動時間との関係を分析すると、空間把握行動時間が長くなっても、観覧回数は増えないことがわかった。

観覧行動の内訳別観覧回数と観覧時間を分析すると、空間把握行動のなかでも、臨地解説＋参加体験に該当する観覧行動は、回数は少ないが、観覧時間は長時間持続することがわかった。一方で、参加体験に該当する観覧行動は、観覧回数と観覧時間の割合はだいたい同じことから、観覧時間は短時間に終わることがわかった。

これらから、室内における民家展示、屋外における民家展示において、観覧者の空間把握行動という尺度を用いて分析すると、その違いがあまりない傾向があった。すなわち、民家を展示資料として考える場合、積極的に空間を感じろうとする行動は、室内・屋外という展示環境の差があったとしても、それほど大きな影響を与えていないことがわかった。しかしながら、観覧者の民家展示に対する要望の違いや、温度・日照といった自然環境の変化といった展示環境の差による空間把握行動の発生要因、観覧時間が長時間持続する臨地解説＋参加体験という観覧行動の発生要因、また、展示環境に内在する情報を効果的に観覧者に伝達するための解説人員が、観覧行動に与える影響などを分析する必要があることがわかった。

引用・参考文献

- 朴光範・野村東太・大原一興・平野暁臣・小川英彦・真鍋博司・西宮浩司 1992.8, 「来館者の観覧時間に関するケーススタディ - 博物館の展示計画に関する研究その1」『日本建築学会大会学術講演梗概集 E』, pp.465-466.
- 西宮浩司・野村東太・大原一興・平野暁臣・朴光範・小川英彦・真鍋博司 1992.8, 「解説員による展示解説実施と観覧行為に関する一考察 - 博物館の展示計画に関する研究その3」『日本建築学会大会学術講演梗概集 E』, pp.469-470.
- 小川英彦・野村東太・大原一興・平野暁臣・朴光範・真鍋博司・西宮浩司 1992.8, 「来館者の観覧時間と観覧行為に関する研究 - 博物館の展示計画に関する研究その2 - 」『日本建築学会大会学術講演梗概集 E』, pp.467-468.
- 野村東太・大原一興・朴光範・小川英彦・真鍋博司・西宮浩司 1993.3, 「博物館の展示・解説が観覧行為に与える影響 - 博物館に関する建築計画的な研究V」『日本建築学会計画系論文集』, 第445号, pp.73-81.
- 西宮浩司・野村東太・大原一興・白石真二郎 1993.9, 「自然科学系博物館における観覧行為に関する一考察 - 博物館に関する建築計画的な研究その31 - 」『日本建築学会大会学術講演梗概集 E』, pp.687-688.
- 久保田百年・野村東太・大原一興 1994.9, 「民家展示施設における活動内容に関する考察 - 民家展示施設の建築計画に関する研究その1」『日本建築学会大会学術講演梗概集 E』, pp.629-630.
- 大原一興・野村東太・久保田百年 1994.9, 「民家展示施設における観覧行為のケーススタディ - 民家展示施設の建築計画に関する研究その2」『日本建築学会大会学術講演梗概集 E』, pp.631-632.
- 坪山幸王・佐藤信治 1995.5, 「展示水槽に対する来館者の観覧行動 - 水族館の観覧空間に関する建築計画的な研究1 - 」『博物館学雑誌』, 第20巻第1・2号合併号, pp.10-21.
- 加茂慎司・野村東太・大原一興 1995.8, 「民家展示施設における展示解説手法の効果に関する考察 - 民家展示施設の建築計画に関する研究その3」『日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1』, pp.419-420.
- 野村東太・西源二郎・大原一興 1996.3, 「水族館の観覧と学習行動に関する研究」『生涯学習のための水族館の教育機能に関する建築計画的な研究』, 平成6～7年度科学研究費補助金総合研究(A)研究成果報告書(課題番号06301079) pp.33-68.
- 諸岡博熊 1998.10, 「博物館利用者の館内行動の観察」『博物館学雑誌』, 第24巻第1号, pp.47-53.
- 松島崇典・小滝一正・大原一興・大月敏雄 1999.9, 「古民家の保全手法と住まい方に関する研究」『日本建築学会大会学術講演梗概集 E-2』, pp.79-80.
- 民家研究委員会編 2001.6, 『古民家の保存・活用のための方法論的研究 - 古民家の地域内保全と民家展示施設の考察』, 住宅総合研究財団.
- 江水是仁 2004.6, 「理工系博物館における民家展示に対する来館者の観覧行動」, 全日本博物館学会ニュース』, No.68.
- 江水是仁・大原一興 2004.8, 「理工系博物館における民家展示に対する来館者の観覧行動」『日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1』, pp.209-210.
- 朴鍾来・花里俊廣 2005.7, 「科学系博物館における展示手法と観覧者の行動特徴からみた展示の分析」『日本建築学会計画系論文集』, 第593号, pp.57-63.

第2章 空間把握行動による各民家展示施設観覧者の特性

江 waters 是仁・大原一興 2005.9, 「理工系博物館・民家展示の空間把握行動に関する考察」『日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1』, pp.553-554.

江 waters 是仁・大原一興 2006.2, 「ミュージアムにおける民家の室内展示に対する来館者の観覧行動に関する研究 - 日本科学未来館・環境共生型住宅の事例 - 」『日本建築学会計画系論文集』, 第 600 号, pp.41-48.

江 waters 是仁・大原一興 2006.6, 「屋外民家展示施設における来園者の観覧行動」『全日本博物館学会ニュース』, No.77.

江 waters 是仁・大原一興 2006.9, 「屋外民家展示施設における来園者の観覧行動に関する研究」, 『日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1』, pp.455-456.

江 waters 是仁・大原一興 2006.11, 「屋外民家展示施設における来園者の観覧行動に関する研究 - 江戸東京たてもの園「八王子千人同心組頭の家」の事例より - 」『日本建築学会計画系論文集』, 第 609 号, pp.33-39.

江 waters 是仁・大原一興 2006.12, 「屋外展示民家における興味が異なる来園者の観覧行動に関する研究 - 温暖期における江戸東京たてもの園・八王子千人同心組頭の家」『博物館学雑誌』, 第 32 巻第 1 号, pp.13-43.

注釈

注1) ここでいう属性とは、年齢別、同伴者別のことをさす。

注2) 日本科学未来館のインタープリターは、理工系大学卒業以上という条件はあるものの、学芸員資格は不問である。また、インタープリターの専攻分野と展示場での担当は、必ずしも一致していないことがある。したがって、環境共生型住宅がある1階を担当するインタープリターは、常勤非常勤合わせて約10名所属し（調査当時）、展示場では、最低でも1日4名いるものの、建築を専攻していたインタープリターは皆無である。また、ほかの展示場を担当するインタープリターも、建築を専攻していたインタープリターは、1名しかいない。

注3) 日本科学未来館ボランティアは、約700名（調査当時）在籍している。1階を担当するボランティアは、1日あたり2～5名ほどである。またボランティアになるための資格は特になく、自分の興味や関心のある展示場に関する研修や接遇などの研修を受けた後、担当する。ボランティアの年齢層は、高校生から70歳代まで幅広く分布している。また、研究者だった人が定年を向かえ、ボランティアをしている人も比較的多い。なお、ボランティアの中で建築関係に携っている人もしくは携っていた人は、ほとんどいない。

注4) 江戸東京たてもの園ボランティアは、2006年12月現在、約180名在籍している。ボランティアは、火曜日～日曜日（月曜日は休園日）で班を組んでいる。1班約30名くらいである。担当する民家は、くじ引きで決めたり、民家1軒ずつ担当したりなど、班ごとの運営に任されている。ボランティアになるための資格は特になく、展示場や接遇などの研修を受けた後に担当する。ボランティアの年齢層は、60歳代が最も多いが、20歳代にも見られる。

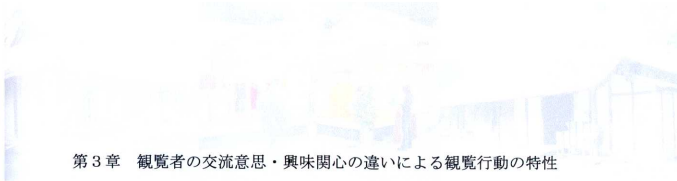
注5) 観覧行動の分類について、特に定式化された指標はないが、これまでの展示観覧行動に関する研究では、全日本博物館学会において、坪山（1995）や諸岡（1998）などがある。日本建築学会において、朴・花里（2005）、野村・大原（1993）などがある。本研究では、これまでミュージアムで繰り返し用いられている行動の分類に加え、今回は、解説人員の存在、野外民家展示施設における観覧行動という点を踏まえ、表2-2のような分類項目を設定した。また、観覧行動を分類する際に、展示場で見られた観覧行動の性格と、観覧行動内容から適した概念を名称として命名し、分類した。

注6) 全観覧時間とは、観覧者が調査対象民家展示施設に足を踏み入れてから出て行くまでの間に発生した観覧行動に費やした時間の合計である。

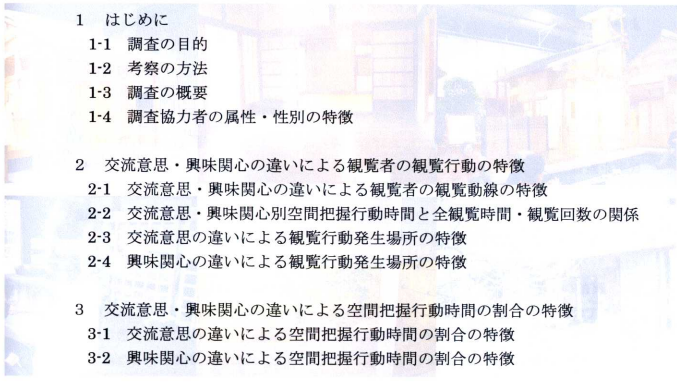
注7) 空間把握行動時間とは、観覧者が調査対象民家展示施設に足を踏み入れてから出て行くまでの間に発生した観覧行動に費やした時間のなかで、臨地解説、参加体験、臨地解説+参加体験に費やした時間の合計である。

注8) 調査員の主観により属性は判断しているため、実際の観覧者の属性とは、若干の誤差はあるものと思われる。

注9) 観覧回数とは、観覧者が調査対象民家展示施設に足を踏み入れてから出て行くまでの間に発生した観覧行動の合計である。



第3章 観覧者の交流意思・興味関心の違いによる観覧行動の特性



1 はじめに

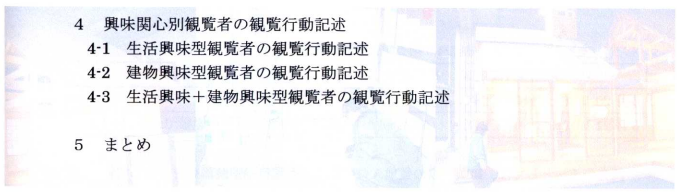
- 1-1 調査の目的
- 1-2 考察の方法
- 1-3 調査の概要
- 1-4 調査協力者の属性・性別の特徴

2 交流意思・興味関心の違いによる観覧者の観覧行動の特徴

- 2-1 交流意思・興味関心の違いによる観覧者の観覧動線の特徴
- 2-2 交流意思・興味関心別空間把握行動時間と全観覧時間・観覧回数の関係
- 2-3 交流意思の違いによる観覧行動発生場所の特徴
- 2-4 興味関心の違いによる観覧行動発生場所の特徴

3 交流意思・興味関心の違いによる空間把握行動時間の割合の特徴

- 3-1 交流意思の違いによる空間把握行動時間の割合の特徴
- 3-2 興味関心の違いによる空間把握行動時間の割合の特徴



4 興味関心別観覧者の観覧行動記述

- 4-1 生活興味型観覧者の観覧行動記述
- 4-2 建物興味型観覧者の観覧行動記述
- 4-3 生活興味+建物興味型観覧者の観覧行動記述

5 まとめ



第3章 観覧者の交流意思・興味関心の違いによる観覧行動の特性

1 はじめに

1-1 調査の目的

前章において、空間把握行動時間の割合などから、各民家展示施設における観覧者の大まかな特徴を把握した。

第3章では、その特徴を踏まえ、観覧者の民家に対する解説員との交流意思・興味関心の違いによる観覧行動の特性を明らかにすることを目的とする。

1-2 考察の方法

目的を達成させるために、観覧者における解説員との交流意思や興味関心の違いを、民家を観覧する前に明らかにしてから観覧行動追跡調査をおこなった。そして、交流意思の有無により観覧者を分類し、さらに交流意思がある観覧者の興味関心による分類を行ったうえで観覧行動を分析する。その結果の差を比較することで、交流意思・興味関心の違いによりどのような観覧行動が起こっているのかを明らかにする。

1-3 調査の概要

ここでは、2006年5月20日と21日に実施した、江戸東京たてもの園八王子千人同心組頭の家を調査対象とした。調査実施日の気象条件や概要は、表3-1の通りである。選定理由として、屋外に移築して展示されている民家であるがゆえ、外気温、日射といった自然環境が、効果的に展示環境に反映されていると考えられるからである。

表3-1 調査実施日の気象条件・概要

	天候気温	被験者数	解説員	裏戸	特記事項
5月20日(土)	晴天 28℃	72名	有	開	なし
5月21日(日)	晴天 27℃	77名	有	開	座敷でお手玉実演

調査の手法としては、組頭の家敷地入口付近に、観覧行動追跡調査を実施している旨を書いた看板を掲げ(写真3-1)、かつ組頭の家敷地に足を踏み入れた観覧者に対し、調査員が看板と同じ文面のチラシを渡した。その際、口頭で簡単に調査をしている旨を話し、調査協力の旨を申し出た^{注1)}。その際、協力を快諾くださった観覧者には、交流に対しての要望と展示民家に対する興味関心がどこにあるのかを事前に明らかにしてもらい、交流希望と興味関心の違いを表示するシールを貼ってもらえるようお願いをした^{注2)}。ここでは、観覧者の交流に対する希望と展示民家に関する興味関心について、まず以下の2つに分類できるものとした。



写真 3-1 掲示板の様子

- ・ 自分のペースで観覧したいので、解説などはこちらからお願いした時以外いらない（不干渉希望型）
- ・ 民家に対して興味関心があるので、解説などをして欲しい（解説希望型）

さらに解説希望型の観覧者には、

- ・ 人々の暮らしや文化、歴史などに興味関心があるので、これらのことを深く知りたい（生活興味型）
- ・ 建築物としての建物そのものに興味関心があるので、これらのことを深く知りたい（建物興味型）

このように分類できた観覧者の交流意思・興味関心の違いを表すため、不干渉希望型、生活興味型、建物興味型を表すシールを用意した（図 3-1）。



図 3-1 観覧者の交流意思・興味関心の違いを表すシール
（左から不干渉希望型、生活興味型、建物興味型）

本調査において、協力が得られた観覧者の概要は、表3-2の通りである。

表3-2 調査協力者の概要

	不干涉希望型	生活興味型	建物興味型	生活興味型+建物興味型	合計
5/20(土)	8名(8)	5名(4)	5名(4)	2名(2)	20名(18)
5/21(日)	6名(5)	10名(7)	6名(3)	4名(2)	26名(17)
合計	14名(13)	15名(11)	11名(7)	6名(4)	46名(35)

※ カッコ内の数字は、実際観覧行動追跡調査ができた人数

ここでは、観覧者のシールを調査員が認識して、観覧行動を記録した。したがって、交流意志の有無および興味関心の違いによる観覧行動などの比較を分析した。

1-4 調査協力者の属性・性別の特徴

調査協力者の年齢別興味関心の違いは、図3-2の通りである。

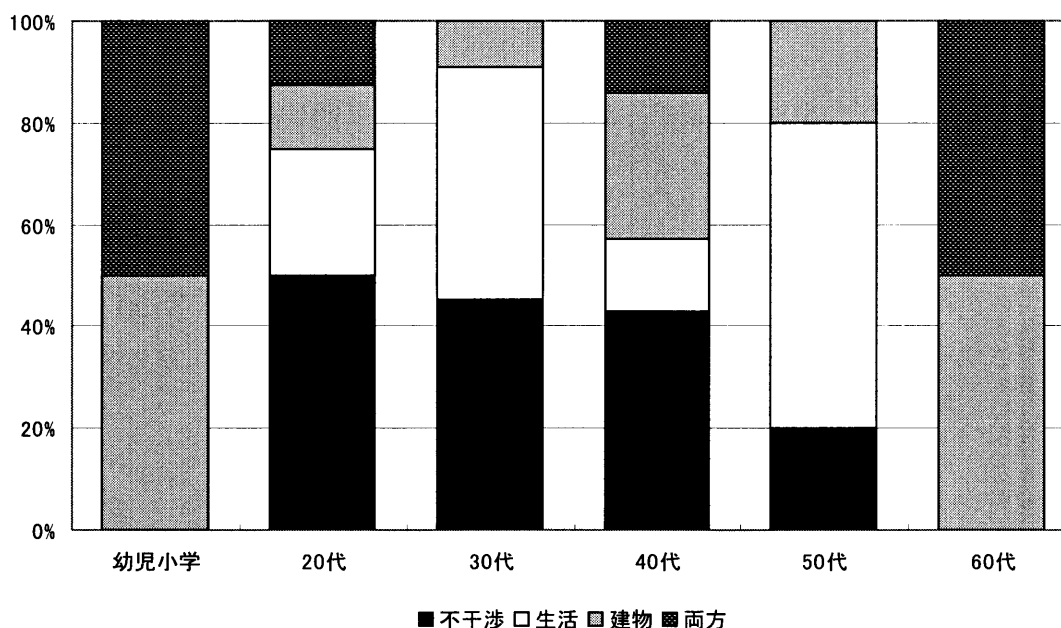


図3-2 調査協力者における年齢別興味関心の違い

図3-2より、自分のペースで観覧したい不干涉希望型は、20歳代から50歳代までの年齢層に見られた。また、生活興味型は50歳代でその割合が大きく、30代代でもやや大きい。建物興味型と生活興味型+建物興味型は、幼児小学生と60歳代でその割合が大きいことがわかった。

同様に、性別による興味関心の違いを、図3-3に示す。

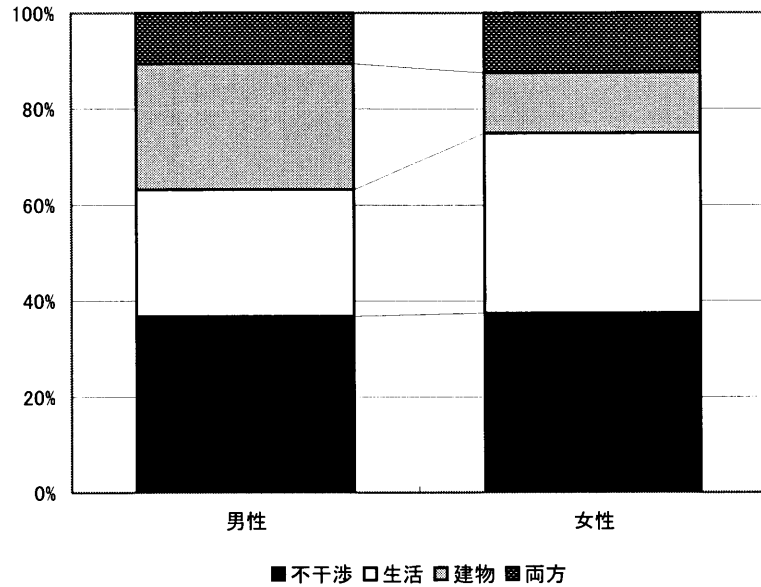


図3-3 調査協力者における性別興味関心の違い

図3-3より、不干涉希望型は、性別による違いはほとんどないが、女性は生活興味型の割合が大きく、男性は建物興味型の割合が大きいことがわかった。

以上により、観覧者の属性や性別の違いにより、興味関心に差があることがわかった。すなわち、20歳代から50歳代までの協力者は、自分のペースで観覧したがる傾向があること、男性は建物に興味関心を持つ傾向があり、女性は生活文化に興味関心を持つ傾向があった。

2 交流意思・興味関心の違いによる観覧者の観覧行動の特徴

2-1 交流意思・興味関心の違いによる観覧者の観覧動線の特徴

交流意思・興味関心の違いによる観覧者の観覧動線をまとめたのを、図3-4～図3-7に示す。

それぞれの動線を比較しても、ほぼ満遍なく室内および屋外での観覧動線が発生しているので、交流意思・興味関心の違いによる観覧動線の顕著な差というものはないことがわかった。

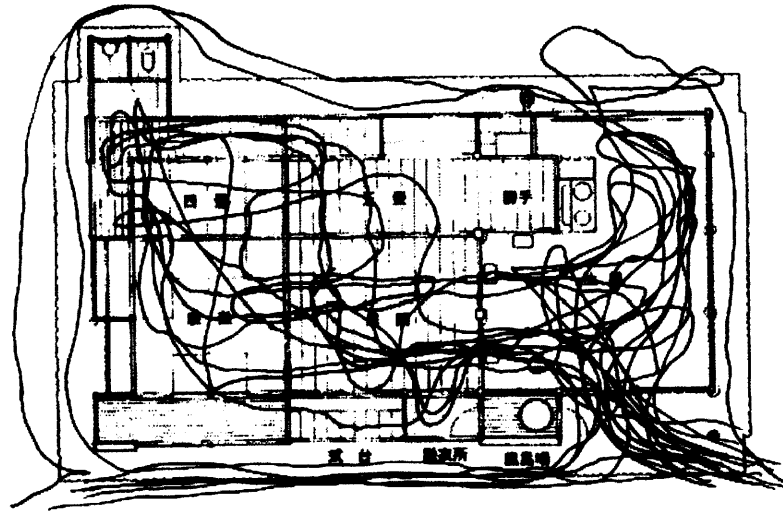


図3-4 不干涉希望型動線 (N=13)

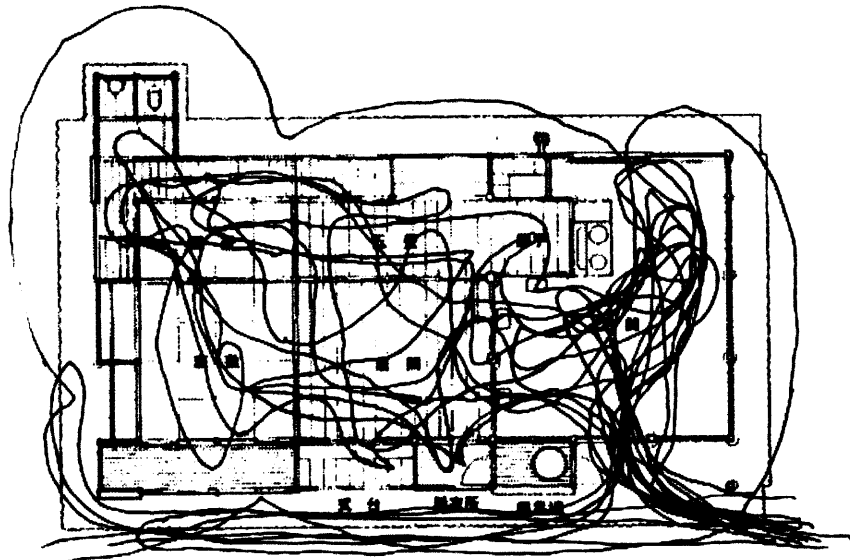


図3-5 生活興味型動線(N=11)

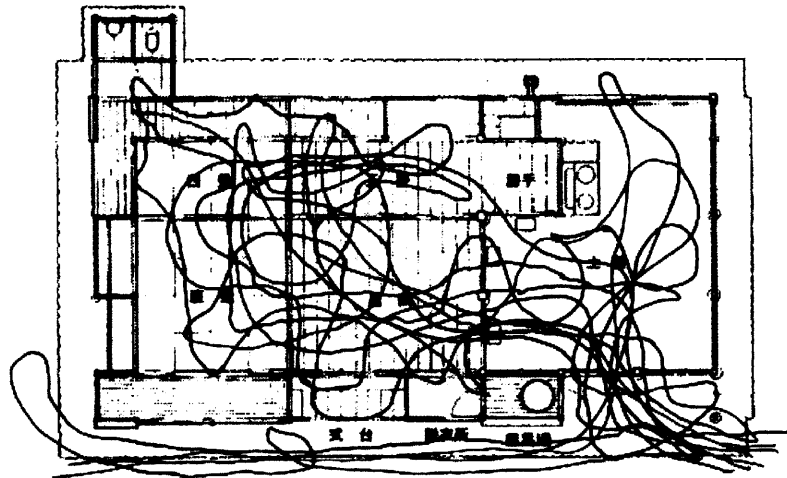


図 3-6 建物興味型動線 (N=7)

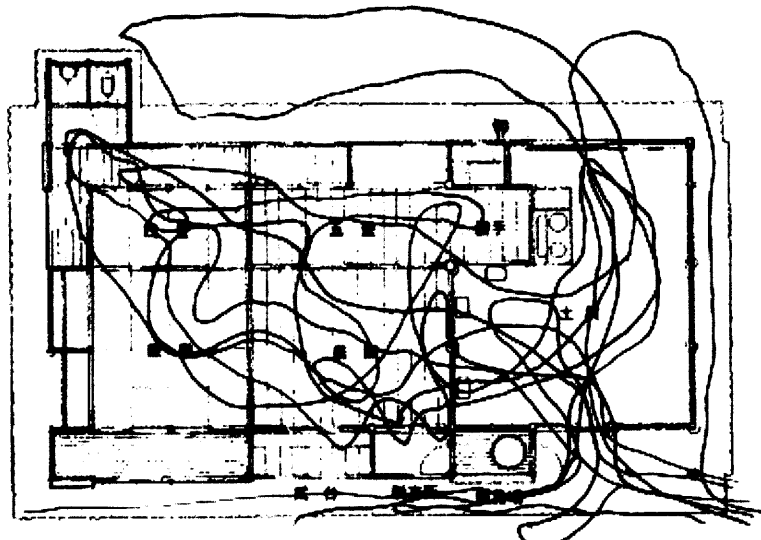


図 3-7 生活興味型+建物興味型動線 (N=4)

2-2 交流意思・興味関心別空間把握行動時間と全観覧時間・観覧回数との関係

交流意思・興味関心別に分類した観覧者における、全観覧時間、空間把握行動時間、観覧回数の平均を、表 3-3 にまとめた。

観覧者全体と比較すると、解説人員との交流意思のない不干渉希望型では、平均観覧回数以外かなり下回っている。このことから、各回の観覧行動に費やす時間が、ほかと比べて圧倒的に少ないことがわかった。

不干渉希望型以外の分類を観覧者全体とで比較すると、特に、生活興味+建物興味型では、すべてが圧倒的に全体平均より上回っていることから、最も積極的に観覧行動が発生し、かつ持続していることがわかった。また、生活興味型、建物興味型では、生活興味+

建物興味型ほどではないが、観覧者全体と比較すると、平均観覧時間^{注3)}、平均空間把握行動時間^{注4)}、平均観覧回数^{注5)}すべてにわたって、やや上回っていることから、比較的積極的に観覧行動が発生していることがわかった。

表 3-3 分類別全観覧時間・空間把握行動時間・観覧回数の平均

	不干涉	生活興味	建物興味	生活+建物	利用全体
平均全観覧時間	85.4 秒	286.2 秒	247.6 秒	804.5 秒	217.2 秒
平均空間把握行動時間	58.8 秒	194.9 秒	213.7 秒	699.5 秒	177.6 秒
平均観覧回数	3.8 回	4.8 回	4.7 回	11.0 回	3.7 回

*小数点以下第2位を四捨五入

次に、交流意思・興味関心別に空間把握行動時間と全観覧時間との関係を、散布図として図 3-8 に示した。

生活興味+建物興味型において、全観覧時間が比較的長く、空間把握行動時間も比較的長くなる傾向がある。一方、不干涉希望型では、全観覧時はかなり短く、空間把握行動時間もきわめて短いことがわかった。建物興味型と生活興味型では、生活興味+建物興味型と、不干涉希望型の中間に位置し、空間把握行動時間も同様に中間に位置していることがわかった。これらのことから、全観覧時間が長くなるにつれ、生活興味+建物興味型の出現割合が大きくなることが推測できる。

また、交流意思・興味関心別に空間把握行動時間と観覧回数との関係を、散布図として図 3-9 のようになった。

生活興味+建物興味型では、比較的ばらつきが多く、不干涉希望型は空間把握行動時間が皆無に近いこともあって、固まっている傾向がわかった。建物興味型と生活興味型では、観覧回数は2~10回以内に集中し、不干涉希望型と生活興味+建物興味型の中間に存在していることがわかった。

これらのことから、交流意思・興味関心の違いによって、空間把握行動時間、全観覧時間、観覧回数が異なることがわかった。

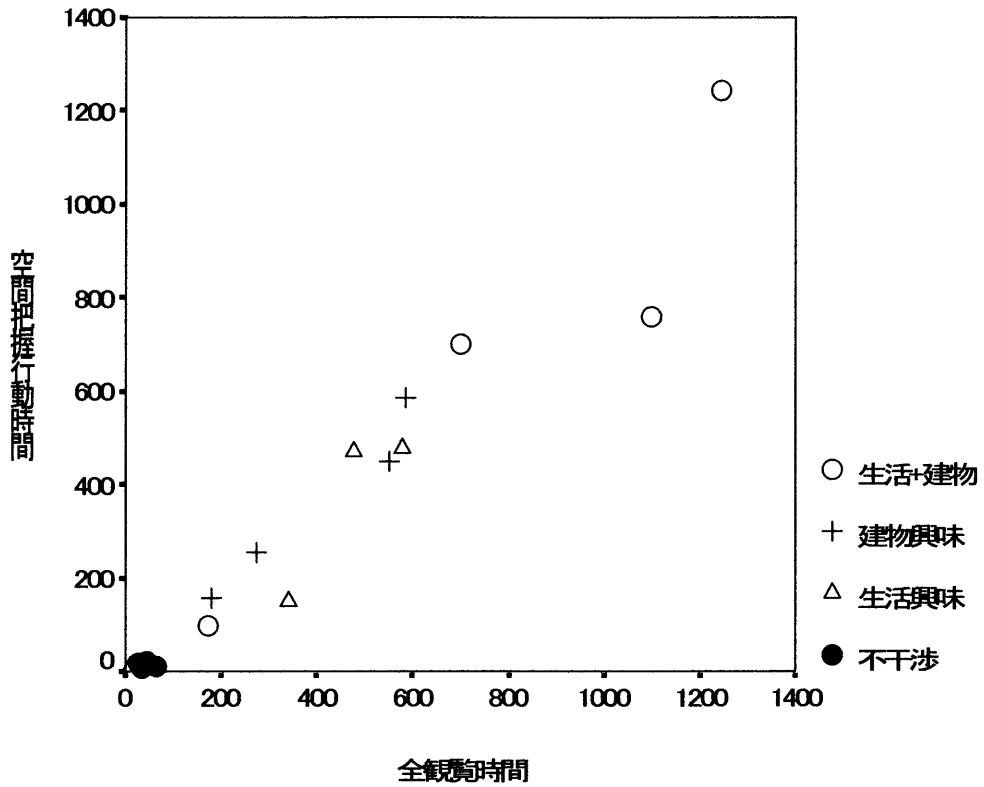


図 3-8 分類別全観覧時間と空間把握行動時間との関係

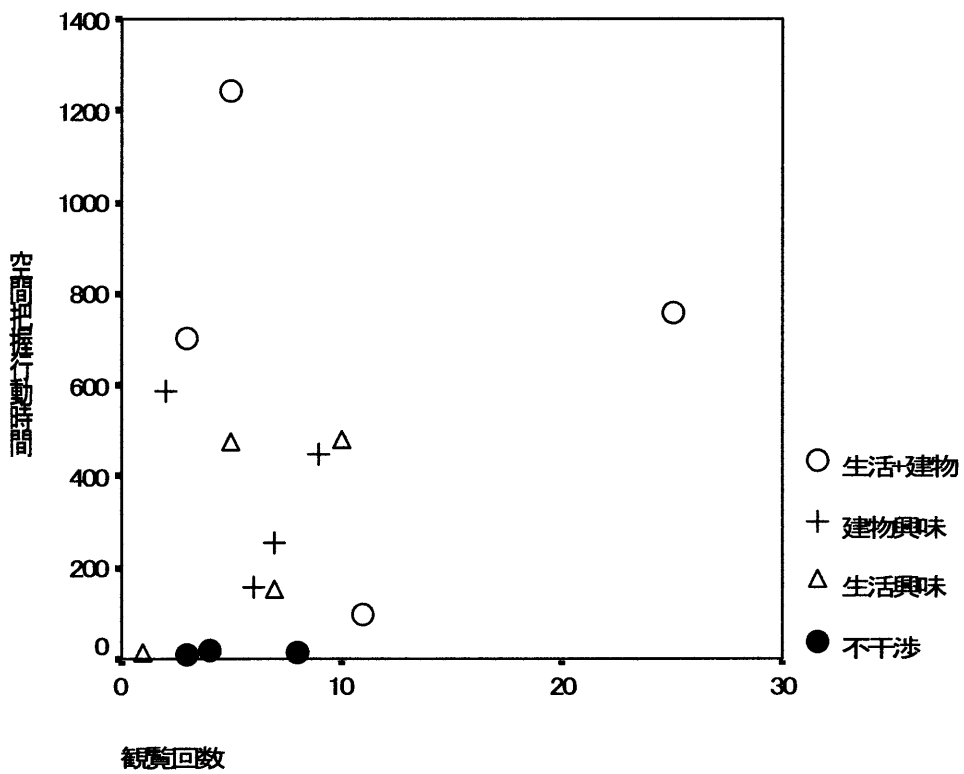


図 3-9 分類別観覧回数と空間把握行動時間との関係

2-3 交流意思の違いによる観覧行動発生場所の特徴

交流意思・興味関心の違いによって観覧行動が異なることがわかった。そこで、交流意思の違いにより観覧行動が発生する展示物の特徴を分析し、それぞれの分類における特徴を明らかにする。

まず、交流意思の有無による観覧行動が発生した回数を図 3-10 に示す。

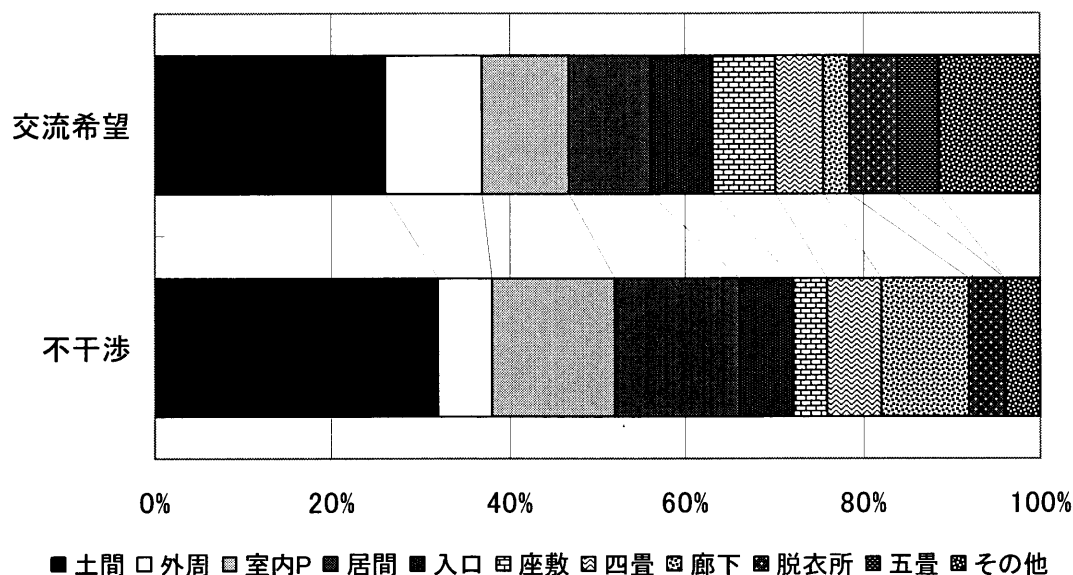


図 3-10 交流意思の違いによる観覧行動発生回数

図 3-10 より、不干涉希望型では、土間や室内パネル、居間、廊下において、交流希望型と比べて観覧行動の割合が大きく発生していることがわかった。また、交流希望型では、外周、座敷、五畳において、不干涉希望型と比べて多く観覧行動の割合が大きく発生していることがわかった。

さらに、観覧行動が発生した時間による比較を行なう。交流意思の有無による観覧行動が発生した時間を、図 3-11 に示す。

図 3-11 より、不干涉希望型では、室内パネルや居間、その他に分類される展示物において、観覧時間の割合が交流希望型と比べて大きい。土間、座敷において、観覧時間の割合は小さいことがわかった。

交流希望型では、土間、座敷において、観覧時間の割合が、不干涉希望型と比べて大きく、特に座敷における割合は非常に大きいことがわかった。

図 3-10 と図 3-11 を比べると、不干涉希望型では、土間や外周において、観覧回数は多く発生しているが、観覧時間では短くなる傾向があることから、該当する展示物 1 回あたりの観覧時間が短いことがわかった。一方で、居間やその他に分類される展示物において、観覧回数は少なく発生しているものの、観覧時間では長くなる傾向があることから、該当する展示物 1 回あたりの観覧時間が長いことがわかった。

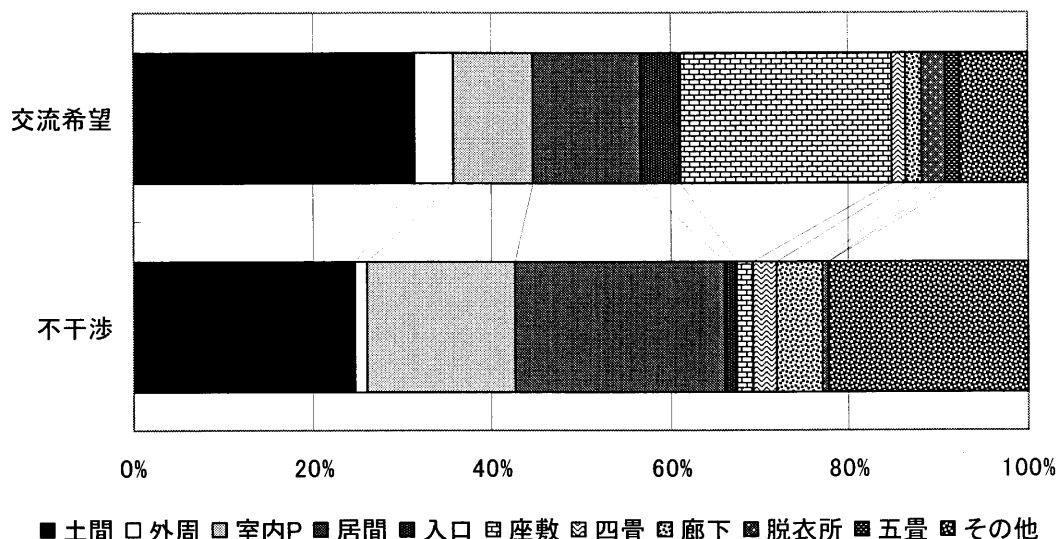


図 3-11 交流意思の違いによる観覧行動時間

また交流希望型では、外周や入口、四畳、五畳において、観覧回数は多く発生しているが、観覧時間が短くなる傾向があることから、該当する展示物 1 回あたりの観覧時間が短いことがわかった。一方で、土間や、とくに座敷において、観覧回数は少なく発生しているものの、観覧時間が長くなる傾向があることから、該当する展示物 1 回あたりの観覧時間が長いことがわかった。

これらのことから、交流意思の違いにより、観覧行動が発生する回数や観覧時間に違いがあることがわかった。

2-4 興味関心の違いによる観覧行動発生場所の特徴

交流希望型の中から、興味関心の違いにより観覧行動が発生する展示物の特徴を分析し、それぞれの分類における特徴を明らかにする。

まず、興味関心の違いによる観覧行動が発生した回数を図 3-12 に示す。

図 3-12 より、生活興味型では、室内パネルにおける観覧行動は、ほかと比べて発生している割合が大きいですが、入口では小さいことがわかった。

建物興味型では、土間、入口における観覧行動は、ほかと比べて発生している割合は大きいですが、外周からの観覧行動が皆無であることがわかった。

生活興味+建物興味型では、外周における観覧行動は、ほかと比べて発生している割合が大きい。また、その他に分類される展示物もその割合は大きいですが、座敷で発生している割合は小さく、五畳では皆無であることがわかった。

さらに、観覧行動が発生した時間による比較を行なう。興味関心の違いによる観覧行動が発生した時間を、図 3-13 に示す。

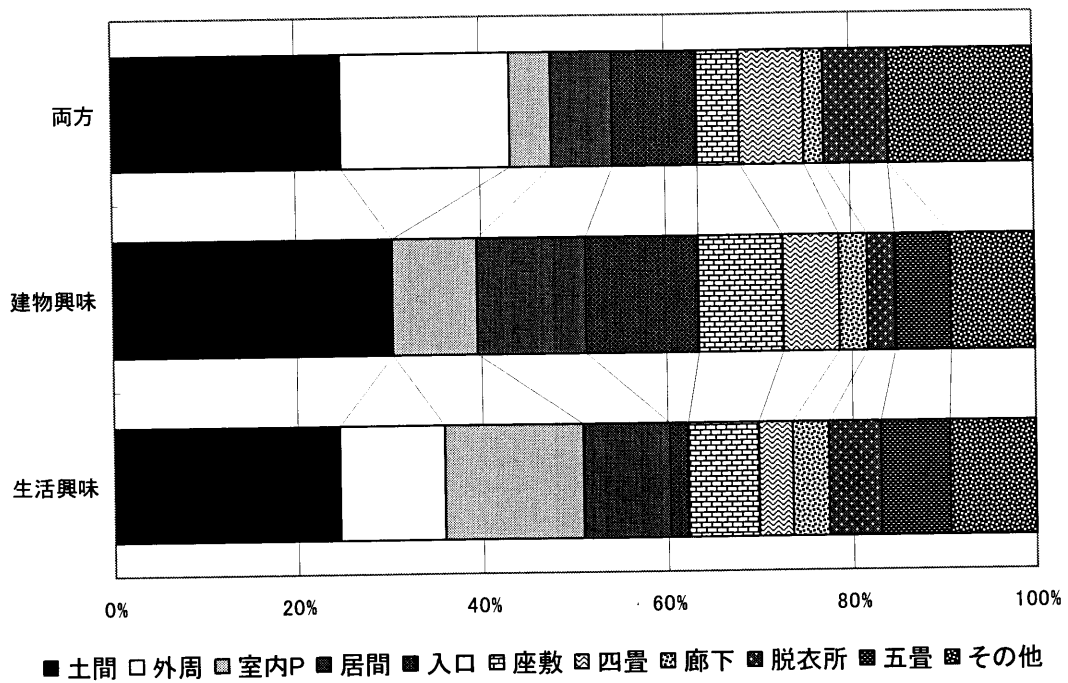


図 3-12 興味関心の違いによる観覧行動発生回数

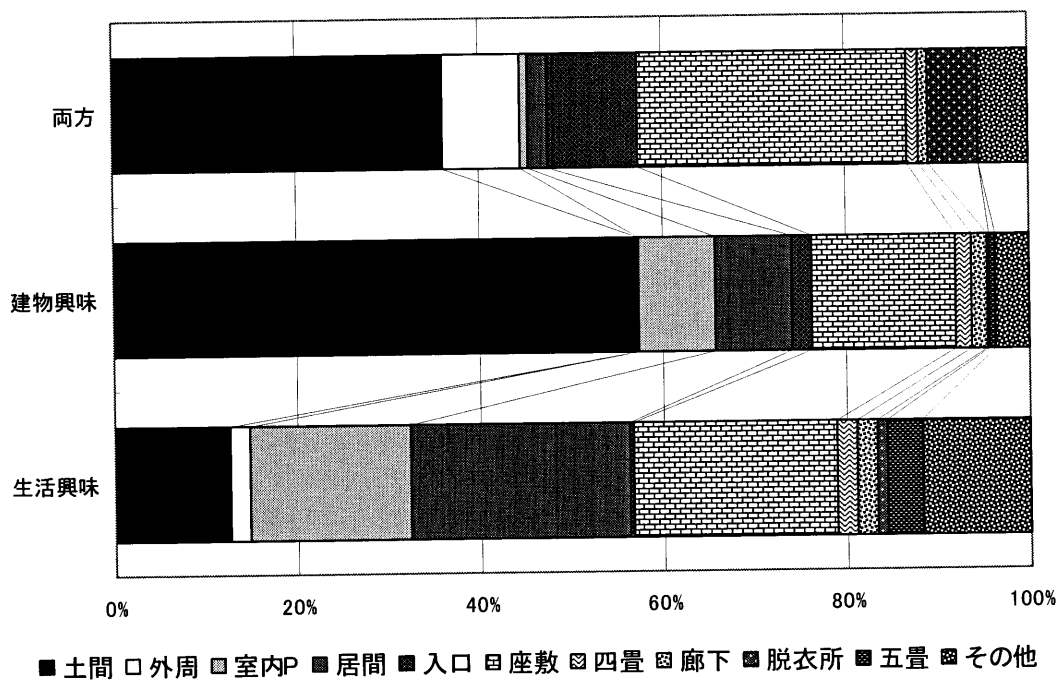


図 3-13 興味関心の違いによる観覧行動時間

図 3-13 より、生活興味型では、室内パネル、居間、座敷において、観覧行動が発生している時間は、ほぼ同じ割合ではあるが、外周や入口での観覧行動が発生している時間の割合はかなり小さいことがわかった。建物興味型では、土間において、観覧行動が発生している時間の割合が極端に大きいことがわかった。また座敷における観覧行動が発生している時間の割合も、比較的大きいが、それ以外の展示場における観覧行動発生時間の割合は、かなり低調であることがわかった。

生活興味+建物興味型では、土間と座敷において観覧行動が発生している時間の割合が大きいことがわかった。また生活興味型と建物興味型とで比べると、外周や入口、脱衣所において、観覧行動が発生している時間の割合が大きいことがわかった。

図 3-12 と図 3-13 を比べると、生活興味型では、土間や外周において、観覧回数は多く発生しているが、観覧時間は短くなる傾向があることから、該当する展示物 1 回あたりの観覧時間が短いことがわかった。逆に居間、座敷において、観覧回数は少なく発生しているが、観覧時間は長くなる傾向があることから、該当する展示物 1 回あたりの観覧時間が長いことがわかった。

建物興味型では、入口のほか、室内にある四畳、五畳において、観覧回数が発生しているものの、観覧時間はほとんどないことから、該当する展示物 1 回あたりの観覧時間は短いことがわかった。逆に、座敷や、特に土間において、観覧回数の発生よりも観覧時間の発生の割合が大きいことから、座敷や土間における 1 回あたりの観覧時間が長いことがわかった。

生活興味+建物興味型では、外周や室内パネル、居間において発生した観覧回数の割合よりも、観覧時間割合のほうが小さくなっていることから、該当する展示物 1 回あたりの観覧時間は短いことがわかった。逆に土間、座敷において発生した観覧回数の割合よりも、観覧時間の割合が大きいことから、該当する展示物 1 回あたりの観覧時間は長いことがわかった。

これらのことから、興味関心の違いにより、観覧行動が発生する回数や観覧時間が違うことがわかった。

3 交流意思・興味関心の違いによる空間把握行動時間の割合の特徴

3-1 交流意思の違いによる空間把握行動時間の割合の特徴

交流意思の違いによる空間把握行動時間の割合を、図 3-14 に示す。

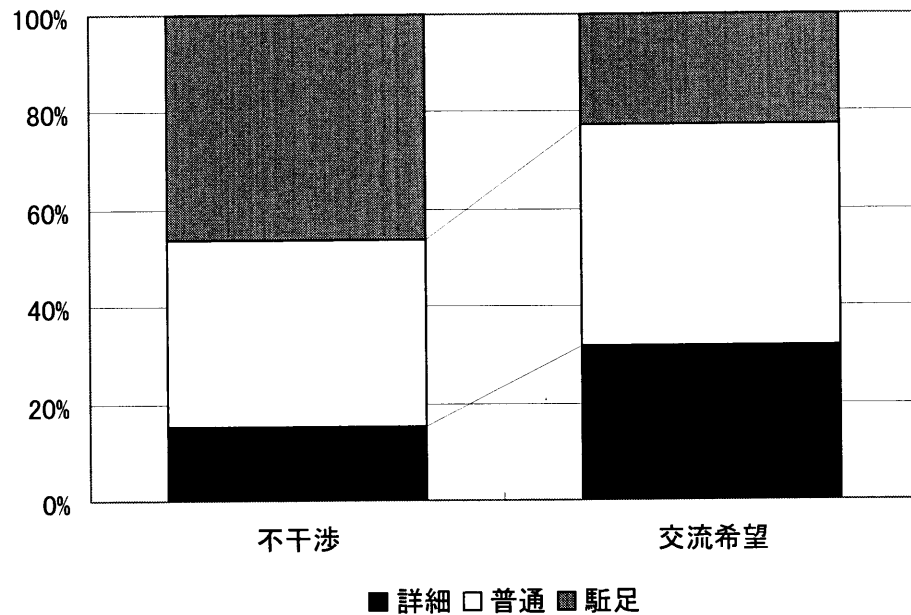


図 3-14 交流意思の違いによる空間把握行動時間の割合

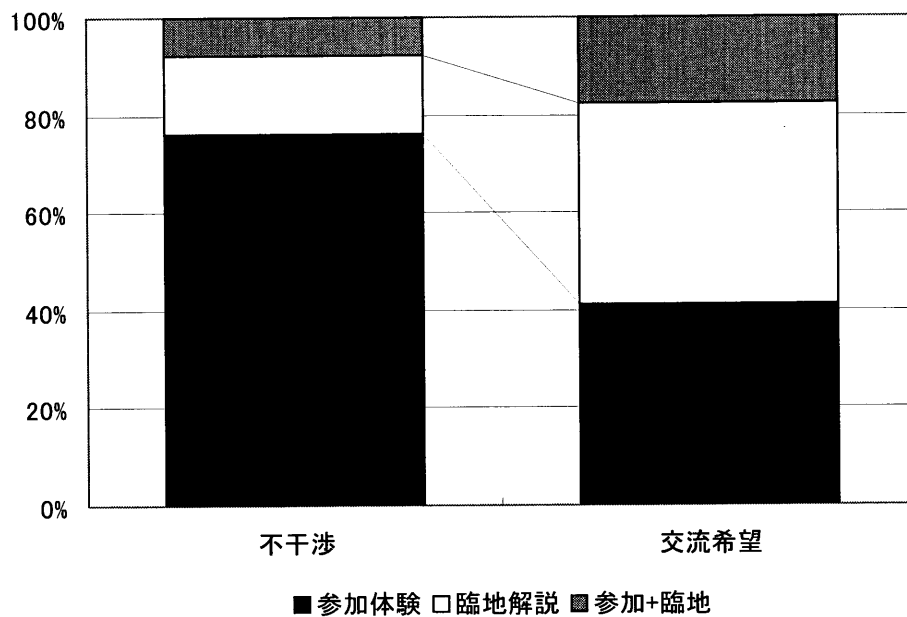


図 3-15 交流意思の違いによる空間把握行動時間の詳細

図3-14より、不干涉希望型、交流希望型ともに普通空間型の割合は、ほぼ同じくらいである。しかしながら、不干涉希望型では、駈足空間把握型の割合が大きく、交流希望型では、詳細空間把握型の割合が大きいことがわかった。次に、交流意思の違いによる空間把握行動時間の詳細を、図3-15に示す。

図3-15より、不干涉希望型では、圧倒的に参加体験の割合が大きく、臨地解説、参加体験+臨地解説の割合はかなり小さい。一方交流希望型では、参加体験と臨地解説の割合はほぼ同じ程度であり、参加体験+臨地解説の割合も、不干涉希望型から比べると大きいことがわかった。

3-2 興味関心の違いによる空間把握行動時間の割合の特徴

興味関心の違いによる空間把握行動時間の割合を、図3-16に示す。

図3-16より、生活興味型、建物興味型において、空間把握行動時間の割合は、ほぼ同じ程度ではあるが、生活興味+建物興味型において、駈足空間把握型は皆無で、空間把握行動時間の割合が大きくなる傾向がある。

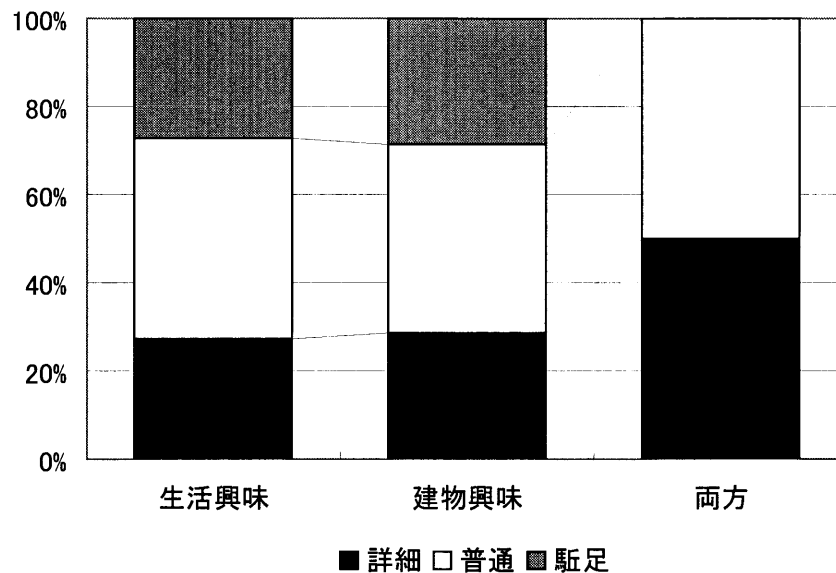


図3-16 興味関心の違いによる空間把握行動時間の割合

次に、興味関心の違いによる空間把握行動時間の詳細を、図3-17に示す。

図3-17より、興味関心の違いがあっても、臨地解説の割合は、ほぼ同じ程度であることがわかった。生活興味型では、参加体験の割合が大きいですが、参加体験+臨地解説の割合は極めて小さいことがわかった。建物興味型では、参加体験、臨地解説、参加体験+臨地解説の割合が、ほぼ同じ程度であることがわかった。生活興味+建物興味型では、建物興味型の割合と、ほぼ同じ割合を示しているが、参加体験+臨地解説の割合が、やや小さい傾向

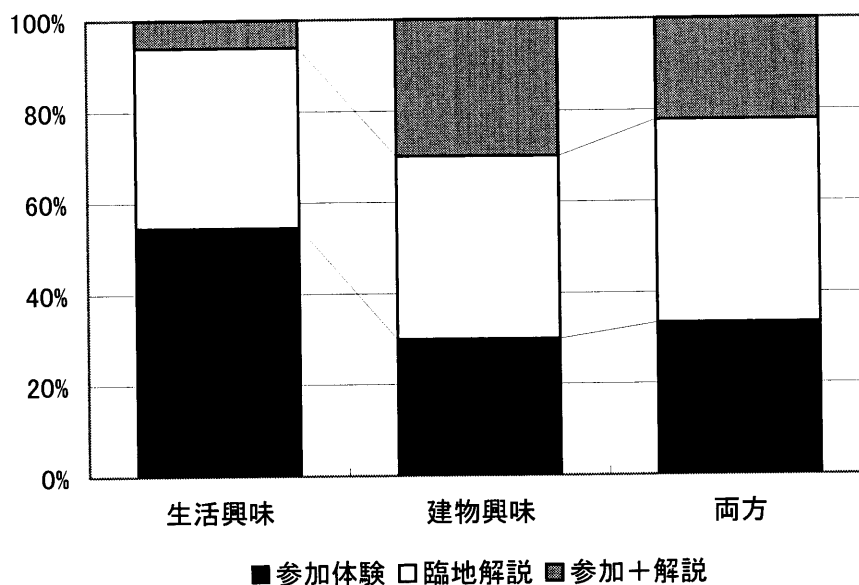


図 3-17 興味関心の違いによる空間把握行動時間の詳細

があった。

図 3-14 と図 3-15 より、不干涉希望型では、積極的に解説人員との接触を希望しないことから、空間把握行動時間の割合が、交流希望型と比べると全体的に小さいこと、そして不干涉希望型の空間把握行動時間の詳細において、臨地解説の割合が小さく、参加体験の割合が圧倒的に大きくなることが特徴として挙げられる。しかし表 3-3 にあるように、平均観覧時間、平均空間把握行動時間、平均観覧回数のいずれも、不干涉希望型では低調であり、民家という三次元空間に内在する情報の伝達がうまくいっていないと考えられる。したがって、該当する観覧者が、空間を積極的に感じている参加体験の観覧形態が確認できたときに、解説人員からの解説交流が図られれば、観覧回数や観覧時間などが増えるのではないかと考えられる。

また、図 3-16 と図 3-17 より、生活興味型と建物興味型において、空間把握行動時間の割合では、ほぼ同じような割合を示したにもかかわらず、空間把握行動時間の詳細では、生活興味型では参加体験の割合が大きく、建物興味型では参加体験+臨地解説の割合が大きい。このことから、建物興味型では、積極的に解説人員からの解説交流が発生する傾向があるといえよう。

このように、生活興味型と建物興味型における空間把握行動時間の詳細の傾向を明らかにすると、解説人員からの介入が観覧行動中に発生しやすいかどうかによって、観覧行動などが大きく左右されると考えられる。同時に、興味関心の違いによる観覧行動が発生する場所が、解説人員にとって解説交流しやすい場所であるかどうか、極めて重要であろう。

そこで、次に、興味関心が違う観覧者の観覧行動を定性的に分析するために、該当する観覧者の観覧行動を記述する。

第3章 観覧者の交流意思・興味関心の違いによる観覧行動の特性

4 興味関心別観覧者の観覧行動記述

4-1 生活興味型観覧者の観覧行動記述

生活興味型観覧者（11名）の行動記述を、表3-4～表3-14に示す。そのうち、表3-4～表3-11までが解説人員からの介入があるものである。

表3-4 生活興味型観覧者A（両親子ども・30歳代・男性）

観覧時間	観覧行動
10秒	土間からカマドを眺め、そばにいた解説人員と会話し、退場

表3-5 生活興味型観覧者B（母と子ども・30歳代・女性）

観覧時間	観覧行動
60秒	土間にある解説パネルを読む
20秒	土間からカマドを眺め、子どもと会話する
90秒	居間にある組頭の家の説明文を読みながら、子どもに居間に上がるか尋ねる
10秒	居間に上がり、脱衣所から風呂場を覗く。子どもに母親が説明する
120秒	解説人員が加わり、脱衣所で風呂場、式台の解説を受ける。また、半農半士であったことも母親に解説する。この間子どもは室内をうろうろする
10秒	居間、座敷を通過して便所の前で子どもと会話する
30秒	靴を履いているときに解説人員と会話をした後、退場

表3-6 生活興味型観覧者C（カップル・30歳代・女性）

観覧時間	観覧行動
12秒	組頭の家屋外にある案内板を見る
15秒	土間から居間に上がり、脱衣所で外を眺める
276秒	居間で解説人員から解説を受ける。解説を受けながら座敷に移動し、座敷でも解説を受ける
56秒	四畳でまた解説人員から解説を受ける
60秒	五畳で天井を見上げ、木組みや茅屋根の様子を眺める
42秒	居間で天井の木組み・茅屋根の解説を解説人員に求め、解説を受ける
88秒	土間に下りて土間にある解説パネルを読む
7秒	外に出て、式台付近の壁を触る
21秒	外から屋根や建物全体を眺め、敷地の外に退場

表 3-7 生活興味型観覧者 D (夫婦・40 歳代・男性)

観覧時間	観覧行動
2 秒	土間にて解説人員に挨拶を交わす
7 秒	土間から居間に上がり、脱衣所に移動して風呂場を覗き込む
13 秒	座敷、縁側、四畳を通り抜け、廊下で立ち止まり「涼しい」と奥さんと話す
12 秒	居間にある組頭の家の説明文を読む
443 秒	居間で解説人員から一通りの解説を受け、おしゃべりをした後、退場

表 3-8 生活興味型観覧者 E (夫婦・50 歳代・男性)

観覧時間	観覧行動
7 秒	土間から室内パネルを読む
10 秒	土間からカマドを眺める
16 秒	裏戸から外周を歩く。外周から四畳の廊下付近・室内を眺める
5 秒	外周を歩く。座敷の障子が開いているので、そこから室内を眺める
264 秒	外周を歩く。夫人が縁側でお手玉実演に参加し、夫もそれに参加。解説人員とお手玉をしながら、昔話をした後、退場

表 3-9 生活興味型観覧者 F(母と子ども・20 歳代・女性)

観覧時間	観覧行動
60 秒	土間からカマドを眺める。その際、子どもと会話する
110 秒	勝手から上がり、居間を通って座敷へ。座敷で実演しているお手玉に子どもが興味を持ち、座敷に座って解説人員とお手玉をする
40 秒	子どもはお手玉をしているが、親は五畳付近まで遠ざかり、遠くからお手玉しているよう様子を眺める
60 秒	お手玉をしていた子どもが母の後を追っかける。子どもと共に四畳へ。子どもが四畳から外を指しながら眺める。その様子を母が子どもに伝える
330 秒	再び座敷に戻り、子どもが座敷に座って解説人員と本格的にお手玉をする。母もお手玉をする
37 秒	お手玉を終えて靴を履きに勝手に行く。母は先に靴を履き、子どもの靴を履かせた後、退場

表 3-10 生活興味型観覧者 G (友人同士・50 歳代・女性)

観覧時間	観覧行動
55 秒	土間からカマドを暫く眺めた後、解説人員から解説を受ける
120 秒	室内パネルを読み、暫くしてから解説人員から解説を受ける
30 秒	外に出るが縁側にあるお手玉を手に取り、お手玉の実演をしていた解説人員と会話し、退場

表 3-11 生活興味型観覧者 H (カップル・20 歳代・女性)

観覧時間	観覧行動
94 秒	土間にある室内パネルを読む。途中カマドを振り返って眺める
5 秒	居間に上がり、脱衣所から風呂場を覗く
118 秒	居間を通り座敷に座り、解説人員とお手玉をする
30 秒	四畳を通り、便所を眺める
21 秒	四畳、居間を通り、五畳からカマドと屋根裏の様子を眺める
7 秒	靴を履き、裏戸をまたぎながら、室内から室外へ、室外から室内へ首を動かしながらその違いを眺める
13 秒	裏戸を出て玄関まで外周を歩き、そのまま式台を抜け、縁側まで外周を歩く。縁側前で外観、特に屋根を眺めた後、退場

以上、表 3-4～表 3-11 までの行動記述を挙げた。

解説人員からの介入が最初にある場合、その後の観覧行動があまり多く発生しない傾向がある。一方観覧行動の半ばに解説人員からの介入がある場合、その後の観覧行動は比較的多く発生する傾向がある。また、解説人員からの介入が発生した場所は、カマドに火をくべる解説人員がいることから、観覧者からカマドを見渡せる土間付近で発生していることがわかった。また、お手玉実演を実施していた表 3-8、表 3-9、表 3-10、表 3-11 では、土間付近での解説人員がなくても、お手玉実演をしている座敷付近で、解説もかねる実演者からの介入があった。

次の表 3-12～表 3-14 は、解説人員からの介入が無かった場合の生活興味型観覧者の行動記述である。

表 3-12 生活興味型観覧者 I (両親と子ども・20 歳代・男性)

観覧時間	観覧行動
17 秒	土間から室内パネルを読む
17 秒	土間からカマドを眺めながら家族で話をする
14 秒	土間から居間・座敷を眺めた後、退場

表 3-13 生活興味型観覧者 J (友人同士・50 歳代・男性)

観覧時間	観覧行動
95 秒	土間から室内パネルを読む
20 秒	土間から土間全体を眺める
10 秒	土間から居間・座敷を眺める
60 秒	土間から再び土間全体・居間・座敷を眺めた後退場

表 3-14 生活興味型観覧者 K (カップル・30 歳代・男性)

観覧時間	観覧行動
70 秒	土間から室内パネルを読む
8 秒	解説を受けたいと思っているが、手の空いている解説人員がいなかったため、土間をうろうろした後、退場

以上、表 3-12～表 3-14 までの行動記述を挙げた。

解説人員からの介入が無い場合、観覧行動が発生する場所は土間までで、室内に上がらず、室内パネルを読む傾向があることがわかった。

生活興味型観覧者の行動記述から、解説人員からの介入がある場合と無い場合を比べてみると、全体的に、解説人員からの介入がある場合、観覧時間が長く、観覧回数も多くなる傾向があるが、観覧初期の段階で、解説人員からの介入がある場合、観覧回数は少なくなる。一方、介入が無い場合、その多くは土間で室内パネルを読む、土間から室内を眺めるといった行動に終始する傾向があった。

生活興味型において、土間において室内パネルを読み終わった時点で、解説人員からの介入があれば、比較的長時間に及ぶ観覧行動、また観覧回数の増加が期待できるのではないか、と推測できる結果が得られた。

4-2 建物興味型観覧者の観覧行動記述

建物興味型観覧者（7名）の行動記述を、表 3-15～表 3-21 に示す。そのうち、表 3-15～表 3-19 までが、解説人員からの介入があるものである。

表 3-15 建物興味型観覧者 A (両親と子ども・30 歳代・男性)

観覧時間	観覧行動
3 秒	土間の土を踏みしめる
60 秒	土間で解説人員から解説を受ける
60 秒	土間で父親が出身地石川県の民家の話を解説人員にする
20 秒	土間で他の人に向かって解説をしていた内容を聞き、手を叩いて反響音を聞く

第3章 観覧者の交流意思・興味関心の違いによる観覧行動の特性

40 秒	居間を通って座敷に上がり、座敷で <u>解説人員から</u> ふすまに関する解説を受ける
70 秒	座敷で <u>解説人員から</u> 解説を受ける
20 秒	式台に移動し、 <u>解説人員から</u> 式台に関する解説を受けた後、退場

表 3-16 建物興味型観覧者 B (両親と子ども・小学生・女性)

観覧時間	観覧行動
575 秒	勝手にカマドの火入れを行っている <u>解説人員</u> に、父親が建物のつくりについて聞く。屋根の葺き替えなどの話に発展するが、子どもは <u>解説人員の隣に座り</u> 、カマドの火入れの様子や、 <u>解説人員が持ってきたわらじに興味を持ち</u> 、 <u>解説人員が子どもにはかせる</u> 。子どもはカマドに関する話を <u>解説人員から</u> 受ける
11 秒	室内を回った後、再度カマドを見た後、退場

表 3-17 建物興味型観覧者 C (一人・40 歳代・男性)

観覧時間	観覧行動
3 秒	入口付近で入口を見渡す
155 秒	土間にて <u>解説人員から</u> 組頭の家概要の解説を受ける
5 秒	室内に上がり、脱衣所から風呂場を覗く
5 秒	座敷、四畳を通り、廊下から便所を覗く
5 秒	五畳で全体を見渡す
5 秒	四畳で調査員と会話をした後、退場

表 3-18 建物興味型観覧者 D (友人同士・20 歳代・女性)

観覧時間	観覧行動
20 秒	入口付近で室内を眺める
90 秒	土間から室内パネルを読み、撮影する
10 秒	土間からカマドを撮影する。その後 <u>解説人員から</u> 上がることを勧められる
30 秒	居間に上がり、 <u>解説人員から</u> 建物全般、そして式台に関する解説を受ける
160 秒	座敷に進み、 <u>解説人員から</u> 大坂格子、天井のさおぶちの向き、組頭の家歴史、囲炉裏が無いことなどの解説を受ける
30 秒	四畳を通り、廊下から便所を覗く。 <u>解説人員から</u> 解説を受ける
40 秒	四畳、座敷、居間を通り、脱衣所から風呂場を覗く。その際 <u>解説人員から</u> 解説を受ける
90 秒	居間で <u>解説人員</u> に土台に関する質問をする。観覧者の家も古く、 <u>解説人員と</u> 話をする
80 秒	靴を履き、土間から天井を見上げて、白川郷との比較を <u>解説人員と</u> 話した後、退場

表 3-19 建物興味型観覧者 E (夫婦・40 歳代・男性)

観覧時間	観覧行動
5 秒	土間から靴を脱ぎ、居間で仕切り戸を眺める
5 秒	五畳に移動し屋外を眺める
26 秒	四畳に移動し、座敷のお手玉実演の様子を眺める
25 秒	五畳、居間を通り、土間で解説人員から天井・屋根裏の解説を受ける
25 秒	土間から室内パネルを読んだ後、退場

以上、表 3-15～表 3-19 までの行動記述を挙げた。

建物興味型においても、解説人員からの介入が最初にある場合、その後の観覧行動があまり発生しない傾向がある。また、観覧行動の初期の段階で解説人員からの介入がある場合、その後の観覧行動は比較的多く発生する傾向があるし、その際の観覧行動も、解説を受けながらの観覧行動である場合が多い。また、解説人員からの介入が発生した場所は、カマドに火をくべる解説人員がいることから、観覧者からカマドを見渡せる土間付近で発生していることがわかった。

生活興味型と比べると、解説人員の介入による、その後の観覧行動などは同じ傾向があるが、全般的に、建物興味型の方が、単に解説人員から一方的に解説を受けるというよりも、解説人員との会話に発展している傾向があることがわかった。

次の表 3-20～表 3-21 は、解説人員からの介入が無かった場合の建物興味型観覧者の行動記述である。

表 3-20 建物興味型観覧者 F (一人・50 歳代・男性)

観覧時間	観覧行動
30 秒	土間から室内パネルを読んだ後、退場

表 3-21 建物興味型観覧者 G (夫婦・60 歳代・男性)

観覧時間	観覧行動
8 秒	屋外にある解説パネルを読む
15 秒	土間から室内パネルを読み、天井を見上げながら裏戸から屋外に出て、屋根を見上げる
7 秒	土間に戻り、入口付近で屋根裏を眺めた後、退場

以上、表 3-20～表 3-21 までの行動記述を挙げた。

解説人員からの介入が無い場合、観覧行動が発生するのは土間周辺であり、観覧時間や観覧回数が低調であることがわかった。

第3章 観覧者の交流意思・興味関心の違いによる観覧行動の特性

建物興味型観覧者の行動記述から、解説人員からの介入がある場合と無い場合を比べてみると、全体的に、解説人員からの介入がある場合、観覧時間が長く、観覧回数も多くなる傾向があるが、観覧行動の最初に解説人員からの介入があると、観覧回数は少なくなる傾向がある。一方、介入が無い場合、その多くは土間周辺で室内パネルを読む、周囲を眺めるといった行動に終始する傾向があった。

建物興味型において、観覧者が民家に内在する情報を積極的に感じようとする観覧行動が発生したときに、解説人員からの介入があると、比較的長時間におよぶ観覧行動、また観覧回数の増加が期待できるのではないかと推測できる結果となった。

4-3 生活興味+建物興味型観覧者の観覧行動記述

生活興味+建物興味型観覧者（4名）の行動記述を、表3-22～表3-25に示す。なお、生活興味+建物興味型に該当する観覧者全員が、解説人員からの介入があった。

表3-22 生活興味+建物興味型観覧者A（両親と子ども・30歳代・男性）

観覧時間	観覧行動
296秒	土間で解説人員から建物の由来、屋根に関する解説を受ける
3秒	居間に上がり、脱衣所から風呂場を覗く
6秒	居間で他の人に向かって解説をしていた内容を聞き、手を叩いて反響音を聞く
933秒	居間で解説人員に千人同心の歴史的背景について尋ねる。座敷に移動しながら昔の実家の話を解説人員にする。床の間について解説人員に尋ねた後、昔の実家の話を解説人員にする
9秒	子どもが床の間に座ったので、父が怒った後、退場

表3-23 生活興味+建物興味型観覧者B（カップル・20歳代・男性）

観覧時間	観覧行動
20秒	屋外から式台を眺め、男性が連れ女性の半土半農の生活を説明
20秒	土間から室内パネルを読む
10秒	土間からカマドを眺める
10秒	土間から居間に上がる際、近くにいた解説人員に上がってもいいか尋ねる
10秒	脱衣所から風呂場を覗き、撮影する
30秒	勝手からカマドを眺める
20秒	四畳から座敷全体、天井を眺める。お手玉の実演を眺める
50秒	座敷を通過して式台に。式台について解説人員に尋ねる
130秒	脱衣所で解説人員に風呂場に関する質問をする。その後解説人員と当時の生活に関する話をしながら風呂場を再度撮影する

第3章 観覧者の交流意思・興味関心の違いによる観覧行動の特性

60秒	居間においてある解説シートを解説人員にねだるが、配布していないと告げる
20秒	靴を履き、入口から出たところで、軒下を撮影する
80秒	入口付近にある組頭の家 of 解説文を熟読する
30秒	解説人員に、入口側にある風呂場の戸をあけてもらう
70秒	風呂場の中を見ながら、連れと会話する
140秒	風呂場の使い方について、解説人員から解説を受けたのち、解説人員と当時の生活に関する話をする
60秒	入口付近で、天井の使われ方について解説人員に質問する
40秒	土間をつきつて裏戸あたりで、解説人員に下水に関する質問をする
60秒	解説人員と共に裏戸から屋外に移動し、落ち葉を溜めているところで「これは何？」と解説人員に質問する
40秒	解説人員と共に屋外から廊下を眺め、雨水の排水に関する質問を解説人員にする
30秒	解説人員と共に屋外から便所を眺め、便所の下にある戸をあけようとする
20秒	解説人員とわかれ、便所に興味を持ったので裏戸をとって土間に戻り、土間にいた別の解説人員からカマドに関する解説を受ける
40秒	勝手から五畳を通り、廊下から便所を見ながら連れと話す
10秒	四畳で立ち止まり、連れと話す
50秒	再び便所を見ながら、便壺について連れと話す
50秒	靴を履き、土間で解説人員に組頭の家 of 住民の仕事について質問をした後、退場

表 3-24 生活興味+建物興味型観覧者 C (友人同士・40歳代・女性)

観覧時間	観覧行動
7秒	土間からカマドを眺める
9秒	先ほどカマドを眺めた位置からもっとカマドに近づいて眺める
5秒	土間から室内パネルを眺める
32秒	居間に上がり、脱衣所から風呂場を覗きながら連れと話す
5秒	居間から屋外を眺める
7秒	五畳を通り、廊下から便所と屋外を眺める
8秒	四畳を通り、座敷でお手玉実演の様子を眺める
16秒	居間、五畳を通り、勝手にカマド関係の道具を眺める
20秒	勝手を少し移動して道具をいじっている際、解説人員から解説を受ける
51秒	靴を履き、裏戸から屋外に出たところで振り返り、屋根について連れと話す
13秒	屋外で周囲に植えてある樹木について連れと話した後、退場

表 3-25 生活興味+建物興味型観覧者 D (一人・60歳代・男性)

観覧時間	観覧行動
90 秒	土間で解説人員から解説を受ける
280 秒	土間で、カマドの火入れをする解説人員に、組頭の家で人々が生活していた時代のことを細かく質問する
330 秒	土間で、解説人員に、建物の構造を説明。式台などから、半士半農などの当時の身分などを解説人員に説明する。解説人員とその後雑談し、退場

以上、表 3-22～表 3-25 までの行動記述を挙げた。

生活興味+建物興味型観覧者の行動記述から、積極的に民家という空間に内在する情報を感じ取ろうとする観覧行動が多く発生する傾向があることがわかった。また、観覧者自身もかなり民家に対する興味なども高く、表 3-25 にあるように、解説人員に組頭の家¹の構造や歴史などを逆に教える場面などもあり、民家に対する相当な知識を持った観覧者もこのなかに含まれると考えられる（網掛け部分の観覧行動に相当）。さらに、表 3-23 にあるように、観覧者の積極的な観覧行動にあわせて、解説人員が積極的に、多くの観覧者は普段は気づかない展示物へと案内する様子も発生していることや、解説人員からの介入があることで、普段はなかなか知ることができない民家に関する情報を、観覧者は知ることができることなどから、生活興味+建物興味型観覧者は、民家展示施設において、最も効果的に民家資料を活用することができる観覧者と捉えることができるだろう。

5 まとめ

温暖期における江戸東京たてもの園八王子千人同心組頭の家において、観覧者の解説人員との交流意思・興味関心の違いによる観覧行動の特性を、観覧動線、空間把握行動時間と全観覧時間・観覧回数との関係、観覧行動発生場所、空間把握行動時間の割合による定量的分析および観覧行動記述による定性的分析を行なった。

その結果、解説人員との交流意思および興味関心の違いによる観覧動線の差はほとんどないことがわかった。

解説人員との交流意思および興味関心の違いによる空間把握行動時間と全観覧時間・観覧回数との関係は、解説人員との交流意思のない観覧者の場合、全観覧者の平均全観覧時間、平均空間把握行動時間、平均観覧回数と比べると、すべて下回っていることから、観覧行動1回あたりに費やす時間は、相当短いことがわかった。また観覧回数も少ないことから、民家に内在する情報を感じ取ることができていない場合が多いということがわかった。

また交流希望型の中でも生活興味+建物興味型の場合、平均全観覧時間、平均空間把握行動時間、平均観覧回数それぞれにおいて、ほかと比べると、もっとも数字が大きい値を示していることから、積極的に民家に内在する情報を感じ取ろうとしていることがわかった。

交流意思の違いによる観覧行動の発生場所を観覧回数と観覧時間で分析すると、交流意思がない場合、土間や外周における1回あたりの観覧時間は短く、居間における1回あたりの観覧時間は長くなることがわかった。

また、交流意思がある場合、外周、入口、四畳、五畳における1回あたりの観覧時間は短く、土間や座敷では、1回あたりの観覧時間は長くなることがわかった。

興味関心の違いによる観覧行動の発生場所を観覧回数と観覧時間で分析すると、生活興味型では、土間や外周における1回あたりの観覧時間は短く、居間、座敷における1回あたりの観覧時間は長くなることがわかった。

また、建物興味型では、入口、四畳、五畳における1回あたりの観覧時間は短く、座敷、土間における1回あたりの観覧時間は長くなることがわかった。

生活興味+建物興味型では、外周、室内パネル、居間における1回あたりの観覧時間は短く、土間、座敷における1回あたりの観覧時間は長くなることがわかった。

交流意思の違いによる空間把握行動の割合および空間把握行動の詳細を分析すると、交流意思がない場合、空間把握行動の割合が、交流意思のある場合と比べると小さいこと、そして参加体験に該当する空間把握行動の割合が、交流意思のある場合と比べると圧倒的に大きいことがわかった。

興味関心の違いによる空間把握行動の割合および空間把握行動の詳細を分析すると、空間把握行動の割合では生活興味型と建物興味型において、ほぼ同じような傾向があるが、

空間把握行動の詳細で比べると、生活興味型の場合、参加体験の割合が大きく、建物興味型の場合、参加体験+臨地解説の割合が大きいことがわかった。

興味関心の違いによる観覧者の特徴を、行動記述より分析した結果、解説人員との接触の時期により、観覧回数や観覧時間に大きな影響があると推測することができることがわかった。

これらから、観覧者の解説人員との交流意思・興味関心の違いによる観覧行動の違いがあることがわかった。特に、興味関心の違いにより、観覧行動の発生場所および解説人員からの介入が、観覧行動に大きな影響を与えていることが推測できる結果となった。よって、観覧行動の発生場所の傾向や、解説人員からの介入の有無による観覧行動の特性を分析することにより、観覧者が、民家という三次元空間に内在する情報が円滑に伝達できる環境の特性がわかると考えられる。

引用・参考文献

- 朴光範・野村東太・大原一興・平野暁臣・小川英彦・真鍋博司・西宮浩司 1992.8, 「来館者の観覧時間に関するケーススタディ - 博物館の展示計画に関する研究その1」『日本建築学会大会学術講演梗概集 E』, pp.465-466.
- 小川英彦・野村東太・大原一興・平野暁臣・朴光範・真鍋博司・西宮浩司 1992.8, 「来館者の観覧時間と観覧行為に関する研究 - 博物館の展示計画に関する研究その2 -」『日本建築学会大会学術講演梗概集 E』, pp.467-468.
- 西宮浩司・野村東太・大原一興・平野暁臣・朴光範・小川英彦・真鍋博司 1992.8, 「解説員による展示解説実施と観覧行為に関する一考察 - 博物館の展示計画に関する研究その3」『日本建築学会大会学術講演梗概集 E』, pp.469-470.
- 野村東太・大原一興・朴光範・小川英彦・真鍋博司・西宮浩司 1993.3, 「博物館の展示・解説が観覧行為に与える影響 - 博物館に関する建築計画的な研究V」『日本建築学会計画系論文集』, 第445号, pp.73-81.
- 西宮浩司・野村東太・大原一興・白石真二郎 1993.9, 「自然科学系博物館における観覧行為に関する一考察 - 博物館に関する建築計画的な研究その31 -」『日本建築学会大会学術講演梗概集 E』, pp.687-688.
- 久保田百年・野村東太・大原一興 1994.9, 「民家展示施設における活動内容に関する考察 - 民家展示施設の建築計画に関する研究その1」『日本建築学会大会学術講演梗概集 E』, pp.629-630.
- 大原一興・野村東太・久保田百年 1994.9, 「民家展示施設における観覧行為のケーススタディ - 民家展示施設の建築計画に関する研究その2」『日本建築学会大会学術講演梗概集 E』, pp.631-632.
- 加茂慎司・野村東太・大原一興 1995.8, 「民家展示施設における展示解説手法の効果に関する考察 - 民家展示施設の建築計画に関する研究その3」『日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1』, pp.419-420.
- 野村東太・西源二郎・大原一興 1996.3, 「水族館の観覧と学習行動に関する研究」『生涯学習のための水族館の教育機能に関する建築計画的な研究』, 平成6~7年度科学研究費補助金総合研究(A)研究成果報告

書（課題番号 06301079）pp.33-68.

松島崇典・小滝一正・大原一興・大月敏雄 1999.9,「古民家の保全手法と住まい方に関する研究」,『日本建築学会大会学術講演梗概集 E-2』,pp.79-80.

民家研究委員会編 2001.6,『古民家の保存・活用のための方法論的研究 - 古民家の地域内保全と民家展示施設の考察』,住宅総合研究財団.

江 waters 是仁・大原一興 2006.6,「屋外民家展示施設における来園者の観覧行動」『全日本博物館学会ニュース No.77』

江 waters 是仁・大原一興 2006.9,「屋外民家展示施設における来園者の観覧行動に関する研究」『日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1』,pp.455-456.

江 waters 是仁・大原一興 2006.11,「屋外民家展示施設における来園者の観覧行動に関する研究 - 江戸東京たてもの園「八王子千人同心組頭の家」の事例より - 」『日本建築学会計画系論文集』,第 609 号,pp.33-39.

江 waters 是仁・大原一興 2006.12,「屋外展示民家における興味が異なる来園者の観覧行動に関する研究 - 温暖期における江戸東京たてもの園・八王子千人同心組頭の家」『博物館学雑誌』第 32 巻第 1 号,pp.13-43.

注釈

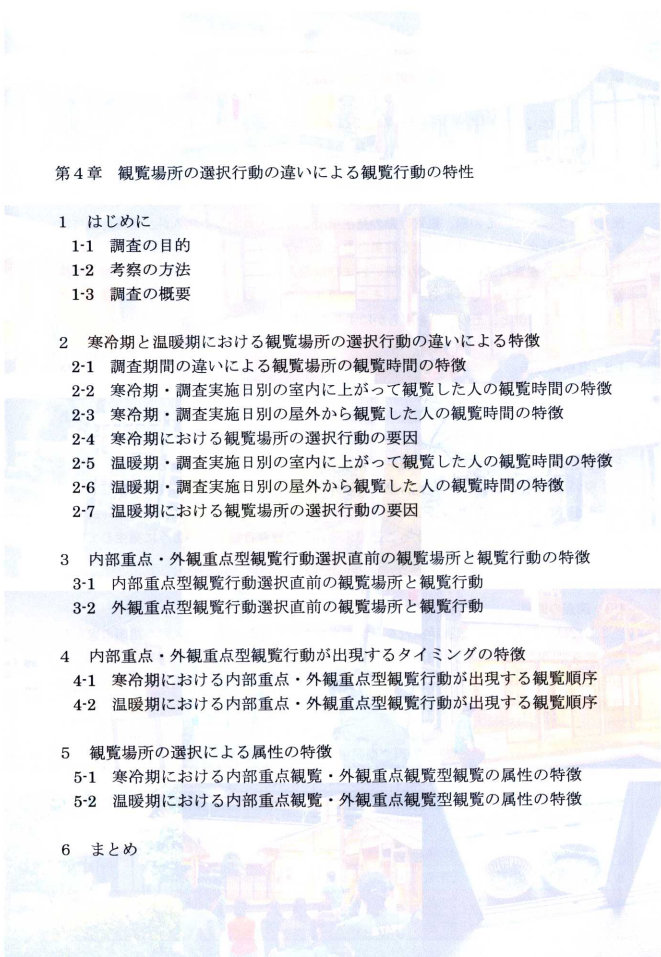
注1) 口頭による説明の後、調査対象観覧者になりたくない旨を申し出た観覧者のデータは採取しなかったが、調査期間中、申し出た観覧者はいなかった。配布したチラシには、研究機関と連絡先を記したが、問い合わせなどは、2006年12月現在全く無い。また、調査方法として、調査員は、なるべく観覧者の視線に入り込まないように、適度な距離を保ちながら観覧行動の記録を行った。グループでの観覧の場合、グループの中から一人決め、その人の観覧行動を記録した。観覧者が組頭の家敷地を出たところでデータ採取は終了し、新たな観覧者の観覧行動を記録するという方法を繰り返した。なお、この調査に携わった調査員は、両日参加した者は10名、1日だけの参加者は、各日3名程度であった。また、観覧者の抽出にあたっては、作為的な偏りは小さいものと考えられる。

注2) 口頭による説明の後、協力いただける観覧者には、調査員に興味・関心などの意思を表示していただいた。その際、調査員は観覧者の興味・関心を表すシールを、目に付きやすい部分に張ってもらうようお願いした。調査員は、シールの色を調査票に記録し、観覧行動の記録を採取した。また、解説人員の方々にも、あらかじめシールの色が意味する内容を説明し、普段どおりの解説・交流をお願いした。なおこの調査にあたり、江戸東京たてもの園からの了承は得た上で行っている。

注3) 平均観覧時間とは、不干涉型、生活興味型、建物興味型、生活興味+建物興味型、および調査ができた全観覧者それぞれの全観覧時間を、それぞれの分類に属する人数で割ったものである。

注4) 平均空間把握行動時間とは、不干涉型、生活興味型、建物興味型、生活興味+建物興味型、および調査ができた全観覧者それぞれの全観覧時間のうち、空間把握行動に費やした観覧時間の合計を、それぞれの分類に属する人数で割ったものである。

注5) 平均観覧回数とは、不干涉型、生活興味型、建物興味型、生活興味+建物興味型、および調査ができた全観覧者それぞれの観覧行動が発生した回数の合計を、それぞれの分類に属する人数で割ったものである。



第4章 観覧場所の選択行動の違いによる観覧行動の特性

1 はじめに

- 1-1 調査の目的
- 1-2 考察の方法
- 1-3 調査の概要

2 寒冷期と温暖期における観覧場所の選択行動の違いによる特徴

- 2-1 調査期間の違いによる観覧場所の観覧時間の特徴
- 2-2 寒冷期・調査実施日別の室内に上がって観覧した人の観覧時間の特徴
- 2-3 寒冷期・調査実施日別の屋外から観覧した人の観覧時間の特徴
- 2-4 寒冷期における観覧場所の選択行動の要因
- 2-5 温暖期・調査実施日別の室内に上がって観覧した人の観覧時間の特徴
- 2-6 温暖期・調査実施日別の屋外から観覧した人の観覧時間の特徴
- 2-7 温暖期における観覧場所の選択行動の要因

3 内部重点・外観重点型観覧行動選択直前の観覧場所と観覧行動の特徴

- 3-1 内部重点型観覧行動選択直前の観覧場所と観覧行動
- 3-2 外観重点型観覧行動選択直前の観覧場所と観覧行動

4 内部重点・外観重点型観覧行動が出現するタイミングの特徴

- 4-1 寒冷期における内部重点・外観重点型観覧行動が出現する観覧順序
- 4-2 温暖期における内部重点・外観重点型観覧行動が出現する観覧順序

5 観覧場所の選択による属性の特徴

- 5-1 寒冷期における内部重点観覧・外観重点観覧型観覧の属性の特徴
- 5-2 温暖期における内部重点観覧・外観重点観覧型観覧の属性の特徴

6 まとめ

第4章 観覧場所の選択行動の違いによる観覧行動の特性

1 はじめに

1-1 調査の目的

第3章において、観覧者の解説員との交流意思・興味関心の違いによる観覧行動の特性を明らかにした。その際、観覧行動の発生場所と解説員からの介入が、観覧行動に大きな影響を与えていると推測できる結果となった。つまり、民家という三次元空間に内在する情報が、観覧行動の発生場所の違いおよび解説員による解説の有無により、その情報が大きく異なるものと考えられる。そこで第4章では、観覧行動の発生場所の違いによる観覧行動の特徴と、その要因を明らかにすることを目的とする。

1-2 考察の方法

前章では、観覧者の交流意思・興味関心の違いによる観覧行動の特性を明らかにした。その結果、興味関心が違うと、観覧時間の長さや観覧行動が発生する場所が違う傾向があることがわかった。そこで、民家という三次元空間に内在する情報を積極的に感じ取ろうとする空間把握行動のなかでも、民家を詳しく観覧しようとする行動のあらわれとして、靴を脱いで室内に上がっての観覧行動と、屋外から建物の外観や周囲の環境を観察する観覧行動が挙げられる。そこで、温度や日射といった季節が異なる時期に、同じ屋外民家展示施設における観覧行動を比較することで、それらの観覧行動がどのように発生しているのかを明らかにする。

1-3 調査の概要

ここでは、調査対象民家展示施設を、江戸東京たてもの園八王子千人同心組頭の家とした。調査期間は、2005年3月12(土)・13(日)・16(水)・17(木)の寒冷期に実施したものと、2006年5月20(土)、21(日)の温暖期に実施した。調査実施期間の気象条件や概要などを、表4-1にまとめた。

表4-1 調査期間中の気象条件・概要

	天候気温	観覧者数	解説員	裏戸	特記事項
3/12(土)	晴れ 16℃	55名	無	開	—
3/13(日)	晴れ 8℃	58名	有	閉	—
3/16(水)	晴れ 15℃	49名	有	開	—
3/17(木)	雨 10℃	25名	有	開	—
5/20(土)	晴れ 28℃	72名	有	開	—
5/21(日)	晴れ 27℃	77名	有	開	座敷でお手玉実演

調査の手法としては、各期間、組頭の家の敷地入口付近に、観覧行動追跡調査を実施している旨を書いた看板を掲げ、かつ組頭の家の敷地に足を踏み入れた観覧者に対し、調査員が看板と同じ文面のチラシを渡しつつ、口頭で簡単に調査実施の旨を話した。そして調査員が、観覧者の視界に入らない距離を保ちながら、ストップウォッチと記録用紙を使って、観覧者の観覧行動を追跡し、観覧行動が発生した場所と観覧行動の内容、観覧行動に費やした時間を記録した^{注1)}。

2 寒冷期と温暖期における観覧場所の選択行動の違いによる特徴

2-1 調査期間の違いによる観覧場所の観覧時間による特徴

民家という三次元空間に内在する情報を感じているかどうかを判断するためには、観覧者が積極的に空間を把握する行動、すなわち空間把握行動が継続して発生することが重要である。ここでは、空間把握行動の中でも、靴を脱いで室内に上がり、積極的に室内空間を感じ取ろうとする観覧行動を内部重点型、屋外から建物の外観や周囲の環境を観察し、積極的に建物とその周囲の環境との関係性を感じ取ろうとする観覧行動を外観重点型として定義する。

まず、調査期間中における全観覧者の全観覧時間のうち、靴を脱いで室内に上がって観覧した時間と、屋外から建物の外観や周囲の環境を観覧した時間を、図4-1と図4-2に示し、室内に上がって観覧する場合と、屋外から観覧する場合の観覧時間などの特徴を明らかにする。

寒冷期の場合、図4-1より、全体的に屋外からの観覧時間よりも室内に上がっての観覧時間が長くなる傾向がある。また、室内に上がっての観覧+屋外からの観覧という、極めて積極的な空間把握行動があった観覧者はごく少数しかなく、しかも室内に上がっての観覧時間が長い傾向がある。室内に上がっての観覧時間の場合、800秒近く観覧時間が発生した観覧者がいるのと、300秒前後に塊があるのを除くと、多くの観覧者は200秒以内で室内に上がっての観覧時間を費やしていることがわかった。一方、屋外からの観覧時間の場合、300秒近く観覧時間が発生した観覧者がいる以外、ほとんどの観覧者は200秒以内で屋外からの観覧時間を費やしていることがわかった。

温暖期の場合、図4-2より、全体的にそれぞれの観覧時間は長くなる傾向がある。また、室内に上がっての観覧+屋外からの観覧があった観覧者は、極めて少数ではあるが、それぞれ比較的時間をかけて観覧する観覧者が2名ほどいることがわかった。室内に上がっての観覧時間の場合、750秒前後の観覧時間が発生した観覧者のほか、300秒以上の観覧時間が発生した観覧者も多く、全体的に長時間観覧行動に費やしていることがわかった。一方、屋外からの観覧時間の場合、600秒以上の観覧時間が発生した観覧者が3名おり、それ以外にも全体的に観覧時間に長い時間費やしていることがわかった。

図4-1と図4-2を比べると、全体的に温暖期において、室内に上がっての観覧時間と屋外からの観覧時間のそれぞれが、長くなる傾向があり、室内に上がっての観覧+屋外からの観覧も、観覧者自身は少ないものの、観覧時間は比較的長時間になる傾向があることがわかった。

これらのことから、座敷にてお手玉の実演があったことも影響があると思われるが、温暖期のほうが、寒冷期よりも民家に内在する情報が、より効果的に伝わりやすい環境になっているのではないかと推測できる結果となった。

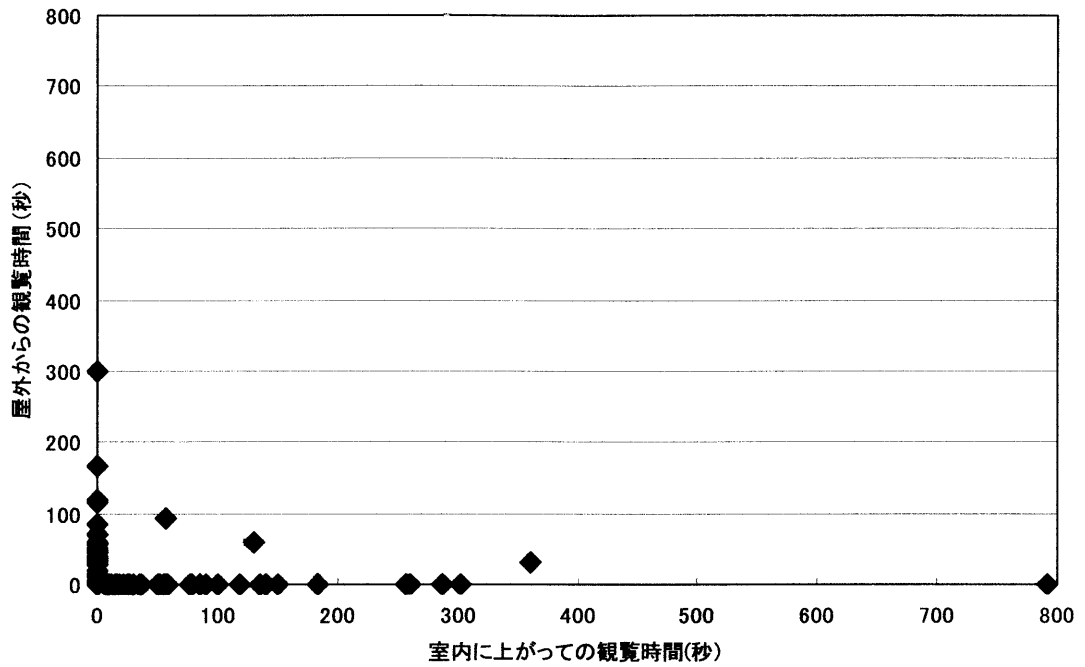


図 4-1 寒冷期・組頭の家における室内に上がる・屋外からの観覧時間 (秒)

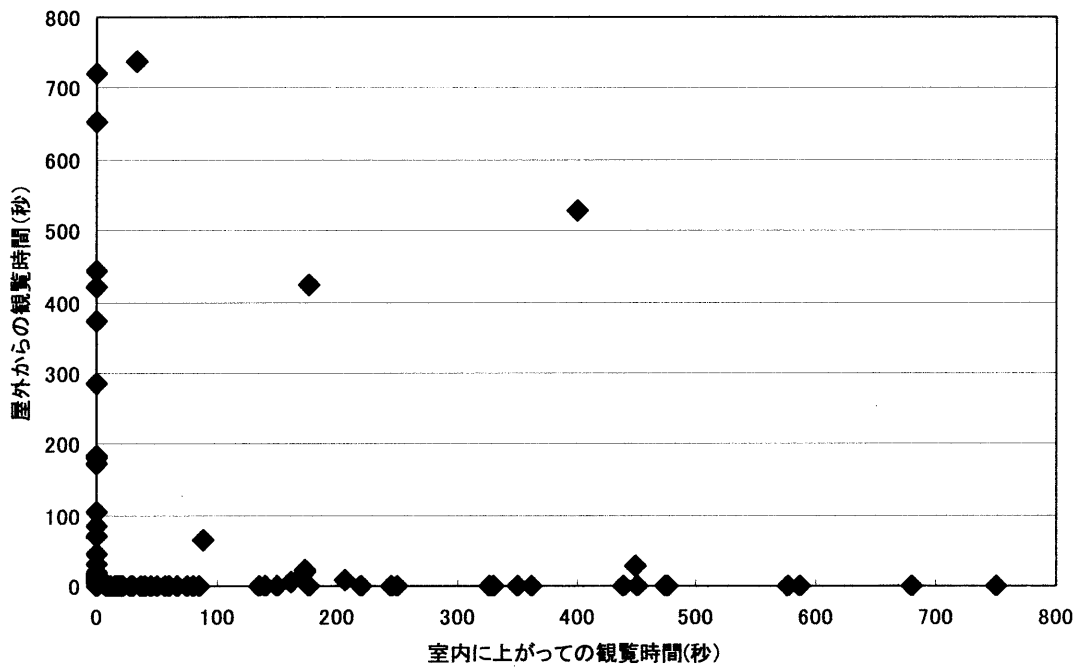


図 4-2 温暖期・組頭の家における室内に上がる・屋外からの観覧時間 (秒)

第4章 観覧場所の選択行動の違いによる観覧行動の特性

また、寒冷期と温暖期における室内に上がったの観覧時間と屋外からの観覧時間、室内に上がったの観覧+屋外からの観覧時間の平均などを、表4-2に示す。

表4-2 寒冷期・温暖期における観覧場所の選択による観覧時間の平均
(カッコ内の％は、調査期間それぞれの観覧者のうち、該当する観覧者を％で表した)

	内部重視	外観重視	両方
寒冷期	101.6 秒 (23.5%)	41.3 秒 (26.2%)	245.7 秒 (1.6%)
温暖期	185.0 秒 (37.6%)	170.0 秒 (22.8%)	412.1 秒 (6.0%)

表4-2より平均で比べると、寒冷期よりも温暖期のほうが、室内に上がったの観覧時間、屋外からの観覧時間、室内に上がったの観覧+屋外からの観覧時間が長く、特に屋外からの観覧時間は顕著に長いことがわかった。しかしながら全観覧者において、室内に上がったの観覧行動および屋外からの観覧行動が発生した観覧者の割合を比べると、寒冷期において、室内に上がった観覧者よりも、屋外からの観覧者の割合が大きく、温暖期においては屋外から観覧した観覧者よりも、室内に上がったの観覧の割合が大きくなっている。また室内に上がって観覧した観覧者の割合は、寒冷期よりも温暖期のほうが大きく、屋外からの観覧者の割合は、温暖期よりも寒冷期のほうが大きくなっていることがわかった。つまり、

室内に上がったの平均観覧時間	寒冷期<温暖期
屋外からの平均観覧時間	寒冷期<温暖期
室内に上がったの観覧者の割合	寒冷期<温暖期
屋外からの観覧者の割合	寒冷期>温暖期

となる。次に、調査実施日の温度や天候、解説人員の有無などの違いがあることから、調査実施日ごとの違いを分析する。

2-2 寒冷期・調査実施日別の室内に上がって観覧した人の観覧時間の特徴

寒冷期における調査実施日や調査期間中の気象条件などは、表4-1にまとめているが、詳細に調査期間中の特徴を挙げると、解説人員がいない12日、寒さのあまり裏戸を途中で閉

鎖した13日^{注2)}、温暖な16日、そして雨天の17日という条件であった。

寒冷期・調査実施日ごとに、調査対象観覧者のうち、どのくらいの割合で室内に上がって観覧した観覧者数と、室内に上がっての観覧時間を、図4-3と表4-3に示した。

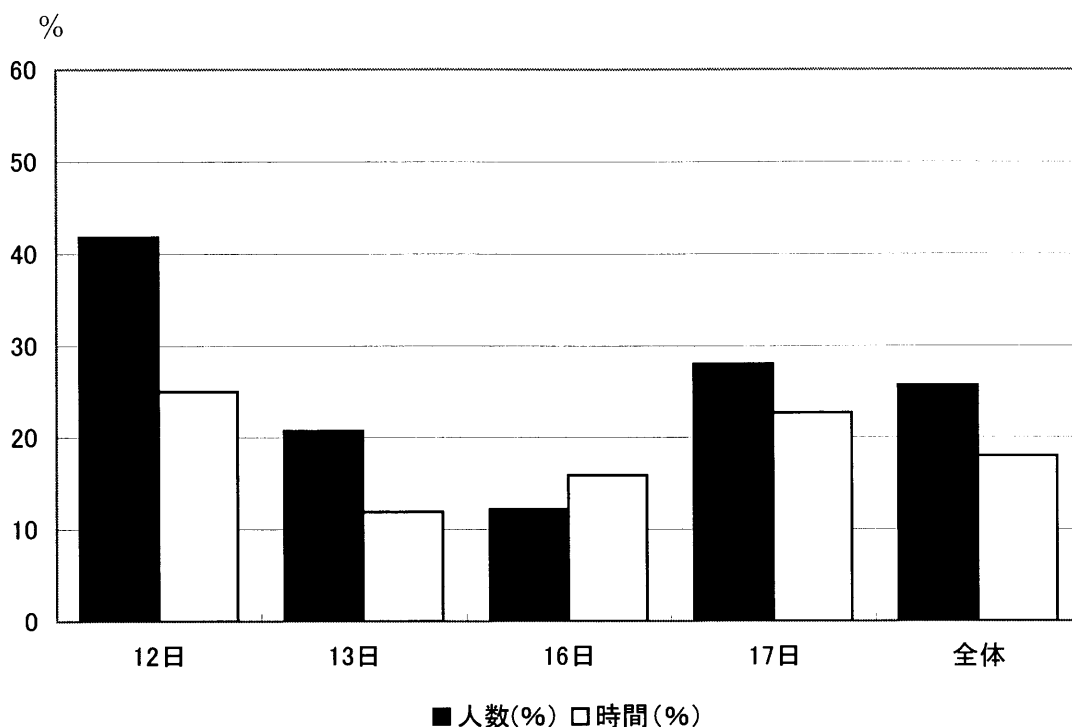


図4-3 室内に上がって観覧した観覧者割合と室内に上がっての観覧時間割合(寒冷期)

表4-3 室内に上がって観覧した観覧者数と室内に上がっての観覧時間 (寒冷期)

() は全体数

	12 (土)	13 (日)	16 (水)	17 (木)	全体
人数	23	12	6	7	48
(人)	(55)	(58)	(49)	(25)	(187)
観覧時間	1151	2011	1698	930	5790
(秒)	(4577)	(7204)	(7854)	(4094)	(23729)

寒冷期の調査実施日ごとに室内に上がって観覧した観覧者数と、室内に上がっての観覧時間を示した図4-3と表4-3より、12日において、比較的室内に上がって観覧した観覧者数の割合が大きいことがわかった。逆に16日において、室内に上がって観覧した観覧者数の割合が小さいことがわかった。

観覧時間の割合を比べてみると、12日と17日において、全体と比べて、室内に上がっての観覧時間が発生した割合が大きく、13日と16日は、全体と比べてその割合が小さくなっていることがわかった。

これらのことから、室内に上がっての観覧した観覧者数と、室内に上がっての観覧時間の場合、調査実施日の諸条件の違いにより、室内に上がっての観覧者数と観覧時間が大きく異なることがわかった。特に、12日と16日の差は大きいことがわかった。これらの要因として、調査期間中12日だけは、生活環境を再現するために、カマドへの火入れを行いかつ観覧者への解説を行う解説人員がいなかった一方、16日は、比較的暖かく、天候にも恵まれており、解説人がいる環境であったことから、室内に上がる・上がらないといった観覧行動の選択が発生したものと思われる。また12日ほどではないが、室内に上がっての観覧した観覧者数と室内に上がっての観覧時間の割合が大きかった17日の場合、雨天であったことから、解説人員の有無、天候の良し悪しが、室内に上がって観覧行動を促すかどうかを左右しているものと推測できる結果となった。

2-3 寒冷期・調査実施日別の屋外から観覧した人の観覧時間の特徴

寒冷期・調査実施日ごとに、調査対象観覧者のうち、どのくらいの割合で屋外から組頭の家を観覧した観覧者数と、屋外からの観覧時間を、図4-4と表4-4に示した。

寒冷期の調査実施日ごとに屋外から観覧した観覧者数と、屋外からの観覧時間を示した図4-4と表4-4より、16日において、16日全体の観覧者の半分以上が屋外から観覧したことがわかった。逆に12日と13日において、屋外から観覧した観覧者の割合は小さく、特に12日全体の観覧者のうち、1割にも満たないことがわかった。

観覧時間の割合を比べてみると、17日において、全体と比べて、屋外からの観覧時間が発生した割合が大きく、12日と13日は、全体と比べてその割合が小さくなっていることがわかった。

これらのことから、屋外から観覧した観覧者数と、屋外からの観覧時間の場合、調査実施日の諸条件の違いにより、屋外から観覧した観覧者数と観覧時間が大きく異なることがわかった。特に12日と16日の差は大きいことがわかった。これらの要因として、16日の場合、天候に恵まれていたことと、比較的暖かかったこと、また解説人員が在駐しているという環境下であった一方、12日は、比較的暖かかったにもかかわらず、解説人員が在駐していなかったという環境であったことにより、屋外から観覧する・しないといった観覧行動の選択が発生したものと思われる。また、観覧時間に限ると、雨天にもかかわらず、16日より17日の方が、その割合が大きいく、観覧者数の割合も比較的大きい。さらに、13日は、比較的屋外から観覧した観覧者数の割合と観覧時間は低調である。13日は天候には恵まれているが、比較的寒く、かつ途中で裏戸を閉じたために、動線が制限されたことが、屋外からの観覧に影響を与えていると考えられる。よって解説人員の有無、動線の制限が、屋外からの観覧行動を促すかどうかを左右しているものと推測できる結果となった。

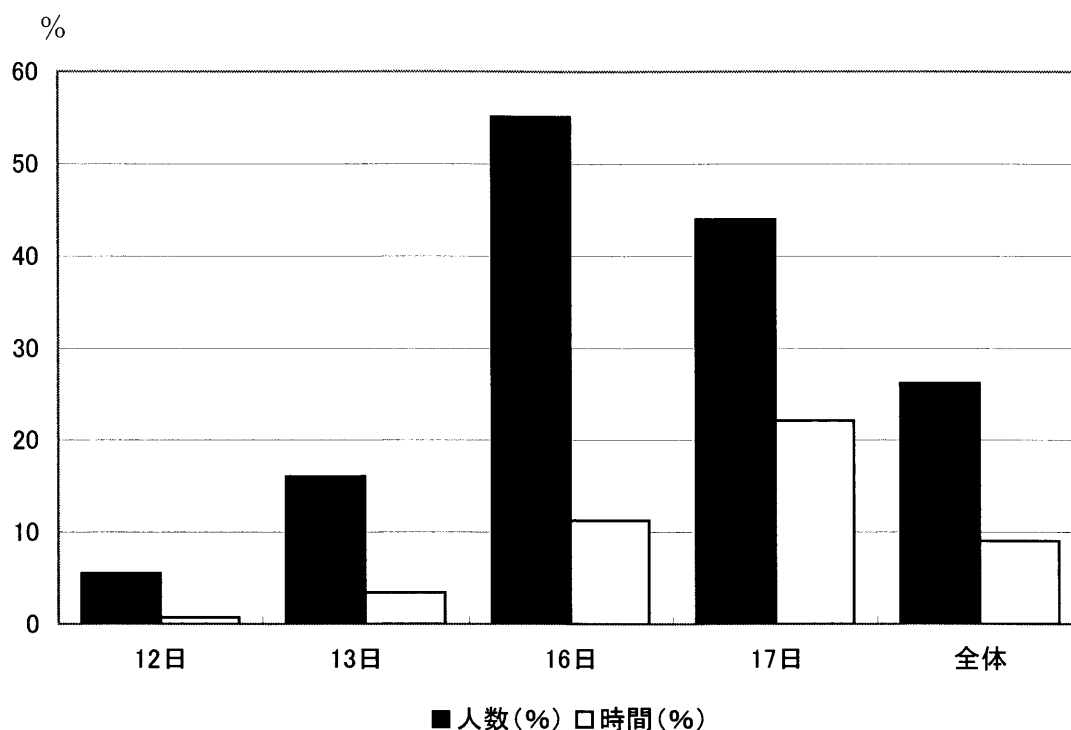


図 4-4 屋外から観覧した観覧者割合と屋外からの観覧時間割合(寒冷期)

表 4-4 屋外から観覧した観覧者数と屋外からの観覧時間(寒冷期)

() は全体数

	12 (土)	13 (日)	16 (水)	17 (木)	全体
人数 (人)	3 (55)	8 (58)	27 (49)	11 (25)	49 (187)
観覧時間 (秒)	30 (4577)	198 (7204)	889 (7854)	905 (4094)	2022 (23729)

2-4 寒冷期における観覧場所の選択行動の要因

寒冷期、室内に上がっての観覧および屋外からの観覧を、民家展示施設の展示環境の違いから分析すると、以下のことがそれぞれの要因として考えられる。

室内に上がって観覧した観覧者の特徴として、
比較的温暖で天候に恵まれている場合

- ・ 解説人員がいないと、室内に上がって観覧した観覧者の割合が大きい。
- ・ 解説人員がいると、室内に上がって観覧した観覧者の割合が小さい。

温度や天候で比較すると、

- ・ 雨天時において、室内に上がって観覧した観覧者の割合がやや大きい。
- ・ 晴天かつ比較的暖かいと、室内に上がって観覧した観覧者の割合が小さい。

屋外から観覧した観覧者の特徴として、

比較的温暖で天候に恵まれている場合

- ・ 解説人員がいないと、屋外から観覧した観覧者の割合は小さい。
- ・ 解説人員がいると、屋外から観覧した観覧者の割合は大きい。

温度や天候で比較すると、

- ・ 雨天時において、屋外からの観覧時間の割合が大きく、また観覧者の割合も比較的大きい
- ・ 晴天かつ比較的暖かくても、屋外から観覧した観覧者の割合は大きい。

裏戸の開閉で比較すると、

- ・ 裏戸が閉鎖されている場合、屋外から観覧した観覧者、観覧時間の割合は小さい。

ということから、解説人員の有無、移動の制限、温度・天気といった自然環境の違いなどから、民家を詳しく観覧しようとする行動のあらわれとして、靴を脱いで室内に上がったの観覧行動と、屋外から建物の外観や周囲の環境を観察する観覧行動が発生した条件を、寒冷期においてその要因を分析した。次に、温暖期において、同様な調査・分析を行い、自然環境などの条件の違いによって観覧行動にどのような差があるのかを、より深化させるために、同じ民家展示施設において、同様な調査を温暖期に行った。

2-5 温暖期・調査実施日別の室内に上がって観覧した人の観覧時間の特徴

温暖期における調査実施日や調査期間中の気象条件などは、表 4-1 にまとめているが、詳細に調査期間中の特徴を挙げると、両日とも夏日で晴天であり、また解説人員がカマドの火入れをかねて在駐している。しかし 21 日の場合、座敷でお手玉の実演が開催されていた。お手玉実演をおこなうのは、たてもの園ボランティアであり、昔の遊びなどに関する解説活動の一環と捉えることができるので、解説人員として扱った^{注3)}。

温暖期・調査実施日ごとに、調査対象観覧者のうち、どのくらいの割合で室内に上がって観覧した観覧者数と、室内に上がったの観覧時間を、図 4-5 と表 4-5 に示した。

温暖期の調査実施日ごとに室内に上がって観覧した観覧者数と、室内に上がったの観覧時間を示した図 4-5 と表 4-5 より、20 日において、室内に上がって観覧した観覧者数の割合が大きく、21 日では、室内に上がって観覧した観覧者数の割合は小さいことがわかった。また、室内に上がったの観覧時間では、20 日ではその割合が大きく、21 日ではやや小さい

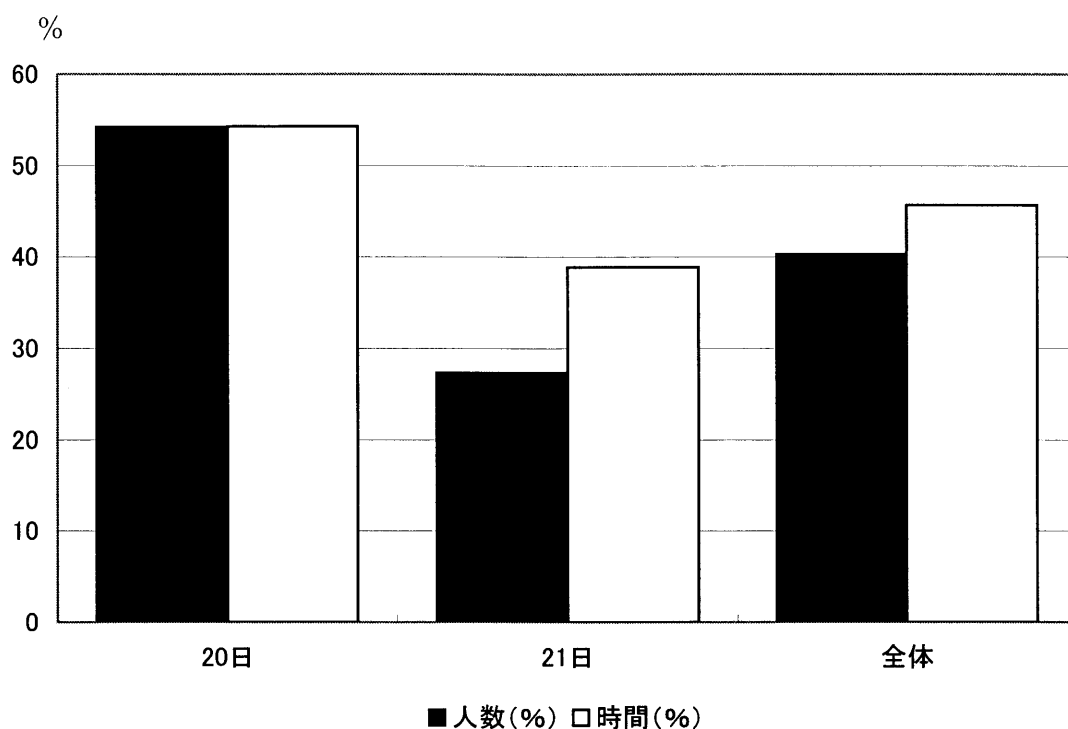


図 4-5 室内に上がって観覧した観覧者割合と室内に上がっての観覧時間割合 (温暖期)

表 4-5 室内に上がって観覧した観覧者数と室内に上がっての観覧時間 (温暖期)

() は全体数

	20 (土)	21 (日)	全体
人数	39	21	60
(人)	(72)	(77)	(149)
観覧時間	7724	7062	14786
(秒)	(14188)	(18176)	(32364)

ことがわかった。しかし観覧者数の割合と観覧時間の割合で比べると、一人あたり室内に上がって費やした観覧時間は 21 日の方が長くなっていることがわかった。

これらから、室内に上がっての観覧した観覧者数と、室内に上がっての観覧時間の場合、調査実施日の諸条件の違いにより、室内に上がっての観覧者数と観覧時間が大きく異なることがわかった。21 日のように、お手玉実演をする解説人員が座敷にいる場合、室内に上がって観覧する観覧者数の割合が小さくなるが、室内での観覧時間の割合が大きくなることがわかった。つまり、お手玉などの実演が室内で行なわれている展示環境において、室内に上がって観覧する観覧者数は減少するが、室内に上がった観覧者の観覧時間は長くな

る傾向があることがわかった。

座敷など、室内で解説人員が実演などを行う場合、実演に参加できる観覧者は、通常より長い時間をそこで費やすこととなるが、その様子を見ている観覧者たちは、自分たちと解説人員との関係が築けないために、室内に上がるのをためらう傾向があるのではないかと考えられる。

2-6 温暖期・調査実施日別の屋外から観覧した人の観覧時間の特徴

温暖期・調査実施日ごとに、調査対象観覧者のうち、どのくらいの割合で屋外から組頭の家を観覧した観覧者数と、屋外からの観覧時間を、図4-6と表4-6に示した。

温暖期の調査実施日ごとに屋外から観覧した観覧者数と、屋外からの観覧時間を示した図4-6と表4-6より、全体的に、屋外から観覧した観覧者数および観覧時間は、室内に上がって観覧した観覧者数および観覧時間よりその値は小さいことがわかった。

21日において、屋外から観覧した観覧者数の割合が大きく、20日では、屋外から観覧した観覧者数の割合は小さいことがわかった。また、屋外からの観覧時間でも、21日ではその割合が大きく、20日では小さいことがわかった。したがって、一人あたり屋外から費やした観覧時間も、21日の方が長くなっていることがわかった。

これらから、屋外から観覧した観覧者数と、屋外からの観覧時間の場合、調査実施日の諸条件の違いにより、室内に上がっての観覧者数と観覧時間が大きく異なることがわかった。21日のように、お手玉実演をする解説人員が座敷にいる場合、屋外から観覧する観覧者数の割合が大きくなるし、観覧時間も長くなることがわかった。つまり、お手玉などの実演が室内で行われている展示環境において、屋外から観覧する観覧者数が増加し、屋外からの観覧者の観覧時間が長くなる傾向があることがわかった。

以上により、屋外から観覧した観覧者は、室内に上がって観覧した観覧者の傾向とは、全く逆の結果となった。座敷で実演の様子を見た観覧者たちは、室内に上がらずに、屋外から民家を観覧する傾向があるのではと推測できる結果となった。

このように、観覧場所を選択する際、温暖期において、室内での解説人員の有無または、生活環境を積極的に再現しようとする実演に参加できる人数の差などが、大きな影響を及ぼしているのではと推測できる。

2-7 温暖期にける観覧場所の選択行動の要因

温暖期、室内に上がっての観覧および屋外からの観覧を、民家展示施設の展示環境の違いから分析すると、以下のことがそれぞれの要因として考えられる。

調査日の違いにより、温度や天候といった環境の違いは無いことから、観覧場所を選択する要因としては、座敷において解説人員からの実演があるかないかの違いであることが推測できる。すなわち、お手玉の実演がある21日と、20日の観覧行動を比べると、

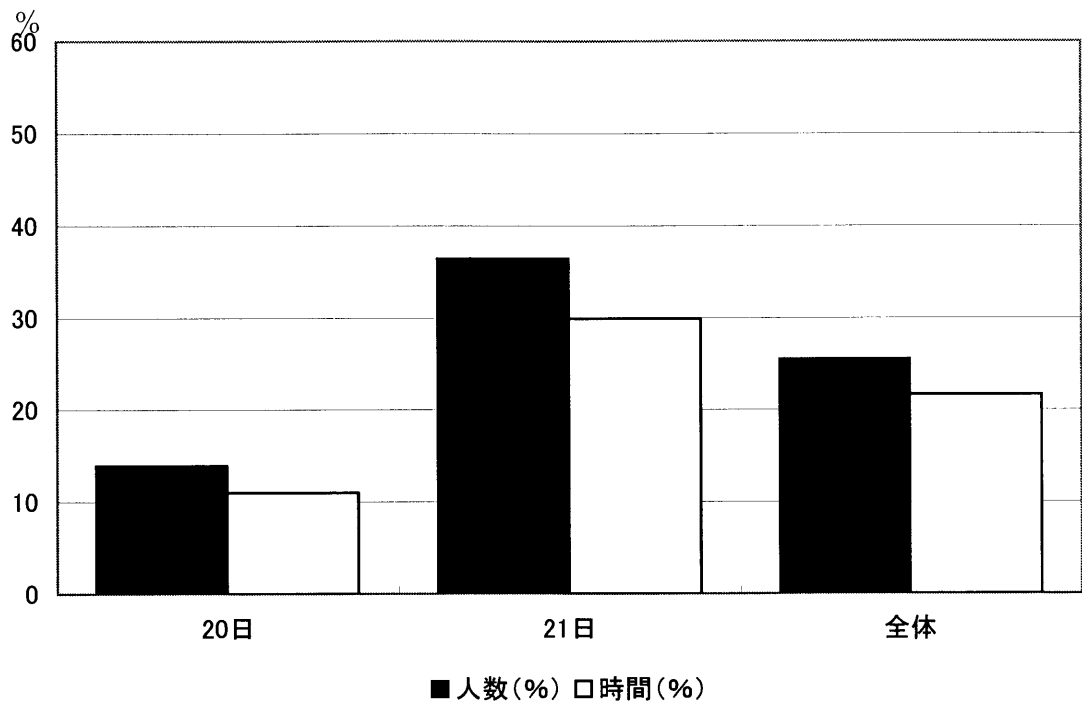


図 4-6 屋外から観覧した観覧者割合と屋外からの観覧時間割合 (温暖期)

表 4-6 屋外から観覧した観覧者数と屋外からの観覧時間 (温暖期)

() は全体数

	20 (土)	21 (日)	全体
人数	10	28	38
(人)	(72)	(77)	(149)
観覧時間	1535	5444	6979
(秒)	(14188)	(18176)	(32364)

室内に上がって観覧した観覧者の場合

- ・ 実演がある場合、観覧者数の割合は小さいが、観覧時間は長時間に及ぶ
- ・ 実演が無い場合、観覧者数の割合は大きい、観覧時間は比較的短い

屋外から観覧した観覧者の場合

- ・ 実演がある場合、観覧者数の割合は大きく、観覧時間は 20 日と比べて若干長くなる
- ・ 実演が無い場合、観覧者数の割合は小さく、観覧時間も 21 日と比べて若干短くなる

る

ということから、座敷において、生活環境を再現するために実施される実演の有無により、民家を詳しく観覧しようとする行動のあらわれとして、靴を脱いで室内に上がったの観覧行動と、屋外から建物の外観や周囲の環境を観察する観覧行動が発生した条件を、温暖期においてその要因を分析し、明らかにした。

3 内部重点・外観重点型観覧行動選択直前の観覧場所と観覧行動の特徴

3-1 内部重点型観覧行動選択直前の観覧場所と観覧行動

民家という三次元空間に内在する情報を、より積極的に感じ取ろうとする観覧行動が発生する直前の観覧形態を分析し、展示物の特徴と、観覧形態の特徴を明らかにすることで、室内に上がる、または屋外から観覧する行動につながる要因を明らかにする。

室内に上がって観覧した観覧者が、室内に上がって観覧する直前、どの場所でどのような観覧形態だったのかを、ここでは明らかにする。

まず、寒冷期の場合、室内に上がってと屋外からの両方を観覧した観覧者は3名、始めから室内に上がって観覧した観覧者は6名いたので、これらに該当する観覧者のデータは除外し、残った39名のデータを用いて、室内に上がる直前の観覧場所とを分析する。

寒冷期における室内に上がる直前の観覧行動が発生した場所を、図4-7に示した。すると、土間で観覧行動が発生している割合が多く、全体の8割を占めている。室内パネルも約2割を占めており、ほとんど土間と室内パネルで室内に上がる直前の観覧行動が発生していることがわかった。

一方、温暖期の場合、室内に上がってと屋外からの両方を観覧した観覧者は9名、始めから室内に上がって観覧した観覧者は11名いたので、これらの該当する観覧者のデータは除外し、残った40名のデータを用いて、室内に上がる直前の観覧場所を分析する。

温暖期における室内に上がる直前の観覧行動が発生した場所を図4-8に示した。すると、土間での観覧行動が発生している割合が大きく、9割近くに達している。

図4-7と図4-8を比べると、温暖期のほうが、土間で観覧行動が発生している割合が、寒冷期よりも若干大きく、パネルで観覧行動が発生している割合が、寒冷期よりも若干小さくなるだけで、寒冷期・温暖期による顕著な差はないことがわかった。

次に、それぞれの期間、室内に上がる直前の観覧行動を、寒冷期、温暖期それぞれ図4-9と図4-10に示す。

図4-9より、寒冷期における室内に上がる直前の観覧行動の実態は、普通観覧の割合が最も大きく、全体の6割近くを占めており、空間把握行動の割合が半分に達していない。また空間把握行動である参加体験、臨地解説それぞれの割合も、2割近くしかなく、参加体験+臨地解説などは、ほとんど現れていないことがわかった。

一方、図4-10より、温暖期における室内に上がる直前の観覧行動の実態は、普通観覧の割合は、全体の3割強程度しか占めておらず、空間把握行動の割合が半数を超えている。空間把握行動の中でも、臨地解説の割合が大きく、普通観覧の割合を超え、全体の4割近くを占めている。また参加体験、参加体験+臨地解説の割合も、それぞれ15%近くまで達している。

これらから、寒冷期と温暖期における、室内に上がる直前の観覧行動の実態は、寒冷期において、空間把握行動の割合が小さいが、温暖期において空間把握行動の割合が大きく、

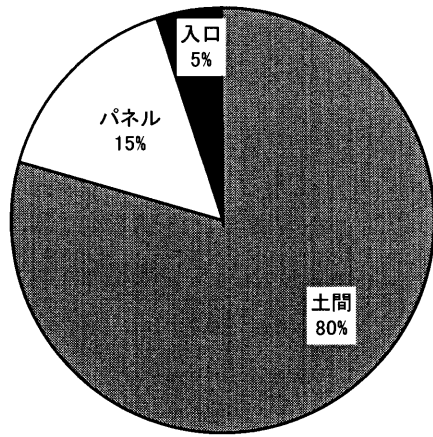


図 4-7 寒冷期・室内に上がる直前の観覧行動発生場所

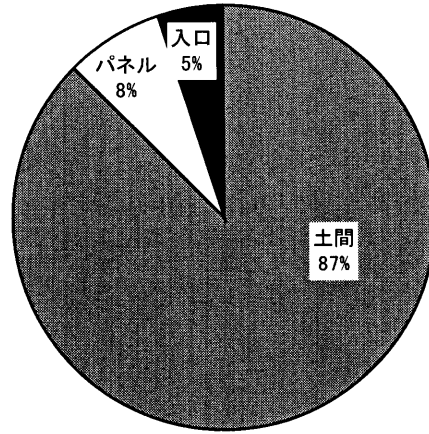


図 4-8 温暖期・室内に上がる直前の観覧行動発生場所

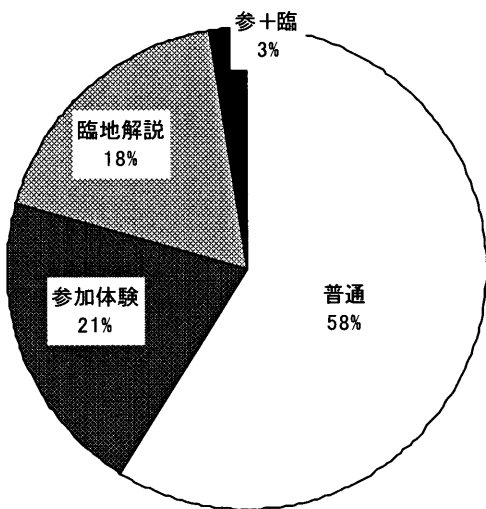


図 4-9 寒冷期・室内に上がる直前の観覧行動の実態

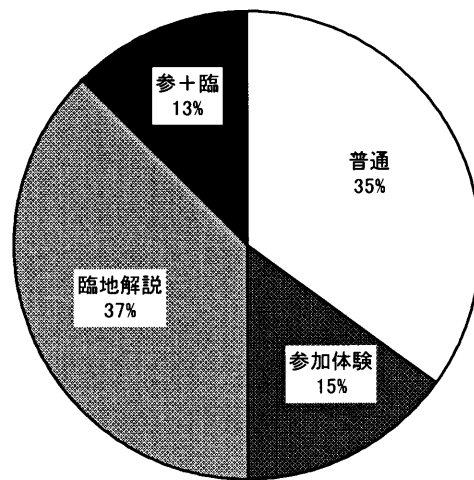


図 4-10 温暖期・室内に上がる直前の観覧行動の実態

特に解説人員との接触による臨地解説の割合が大きいことがわかった。

寒冷期と温暖期それぞれにおける、室内に上がる直前の観覧場所と観覧行動を比べると、

- ・ 観覧場所は、寒冷期・温暖期にかかわらず土間で発生している割合が大きい。
- ・ 観覧行動は、寒冷期の場合、普通観覧の割合が最も大きく、空間把握行動の割合は全体の半数に至っていない。
- ・ 温暖期の場合、臨地解説の割合が最も大きく、空間把握行動の割合は半数を超えている。

という特徴があることがわかった。

3-2 外観重点型観覧行動選択直前の観覧場所と観覧行動

屋外から観覧した観覧者が、屋外からの観覧直前、どの場所でどのような観覧形態だったのかを同様に明らかにする。

まず寒冷期の場合、室内に上がってと屋外からの両方を観覧した観覧者は3名、始めから屋外から観覧した観覧者は14名いたので、これらに該当する観覧者のデータは除外し、残った32名のデータを用いて、室内に上がる直前の観覧場所とを分析する。

寒冷期における屋外からの観覧直前の観覧行動が発生した場所を、図4-11に示した。すると、土間で観覧行動が発生している割合が多く、全体の約6割を占めている。それ以外では、入口で全体の約四分の一近い割合で発生しており、残りが室内パネルであった。

一方、温暖期の場合、室内に上がってと屋外からの両方を観覧した観覧者は9名、始めから室内に上がって観覧した観覧者は8名いたので、これらの該当する観覧者のデータは除外し、残った21名のデータを用いて、室内に上がる直前の観覧場所を分析する。

温暖期における屋外からの観覧直前の観覧行動が発生した場所を、図4-12に示した。すると、土間での観覧行動が全体の約7割に達しており、室内パネルも約2割を占めており、入口は1割を占める結果となった。

図4-11と図4-12を比べると、温暖期において、土間で観覧行動が発生する割合は若干大きく、入口での観覧行動の割合がやや小さくなる以外、大きな差はないことがわかった。

次に、それぞれの期間、屋外からの観覧直前の観覧行動を図4-13と図4-14に示す。

図4-13より、全体的にはほぼ四分の一ずつ分散しており、普通観覧と参加体験では28%ずつ、臨地解説と参加体験+臨地解説の割合は22%であった。一方、図4-14では、参加体験の割合は大きく、また臨地解説と普通観覧の割合は同じ割合で並んでいる。参加体験+臨地解説の割合は、この中では最も小さいことがわかった。

これらから、寒冷期と温暖期における、屋外からの観覧直前の観覧行動の実態は、寒冷期はいずれの観覧行動もほぼ等しく発生することが特徴であり、温暖期においては、参加体験の割合が大きくなることがわかった。

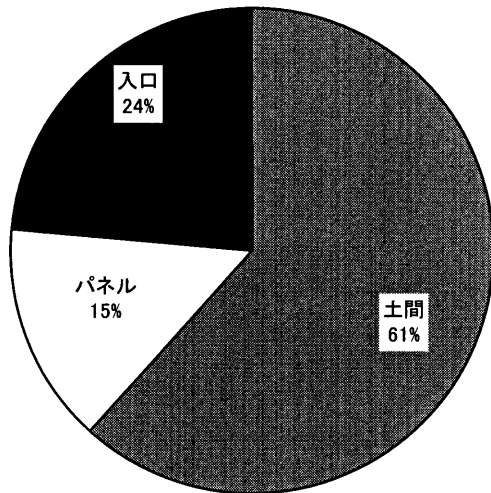


図 4-11 寒冷期・屋外からの観覧直前の観覧行動発生場所

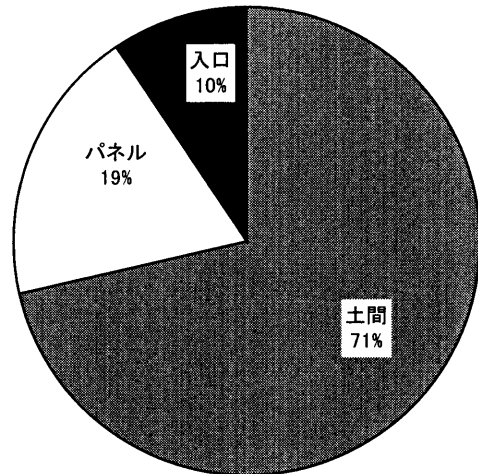


図 4-12 温暖期・屋外からの観覧直前の観覧行動発生場所

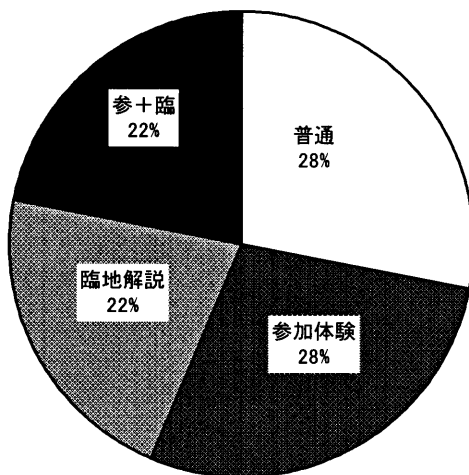


図 4-13 寒冷期・屋外からの観覧直前の観覧行動の実態

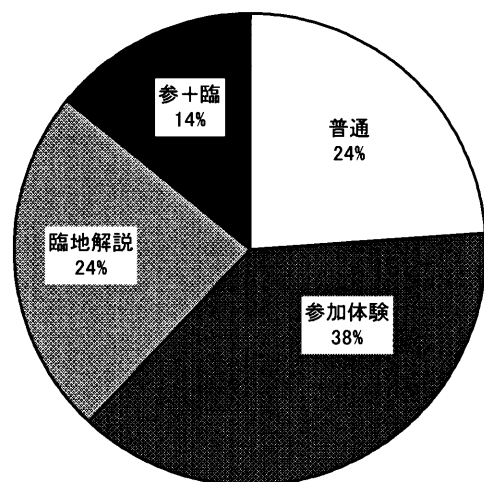


図 4-14 温暖期・屋外からの観覧直前の観覧行動の実態

寒冷期と温暖期それぞれにおける、屋外から観覧直前の観覧場所と観覧行動を比べると、

- ・ 観覧場所は、寒冷期・温暖期にかかわらず土間で発生している割合が大きい。
- ・ 観覧行動は、寒冷期の場合、普通観覧、参加体験、臨地解説、参加体験＋臨地解説の割合はだいたい同じである。
- ・ 温暖期の場合、参加体験の割合が最も大きく、臨地解説の割合も比較的大きい。

という特徴があることがわかった。

4 内部重点・外観重点型観覧行動が出現するタイミングの特徴

4-1 寒冷期における内部重点・外観重点型観覧行動が出現する観覧順序

民家という三次元空間に内在する情報を、より積極的に感じ取ろうとする観覧行動が発生するのは、全観覧行動の中でどのタイミングかを分析することで、室内に上がったの観覧または屋外からの観覧の特徴を明らかにする。

そこで、まず寒冷期における室内に上がって観覧した観覧者と、屋外から観覧した観覧者の観覧時間のうち、どのタイミングで室内に上がったの観覧、屋外からの観覧が発生したのかを、図4-15に示した。

図4-15より、寒冷期における室内に上がったの観覧は、長い時間をかけて室内に上がって観覧しており、室内に上がって観覧するタイミングは、観覧行動の最後に出現していることがわかった。一方、寒冷期における屋外からの観覧は、短い時間をかけて屋外から観覧しており、屋外から観覧するタイミングは、観覧行動の最後に出現していることがわかった。

室内に上がったの観覧と、屋外からの観覧を比べると、室内に上がったの観覧の場合、土間など、靴を脱がなくてもいいところで発生している観覧時間が短い。しかし屋外からの観覧の場合、靴を脱がなくてもいいところで発生している観覧時間が長いことがわかった。

これらのことから、寒冷期における特徴としては、室内に上がったの観覧、屋外からの観覧それぞれ、観覧者の観覧時間の中でも、最後の方に出現する傾向があること、室内に上がったの観覧時間は比較的長く、屋外からの観覧時間は比較的短いことがわかった。

4-2 温暖期における内部重点・外観重点型観覧行動が出現する観覧順序

温暖期における室内に上がって観覧した観覧者と、屋外から観覧した観覧者の観覧時間のうち、どのタイミングで室内に上がったの観覧、屋外からの観覧が発生したのかを、図4-16に示した。

図4-16より、温暖期における室内に上がったの観覧は、ほとんどの観覧者の場合、非常に長い時間をかけて室内に上がって観覧していることがわかった。また室内に上がって観覧するタイミングは、観覧行動の最後に出現していることがわかった。一方、温暖期における屋外からの観覧は、長い時間をかけて屋外から観覧しており、屋外から観覧するタイミングは、観覧行動の最後に出現していることがわかった。

室内に上がったの観覧と、屋外からの観覧を比べると、室内に上がったの観覧の場合、土間など、靴を脱がなくてもいいところで発生している観覧時間が短い。しかし屋外からの観覧の場合、靴を脱がなくてもいいところで発生している観覧時間が、やや長いことがわかった。

これらのことから、温暖期における特徴として、室内に上がったの観覧、屋外からの観

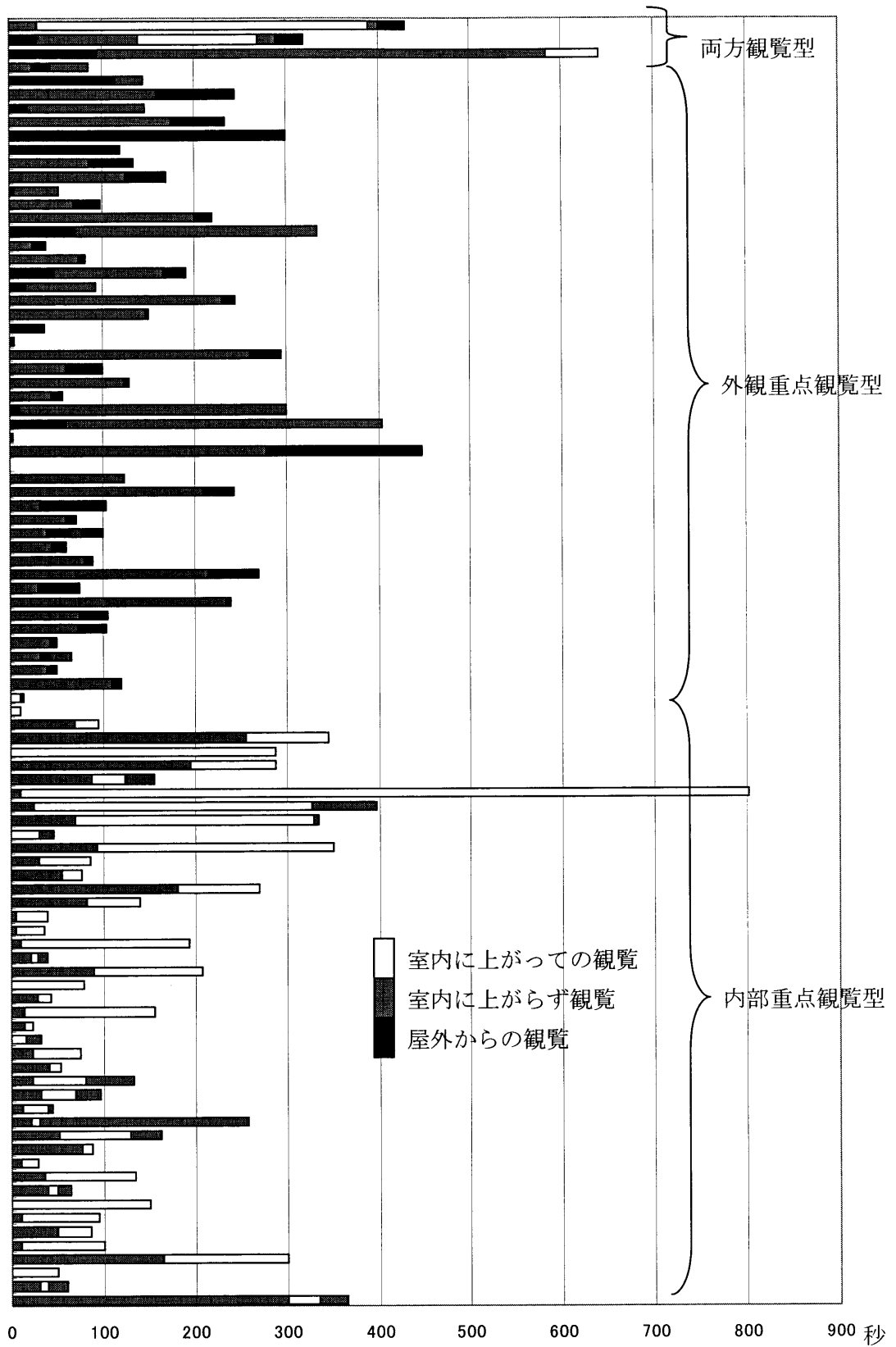


図 4-15 寒冷期における室内に上がる・屋外から観覧する観覧者の観覧行動の発生傾向

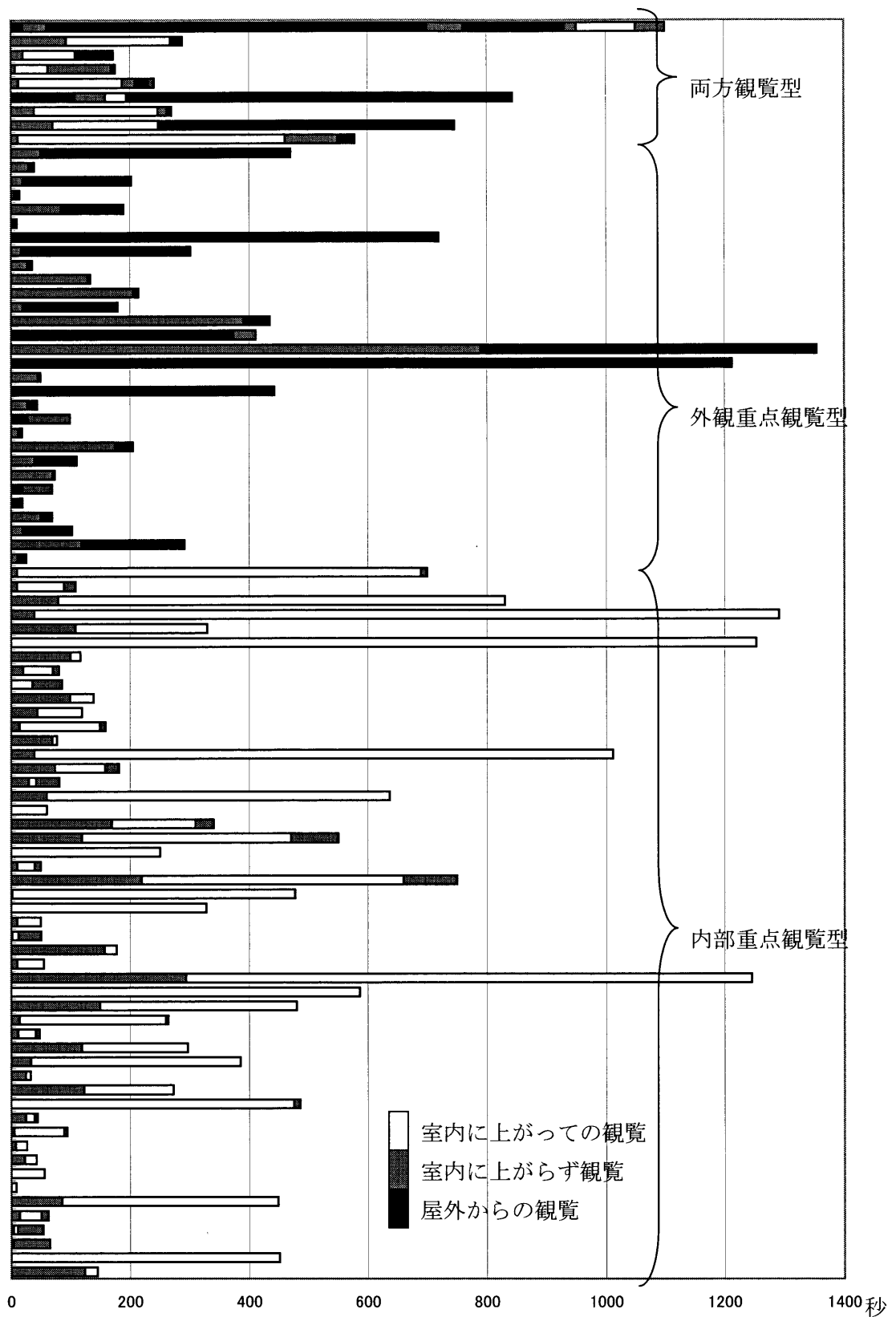


図 4-16 温暖期における室内に上がる・屋外から観覧する観覧者の観覧行動の発生傾向

覧それぞれ、観覧者の観覧時間の中でも、最後の方に出現する傾向があること、室内に上がったの観覧時間、屋外からの観覧時間それぞれ長いということがわかった。

また、寒冷期と温暖期を比べると、

- ・ 室内に上がったの観覧、屋外からの観覧それぞれ、寒冷期において、室内に上がらず、靴を脱がなくてもいい土間のようなところで、長い時間にわたって観覧している傾向がある。
- ・ 室内に上がったの観覧、屋外からの観覧それぞれ、温暖期において、室内に上がらず、靴を脱がなくてもいい土間のようなところで、比較的短い時間観覧している傾向がある。
- ・ 温暖期のほうが、室内に上がったの観覧時間、屋外からの観覧時間それぞれ長く持続している。
- ・ 室内に上がったの観覧、屋外からの観覧は、季節に限らず、観覧者の観覧時間の中で、最後に出現する傾向がある。
- ・ 屋外から観覧する観覧者において、温暖期において、観覧時間のすべてを屋外から費やしている観覧者の数は、寒冷期よりも多い。

ということがわかった。以上より、季節によって観覧場所を選択する傾向があること、その際の観覧時間、観覧行動などにも特徴があることがわかった。

5 観覧場所の選択による属性の特徴

5-1 寒冷期における内部重点観覧・外観重点観覧型観覧の属性の特徴

民家という三次元空間に内在する情報を積極的に感じ取ろうとする空間把握行動のなかでも、民家を詳しく観覧しようとする行動のあらわれとして、靴を脱いで室内に上がっての観覧行動と、屋外から建物の外観や周囲の環境を観察する観覧行動を行なった観覧者の属性を明らかにする。

寒冷期における室内に上がっての観覧者と、屋外から観覧した観覧者の年齢別属性を、図4-17に示す。

図4-17より、室内に上がっての観覧者の場合、屋外からの観覧者の割合と比べて、幼児小学生や20歳代といった、比較的年齢が若い観覧者の割合が大きいことがわかった。一方、屋外からの観覧者の場合、室内に上がっての観覧者の割合と比べて、50歳代の観覧者の割合が大きく、特に60歳代以上といった、比較的年齢が高い観覧者の割合が極めて大きいことがわかった。また、30歳代、40代が占める割合は、室内に上がっての観覧と屋外からの観覧それぞれ同じくらいの割合であることがわかった。

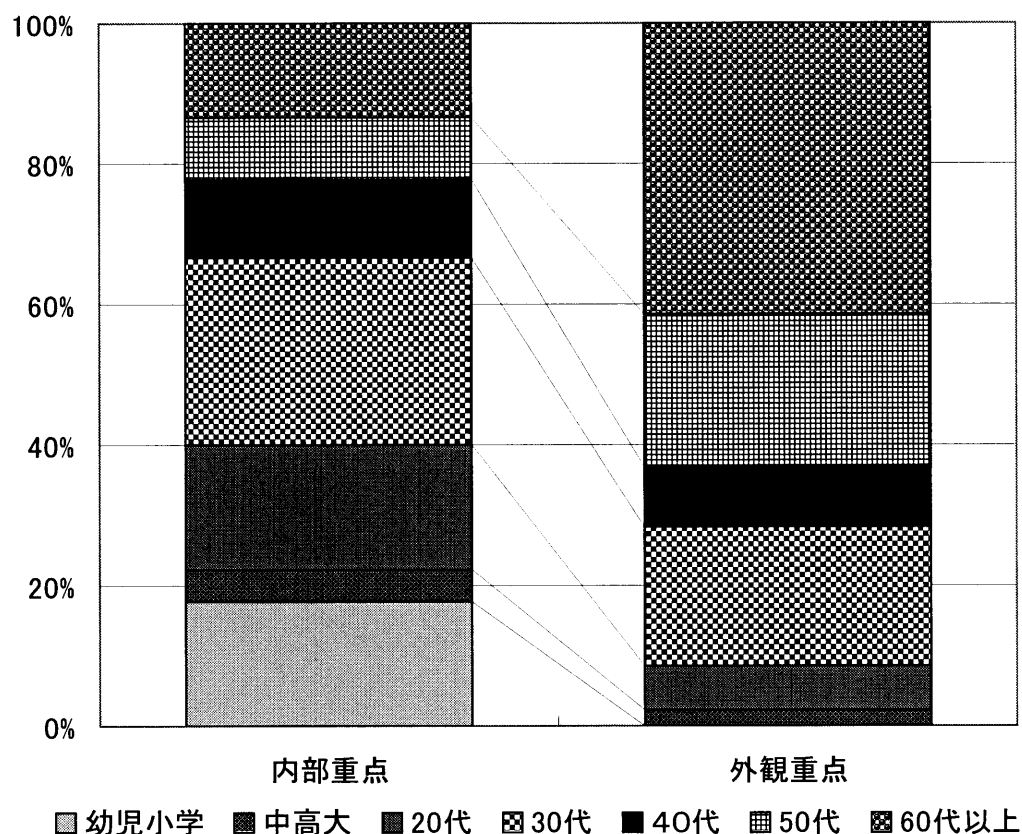
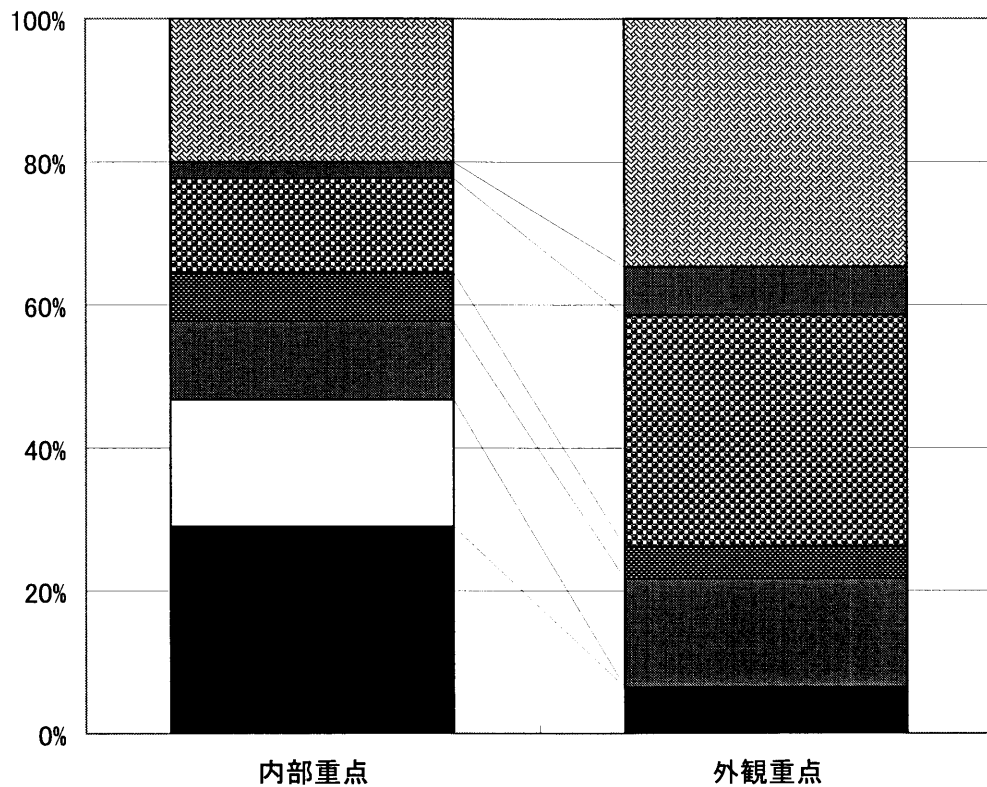


図4-17 寒冷期における室内に上がる・屋外から観覧する観覧者の年齢別属性



■ 両親祖父母子 □ 父・母・子 ■ 夫婦 ■ カップル ■ 友同士 ■ 団体 ■ 一人

図 4-18 寒冷期における室内に上がる・屋外から観覧する観覧者の同伴者別特徴

また、室内に上がったの観覧者、屋外からの観覧者の同伴者別特徴を、図 4-18 に示す。

図 4-18 より、室内に上がったの観覧者は、屋外からの観覧者と比べて、両親祖父母と子ども、父親または母親と子どもといった、親子連れの割合が大きいことがわかった。一方屋外からの観覧者は、室内に上がったの観覧者と比べて、友人同士、一人の割合が大きいことがわかった。

これらから、寒冷期における室内に上って観覧・屋外からの観覧があった観覧者の場合、年齢や同伴者によって、観覧場所を選択する傾向があった。

5-2 温暖期における内部重点観覧・外観重点観覧型観覧の属性の特徴

温暖期における、室内に上って観覧と、屋外から観覧した観覧者の年齢別属性を、図 4-19 に示す。

図 4-19 より、室内に上がったの観覧者の場合、屋外からの観覧者と比べて、30 歳代と 60 歳代以上の年齢層の割合が大きいことがわかった。一方、屋外からの観覧者の場合、室内に上がったの観覧者と比べて、50 歳代の割合が大きいことがわかった。幼児小学生、中学高校大学生、20 歳代、40 歳代では、それぞれ大体同じ割合であった。

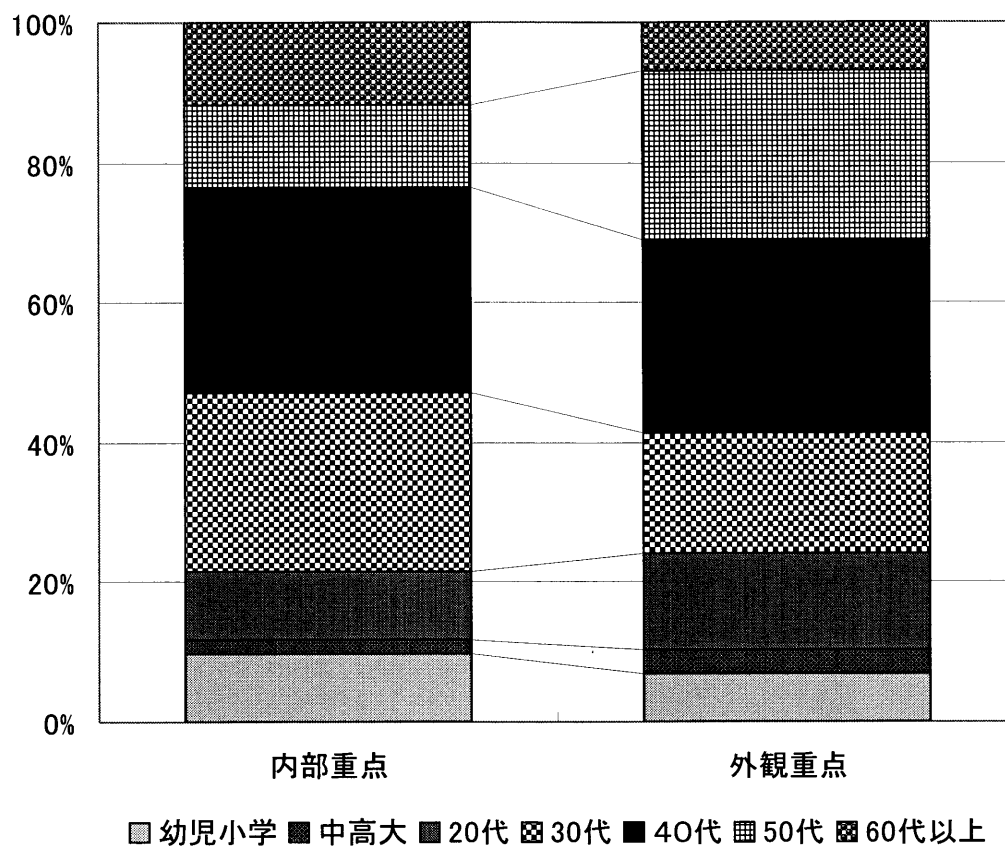


図 4-19 温暖期における室内に上がる・屋外から観覧する観覧者の年齢別属性

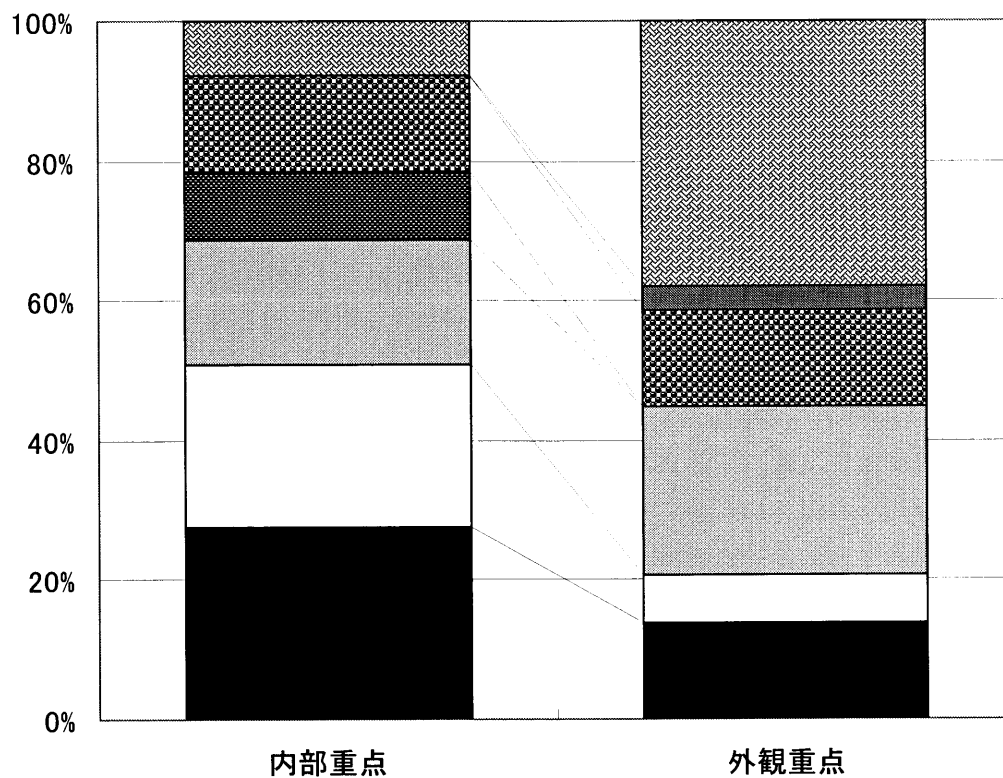
また、室内に上がったの観覧、屋外からの観覧者の同伴者別特徴を、図 4-20 に示す。

図 4-20 より、室内に上がったの観覧者は、屋外からの観覧者と比べて、両親祖父母と子ども、父親または母親とこともといった、親子連れの割合が大きいことがわかった。また、カップルでの観覧は、屋外からの観覧者の中にはいないことがわかった。一方、屋外からの観覧者は、室内に上がったの観覧者と比べて、圧倒的に一人での観覧の割合が大きく、夫婦での観覧の割合がやや大きいことがわかった。また、団体の観覧者は、室内に上がったの観覧者の中にはいないことがわかった。

これらから、温暖期における室内に上って観覧・屋外からの観覧があった観覧者の場合、年齢や同伴者によって、観覧場所を選択する傾向があった。

また、寒冷期と温暖期で属性を比べると、

- ・ 外観から観覧する観覧者の場合、寒冷期温暖期関係なく、50 歳以上の、比較的年齢層の高い人たちの観覧が占める割合が大きい。
- ・ 外観から観覧する観覧者の場合、寒冷期温暖期関係なく、一人での観覧が占める割合が大きい。



■ 両親祖父母子 □ 父・母・子 ▨ 夫婦 ■ カップル ▩ 友同士 ■ 団体 ▩ 一人

図 4-20 温暖期における室内に上がる・屋外から観覧する観覧者の同伴者別特徴

- ・ 室内に上がって観覧する観覧者の場合、寒冷期温暖期関係なく、両親祖父母と子ども、父親または母親と子どもといった、親子連れでの観覧が占める割合が大きい。
- ・ 室内に上がって観覧する観覧者の場合、寒冷期温暖期関係なく、30 歳代以下の、比較的年齢層の低い人たちの観覧が占める割合が大きい。

という特徴が明らかになった。以上より、季節が異なったとしても、観覧場所を選択する観覧者の属性には、大きな変化が無いことがわかった。

6 まとめ

寒冷期と温暖期における、江戸東京たてもの園八王子千人同心組頭の家において、観覧行動の選択行動の違いによる観覧行動の特性を、室内に上がったの観覧、屋外からの観覧それぞれに費やした観覧時間、観覧人数、観覧場所などから分析を行った。

その結果、民家という三次元空間に内在する情報を積極的に感じる観覧行動として、室内に上がって観覧（＝内部重点型）と、屋外からの観覧（＝外観重点型）の両方を行った観覧者は、寒冷期温暖期それぞれ極めて少ないことがわかった。

寒冷期の場合、解説人員が不在でカマドの火入れが無い場合、室内に上がったの観覧が多くなり^{注4)}、屋外からの観覧が少なくなることがわかった。また、雨天の場合、室内に上がったの観覧が、晴天時と比べてやや多くなることがわかった。また、晴天で暖かい気温の場合、屋外からの観覧が、寒い気温と比べてやや多くなることがわかった。

温暖期の場合、室内で実演が行なわれている場合、室内に上がって観覧した観覧者は、実演が無いときと比べて少ないが、室内に上がって観覧した観覧者の観覧時間は長くなることがわかった。逆に実演が行なわれていない場合、室内に上がって観覧した観覧者は、実演が行なわれているときと比べて多いが、室内に上がって観覧した観覧者の観覧時間は短くなることがわかった。また、室内での実演が行なわれている場合、屋外から観覧した観覧者は、実演が無いときと比べて多く、観覧時間もやや長くなることがわかった。逆に実演が行なわれていない場合、屋外から観覧した観覧者は、実演が行なわれているときと比べて少なく、観覧時間もやや短くなることがわかった。

室内に上がって観覧する直前の観覧行動と観覧場所の特徴として、寒冷期温暖期それぞれ土間で発生している割合が最も大きいことがわかった。また、寒冷期の場合、観覧行動において、普通観覧の割合が大きく、温暖期においては臨地解説の割合が最も大きいことがわかった。一方、外観から観覧する直前の観覧行動と観覧場所の特徴として、寒冷期温暖期それぞれお土間で発生している割合がもっとも大きいことがわかった。また、寒冷期の場合、観覧行動において、普通観覧、参加体験、臨地解説、参加体験＋臨地解説の割合は大体同じ割合を占めていたが、温暖期の場合、参加体験の割合が最も大きいことがわかった。

室内に上がったの観覧行動が発生するのは、寒冷期温暖期それぞれ、観覧者の全観覧行動の中でも最後に出現する傾向があることがわかった。また、室内に上がったの観覧行動は、何回かに別けて出現するよりも、観覧行動1回につき、長時間持続することがわかった。また、屋外からの観覧行動が発生するのは、寒冷期温暖期それぞれ、観覧者の全観覧行動の中でも最後に出現する傾向があることがわかった。また、屋外からの観覧行動は、何回かに別けて出現するよりも、観覧行動1回につき、長時間持続することがわかった。つまり、積極的に民家という三次元空間に内在する情報を感じようとする観覧者の場合、興味関心の対象は室内と屋外というように異なっていたとしても、観覧形態はほぼ同じ特

徴があることがわかった。

属性による特徴として、室内に上がって観覧する観覧者の場合、寒冷期温暖期関係なく、30歳以下の若年層の割合が大きく、親子連れでの観覧が占める割合が大きいことがわかった。また、屋外から観覧する観覧者の場合、寒冷期温暖期関係なく、50歳以上の老年層の割合が大きく、一人での観覧が占める割合が大きいことがわかった。

観覧場所の選択行動の違いによる観覧者の特徴を分析した結果、天候や気温といった自然環境の違いや、解説人員の有無、室内での実演の有無などによって、観覧場所が選択されることがわかった。また、室内に上がっての観覧、屋外からの観覧は、観覧者の全観覧行動の中でも、最後に出現することがわかった。属性による特徴も、若年層に室内に上がって観覧する傾向が、老年層に屋外から観覧する傾向があることがわかった。

積極的に民家という三次元空間に内在する情報を感じ取ろうとする行動のあらわれとして、室内に上がっての観覧と屋外からの観覧が発生した観覧者の特徴がわかった。特に、天候や温度といった自然環境の違いにより、重点的に観覧する場所が異なることから、自然環境の変化に即して、展示解説の重点場所を変えたり、可能であれば実演などを、その日の自然環境によって決めるなどの運営方法が、より効果的に民家の持つ情報を伝えることができるのではないかと推測できる結果となった。

引用・参考文献

- 朴光範・野村東太・大原一興・平野暁臣・小川英彦・真鍋博司・西宮浩司 1992.8,「来館者の観覧時間に関するケーススタディ - 博物館の展示計画に関する研究その1」『日本建築学会大会学術講演梗概集 E』,pp.465-466.
- 西宮浩司・野村東太・大原一興・平野暁臣・朴光範・小川英彦・真鍋博司 1992.8,「解説員による展示解説実施と観覧行為に関する一考察 - 博物館の展示計画に関する研究その3」『日本建築学会大会学術講演梗概集 E』,pp.469-470.
- 小川英彦・野村東太・大原一興・平野暁臣・朴光範・真鍋博司・西宮浩司 1992.8,「来館者の観覧時間と観覧行為に関する研究 - 博物館の展示計画に関する研究その2 -」『日本建築学会大会学術講演梗概集 E』,pp.467-468.
- 野村東太・大原一興・朴光範・小川英彦・真鍋博司・西宮浩司 1993.3,「博物館の展示・解説が観覧行為に与える影響 - 博物館に関する建築計画的な研究V」『日本建築学会計画系論文集』,第445号,pp.73-81.
- 西宮浩司・野村東太・大原一興・白石真二郎 1993.9,「自然科学系博物館における観覧行為に関する一考察 - 博物館に関する建築計画的な研究その31 -」『日本建築学会大会学術講演梗概集 E』,pp.687-688.
- 久保田百年・野村東太・大原一興 1994.9,「民家展示施設における活動内容に関する考察 - 民家展示施設の建築計画に関する研究その1」『日本建築学会大会学術講演梗概集 E』,pp.629-630.
- 大原一興・野村東太・久保田百年 1994.9,「民家展示施設における観覧行為のケーススタディ - 民家展示施設の建築計画に関する研究その2」『日本建築学会大会学術講演梗概集 E』,pp.631-632.

第4章 観覧場所の選択行動の違いによる観覧行動の特性

加茂慎司・野村東太・大原一興 1995.8, 「民家展示施設における展示解説手法の効果に関する考察 - 民家展示施設の建築計画に関する研究その3」『日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1』, pp.419-420.

野村東太・西源二郎・大原一興 1996.3, 「水族館の観覧と学習行動に関する研究」『生涯学習のための水族館の教育機能に関する建築計画的な研究』, 平成6～7年度科学研究費補助金総合研究(A)研究成果報告書(課題番号 06301079) pp.33-68.

松島崇典・小滝一正・大原一興・大月敏雄 1999.9, 「古民家の保全手法と住まい方に関する研究」『日本建築学会大会学術講演梗概集 E-2』, pp.79-80.

民家研究委員会編 2001.6, 『古民家の保存・活用のための方法論的研究 - 古民家の地域内保全と民家展示施設の考察』, 住宅総合研究財団.

江水是仁・大原一興 2006.2, 「屋外展示民家における興味が異なる来園者の観覧行動に関する研究 - 温暖期における江戸東京たてもの園・八王子千人同心組頭の家的事例」『博物館学雑誌』第32巻第1号, pp.13-43.

江水是仁・大原一興 2006.6, 「屋外民家展示施設における来園者の観覧行動」『全日本博物館学会ニュース』, No.77.

江水是仁・大原一興 2006.9, 「屋外民家展示施設における来園者の観覧行動に関する研究」『日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1』, pp.455-456.

江水是仁・大原一興 2006.11, 「屋外民家展示施設における来園者の観覧行動に関する研究 - 江戸東京たてもの園「八王子千人同心組頭の家」の事例より -」『日本建築学会計画系論文集』, 第609号, pp.33-39.

注釈

^① 江戸東京たてもの園八王子千人同心組頭の家(温暖期)で行った調査(第3章の注釈1)と同じ方法で行った。なお、寒冷期に実施した調査に携わった調査員は、3月12日と13日は3名、16日と17日は5名であった。

^② 扉などの閉閉は、当日担当の解説員に任せられている。通常は、裏戸は開けているものの、調査日当日は、北風が強く、寒風が室内まで強く吹き付けるので、室内の温度はかなり低かった。よって、観覧者にとっても、解説員にとっても、当日非常に寒く感じたために途中から閉鎖された。

^③ 江戸東京たてもの園では、カマドへの火入れによる生活環境を再現したり、解説交流をしたりする解説員のほかに、お手玉や駒まわしといった、昔の遊びの実演や、職人による伝統工芸の実演などが、展示されている民家の室内もしくは敷地を使って、主に休日に定期的に行なわれる。今回の調査日のなかで、1日はたまたま組頭の家で実演が行なわれていたが、実演が行なわれる家屋は、アトランダムに行われるので、昔の遊びの実演が、毎週の休日ごとに、同じ民家で開催されることはない。

^④ 八王子千人同心組頭の家と同じように、室内にイロリ・カマドなどがある条件で、解説員によるイロリやカマドの火入れがある場合、久保田・野村・大原 1994、大原・野村・久保田 1994、加茂・野村・大原 1995によると、室内に上がっての観覧行動を誘発する傾向があると指摘している。しかしながら今回の調査では、カマドの位置が室内に上がらなくてもいいところがあり、観覧者がわざわざ室内に上がらなくても、カマドの火入れなどの様子を観覧することができることから、逆の傾向が見られたと考えられる。

第5章 解説人員の介入による観覧行動の特性

1 はじめに

- 1-1 調査の目的
- 1-2 考察の方法
- 1-3 調査の概要

2 各民家展示施設における観覧行動の実態

- 2-1 臨地解説が発生する観覧行動の実態
- 2-2 環境共生型住宅における臨地解説が発生する展示物の特徴
- 2-3 江戸東京たてもの園・八王子千人同心組頭の家（寒冷期）における臨地解説が発生する展示物の特徴
- 2-4 江戸東京たてもの園・八王子千人同心組頭の家（温暖期）における臨地解説が発生する展示物の特徴

3 各民家展示施設における観覧時間の実態

- 3-1 環境共生型住宅における臨地解説による観覧時間の実態
- 3-2 江戸東京たてもの園・八王子千人同心組頭の家（寒冷期）における臨地解説による観覧時間の実態
- 3-3 江戸東京たてもの園・八王子千人同心組頭の家（温暖期）における臨地解説による観覧時間の実態

4 各民家展示施設における観覧行動1回あたりの観覧時間の実態

- 4-1 環境共生型住宅における観覧行動1回あたりの観覧時間の実態
- 4-2 江戸東京たてもの園・八王子千人同心組頭の家（寒冷期）における観覧行動1回あたりの観覧時間の実態
- 4-3 江戸東京たてもの園・八王子千人同心組頭の家（温暖期）における観覧行動1回あたりの観覧時間の実態

5 まとめ

第5章 解説人員の介入による観覧行動の特性

1 はじめに

1-1 調査の目的

本研究において、民家という三次元空間に内在する情報を、視覚以外の感覚器官を用いて観覧する行動＝空間把握行動を軸に、分析を進めてきた。そして第4章において、民家という三次元空間に内在する情報が、観覧行動の発生場所の違いによる観覧行動の特徴と、その要因などを明らかにした。

第5章において、空間把握行動の中でも、解説人員によって展開される観覧行動に注目し、解説人員が観覧者の観覧行動にどのような影響をもたらしているのか、またどのような環境下において、解説人員からの解説などが発生するのか、その特徴を明らかにすることを目的とする。

1-2 考察の方法

本章では、民家という三次元空間に内在する情報を、視覚以外の感覚器官を用いて観覧する行動＝空間把握行動の中でも、臨地解説に該当する観覧行動を中心に、臨地解説が発生した展示環境を中心に分析する。そのためには、展示環境が異なる施設での観覧行動追跡調査をおこなった。そして、観覧者の観覧行動の中から、臨地解説に該当する観覧行動を抽出し、分析する。その結果を比較することで、気象条件が異なる時期や室内と野外といった展示環境が異なる施設において、解説人員との接触が効果的に機能する条件などを明らかにする。

1-3 調査の概要

本章では、展示環境が異なる施設での比較をするため、調査対象施設は、日本科学未来館環境共生型住宅（調査期間：2003年12月15.17.19.21.22日）、寒冷期における江戸東京たても園八王子千人同心組頭の家（調査期間：2005年3月12.13.16.17日）、温暖期における江戸東京たても園八王子千人同心組頭の家（調査期間：2006年5月20.21日）である。なお、有効サンプルや気象条件などは、前記してあるので割愛する。

調査の手法としては、各期間、調査対象施設の入口付近に、観覧行動追跡調査を実施している旨を書いた看板やホワイトボードを掲げ、かつ調査員により看板やホワイトボードに書かれている文面と同じ内容のチラシを観覧者に渡しつつ、口頭で簡単に調査実施の旨を話した。そして調査員が、観覧者の視線に入らない距離を保ちながら、ストップウォッチと記録用紙を使って、観覧者の観覧行動を追跡し、観覧行動が発生した場所と観覧行動の内容、観覧行動に費やした時間を記録した。本章では、その中から臨地解説が発生した部分を抽出し、分析した。

2 各民家展示施設における観覧行動の実態

2-1 臨地解説が発生する観覧行動の実態

第2章でも触れたが、ここでは各民家展示施設における観覧行動を分類し、その中で特に解説人員からの介入が発生する臨地解説が含まれる観覧行動を中心に、調査期間中の全観覧回数の内訳を図5-1に、全観覧時間の内訳を図5-2に示す。

図5-1より、全観覧回数において、各民家展示施設とも、最も大きな割合を占めているのが普通観覧で、順に参加体験、臨地解説、臨地解説+参加体験であることがわかった。

空間把握行動の中でも臨地解説に注目すると、各施設の中で、臨地解説の割合が比較的大きいのは、組頭の家（温暖期）であり、組頭の家（寒冷期）が小さいことがわかった。また、臨地解説+参加体験に注目すると、組頭の家（温暖期）と組頭の家（寒冷期）では、ほぼ同じくらいの割合であるが、環境共生型住宅において、その割合がやや大きくなっていることがわかった。

次に、図5-2より、全観覧時間において、普通観覧以外の空間把握行動の割合が大きく占めていることがわかった。空間把握行動の中でも、環境共生型住宅では、臨地解説+参加体験の占める割合がやや大きいが、臨地解説、参加体験の割合がだいたい同じであることがわかった。一方、組頭の家（寒冷期）では、参加体験の割合が大きく、臨地解説の割合が小さいことがわかった。そして組頭の家（温暖期）では、臨地解説+参加体験の割合が大きく、臨地解説の割合も比較的大きいことがわかった。

観覧行動回数と観覧時間を比べると、1回あたりの観覧行動回数に費やす時間は、各施設において、普通観覧は、観覧行動回数の割合が大きかったにもかかわらず、観覧時間の割合は小さいことから、短時間での観覧であることがわかった。一方、臨地解説+参加体験において、観覧行動回数の割合は小さかったにもかかわらず、観覧時間の割合は大きいことから、長時間かけての観覧であることがわかった。参加体験においては、観覧回数の割合はやや大きいものの、観覧時間の割合はやや小さくなっていることから、1回あたりの観覧時間は比較的短くなっていることがうかがえる。そして臨地解説においては、観覧行動回数の割合よりも、観覧時間の割合のほうが、やや大きくなっていることから、1回あたりの観覧時間は比較的長くなっていることがうかがえる。

施設間で比べると、組頭の家（寒冷期）において、解説人員からの介入がある臨地解説を伴う観覧行動の割合も、観覧時間の割合も小さいことがわかった。一方で、組頭の家（温暖期）では、臨地解説を伴う観覧行動の割合も、観覧時間の割合も大きいことがわかった。

調査対象とした民家展示施設において、臨地解説を伴う観覧行動が発生しやすい施設として、

組頭の家（温暖期）>環境共生型住宅>組頭の家（寒冷期）

という順序があることがわかった。

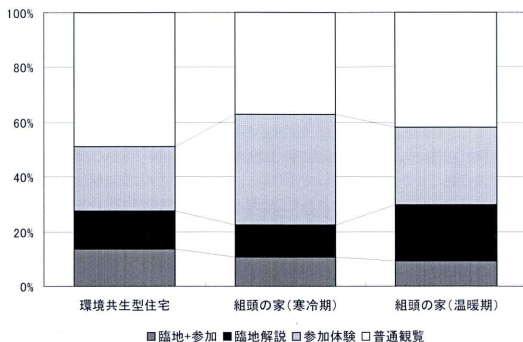


図 5-1 各民家展示施設における観覧回数の内訳

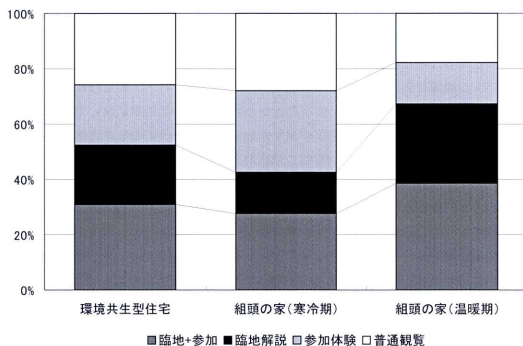


図 5-2 各民家展示施設における観覧時間の内訳

各施設間で明らかになった、臨地解説が発生する要因を明らかにするために、各展示施設において、臨地解説が発生した展示物をまず明らかにする。

2-2 環境共生型住宅における臨地解説が発生する展示物の特徴

各民家展示施設における観覧行動が発生した展示物の特徴の中でも、臨地解説が発生する展示物の特徴を明らかにする。なお、環境共生型住宅の展示物は、図5-3と表5-1の通りである。

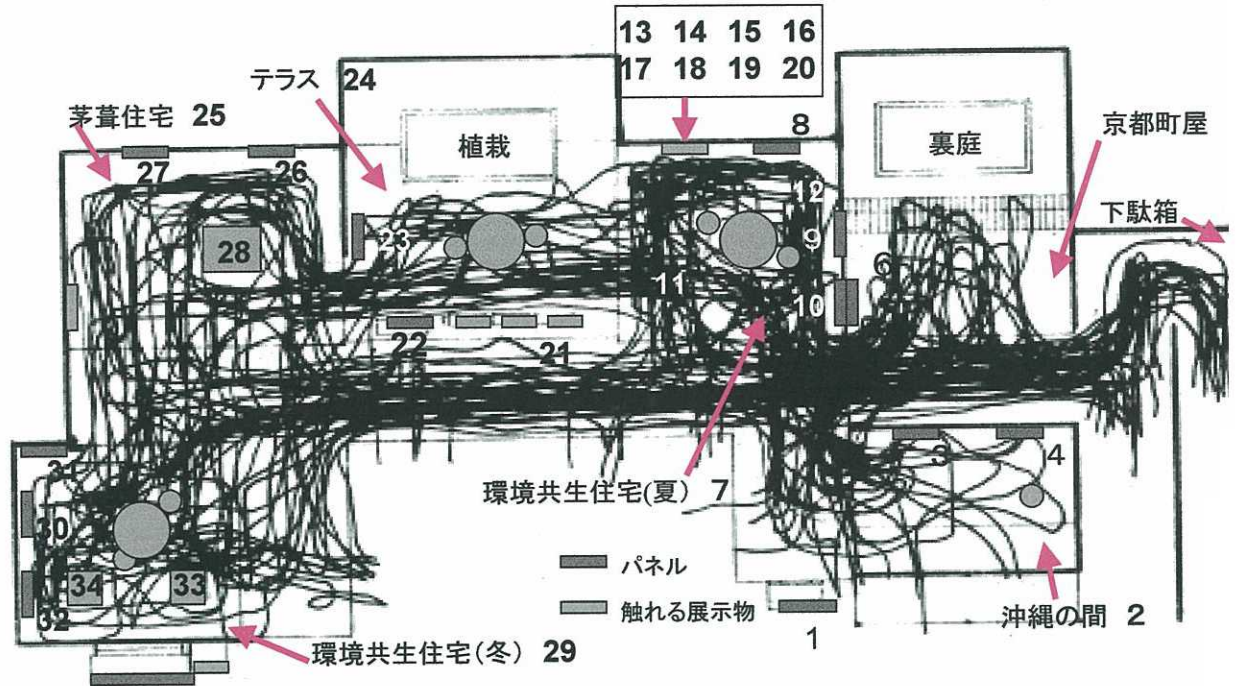


図5-3 環境共生型住宅展示物配置図(動線は12月15日 N=39、図中の数字は、表1の番号に相当する)

表5-1 環境共生型住宅展示物一覧 (■はパネル展示を示す)

番号	展示名	展示形態	特徴
1	展示のあらまし	パネル	全体のガイドライン
2	沖縄の間	現物	伝統的な沖縄の家屋の一部を再現。通気性などに関する展示
3	強風と日差しを和らげる	パネル	沖縄地方の気候の特徴とそれに適した家づくりの重要性の説明
4	住まい温暖省エネルギー	パネル	熱循環を良くすることで、省エネルギーにつながる説明
5	京都町屋	現物	坪庭を資源氏、微気圧差による空気の対流が起こることを説明
6	涼風をめぐるせる	パネル	熱対流に関する説明
7	環境共生型住宅一夏	現物	屋根緑化、簾、廃熱窓を施し、熱を軽減する工夫を展示
8	夏を快適に住まう	パネル	コンクリート蓄熱を防ぎ、日射を遮蔽することで熱軽減に関する説明
9	エコプロダクツを使う1	パネル	LCAより、環境負担を軽減するための建築資材の重要性を説明
10	エコプロダクツを使う2	パネル	夏間で展示されている床材、壁材、シックハウスに関する説明

第5章 解説人員の介入による観覧行動の特性

11	エコプロダクツ床材	現物	エコマテリアルの床材を展示
12	エコプロダクツ壁材	現物	光触媒タイル、エコマテリアルの壁紙を展示
13	断熱サッシ	現物	開口部から遮熱する建材を展示
14	断熱サッシ	パネル	断熱サッシの仕組の説明
15	発熱ガラス	現物	発熱ガラスを展示
16	発熱ガラス	パネル	発熱ガラスの仕組の説明
17	プリズムガラス	現物	プリズムガラスを展示
18	プリズムガラス	パネル	プリズムガラスの仕組の説明
19	ハニカムガラス	現物	ハニカムガラスを展示
20	ハニカムガラス	パネル	ハニカムガラスの仕組の説明
21	パシブクーリングウォール	現物	気化熱で涼風を生み出すパシブクーリングウォールを展示
22	パシブクーリングウォール	パネル	パシブクーリングウォールの仕組の説明
23	建築廃材のリサイクル	パネル	建築廃材のリサイクル、リユースのための取り組みの説明
24	Mウッド2	現物	建築廃材のリサイクル例として展示
25	茅葺住宅	現物	ススキ、アシで葺いた屋根、土壁や囲炉裏など茅葺住宅を展示
26	茅葺民家夏涼しさの秘密	パネル	茅葺住宅の遮熱効果など説明
27	エコロジカル文化に学ぶ	パネル	建築資材が循環生産できる社会システムに関する説明
28	囲炉裏	現物	囲炉裏を展示
29	環境共生型住宅一冬	現物	パッシブソーラーシステムなど太陽光を活かした工夫を展示
30	冬を快適に住まう	パネル	太陽光エネルギーを取り入れることで環境への負担軽減の説明
31	エネルギーを自給する	パネル	太陽光エネルギーなど、エネルギー時給に関する説明
32	パッシブソーラの暖房仕組	パネル	パッシブソーラーによる蓄熱の説明
33	ペットボトル蓄熱層	現物	蓄熱の例として、ペットボトル蓄熱を展示
34	碎石蓄熱層	現物	蓄熱の例として、碎石蓄熱を展示

図5-3より、原寸大の民家として、沖縄の間、京都町屋、環境共生型住宅一夏、茅葺住宅、環境共生型住宅一冬、合計5棟がある。また、表5-1より、各棟の中には、パネルによる解説、建材などを触れる展示が配置している。そして開館時間中、ほぼ解説人員が環境共生型住宅内で待機し、適宜観覧者と解説・交流をおこなう環境が整備されている^{注1)}。

ここでは各棟と廊下、テラス空間で発生した観覧者の観覧行動の内訳を図5-4にまとめた。

図5-4より、普通観覧が発生した展示場は、冬間が最も多く、茅葺や夏間、町屋でも比較的多く発生していることがわかった。参加体験が発生した展示場は、冬間が多く、夏間もやや多いことがわかった。

臨地解説が発生した展示場は夏間が多く、茅葺、テラスもやや多く発生していることがわかった。また、臨地解説+参加体験が発生した展示場は、夏間が多く、テラスもやや多

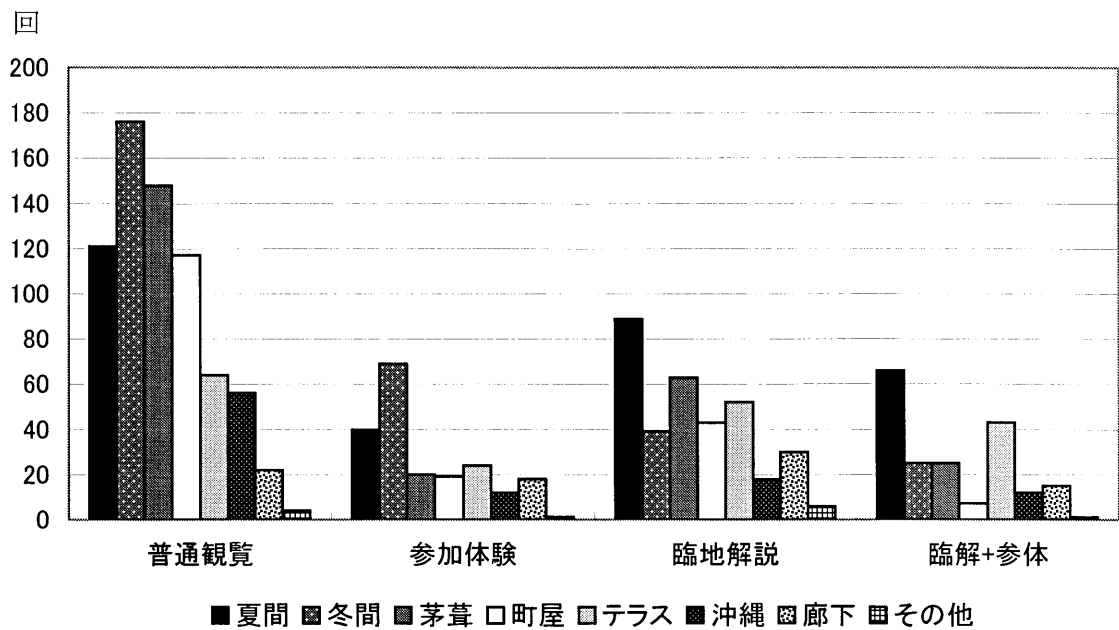


図 5-4 環境共生型住宅観覧行動分類別観覧行動発生場所

く発生していることがわかった。

これらから、まず臨地解説が発生する観覧場所は、夏間にその傾向があることがわかった。夏間の様子を写真 5-1 に示すが、写真 5-1 左側にある窓の一つは、発熱ガラスになっており、開館時間中は常に発熱している。また床材には、サイザル麻で編まれたものや、コルク材を用いたエコマテリアルでできており、パネルで書かれている説明と現物を、足の裏の感触などを用いながら観覧することができる展示物となっている。よって観覧者は、足の裏の感触を感じたり、発熱ガラスを触ったりといった行動が比較的多く発生することから、その様子を解説人員がはっきりと認知できると考えられる。したがって観覧者が展示物を通して感じたことを解説人員が解説するのに違和感のない環境が整備されていると考えられるので、臨地解説が加わりやすい環境になっているものと考えられる。つまり、観覧者の観覧行動の中で、参加体験が発生すること、そして参加体験によって、観覧者の反応が行動にあらわれること、そしてその行動が解説人員に見えることによって、臨地解説が発生しやすくなる傾向があるのではないかと考えられる。また、解説人員からの解説・交流が発生すると、関連した展示物に解説内容が広がっていき、夏間の隣にあるテラスや茅葺における臨地解説の観覧行動の発生が大きくなるものと考えられる結果となった。

また、テラス(写真 5-2)では、臨地解説+参加体験の観覧行動の発生が比較的多くあることがわかった。夏間という空間に内在する情報に関係する情報と同じような情報が、テラスという空間で展示され、またテラスから夏間を見上げることで理解できる展示物もあることから、夏間で発生した臨地解説の内容が、そのままテラスにおいて継続できる環境になっているものと考えられる。

夏間で用いる
建材の説明

発熱ガラス

エコマテリアル
でできた床材



写真 5-1 環境共生型住宅・夏間の様子



屋根緑化・発熱窓・簾

パッシブクーリングウォール
(多孔質セラムックスで
できている。水をかけ、風を送
ることで気化熱により空気を冷
却するので、状況に応じて解
説人員が散水・ウチワで風を
送る)

写真 5-2 環境共生型住宅・テラスの様子

2-3 江戸東京たてももの園・八王子千人同心組頭の家（寒冷期）における臨地解説が発生する展示物の特徴

江戸東京たてももの園・八王子千人同心組頭の家では、解説人員がカマドの火入れをおこなっている。また、土間には、八王子千人同心に関する情報^{注2)}を、6枚のパネルにまとめて展示している（写真5-3および図5-5）。



写真5-3 組頭の家・カマドから土間の様子

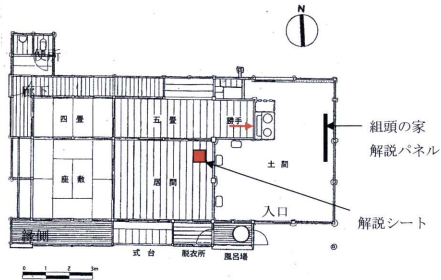


図5-5 写真5-3の撮影位置および解説シートの配置図（勝手の矢印が撮影方向）

写真 5-3 および図 5-5 より、解説人員は土間に突き出たカマドに在駐していること、そしてカマドの先には、パネルがある環境であることがわかる。

寒冷期における、各展示場における観覧者の観覧行動の内訳を、図 5-6 にまとめた。

図 5-6 より、普通観覧が発生した展示場は、土間とパネルが圧倒的に多いことがわかった。参加体験が発生した展示場は、土間と外周で圧倒的に発生していることがわかった。

臨地解説が発生した展示場は、土間での発生が大きく、臨地解説+参加体験においても、土間での発生が大きいことがわかった。

これらから、臨地解説が発生する観覧場所は、土間に多いことがわかった。しかしながら、普通観覧、参加体験においても、土間で観覧行動が多く発生していることから、臨地解説ならではの、特徴ということではできない。一方で、臨地解説+参加体験が発生する観覧場所は、土間が多いものの、入口での発生が、他の観覧行動と比べて多いことがわかった。これらの要因として、写真 5-3 などから、解説人員は、カマドの火を管理する都合上、カマドの前から移動して解説することは難しいことから、どうしても解説できる場所が限られてしまうことが考えられる。また、入口で発生した観覧行動の場合、臨地解説+参加体験よりも、参加体験のほうが少ないことから、観覧者が入口あたりを観覧中、参加体験によって、観覧者の反応が行動にあらわれること、そしてその行動が解説人員に見えることによって、臨地解説が発生しやすくなる傾向があるのではないかと考えられる。しかしながら、解説人員からの解説・交流が発生しても、解説人員はカマドから離れることができないために、臨地解説が発生する観覧行動は土間を中心とした空間に限定されるのではないかと考えられる。

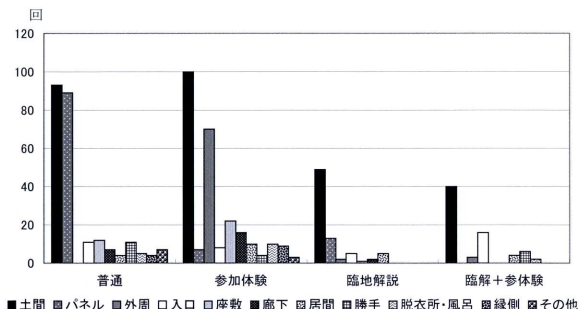


図 5-6 組頭の家（寒冷期）観覧行動分類別観覧行動発生場所

2・4 江戸東京たてもの園・八王子千人同心組頭の家（温暖期）における臨地解説が発生する展示物の特徴

温暖期において、調査期間のなかで、座敷でお手玉をおこないながら、昔の遊びなどを解説実演する日が1日あった^{註9)}。その様子を、写真5・4に示す。

写真5・4のように、縁側に看板と、お手玉を展示してあった。



写真5・4 座敷でのお手玉実演の様子

温暖期における、各展示場における観覧者の観覧行動の内訳を、図5・7にまとめた。

図5・7より、普通観覧が発生した展示場は、土間、パネルでかなり多く発生していることがわかった。参加体験が発生した展示場は、土間、外周で多く発生していることがわかった。

臨地解説が発生した展示場は、土間でかなり多く発生していることがわかった。また、土間ほどではないが、居間でも比較的多く発生していることがわかったが、お手玉実演が行なわれていた座敷では、それほど多く発生していないことがわかった。また臨地解説＋参加体験が発生した展示場は、土間や座敷で、居間や外周、縁側でも観覧行動が比較的多く発生していることがわかった。

これらから、臨地解説が発生する観覧場所は、土間に多いことがわかったが、居間や座敷でも、一定回数以上臨地解説が発生していることがわかった。この要因として、座敷での解説人員によるお手玉実演の影響があるものと考えられる。そこで、お手玉の実演の有

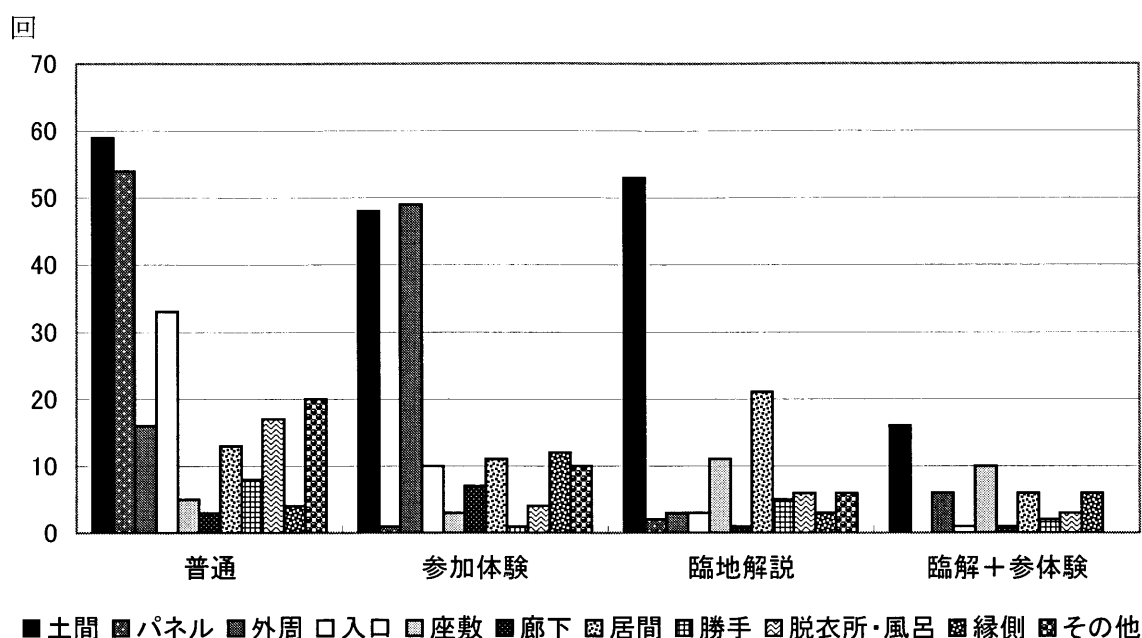


図 5-7 組頭の家（温暖期）観覧行動分類別観覧行動発生場所

無による、観覧行動分類別観覧行動発生場所を明らかにすることで、座敷での実演の有無と、臨地解説の発生場所の違いを明らかにする。

図 5-8 は、座敷でのお手玉実演が無い 20 日の、図 5-9 は、座敷でのお手玉実演がある 21 日の観覧行動分類別観覧行動発生場所を示している。

図 5-8 より、お手玉実演が座敷で無い場合、土間、居間、座敷において、臨地解説や臨地解説+参加体験の観覧行動が比較的多く発生していることがわかる。一方、図 5-9 より、お手玉実演が座敷である場合、臨地解説は土間では多く発生しているものの、座敷や居間において、発生は少ない。一方で臨地解説+参加体験では、土間、座敷、縁側や外周において比較的多く発生しているものの、居間では全く発生していないことがわかる。

図 5-8 と図 5-9 を比べると、普通観覧の場合、20 日より 21 日の方が、土間や室内パネルにて、多くの観覧行動が発生していることがわかった。参加体験の場合、土間の観覧が 20 日より 21 日の方が減少していることと、外周での観覧が 20 日より 21 日の方が増加している以外、主だった違いはない。

臨地解説では、座敷での実演がある場合、無い場合と比べて、居間、座敷での観覧行動の出現がかなり減少し、増加しているのはほとんどないことがわかる。臨地解説+参加体験では、座敷での実演がある場合、無い場合と比べて、土間、外周、座敷、縁側での観覧行動の出現が、少し増加するものの、居間での観覧行動はなくなっていることがわかった。

これらから、座敷での実演の有無による臨地解説および臨地解説+参加体験が発生した観覧場所は、臨地解説の場合、実演があることで、座敷や居間といった、室内における観覧行動の発生を減少させることがわかった。一方、臨地解説+参加体験の場合、実演があ

ることで、わずかに座敷での観覧行動の発生が増えるが、居間での観覧行動は減少していることがわかった。民家という三次元空間の中でおこなわれていた、昔の遊びなどを実演として実施する際、実演に参加できる観覧者が少ないために、結局多くの観覧者はその様子を見るだけになってしまい、実演を眺めている観覧者に解説人員からの介入が無いことが考えられる。結果的に、調査期間中の実演は、民家の持つ情報を効果的に伝えると考えられる、解説人員からの介入による観覧行動を抑圧してしまうと考えられる結果となった。

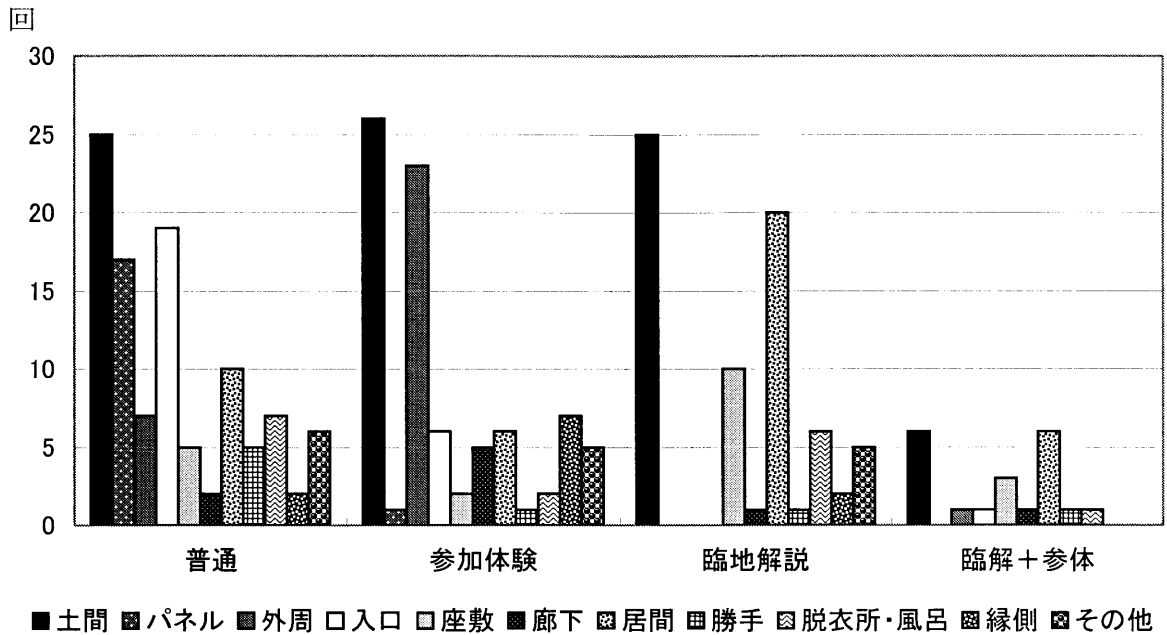


図 5-8 お手玉実演が無い 20 日における観覧行動分類別観覧行動発生場所

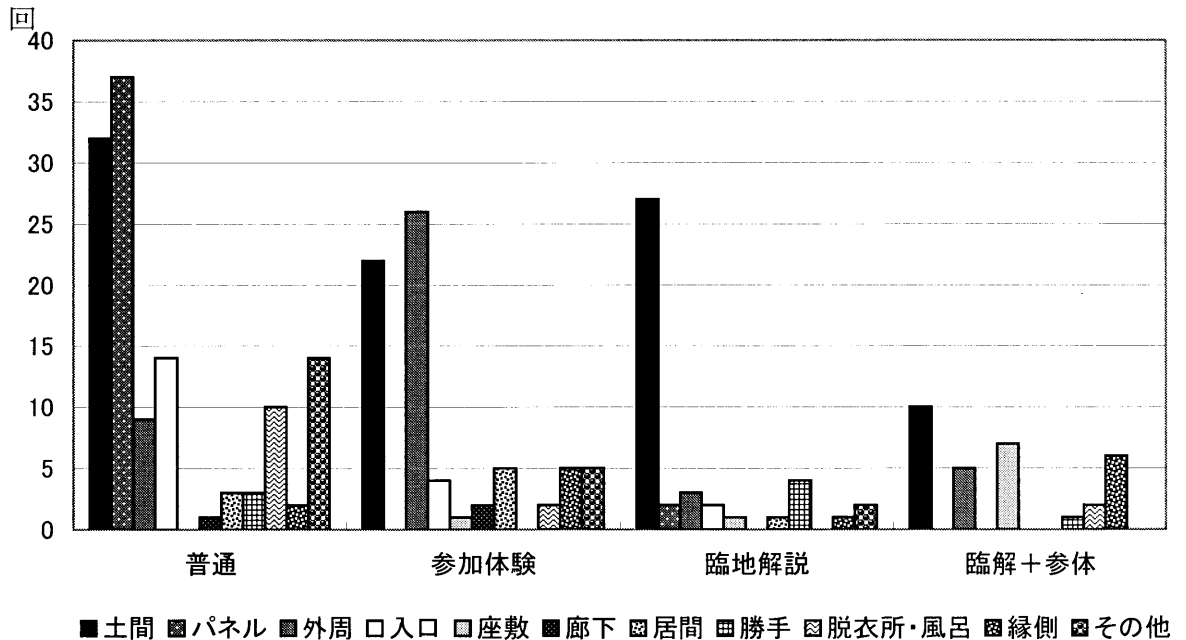


図 5-9 お手玉実演がある 21 日における観覧行動分類別観覧行動発生場所

3 各民家展示施設における視察時間の実態

3-1 環境共生型住宅における臨地解説による視察時間の実態

各民家展示施設における視察行動に費やした時間の中でも、臨地解説に相当する視察行動が発生した時間を明らかにする。

まず環境共生型住宅における、臨地解説に相当する視察行動が発生した時間を、展示場ごとに分類したものを、図5-10に示す。

図5-10により、普通視察の場合、夏間、冬間、茅葺に比較的時間を費やして視察する一方、廊下においてはほとんど視察時間が発生していないことがわかった。また、テラス、廊下で視察に費やす時間は短い。参加体験の場合、夏間、冬間で比較的時間を費やして視察し、町屋でも、視察時間はやや長い。町屋の場合、極端に視察時間が短いものはないことがわかった。

臨地解説の場合、冬間での視察時間が飛びぬけて長く、それ以外は1000~2000秒くらいの時間を費やして視察している場所が多いことがわかった。また、臨地解説+参加体験の場合、夏間での視察が飛びぬけて長く、テラスにおいてもかなり長い時間を費やして視察していることがわかった。また、冬間、茅葺、廊下においても、2000秒前後の視察時間を費やして視察している一方、町屋や沖縄の間においては、かなり短い視察時間であることがわかった。

これらから、臨地解説に相当する視察行動が持続する展示物は冬間であり、臨地解説+参加体験に相当する視察行動が持続する展示物は夏間であるということがわかった。冬間の展示物は、写真5-5のように、視察者は視覚によって、床下にペットボトルや碎石による

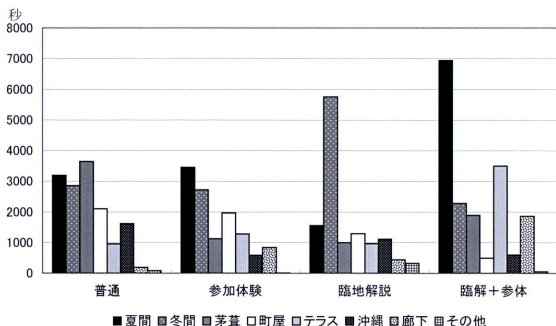


図5-10 環境共生型住宅視察行動分類別視察時間発生場所



蓄熱層が確認できる。解説人員は、観覧者がこれらの部分を観覧していることは、その様子で確認することができるが、実際に五感を使って展示物の情報を感じることができない展示物なので、必然的に解説人員が口頭で解説するよりほかない展示物となっていると考えられる。一方、発熱ガラスやエコマテリアルのように、五感を使って展示物の情報を感じることができる夏間では、本章の2-2でも指摘したように、解説人員からの解説が発生しやすい環境となっているものと考えられる。また、臨地解説+参加体験では、テラスでの観覧時間が長いことも、本章の2-2で指摘したことを裏付ける結果であろう。

3-2 江戸東京たてもの園・八王子千人同心組頭の家（寒冷期）における臨地解説による観覧時間の実態

江戸東京たてもの園・八王子千人同心組頭の家（寒冷期）における臨地解説に相当する観覧行動が発生した時間を、展示場ごとに分類したものを、図5-11に示す。

図5-11より、普通観覧の場合、室内パネルで観覧する時間が飛びぬけて長く、土間も比較的時間を費やして観覧していることがわかった。一方、それ以外では、観覧時間が非常に短いことがわかった。参加体験の場合、土間や外周で観覧する時間が長く、入口、廊下、

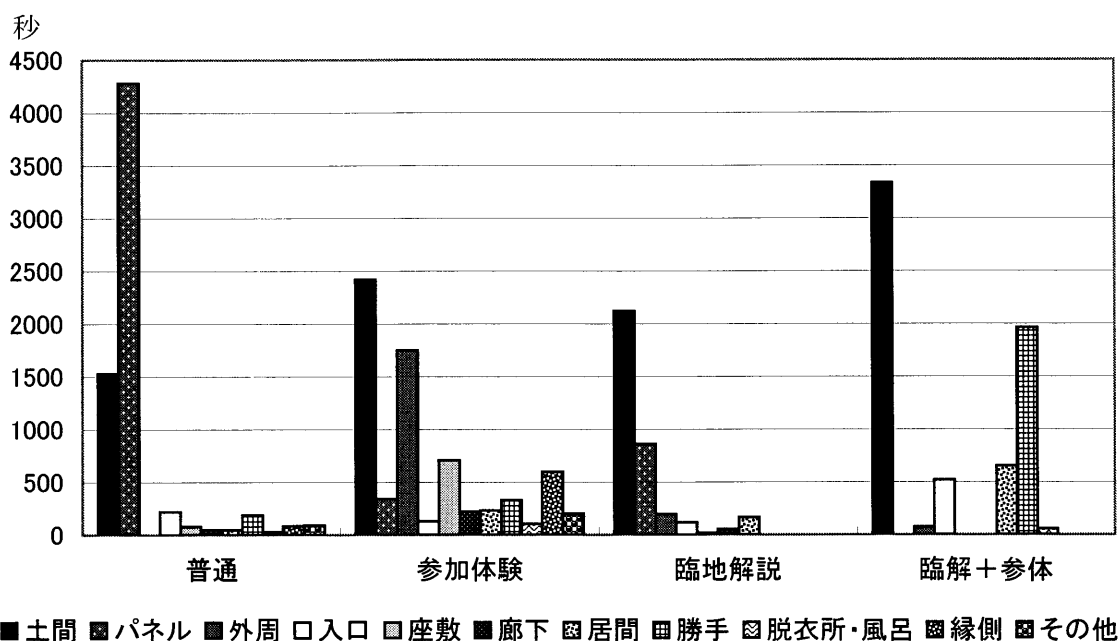


図 5-11 組頭の家（寒冷期）観覧行動分類別観覧時間発生場所

居間、脱衣所での観覧時間はほとんど無いことがわかった。

臨地解説の場合、土間での観覧時間が長く、室内パネルもやや長い、それ以外の場所での観覧時間はかなり短いことがわかった。また、臨地解説+参加体験の場合、土間での観覧時間がかなり長く、勝手での観覧時間も長い、一方で、室内パネル、座敷、廊下での観覧行動は全く無いことがわかった。

これらから、臨地解説に相当する観覧行動が持続する展示物は土間であり、臨地解説+参加体験に相当する観覧行動が持続する展示物は、土間と勝手であるということがわかった。これらの要因として、調査期間中は寒冷期ということで気温が比較的良かったこと、そして生活環境を再現するために、カマドへの火入れが解説人員によりされていたことから、カマドで暖を取るという観覧行動が多かったものと考えられる。また、臨地解説+参加体験で、勝手での観覧時間が長いのは、解説人員がカマドに火をくべる様子や、薪をより燃焼させるため、解説人員が火吹き竹で空気をカマドに吹き込む様子を観覧者が眺めているときに、解説人員からのカマドに関する解説や、昔の炊事に関する解説が始まるだけでなく、観覧者が実際にカマドに火をくべたり、火吹き竹で空気を吹き込んだりする行動につながっていった^{注4)}。一方で、室内に上がって発生した観覧時間は、居間ではあるものの、カマドの火から遠いので気温が低く、また解説人員がいない脱衣所・風呂や座敷、廊下などでは、0もしくはほとんど発生しないことから、カマドの火によって暖かい空間の範囲と、カマドに火入れをする解説人員の活動範囲によって、臨地解説を伴う観覧行動時間は、カマドの周辺で長く持続すると考えられる。

3-3 江戸東京たてもの園・八王子千人同心組頭の家（温暖期）における臨地解説による観覧行動の実態

江戸東京たてもの園・八王子千人同心組頭の家（温暖期）における臨地解説に相当する観覧行動が発生した時間を、展示場ごとに分類したものを、図5-12に示す。

図5-12より、普通観覧の場合、室内パネルで観覧する時間がやや長く、土間や入口でも時間を費やして観覧していることがわかった。参加体験の場合、全体的に観覧時間は低調ではあるが、縁側で多くの観覧時間が費やされていることがわかった。

臨地解説の場合、土間での観覧時間がかなり長時間に及んでいることと、居間での観覧時間が長いことがわかった。一方で、室内パネルや入口、廊下での観覧時間は極めて低調であることがわかった。また、臨地解説+参加体験の場合、座敷での観覧時間が飛びぬけて長くなっていることがわかった。また、縁側での観覧時間も、比較的長く費やされていることがわかった。

これらから、臨地解説に相当する観覧行動が持続する展示物は土間であり、臨地解説+参加体験に相当する観覧行動が持続する展示物は、座敷と縁側であるということがわかった。これらの要因として、臨地解説において土間において観覧時間が長くなるのは、カマド付近に在駐する解説人員からいることによるものと考えられる。また調査期間中のうち、1日は、座敷でお手玉実演が開催されていたことから、実演に参加した観覧者が、臨地解説+参加体験の観覧時間を押し上げていると考えられるし、また縁側のように、外から靴を脱がなくても、座敷でおこなわれる実演に参加できる環境がそろっていると考えられる。

そこで、お手玉の実演の有無による、観覧行動分類別観覧時間発生時間を明らかにすることで、実演の有無と、臨地解説による観覧行動の発生時間の違いを明らかにする。

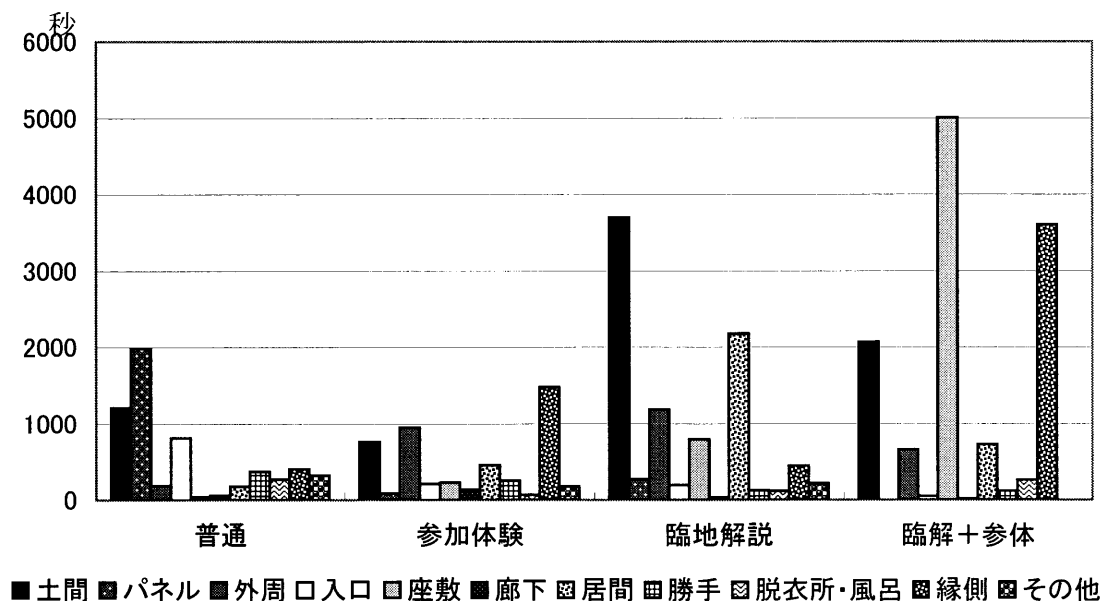


図5-12 組頭の家（温暖期）観覧行動分類別観覧時間発生展示場所

図 5-13 は座敷でのお手玉実演の無い 20 日の、図 5-14 は、座敷でのお手玉実演がある 21 日の観覧行動分類別観覧時間発生場所を示している。

図 5-13 より、実演の無い場合、居間、土間、座敷において臨地解説や、臨地解説+参加体験による観覧時間が長くなるのがわかる。一方、図 5-14 より、実演がある場合、臨地解説は土間、外周で観覧時間が発生しているが、臨地解説+参加体験では、縁側と座敷において、観覧時間が飛びぬけて発生していることがわかる。図 5-13 と図 5-14 を比べると、

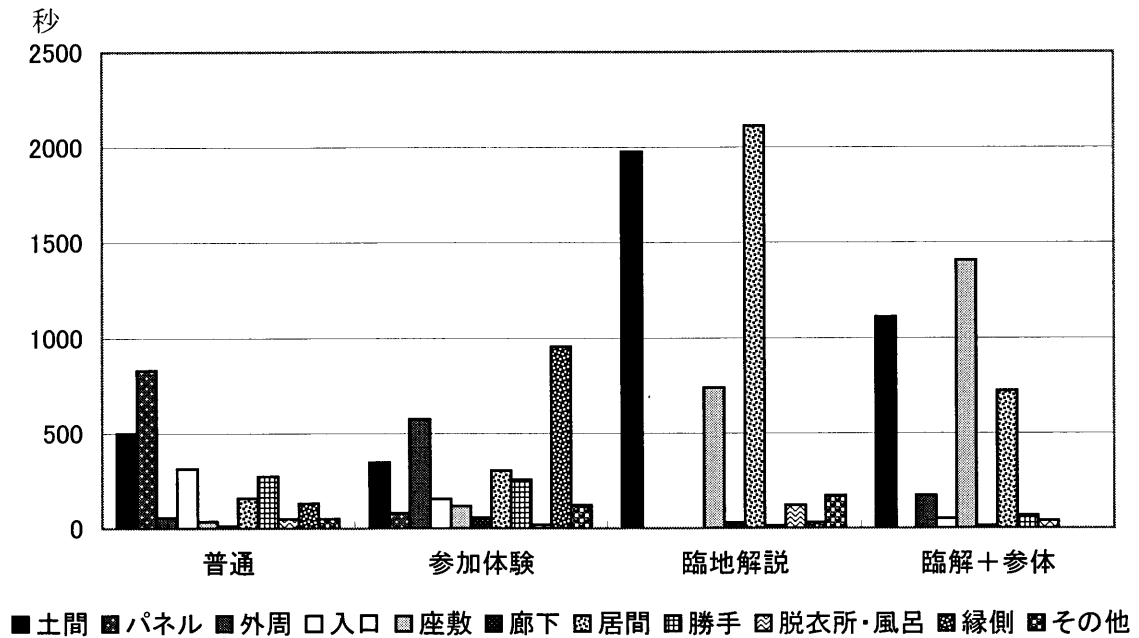


図 5-13 お手玉実演が無い 20 日における観覧行動分類別観覧時間発生場所

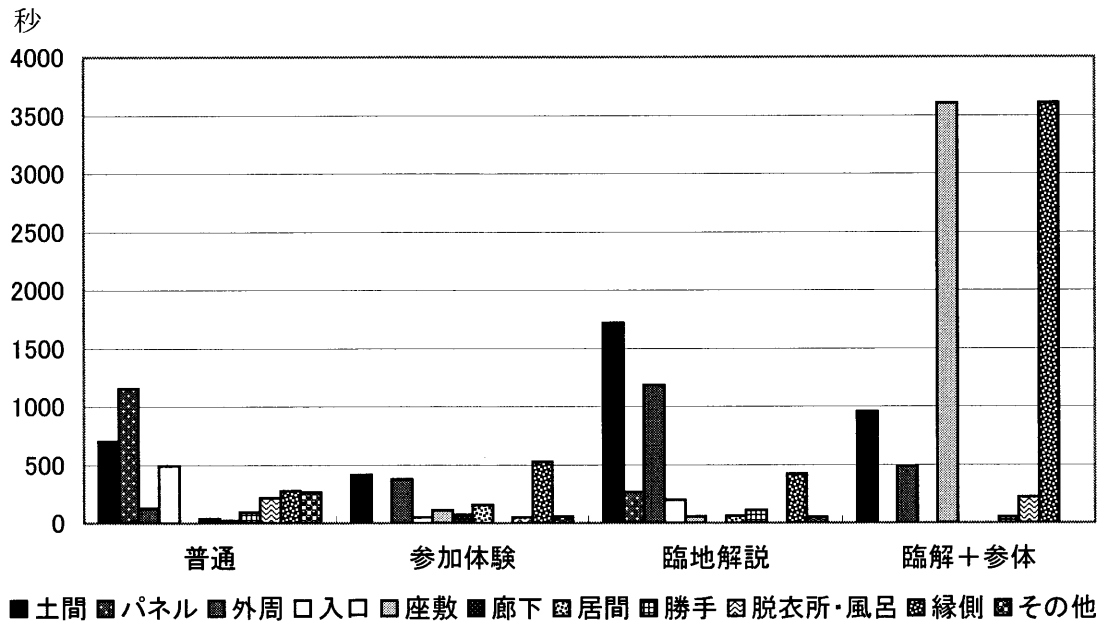


図 5-14 お手玉実演がある 21 日における観覧行動分類別観覧時間発生場所

普通観覧および参加体験の場合、座敷での実演が無い20日の方が多く発生しているが、発生場所の傾向はほぼ似た傾向があることがわかる。

臨地解説では、座敷での実演が無い20日において、土間、居間で、長い時間費やして観覧していることがわかるが、座敷での実演がある21日において、居間での観覧時間が大幅に減少し、土間での観覧時間も減少していることがわかった。一方で、20日では観覧時間がない外周や、ほとんどない縁側は、21日になると、比較的観覧時間が長くなる傾向があることがわかる。また、臨地解説＋参加体験では、20日において、土間、座敷、居間で、長い時間費やして観覧していることがわかるが、21日になると、土間や居間での観覧時間は大幅に減少し、座敷と縁側での観覧時間が大幅に増加することがわかる。

これらのことから、座敷での実演の有無による臨地解説および臨地解説＋参加体験という観覧行動が長時間持続した観覧場所は、実演があることで、居間や座敷といった、室内での観覧時間が減少し、屋外からの観覧時間が増加することがわかった。一方、臨地解説＋参加体験の場合、実演があることで、座敷での観覧時間が増加し、縁側からの観覧時間も非常に増加していることがわかった。特に特徴的なのは、縁側からの観覧時間の増大である。縁側という場所を考えると、屋外にいる観覧者から、座敷での実演の様子が良く見える位置にあり、また縁側であるが故に、靴などを脱がずに、縁側に腰掛けて実演の様子を眺めたり、実演に参加したりすることが可能であることから、観覧者にとって、実演に参加しやすい環境が整っていたものと考えられる。結果的に、お手玉実演を通して、当時の生活や遊びを、解説人員から聞くことができるといえよう。

4 各民家展示施設における観覧行動1回あたりの観覧時間の実態

4-1 環境共生型住宅における観覧行動1回あたりの観覧時間の実態

前項および前々項において、観覧行動分類別の、観覧時間発生場所と観覧行動発生場所を分析した。本項では、観覧行動1回あたりの観覧時間と観覧行動発生場所を明らかにし、解説人員が介入することで、観覧時間の長さの変化が、展示場によりどれだけ差があるのか、そしてその差の要因を明らかにしていきたい。そのためには、観覧行動分類別観覧時間発生場所を、観覧行動分類別観覧行動発生場所で割ることで、観覧行動1回あたりの観覧時間がわかる。

まず環境共生型住宅における観覧行動1回あたりの観覧時間の実態を、図5-15に示す。

図5-15より、普通観覧では、1回あたりの観覧時間は、どの場所でも20秒前後しかなく、極めて低調であることがわかる。また、参加体験では、町屋や夏間において、1回あたりの観覧時間が長く、冬間、茅葺、テラス、沖縄の間、廊下において、観覧時間は40～60秒くらい発生していることがわかる。

臨地解説では、冬間において、1回あたりの観覧時間は極めて長く、沖縄の間においても、比較的長い時間観覧が発生していることがわかった。また、臨地解説+参加体験では、廊下において、1回あたりの観覧時間が長く、夏間、冬間、茅葺などでも比較的長く観覧時間に費やしていることがわかる。また、臨地解説+参加体験に相当する観覧行動に費やした観覧時間は、全体的にどの展示場でも長く発生していることがわかる。

これらから、室内で民家を展示している施設において、1回あたりの観覧時間から、臨

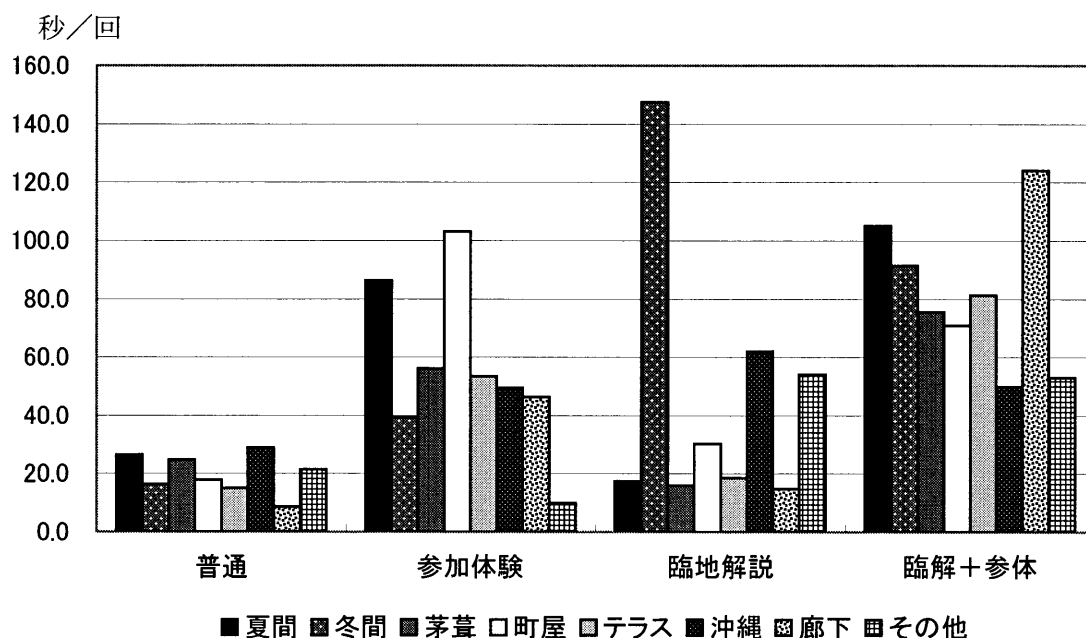


図5-15 環境共生型住宅における観覧行動分類別1回あたりの観覧行動発生時間

地解説において、冬間で顕著に長いことがわかる。また、臨地解説＋参加体験において、廊下、夏間において、観覧時間が長いことがわかる。しかしながら、臨地解説において、夏間、茅葺、テラスでは、普通観覧と比べて、1回あたりの観覧時間は同じくらいであることから、解説人員の介入があっても、観覧者の観覧時間が長くはならない展示物があることがわかる。さらに、臨地解説＋参加体験では、普通観覧と比べて、1回あたりの観覧時間はすべて長くなっているものの、臨地解説と比べて、冬間と沖縄の間以外、1回あたりの観覧時間は長くなっていることから、臨地解説時に、観覧者が実際に視覚以外の感覚器官で、解説人員の解説内容を感じることができる、参加体験が伴う展示場で、1回あたりの観覧時間が長くなるのではと考えられる結果となった。

また、図5-4と図5-15を比較すると、図5-4より、臨地解説における冬間での観覧行動発生回数は、比較的低調であるが、普通観覧における冬間での観覧行動発生回数は多い。しかしながら図5-15より、冬間での1回あたりの観覧時間は、臨地解説において長く、普通観覧においてかなり短くなることから、解説人員によって、その空間に内在する情報が提供されない限り、観覧者はその情報に気づかずに移動してしまうと考えられる。同様に、図5-4より、臨地解説＋参加体験における廊下での観覧行動発生回数は、比較的低調であり、普通観覧でもやはり低調である。さらに参加体験でも、廊下での観覧行動発生回数は普通観覧と同じくらい少ない。しかしながら図5-15より、廊下での1回あたりの観覧時間は、臨地解説＋参加体験において長く、普通観覧においてはかなり短くなることからわかる。また、参加体験では、比較的観覧時間は長い、臨地解説のみでは短いことがわかる。つまり、廊下から見える展示物の中にある、特徴的な情報に観覧者は気づき、その際に臨地解説が伴うことができれば、長時間にわたる観覧行動が持続するものと考えられる。ちなみに、廊下では、写真5-2に示す屋根緑化や、パッシブクーリングウォール、写真5-5に示すOMソーラー、そして写真5-6に示す、茅葺住宅の茅葺屋根の様子が見渡せる環境となっている。また、パネルなどに書かれてある情報も、日射による熱環境が室内環境に与える影響を中心としたものであり、夏間における屋根緑化による冷却、パッシブクーリングウォールによる気化熱による冷却、茅葺による断熱効果、そして冬間におけるOMソーラーによる暖房というように、関連している。観覧者が屋根を見上げる、またはパッシブクーリングウォールによる冷却効果を手で感じるといった参加体験に相当する観覧行動が発生した場合、解説人員からの解説を受けることで、他の展示物と関連させて解説することができることから、臨地解説＋参加体験における、1回あたりの観覧時間は廊下で長くなるものと考えられる。

室内という、環境が制御された空間に展示されている民家展示において、熱環境に関する展示物には、解説人員からの解説が多く発生するという特徴があった。この点、野外に展示されている民家展示と比べることで、より特徴が浮き彫りになるものと思われる。



写真 5-6 環境共生型住宅・茅葺住宅の様子

4-2 江戸東京たてもの園・八王子千人同心組頭の家（寒冷期）における視覚行動 1 回あたりの視覚時間の実態

江戸東京たてもの園・八王子千人同心組頭の家（寒冷期）における視覚行動 1 回あたりの視覚時間の実態を、図 5-16 に示す。

図 5-16 より、普通観覧では、1 回あたりの視覚時間は、パネルを除くと極めて短いことがわかる。また参加体験では、勝手や縁側での、1 回あたりの視覚時間は長くはなるものの、それ以外の場所では、大体普通観覧と同じであることがわかる。

臨地解説では、外周において、1 回あたりの視覚時間が長くなっているものの、全体的に低調である。そして臨地解説＋参加体験では、居間や勝手において、1 回あたりの視覚時間が非常に長いことがわかる。また、土間における視覚時間も、やや長い、それ以外では、視覚行動自体発生していない場所も多く、発生したとしても、かなり視覚時間は短いことがわかる。

これらより、寒冷期における野外民家展示施設において、1 回あたりの視覚時間から、臨地解説の場合、外周での視覚時間はやや長いものの、普通観覧、参加体験に相当する視覚時間と比べて、際立った特徴はないことがわかる。また、臨地解説＋参加体験の場合、勝手での視覚時間が顕著に長く、また居間でもかなり時間をかけて観覧していることがわかる。勝手における視覚行動の場合、参加体験でも比較的時間をかけて観覧していることから、観覧者は、勝手付近で解説人員がカマドの火入れをおこなっており、その様子を観

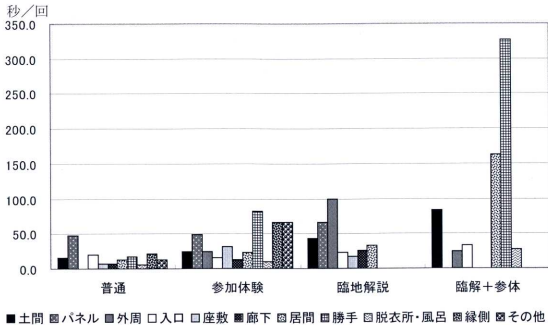


図 5-16 組頭の家 (寒冷期) における視覚行動分類別 1 回あたりの視覚行動発生時間

覧したり、勝手に暖を取ったりしていると考えられる。また、勝手に暖を取ったり、カマドの火入れの様子を観覧したりする観覧者との間に、臨地解説が発生することから、観覧時間が長くなるのではないかと考えられる結果となった。

また、図 5-6 と図 5-16 を比較すると、図 5-6 より、臨地解説における外周での観覧行動発生回数はかなり少ないことから、少数の観覧者が、時間をかけて観覧していることがわかるが^(注 5)、土間での観覧行動発生回数は多いため、観覧者の多くは、観覧行動は土間で発生するものの、観覧時間が持続しないことがわかる。また、図 5-6 より、勝手、居間での観覧行動発生回数はかなり少ないが、土間において多くの観覧行動が発生している。一方図 5-16 より、勝手や居間での 1 回あたりの観覧時間はかなり長く持続することから、少数の観覧者が、勝手や居間において、相当な時間をかけて観覧しているものの、土間では、観覧者の多くは、観覧時間が持続しないことがわかる。これらから、土間のように、靴を脱がずにカマドの火入れの様子や暖を取るといった観覧行動は、観覧行動の分類にかかわらず比較的多く発生する。よって、土間でカマドに関する観覧行動 (カマドの火で暖を取る、火入れの様子を眺めるなど) が発生した際に、解説人員からより積極的に、カマドに関する解説などが図られること、そしてカマドの火入れの様子がよりはっきりと見える居間や勝手に観覧者を上がらせた上で、解説や実際に火をくべる行動を観覧者にしてもらうことで、長時間の観覧行動につながるできると考えられる。したがって、寒冷期における屋外民家展示施設において、カマドなどの火入れに関する行動に特化した実演などを行なうこと、また火入れから、当時の生活環境や食生活などに関する解説などを行なうことが効果的であると考えられる結果となった。

4-3 江戸東京たてもの園・八王子千人同心組頭の家（温暖期）における観覧行動1回あたりの観覧時間の実態

江戸東京たてもの園・八王子千人同心組頭の家（温暖期）における観覧行動1回あたりの観覧時間の実態を、図5-17に示す。

図5-17より、普通観覧では、1回あたりの観覧時間は、全体的に極めて低調であるが、縁側での観覧時間が、やや長いことがわかる。また参加体験では、勝手での1回あたりの観覧時間は長くなり、室内パネル、座敷、縁側での観覧時間も、比較的長いが、それ以外は極めて低調であることがわかる。

臨地解説では、外周において、1回あたりの観覧時間が長く、室内パネル、縁側からの観覧時間も、比較的長いことがわかるが、それ以外は低調である。そして臨地解説+参加体験では、縁側と座敷において、1回あたりの観覧時間が非常に長くなるが、入口や廊下では、極めて低調であることがわかる。

これらより、温暖期における屋外民家展示施設において1回あたりの観覧時間から、臨地解説の場合、外周での1回あたりの観覧時間は、他の観覧行動と比べて顕著に長いことがわかる。また、臨地解説+参加体験において、縁側および座敷での1回あたりの観覧時間は、他の観覧行動と比べて顕著に長いことがわかる。縁側および座敷における観覧行動の場合、普通観覧、参加体験、臨地解説それぞれ、1回あたりの観覧期間はほぼ同じくらいであるが、臨地解説+参加体験になると、観覧時間が増加することがわかる。縁側や縁側では、参加体験だけでは、または臨地解説だけでは観覧時間はそれほど増加しないが、観覧者が参加体験しているところに臨地解説が加わる、または臨地解説しているところに

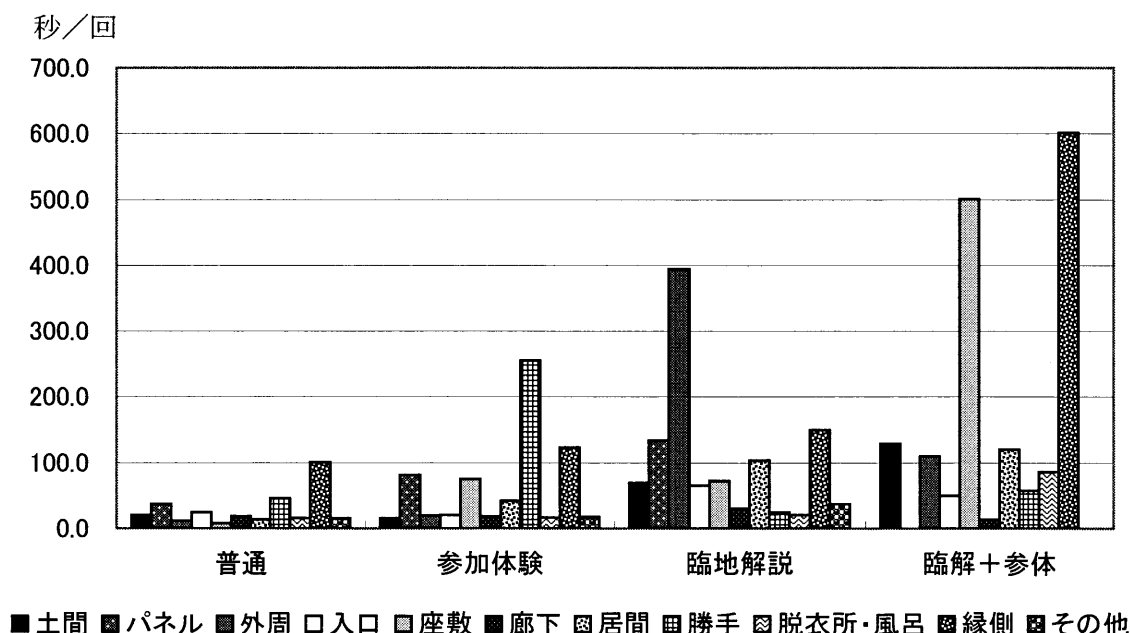


図5-17 組頭の家（温暖期）における観覧行動分類別1回あたりの観覧行動発生時間

参加体験が加わることで、観覧時間が増加したと考えられる。

また、図 5-7 と図 5-17 を比較すると、図 5-7 より、土間での観覧行動発生回数は、いずれの観覧行動分類においてもっとも多く発生しているものの、図 5-17 より、1 回あたりの観覧時間は、かなり短時間で終わっていることがわかる。また、図 5-7 より、参加体験における勝手の観覧行動発生回数は非常に少ないものの、図 5-17 より、1 回あたりの観覧時間はかなり長いことから、少数の観覧者が時間をかけて観覧していることがわかる。さらに、臨地解説における外周、臨地解説+参加体験における座敷や縁側でも同様のことがいえるだろう。また、調査期間中、座敷でお手玉の実演の有無も、観覧行動に大きな影響を与えていると考えられる。

そこで、お手玉の実演の有無による、1 回あたりの観覧時間を明らかにし、実演によって観覧行動の変化、特に解説人員が絡む臨地解説と臨地解説+参加体験の観覧行動の特徴を明らかにする。

図 5-18 は、座敷でのお手玉実演の無い 20 日の、図 5-19 は、座敷でのお手玉実演がある 21 日の 1 回あたりの観覧時間を示す。

図 5-18 より、実演がない場合、臨地解説による 1 回あたりの観覧時間は、全体的にかなり低調であることがわかる。しかし、臨地解説+参加体験による 1 回あたりの観覧時間は、座敷で長く持続していることがわかる。また、土間、外周でも、比較的時間をかけて観覧していることがわかる。一方、図 5-19 より、実演がある場合、臨地解説による 1 回あたりの観覧時間は、外周と縁側において、長く持続していることがわかる。また、臨地解説+参加体験における 1 回あたりの観覧時間は、縁側と座敷でかなり長い時間持続していることがわかる。

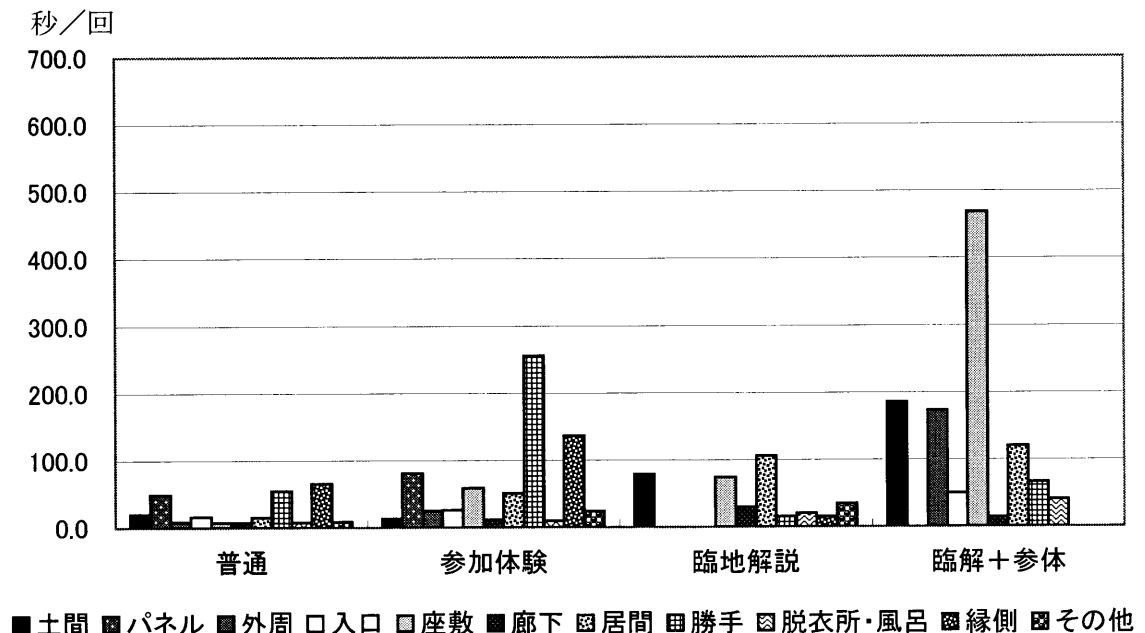


図 5-18 お手玉実演が無い 20 日における観覧行動分類別 1 回あたりの観覧行動発生時間

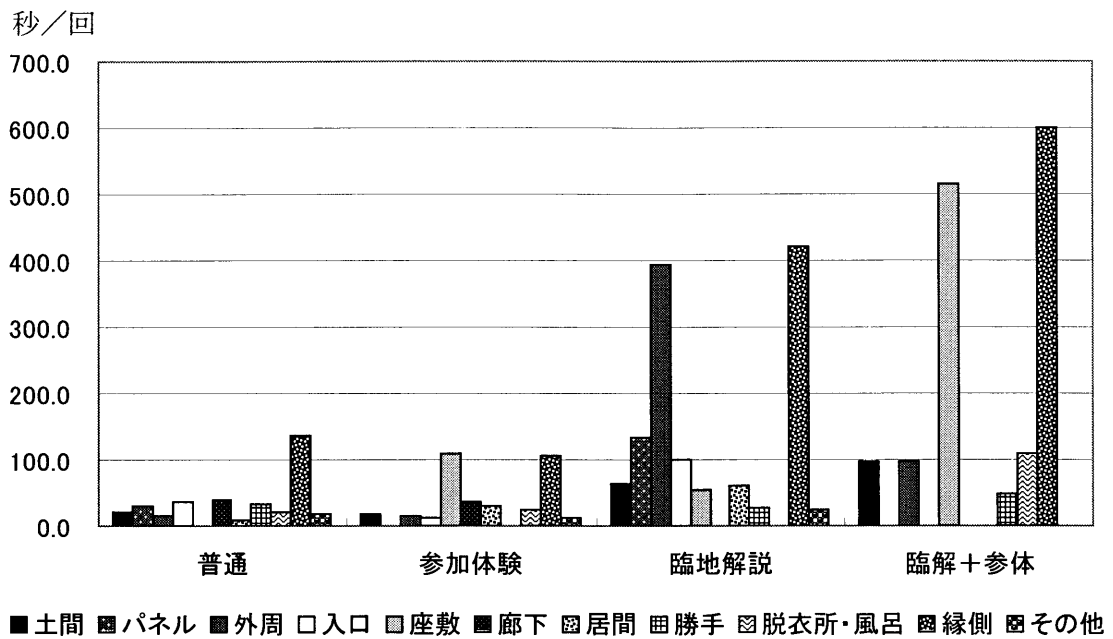


図 5-19 お手玉実演がある 21 日における観覧行動分類別 1 回あたりの観覧行動発生時間

また、図 5-8 と図 5-18 を比べると、図 5-8 より、実演の無い場合、臨地解説において、観覧行動が多く発生した展示場に土間と居間が、やや多く発生した展示場に居間や座敷がある。この展示場は、図 5-18 より、1 回あたりの観覧時間は比較的短いということから、比較的多くの観覧者に臨地解説による観覧行動が発生するものの、臨地解説による観覧行動は持続していないということがわかる。一方、臨地解説+参加体験において、図 5-8 より、土間や居間において、観覧行動は比較的多く発生している。これらの展示場は、図 5-18 より、土間では、1 回あたりの観覧時間は比較的長く持続してはいるものの、居間においては、1 回あたりの観覧時間は短くなっている。逆に、図 5-18 において、1 回あたりの観覧時間がかかなり長い座敷の場合、図 5-8 より観覧回数の発生はやや少ないことから、比較的少数の観覧者が、座敷を観覧する場合、時間をかけていることがわかる。

同様に、図 5-9 と図 5-19 を比べると、図 5-9 より、実演がある場合、臨地解説において、観覧行動が多く発生した展示場は土間であり、土間以外は低調である。しかしながら、図 5-19 より、土間での 1 回あたりの観覧時間は、かなり短いことがわかることから、多くの観覧者に臨地解説による観覧行動が発生するものの、臨地解説による観覧行動は持続していないということがわかる。しかしながら、図 5-19 において、1 回あたりの観覧時間が長いのは、外周と縁側であるが、図 5-9 より、外周と縁側にて臨地解説が発生した回数は極めて低調であることがわかる。一方、臨地解説+参加体験において、図 5-9 より、土間、座敷、縁側において、観覧行動は比較的多く発生している。これらの展示場は、図 5-19 より、土間での 1 回あたりの観覧時間は短いものの、座敷と縁側において、1 回あたりの観覧時間はかなり持続していることから、比較的多くの観覧者が、座敷と縁側を観覧する場合、時

間をかけていることがわかる。

実演の無い20日と、実演のある21日を比べると、実演がある場合、縁側での観覧回数および1回あたりの観覧時間が、臨地解説+参加体験において、実演が無い場合よりも激増していることがわかる。また、臨地解説においても、1回あたりの観覧時間は増えている。したがって、座敷で実演などを行なう場合、観覧者は、屋外から座敷の様子を見ることができると、そして、靴を脱がずに、座敷で行なわれている実演に参加できる環境である縁側で、活発な観覧行動が発生したものと考えられる。また、図5-19より、縁側での1回あたりの観覧時間は、参加体験だけでは短いものの、参加体験に臨地解説が加わることで、観覧時間は長時間持続することがわかる。よって、解説人員からの介入によって、観覧時間を持続させることができたと考えられる。さらに、実演がある場合、臨地解説および臨地解説+参加体験に相当する観覧行動1回あたりの観覧時間は、無い場合と比べて長くなるが、観覧行動が発生する場所は限られることがわかる。

これらから、温暖期の場合、座敷での実演の有無で観覧行動が大きく左右されること、また実演がある場合、縁側のような環境、つまり屋外空間から室内空間で行われている実演を見ることができると、そして屋外からの観覧者でも、縁側のように腰掛けて実演の様子を観覧し、かつ解説人員からの解説や実演に参加することができるような環境により、観覧時間が長くなることがわかることから、室内屋外問わず、実演の内容が広範囲から確認できる環境を確保すること、そして実演を観覧者が見た後、実演をしている場所の近くまでよることができるような環境を確保すること、そして近づいてきた観覧者に対して、解説人員がその内容を解説したり、実演に参加することを促すことが効果的であると考えられる結果となった。

5 まとめ

民家という三次元空間に内在する情報を、視覚以外の感覚器官を用いて観覧する行動＝空間把握行動の中でも、解説人員による解説・交流が図られやすい環境を明らかにするため、観覧者の観覧行動の分類により観覧行動発生回数、観覧時間を中心に、室内で民家が再現展示されている施設、屋外で移築された民家が展示されている施設（寒冷期と温暖期、また温暖期においては、実演の有無の違い）といった展示環境が異なる民家展示施設を通して分析をおこなった。

その結果、各民家展示施設における、全観覧行動のうち、解説人員が伴う観覧行動、すなわち臨地解説および臨地解説＋参加体験に該当する観覧行動が発生した回数および観覧行動時間の割合は、屋外移築民家展示（温暖期）が最も大きく、室内再現民家展示と続き、屋外移築民家展示（寒冷期）が最も小さいことがわかった。

室内再現民家展示の場合、臨地解説が含まれる観覧行動が発生する場所および観覧時間が長くなる場所の特徴には、観覧者に展示物を触ってもらうことで、参加体験をして欲しい展示物があるにもかかわらず、なかなか観覧者が展示物を触るという行動が起こらないようなところ、または、観覧者の視線を大きく動かさないとわからないところにある展示物に、最も気づきやすいところで解説人員からの介入があるところで発生しているということがわかった。よって、室内再現民家展示において、解説人員からの介入が無くては、観覧者に気づいて欲しい情報は伝わりきれていないと考えられる。解説人員がいなくても、三次元空間に内在する情報を、観覧者に伝えるためのデザインや展示計画が必要であると考えられる。

屋外移築民家展示（寒冷期）の場合、臨地解説が含まれる観覧行動が発生する場所および観覧時間が長くなる場所の特徴には、靴を脱がなくてもいい場所で、かつカマドの火にあたれる場所において発生していることがわかった。また、カマドの火入れという解説人員がおこなう行動自体に興味を持つ観覧者が、少数ではあるが存在することから、カマドの火入れという解説人員の行動をよく観察できる位置から、多くの観覧時間を費やしていることもわかった。よって、屋外であるがゆえに、寒冷期の場合、カマドの火入れという行動は、暖をとるという以上に、暖を取るための解説人員の行動自体、興味を引く行動と写っていると考えられることから、火入れという行動を通して、観覧者に容易に解説交流ができるものと考えられる。

屋外移築民家展示（温暖期）の場合、臨地解説が含まれる観覧行動が発生する場所および観覧時間が長くなる場所の特徴には、靴を脱がなくてもいい場所で、かつ解説人員が何らかの行動を起こしている、カマドの周辺や、実演が開催されている座敷周辺で発生していることがわかった。また、座敷での実演の有無で比べると、実演がある場合、靴を脱いで座敷で実演に多くの実演を割いている観覧者と、靴を脱がず、縁側からその実演に参加している観覧者がいることがわかった。よって、温暖期の場合、寒冷期のように、暖をと

るために、カマドの火入れで発生した臨地解説よりも、屋外で観覧している観覧者に、室内で何かをやっている光景が見える場所で実演などを行なうことで、観覧者に容易に解説交流ができるものと考えられる。

また、各民家展示施設において、解説人員からの介入と参加体験が合わさった観覧行動は、1回あたりの観覧時間は延びるものの、観覧回数は比較的少ないことがわかった。解説人員からの接触が、観覧者にとって多いほど観覧時間などが延びることから、民家という三次元空間に内在する情報を伝達し、その情報をきっかけにして観覧行動や観覧時間は発展していくものの、そのような体験ができる観覧者は、少ないことがうかがえる。したがって、解説人員との接触でおこなっていることを、サイン計画や展示計画の時点でカバーし、解説人員からの介入が無い場合でも、解説人員からの解説交流と同じような観覧を確保する必要が急務であると考えられる。なぜなら、解説人員は人であり、簡単に増員することはできないからである^{注6)}。

引用・参考文献

- 朴光範・野村東太・大原一興・平野暁臣・小川英彦・真鍋博司・西宮浩司 1992.8, 「来館者の観覧時間に関するケーススタディ - 博物館の展示計画に関する研究その1」『日本建築学会大会学術講演梗概集 E』, pp.465-466.
- 小川英彦・野村東太・大原一興・平野暁臣・朴光範・真鍋博司・西宮浩司 1992.8, 「来館者の観覧時間と観覧行為に関する研究 - 博物館の展示計画に関する研究その2 -」『日本建築学会大会学術講演梗概集 E』, pp.467-468.
- 西宮浩司・野村東太・大原一興・平野暁臣・朴光範・小川英彦・真鍋博司 1992.8, 「解説員による展示解説実施と観覧行為に関する一考察 - 博物館の展示計画に関する研究その3」『日本建築学会大会学術講演梗概集 E』, pp.469-470.
- 野村東太・大原一興・朴光範・小川英彦・真鍋博司・西宮浩司 1993.3, 「博物館の展示・解説が観覧行為に与える影響 - 博物館に関する建築計画的な研究V」『日本建築学会計画系論文集』, 第445号, pp.73-81.
- 西宮浩司・野村東太・大原一興・白石真二郎 1993.9, 「自然科学系博物館における観覧行為に関する一考察 - 博物館に関する建築計画的な研究その31 -」『日本建築学会大会学術講演梗概集 E』, pp.687-688.
- 久保田百年・野村東太・大原一興 1994.9, 「民家展示施設における活動内容に関する考察 - 民家展示施設の建築計画に関する研究その1」『日本建築学会大会学術講演梗概集 E』, pp.629-630.
- 大原一興・野村東太・久保田百年 1994.9, 「民家展示施設における観覧行為のケーススタディ - 民家展示施設の建築計画に関する研究その2」『日本建築学会大会学術講演梗概集 E』, pp.631-632.
- 坪山幸王・佐藤信治 1995.5, 「展示水槽に対する来館者の観覧行動 - 水族館の観覧空間に関する建築計画的な研究1 -」『博物館学雑誌』, 第20巻第1・2号合併号, pp.10-21.
- 加茂慎司・野村東太・大原一興 1995.8, 「民家展示施設における展示解説手法の効果に関する考察 - 民家展示施設の建築計画に関する研究その3」『日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1』, pp.419-420.

第5章 解説人員の介入による観覧行動の特性

- 野村東太・西源二郎・大原一興 1996.3, 「水族館の観覧と学習行動に関する研究」『生涯学習のための水族館の教育機能に関する建築計画的な研究』,平成6～7年度科学研究費補助金総合研究(A)研究成果報告書(課題番号06301079) pp.33-68.
- 諸岡博熊 1998.10, 「博物館利用者の館内行動の観察」『博物館学雑誌』,第24巻第1号,pp.47-53.
- 松島崇典・小滝一正・大原一興・大月敏雄 1999.9, 「古民家の保全手法と住まい方に関する研究」『日本建築学会大会学術講演梗概集 E-2』,pp.79-80.
- 民家研究委員会編 2001.6, 『古民家の保存・活用のための方法論的研究 - 古民家の地域内保全と民家展示施設の考察』,住宅総合研究財団.
- 江waters 是仁・大原一興 2004.8, 「理工系博物館における民家展示に対する来館者の観覧行動」『日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1』,pp.209-210.
- 江waters 是仁 2004.6, 「理工系博物館における民家展示に対する来館者の観覧行動」『全日本博物館学会ニュース』,No.68.
- 朴鍾来・花里俊廣 2005.7, 「科学系博物館における展示手法と観覧者の行動特徴からみた展示の分析」『日本建築学会計画系論文集』,第593号,pp.57-63.
- 江waters 是仁・大原一興 2005.9, 「理工系博物館・民家展示の空間把握行動に関する考察」『日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1』,pp.553-554.
- 江waters 是仁・大原一興 2006.2, 「ミュージアムにおける民家の室内展示に対する来館者の観覧行動に関する研究 - 日本科学未来館・環境共生型住宅の事例 - 」『日本建築学会計画系論文集』,第600号,pp.41-48.
- 江waters 是仁・大原一興 2006.6, 「屋外民家展示施設における来園者の観覧行動」『全日本博物館学会ニュース』,No.77.
- 江waters 是仁・大原一興 2006.9, 「屋外民家展示施設における来園者の観覧行動に関する研究」『日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1』,pp.455-456.
- 江waters 是仁・大原一興 2006.11, 「屋外民家展示施設における来園者の観覧行動に関する研究 - 江戸東京たてももの園「八王子千人同心組頭の家」の事例より - 」『日本建築学会計画系論文集』,第609号,pp.33-39.
- 江waters 是仁・大原一興 2006.12, 「屋外展示民家における興味が異なる来園者の観覧行動に関する研究 - 温暖期における江戸東京たてももの園・八王子千人同心組頭の家」『博物館学雑誌』,第32巻第1号,pp.13-43.

注釈

注1) 日本科学未来館の解説人員は、環境共生型住宅以外にも多くの展示物があるので、その展示物の解説・交流を行っているほか、展示物を用いた実演(燃料電池や太陽電池に関すること、循環生産についてなど)を行っている。また、日本科学未来館のシンボル展示、Geo-Cosmos と呼ばれる、直径6.5mの球形に、発光ダイオードを951040個用いたディスプレイに、人工衛星などがとらえた地球の姿(雲画像、地表面温度、海水面温度、大気汚染物質の拡散の様子、水蒸気など)や、地球シミュレータによって解析された、2100年までの温暖化の様子や、水深100m付近の海流の様子などを解析したものを映しだし、主に地球環境に関する実演も担当している。なお、シンボル展示 Geo-Cosmos は、スペースシャトルから見た美しい地球の姿を、観覧者の皆さんと共有したいという、日本科学未来館館長であり、宇宙飛行士でもある毛利衛氏の強い思いが込められた展示物である。このような実演は、開催する時間帯が決まっている。

注2) 八王子千人同心とは、江戸幕府の職制のひとつで、現在の八王子市に配置された郷土身分の幕臣集団

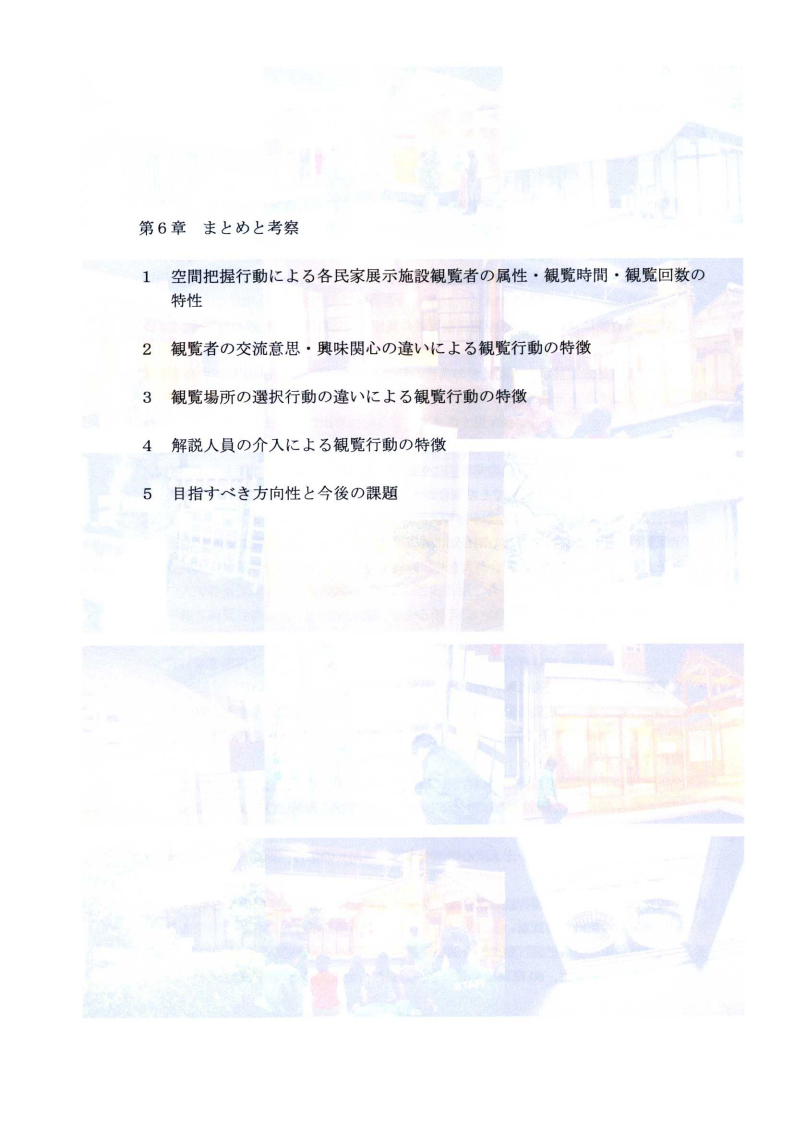
のことである。徳川家康の江戸入府に伴い、1600年に発足した。武蔵・甲斐国境の警備と治安維持を任務とする。千人同心は、甲斐武田家遺臣を中心に、近在の地侍、豪農などで組織された。八王子を拠点としたのは、甲斐国につながる甲州街道と陣場街道があるので、武田家遺臣を中心に、甲斐方面からの侵攻に備えたためである。しかしながら、太平の世が続き、国境警備としての役割が薄れると、家康を祀る日光東照宮の警備を担当するのが主な仕事となった。このように、千人同心は警備を主任務とする軍事組織であり、徳川将軍家直参の武士として禄を受け取ったが、その一方で、平時は農耕に従事し、年貢も納める半士半農といった立場であった。そのような内容が、組頭の家の室内にある6枚のパネルに書かれている。

注3) お手玉実演は、調査を開始した21日午前10時30分にはすでに始まっており、調査終了の午後2時30分まで、継続していた。

注4) 解説人員からの話によると、以前はカマドで火をくべる際、寒冷期では、釜などで甘酒などを温めて観覧者に振舞っていた時期があり、その際多くの観覧者がカマドの火入れの様子や、実際火吹き竹で火を起こす作業なども、観覧者が行うことも多くあったそうだが、1998年7月に起きた和歌山毒物カレー事件をうけて、以降中止となり、現在は釜などで水を沸かせている。

注5) 組頭の家の周囲には、梅の木が多くある。寒冷期の調査期間中、梅の花が咲いており、梅の花の香りも組頭の家の室内に漂うときがあったので、観覧者の観覧行動に、少しは影響を与えているものと考えられる。

注6) 例えば、従来は地方公共団体やその外郭団体に限定していた公共施設の管理運営を、株式会社や民間業者などの団体ができる指定管理者制度などがそうである。公共施設の管理運営を、安くできる株式会社や民間業者が入札などによって選考され、最も安い値段をつけた業者が管理運営できる。したがって、ミュージアムのような施設では、観覧者の入館料などの収入による自主財源が非常に乏しく、維持管理費や人件費に多く支出する。そのために、指定管理者により安く管理運営できる指定管理者制度を積極的に導入しようとする動きがある。長崎歴史文化博物館は、民間業者である乃村工藝社が管理運営にあたっている。また、従来ミュージアムの運営を担っていたミュージアムの事務局なども、財団法人化し、人件費の削減、効果的な予算執行など、いわゆるミュージアムマネジメントを主眼に置きながら、維持管理費などを抑えて、指定管理者として業務委託できるように努力している。江戸東京たてもの園も、東京都立の文化施設が集まって設立した、財団法人東京都歴史文化財団の一員として活動している。本論では、ミュージアムマネジメントを論ずるつもりはないが、ミュージアムの運営も常に効率性・経済性を優先するあまり、必要と思われる活動に十分な予算がまわらず、執行されないことが危惧される。

A collage of various museum exhibits and visitor interactions. It includes images of people looking at displays, a person kneeling to look at a low exhibit, a person sitting on a bench, and various museum interiors with displays and architectural details.

第6章 まとめと考察

- 1 空間把握行動による各民家展示施設観覧者の属性・観覧時間・観覧回数
の特性
- 2 観覧者の交流意思・興味関心の違いによる観覧行動の特徴
- 3 観覧場所の選択行動の違いによる観覧行動の特徴
- 4 解説人員の介入による観覧行動の特徴
- 5 目指すべき方向性と今後の課題

結論

第6章 まとめと考察

民家展示施設の利用実態と、観覧者が、三次元空間に内在する情報を積極的に感じ取ろうとする、空間把握行動が、どのような条件の下発生したのか、また解説人員からの介入がどのような条件の下で発生したのかを整理し、民家という三次元空間に内在する情報を効果的に観覧者に感じてもらう条件などを考察する。

1. 空間把握行動による各民家展示施設観覧者の属性・観覧時間・観覧回数の特性

第2章より、各民家展示施設観覧者の属性の特徴として、日本科学未来館環境共生型住宅の場合、

- ・ 全観覧行動中の空間把握行動の割合は比較的分散している。
- ・ 全観覧行動中の空間把握行動の割合別に年齢層を比べると、幼児小学生と、40歳代、50歳代、60歳以上の年齢層でその割合が大きく、中学・高校・大学生、30歳代でその割合は小さく、20歳では著しく小さい。
- ・ 全観覧行動中の空間把握行動の割合別に観覧同伴者を比べると、夫婦、父親または母親と子ども、友人同士でその割合が大きく、両親または祖父母と子ども、カップル、一人でその割合は小さい。

江戸東京たても園八王子千人同心組頭の家（寒冷期）の場合、

- ・ 全観覧行動中の空間把握行動の割合は、0%と100%に二極化している。
- ・ 全観覧行動中の空間把握行動の割合別に年齢層を比べると、幼児小学生と、50歳代、60歳以上の年齢層でその割合は大きく、中学・高校・大学生、20歳代、30歳代、40歳代でその割合は小さい。
- ・ 全観覧行動中の空間把握行動の割合別に観覧同伴者を比べると、夫婦、友人同士、団体でその割合が大きく、両親または祖父母と子ども、カップル、一人でその割合は小さい。

江戸東京たても園八王子千人同心組頭の家（温暖期）の場合、

- ・ 全観覧行動中の空間把握行動の割合は、0%と100%に集中する傾向はあるものの、館来期の組頭の家ほどではない。
- ・ 全観覧行動中の空間把握行動の割合別に年齢層を比べると、幼児小学生でその割合は著しく大きく、中学生、60歳以上でも大きい。また、全般的にその割合は大きい。

- ・ 全観覧行動中の空間把握行動の割合別に観覧同伴者を比べると、団体、父親または母親と子ども、両親または祖父母と子ども、友人同士でその割合は大きく、カップルでその割合は小さい。

これらから、空間把握行動割合が多く出現する年齢層は、幼児小学生といった年齢が低い属性と、50歳代、60歳代以上といった、比較的年齢が高い属性であること、そして、空間把握行動割合が多く出現する観覧同伴者の形態は、夫婦、友人同士、親子連れといった属性であり、少なく出現する観覧同伴者の形態は、一人での観覧とカップルでの観覧であることから、以下のように考察できる。

- ① 幼児小学生といった、年齢層が低い属性は、自分たちが育ってきた家庭環境の中に「座敷」、「ふすま」、「障子」などといった、日本の伝統的な生活様式をうかがうものが少ないため、空間把握行動の出現が多くなったものと思われる。
- ② 50歳代以上の、比較的年齢層が高い属性は、自分たちが幼少期時代に育ってきた家庭環境と、比較的展示内容が類似することから、懐古しながらの観覧形態をとるために、空間把握行動の出現が多くなったものと思われる。
- ③ 夫婦、友人同士、親子連れに相当する観覧同伴者の場合、観覧して感じたことを話し合ったり、参加体験が伴う観覧行動を一緒に行ったりすることができることから、空間把握行動の出現が多くなったものと思われる。
- ④ 一人での観覧は、自分が観覧して感じたことを話し合う相手がいなかったり、参加体験が伴う観覧行動により、情報を共有できる相手がいなかったりすることで、空間把握行動が抑制されているものと思われる。また、カップルでの観覧は、お互い相方を気にして観覧行動を遠慮してしまい、空間把握行動が抑制されているものと思われる。

同じく第2章より、各民家展示施設観覧者の空間把握行動と、全観覧時間・観覧回数の特徴として、

- ・ いずれの施設も、全観覧時間が長くなるにつれて空間把握行動時間も長くなる傾向がある。しかしながら、環境共生型住宅、組頭の家（寒冷期）では、全観覧時間中空間把握行動時間の占める割合が小さい観覧者も比較的多くいる。
- ・ 組頭の家（寒冷期）と、組頭の家（温暖期）を比べると、温暖期のほうが全観覧時間は長い。
- ・ いずれの施設も、空間把握行動時間と観覧回数との間にはっきりとした関係はない。環境共生型住宅では、空間把握行動時間が長い観覧者は、観覧回数は5～15回くらい発生し、組頭の家（寒冷期）と組頭の家（温暖期）では、空間把握行動時間が長い観覧者は、観覧回数は概ね10回くらい発生している傾向がある。

これらから、観覧回数が少なくても、空間把握行動時間は長いことから、以下のように考察できる。

- ① 空間把握行動時間が長い観覧者は、多くの展示物を観覧するよりも、少数の展示物を、時間をかけて観覧すると思われる。
- ② 観覧回数の初期の段階で、観覧時間が長くなるような展示環境が整っているのではと思われる。

2. 観覧者の交流意思・興味関心の違いによる観覧行動の特徴

第3章より、江戸東京たてもの園八王子千人同心組頭の家（温暖期）における、観覧者の交流意思・興味関心の違いによる観覧行動の特徴として、

- ・ 交流意思・興味関心の違いによる観覧動線の差はない。
- ・ 交流意思・興味関心の違いによる空間把握行動時間と全観覧時間の関係は、自分のペースで観覧し、自分が欲したとき以外解説人員からの解説を望まない不干渉希望型の観覧者の場合、空間把握行動時間も全観覧時間も極めて低調である。
- ・ 民家の中で展開された人々の生活に興味がある生活興味型と、建物自体に興味がある建物興味型の観覧者の場合、空間把握行動時間と全観覧時間は、それぞれ約200～600秒の範囲で発生している。
- ・ 生活興味型＋建物興味型の観覧者の場合、空間把握行動時間と全観覧時間は、それぞれ600秒以上で発生している傾向がある。
- ・ 交流意思・興味関心の違いによる空間把握行動時間と観覧回数との関係は、はっきりとした傾向が見られない。

これらから、交流意思の無い観覧者は、全観覧時間と空間把握行動時間が短いこと、興味関心を持って観覧する観覧者は、全観覧時間と空間把握行動時間は比較的長いこと、観覧回数は、交流意思・興味関心の違いによる差はないことから、以下のように考察できる。

- ① 観覧動線や観覧回数から、交流意思、興味関心の違いによる差は無いことから、民家展示施設における観覧者個人の観覧行動が発生する場所は、交流意思、興味関心の違いにかかわらず同じように発生していると思われる。
- ② 興味関心が多くなると、全観覧時間および空間把握行動時間が長くなるので、観覧者の興味関心と合致するような展示物が多く展示場で展開すると、全観覧時間および空間把握

握行動時間も長くなると思われる。

また、第3章より、交流意思の違いによる観覧行動発生場所の特徴として、

- ・ 観覧行動が発生した場所を交流意思の無い不干涉希望型と、交流意思のある交流希望型と比べると、不干涉希望型では、土間、室内パネル、居間、廊下で、交流希望型よりも多くの観覧行動が発生している。
- ・ 交流希望型では、外周、座敷、五畳で、不干涉希望型よりも多くの観覧行動が発生している。
- ・ 観覧行動時間の長さから、不干涉希望型と交流希望型を比べると、不干涉希望型では室内パネル、居間で、交流希望型よりも観覧時間が長く発生している。
- ・ 交流希望型では、土間、座敷で、不干涉希望型よりも観覧時間が長く発生している。

また、交流希望型をさらに細かく分類し、生活興味型、建物興味型、生活興味+建物興味型における、観覧行動が発生した場所とその時間の特徴として、

- ・ 観覧行動が発生した場所は、いずれも土間で発生している割合が大きい。建物興味型において、土間での観覧行動発生割合は、他と比べると大きくなる傾向がある。また、建物興味型において、外周での観覧行動は発生していない。
- ・ 観覧時間では、生活興味型において、室内パネル、居間、座敷での観覧時間がほぼ同じ割合で比較的長い傾向がある。一方建物興味型では、土間での観覧時間がかなり長く占めており、生活興味+建物興味型では、土間および座敷での観覧時間がほぼ同じ割合で比較的長い傾向がある。

これらから、不干涉希望型の観覧者は、交流希望型と比べて土間や廊下で多く観覧行動が発生するが、交流希望型と比べて観覧時間はあまり長くないことがわかる。また、交流希望型と比べて室内パネルや居間で多くの観覧行動が発生し、かつ交流希望型と比べて観覧時間も交流希望型と比べると長いこと、交流希望型の観覧者は、不干涉希望型と比べて座敷で多く観覧行動が発生しており、観覧時間も長く発生していること、観覧行動は少ないが、観覧時間は座敷で不干涉希望型より長いことから、以下のように考察できる。

- ① 土間では、多くの観覧行動を誘発する環境が整っているものと思われるが、解説人員からの介入によって、見ただけでは気づかない展示場所を示したり、参加体験という行動につながったりする効果があるのではないと思われる。
- ② 観覧者の興味関心と、解説人員からの介入によって得られた展示情報が合致した場合に、観覧時間は長くなるのではないと思われる。

また、第3章より、交流意思の違いによる観覧行動の特徴として、

- ・ 不干涉希望型では、空間把握行動の割合が小さい駆足空間把握型の割合が大きい。
- ・ 交流希望型では、空間把握行動の割合が平均的な普通空間把握型の割合が大きく、空間把握行動割合が大きい詳細空間把握型も、比較的大きい。
- ・ 空間把握行動の詳細から、不干涉希望型では、圧倒的に参加体験に相当する観覧行動の占める割合が大きい。
- ・ 交流希望型では、参加体験と臨地解説はほぼ同じ割合で大きく、参加体験+臨地解説の割合も、不干涉希望型と比べると、その割合は大きい。

また、交流希望型をさらに細かく分類し、生活興味型、建物興味型、生活興味+建物興味型における、空間把握行動の割合や空間把握行動の詳細の特徴として、

- ・ 生活興味型、建物興味型では、詳細空間把握型、普通空間把握型、駆足空間把握型の割合は、それぞれ同じ位の割合であり、両者の間には差がほとんどない。
- ・ 生活興味+建物興味型では、詳細空間把握型と普通空間把握型で半分ずつ分かれている。
- ・ 生活興味型では、空間把握行動の中で参加体験に相当する観覧行動が多く発生している。
- ・ 建物興味型では、空間把握行動の中で臨地解説に相当する観覧行動が多く発生している。また、参加体験+臨地解説に相当する観覧行動も、生活興味型と生活興味+建物興味型で比べると、その発生回数は多い。

これらから、不干涉希望型では、全観覧時間に占める空間把握行動時間は短く、その際の空間把握行動は、参加体験に相当するものが多いこと、交流希望型では、全観覧時間に占める空間把握行動時間は長く、その際の空間把握行動は、参加体験だけでなく、臨地解説に相当するものも多くなること、交流希望型の中で、生活興味型、建物興味型、生活興味+建物興味型では、参加体験、臨地解説、参加体験+臨地解説に相当する観覧行動が異なることから、以下のように考察できる。

- ① 干渉型の観覧者でも、参加体験に相当する観覧行動が多く発生するのであれば、その様子を見た解説人員によって、参加体験した内容の解説が起きる機会があるのではないかと思われる。
- ② 建物興味型において、参加体験+臨地解説に相当する観覧行動が多く発生することから、民家という三次元空間に内在する情報を、最も効果的に感じているタイプであると思われる。

3. 観覧場所の選択行動の違いによる観覧行動の特徴

第4章より、江戸東京たてもの園八王子千人同心組頭の家における、寒冷期と温暖期での観覧場所の選択行動の違いによる特徴として、

- ・ 温暖期のほうが、室内に上がっての観覧時間と屋外からの観覧時間それぞれ長くなる。
- ・ 屋外から観覧した観覧者は、温暖期よりも寒冷期のほうが多い。
- ・ 寒冷期において、室内に上がった観覧者の割合と室内に上がって発生した観覧時間の長さを、調査日ごとに比べると、カマドへの火入れが無く、ボランティアが不在の場合、多くの観覧者が室内に上がり、かつ比較的長い時間室内に上がって観覧している。
- ・ 寒冷期において、屋外で観覧した観覧者の割合と、屋外で発生した観覧時間の長さを、調査日ごとに比べると、解説人員が在駐し、カマドの火入れがあり、かつ比較的暖かな日である場合、多くの観覧者は屋外で観覧するものの、観覧時間は、ボランティアは在駐するものの、雨天時のほうが長くなる。
- ・ 温暖期において、室内に上がった観覧者の割合と室内に上がって発生した観覧時間の長さを、調査日ごとに比べると、室内で解説人員からの実演などが無い場合、多くの観覧者が室内に上がり、かつ比較的長い時間室内に上がって観覧している。
- ・ 温暖期において、屋外から観覧した観覧者の割合と、屋外で発生した観覧時間の長さを、調査日ごとに比べると、室内で解説人員からの実演などがある場合、多くの観覧者が屋外から観覧し、かつ比較的長い時間屋外から観覧している。
- ・ 室内に上がって観覧した観覧者が、室内に上がる直前に観覧した場所は、寒冷期、温暖期共に土間が最も多く、割合もほぼ同じである。また、観覧行動の実態は、寒冷期においては普通観覧の割合が最も大きく、温暖期においては臨地解説の割合がもっとも大きい。
- ・ 屋外から観覧した観覧者が、屋外からの観覧直前に観覧した場所は、寒冷期、温暖期共に土間が最も多い。また、観覧行動の実態は、寒冷期において普通観覧、参加体験、臨地解説、参加体験+臨地解説はそれぞれほぼ四等分されているが、温暖期においては、参加体験が約4割占めて最も大きい。
- ・ 室内に上がっての観覧、屋外からの観覧が、観覧者の全観覧行動の中で発生するタイミングは、寒冷期、温暖期共に、観覧行動の中でも最後に出現する傾向がある。
- ・ 寒冷期における室内に上がって観覧した観覧者は、幼児小学生、20歳代の若年齢層で多く、屋外から観覧した観覧者は、50歳代、60歳以上の高年齢層で多い。また、温暖期における室内に上がって観覧した観覧者は、幼児小学生、30歳代で多く、屋外から観覧した観覧者は、20歳代、50歳代で多い。
- ・ 室内に上がって観覧した観覧者は、寒冷期、温暖期関係なく親子連れで多く、屋外から観覧した観覧者も、寒冷期、温暖期関係なく友人同士と一人での観覧が多い。

これらから、寒冷期において解説人員が不在の場合、室内に上がっての観覧者が増え、屋外からの観覧は減ること、温暖期において、室内で解説人員からの実演がある場合、室内に上がっての観覧者が減り、屋外からの観覧は増えること、室内に上がる直前の観覧行動、屋外からの観覧直前の観覧行動が発生した場所は、それぞれ土間が多いこと、寒冷期温暖期間問わず、室内に上がっての観覧行動、屋外からの観覧行動は、観覧者の観覧行動の中でも最後に出現する傾向があること、室内に上がって観覧した観覧者の属性は、比較的若い年齢層であり、屋外から観覧した観覧者の属性は、比較的年齢層が高い傾向があること、寒冷期温暖期間問わず、室内に上がって観覧した観覧者は、親子連れが多く、屋外から観覧した観覧者は、友人同士と一人が多いということから、以下のように考察できる。

- ① 解説人員が室内に居る場合、観覧者は室内に上がって観覧しない傾向があることと、室内に上がる観覧行動が発生するのが、観覧行動の中でも最後の方に現れていることから、観覧者の観覧行動初期の段階で解説人員の存在に気がつくこと、解説員と解説人員との間に関係を気づくことができないので、近寄りたがたい雰囲気醸成されてしまい、観覧行動が続かなくなるのではと思われる。
- ② 室内に上がれなかった観覧者は、室内に上がろうとしないで屋外から民家を観覧するようになるのではないかとと思われる。
- ③ 室内に上がる、屋外から観覧する直前の観覧行動発生場所は土間が多いことから、観覧者が土間で感じた情報の差により、観覧場所が選択されるのではないかとと思われる。
- ④ 室内に上がって観覧する観覧者の年齢層には、季節を問わず若年層で親子連れの形態が多いこと、屋外から観覧する観覧者の年齢層には、季節を問わず比較的高年齢層で友人同士や一人の形態が多いことから、ある程度観覧者の属性で、展示環境を整備するとより効果的な展示手法が開発できると思われる。

4. 解説人員の介入による観覧行動の特徴

第5章より、解説人員の介入による観覧行動の特徴を、室内で民家が展示されている日本科学未来館環境共生型住宅、屋外で民家が展示されている江戸東京たてももの園八王子千人同心組頭の家（寒冷期と温暖期）で比較したところ、その特徴として、

- ・ 臨地解説に相当する観覧行動が多く発生した民家展示施設の環境は、組頭の家（温暖期）が最も多く発生し、環境共生型住宅、組頭の家（寒冷期）の順で少なくなる。また、臨地解説に相当する観覧時間が多く発生した民家展示施設も、同じ順である。
- ・ 環境共生型住宅で、臨地解説に相当する観覧行動が多く発生した展示場所は、足の裏の感触や、発熱ガラスに触ることで展示情報を受け入れる夏間において発生している。ま

た、夏間に関連した展示情報と同じ情報が盛り込まれている場所で、臨地解説に相当する観覧行動が発生している傾向がある。また、臨地解説に相当する観覧行動が長く発生する展示場所は、夏間と観覧者が五感で展示情報を感じることができない冬間である。

- ・ 組頭の家（寒冷期）で、臨地解説に相当する観覧行動が多く発生した展示場所は、解説人員が在駐し、カマドの火入れにより、暖をとることができる土間で多く発生している。また、臨地解説に相当する観覧行動が長く発生する展示場所も土間である。
- ・ 組頭の家（温暖期）で、臨地解説に相当する観覧行動が多く発生した展示場所は、座敷での解説人員からの実演が無い場合、土間と居間で多く発生し、実演がある場合、土間で多く発生している。また、臨地解説に相当する観覧行動が長く発生する展示場所は、実演が無い場合は居間、土間、座敷であり、ある場合は縁側と座敷である。

これらから、室内で民家を展示している場合、臨地解説に相当する観覧行動が発生する場所および観覧時間が長くなる場所の特徴には、観覧者に触ってもらうことで、参加体験して欲しい展示物があるにもかかわらず、観覧者がそれに気づかないような環境である場合、または観覧者の視線を大きく動かさないと見えないところにある展示物に、解説人員からの介入が発生し、臨地解説につながっていること、屋外民家展示施設において、寒冷期の場合、靴を脱がなくてもいい場所で、かつ暖をとることができる場所での傾向があること、温暖期の場合、靴を脱がなくてもいい場所で、かつ解説人員が作業をする光景を見ることができる場所においてその傾向があることから、以下のように考察できる。

- ① 温度環境などが一定である室内における民家展示の場合、解説人員からの介入がないと、展示場に内在する情報を感じることができにくいものと思われる。したがって、臨地解説が必要になる場所が固定化し、かつ展示環境が変化しないことで、解説内容も単調になるのではないかとと思われる。
- ② 屋外で民家が展示されている環境では、温度の変化や座敷での実演などにより、解説人員と観覧者の距離のとり方が難しくなると思われる。実演なども、暫くは実演をしている解説人員の様子を眺めながら、あくまでも観覧者の意思で解説人員と接触する、実演に参加するような運営にすることで、民家に内在する情報を効果的に観覧者に伝えることができるものと思われる。
- ③ 解説人員からの介入が発生しやすい場所は、比較的熱環境など、建物自体に興味関心が向かいやすい場合と、お手玉実演など、生活に興味関心が向かいやすい場合に分けられると思われる。したがって、建物自体に興味関心が向かいやすいのであれば、解説人員から当時の生活の話をするすることで、民家での生活に関する話をし、また、生活に興味関心が向かいやすいのであれば、解説人員から建物自体の話をするすることで、観覧者に多様な情報があることに気づかせ、民家という三次元空間に内在する情報を効果的に引き出すことが可能になるとと思われる。

5. 目指すべき方向性と今後の課題

民家展示施設における観覧者の観覧行動から、民家という三次元空間に内在する情報を効果的に観覧者に感じるための活動として、以下のようなことが考えられる。

① 観覧者と解説人員との接触のタイミング

本研究より、観覧者の観覧行動初期の段階で、解説人員と接触すると、観覧時間が減少する傾向があった。その要因として解説人員と個人的な関係ができないと考えられることから、観覧者の観覧行動中、自然と解説人と関係が出来上がるような展示環境の整備、室内で民家が展示されていた日本科学未来館環境共生型住宅のように、参加体験が発生してから、解説人員の接触がある（参加体験で得た情報を解説人員が伝達するという大義名分が生まれる）ことが、屋外で民家を展示する際でも有効であると考えられる。

② 観覧者と多くの関係が築ける実演の開発

座敷でお手玉実演が行なわれている際、実演に参加できた観覧者は、かなり長い時間その実演に費やすことができるが、参加できない観覧者は、参加している観覧者が退席しない限り参加することはできない。したがって、できるだけ多くの観覧者が、実演に参加できるような運営が必要と考えられる。また、実演の様子も、できるだけ多くの観覧者に認知できるように、見通しの良い環境下で行うことが必要であると考えられる。

③ 生活環境再現展示の充実

屋外民家展示施設におけるカマドの火入れのような、生活環境を再現する展示において、多くの観覧者が民家展示に内在する様々な情報を感じていることが推測できた。したがって、物理的に可能な限り、展示民家に内在される情報を効果的に引き出すために、生活環境を再現する展示の開発が急務であると思われる。カマドなどへの火入れなどは、通年実施されるものと思われるが、火入れの行為自体を、観覧者に体験できるようにするだけでも、観覧者にとって民家に内在する情報を十分に感じることができると考えられる。したがって、室内で民家を展示する施設でも、防災上難しい点も多々あるかとは思われるが、室内に再現した民家に内在する情報を効果的に引き出すためにも、生活環境を再現する展示を実施すべきであると考えられる。

④ 観覧実態の検証と展示計画～新しいミュージアム活動への可能性

近年、展示物評価を導入するミュージアムが多くなったが、民家展示施設でも、民家特有の三次元空間に内在する情報が、観覧者に伝わる環境を評価し、展示計画に活かしていく必要がある。本研究は、ひとつの切り口として、観覧者の観覧行動から分析してきたが、今後施設間で統一した指針の下、展示評価を実施し、施設間で比較することで、より効果的に民家展示の可能性を見出すことが可能になるとと思われる。また、民家には、住ま

い手としての記憶がある。また、民家という学際的な情報が盛り込まれている展示であるがゆえに、様々な学問分野の研究者がいる。住まい手としての一般市民と、研究者が協働で、民家に内在する情報を調査し、研究することができる格好の資料と考えられる。したがって、伊藤(1993)が唱えたように、民家展示施設を軸にした活動を深化させることで、第三世代のミュージアム活動の一端を開拓することが可能であると思われる。また、全国各地に散見できるようになった、エコミュージアムという概念を用いた活動に、民家展示施設も一役買うことが可能になるであろう。

最後に、今後の課題として、観覧者の観覧行動の分析から、館種ごとの観覧形態の特徴を明らかにし、館種ごとに比較分析することが重要であると思われる。なぜなら、「モノ」に内在する情報は、たまたま館種ごとの展示目的に、専門的職員によって情報が選りすぐられて「展示資料」となっている以上、展示目的に合致しない情報は切り捨てられている。「A」という「モノ」が、科学系ミュージアムと歴史系ミュージアムで展示される場合、

科学系ミュージアムの展示資料 = A - 科学的事象以外の情報

歴史系ミュージアムの展示資料 = A - 歴史的事象以外の情報

という内容になってしまう。したがって、「A」という「モノ」が、館種ごとの展示資料として展示されている場合、科学系ミュージアムでも、歴史的な情報が伝わっていること、また歴史系ミュージアムでも、科学的な情報が伝わっていることを、観覧者の観覧行動などを通して検証することが可能になると思われる。したがって、ミュージアムの専門的職員²¹⁾は、類似した展示物が展示されているミュージアムと連携などをすることで、職員自身、学際的な視点を持った上で展示資料から新たな価値を導き出すことができると考えられる。また、類似した展示物が展示されているミュージアム同士、相互依存関係を築くことができると考えられることから、ミュージアム活動がより一層活性化されると考えられる。

ミュージアムは、「モノ」に内在する情報を観覧者が感じ、感じたことをいろいろな人と話すことで、多種多様な価値観、モノの見方があることを知り、自己を相対化することができる機会を提供することがレゾンデートルの一つであると考えられる。しかし一方で、ミュージアムで「モノ」を資料として公開展示するということは、ミュージアムの「価値観」を観覧者に押し付けているとも考えられる。ミュージアムも、絶えず相対化することが、今後必要になってくるだろうし、観覧者の観覧行動を分析し、ミュージアムの活動を評価し、それをミュージアム間で比較検討することで、相対化することができると考えられるからである。

本研究は、民家という展示資料を扱うミュージアムにおいて、展示環境や展示目的が異なる施設での観覧者の観覧行動を通して、様々な展示情報を引き出すための要因を考察し、

それらをミュージアムの運営に取り入れることで、より充実した活動への提言を行った。

このように、観覧者の観覧行動を通してミュージアムの展示場で起きていることを分析することで、設置者の意図がきちんと観覧者に伝わっているか、伝わっているとすれば、それはどのような要因が考えられるのか、また伝わっていないようならば、何がいけないのか、自分たちのミュージアムの活動を科学的に分析し、改善につながることができると考えられる。これは民家展示施設に限ったことではなく、様々な資料を扱うミュージアム施設全体にいえることである。自分たちの活動するミュージアムの実態を知ることができれば、観覧者に、ミュージアムという空間で提供される様々なサービスを十分に感じ、還元することが可能になるだろう。そういった意味では、今後我が国の多くのミュージアムで、このような研究の深化が求められるのは自明のことである。

今後の研究課題として、様々なミュージアムにおいて、観覧者の観覧行動を通して、展示物に内在する情報が、効果的に引き出される展示環境や展示計画に関する研究を深めていき、それが可能となる博物館学（ミュゼオロジー）やミュージアムマネジメントに関する考察も深めていきたい。

引用・参考文献

- 伊藤寿朗 1993,『市民のなかの博物館』,吉川弘文館.
- 加藤有次・鷹野光行・西源二郎・山田英徳・米田耕司編 1999~,『新版博物館学講座シリーズ』,雄山閣出版.
- 大堀哲編 1999,『博物館学シリーズ』,樹村房.
- 小林達雄 1999,『ミュージアムの思想小林達雄対談集』アム・プロモーション.
- 滋賀県立琵琶湖博物館 2000,『琵琶湖博物館研究調査報告 17号 ワークショップ&シンポジウム 博物館を評価する視点』琵琶湖博物館・滋賀県博物館ネットワーク協議会編.
- 滋賀県立琵琶湖博物館 2000,『琵琶湖博物館研究調査報告 16号 生活再現の応用展示学的研究 - 博物館のエスノグラフィーとして -』嘉田由紀子・古川彰編.
- 川那部浩哉 2000,『博物館を楽しむ琵琶湖博物館ものがたり』岩波書店.
- 浜口哲一 2000,『放課後博物館へようこそ - 地域と市民を結ぶ博物館 -』地人書館.
- 村山皓編 2001,『施策としての博物館の実践的評価 - 琵琶湖博物館の経済的・文化的・社会的効果の研究』,雄山閣出版.
- 村井良子編 2002,『入門ミュージアムの評価と改善』,UMBOOKS.
- 石森秀三編 2002,『博物館経営・情報論』,日本放送出版協会.
- エコ・コミュニケーションセンター編著 2002,『ファシリテーター入門 - 環境教育から環境まちづくりへ』つげ書房新社.
- 上山信一・稲葉郁子 2003,『ミュージアムが都市を再生する - 経営と評価の実践』日本経済新聞社.

溝上智恵子 2003, 『ミュージアムの政治学 - カナダの多文化主義と国民文化』 東海大学出版会.

岩淵潤子 2004, 『美術館で愛を語る』 PHP 新書.

布谷知夫 2005, 『博物館の理念と運営 利用者主体の博物館学』, 雄山閣出版.

注釈

注1) ミュージアムにおける専門的職員とは、博物館法第4条第3項に、「博物館に、専門的職員として学芸員を置く」と明記されているが、現状を鑑みると、学芸員の職務内容と類似した任に就く職員も多く存在している。したがって、ここでは主にミュージアム運営に携わる職員として専門的職員という用語を用いた。

参考文献リスト



- Pierre Bourdieu・Alain Darbel・Dominique Schnapper 1969, L'amour de l'art-les musées d'art européens leur public, deuxième édition revue et augmentée les éditions de minuit. (山下雅之訳 1994, 『美術愛好』 木鐸社.)
- Luc Benoist 1971, Musées et Muséologie, Presses Universitaires de France, Paris. (水嶋英治訳 2002, 『博物館学への招待』 白水社.)
- Danièle Giraudy・Henri Bouilhet 1977, Le Musée et la vie, La documentation Française, Paris. (高階秀爾・松岡智子訳 1993, 『美術館とは何か - ミュージアム&ミュゼオロジー』 鹿島出版会.)
- 吉田桂二 1987, 『民家ウォッチング事典』 東京堂出版.
- 上田篤 1989, 『博物館からミュージアムへ』 学芸出版社.
- 梅棹忠夫 1989, 『博物館の思想 - 梅棹忠夫対談集』 平凡社.
- 加藤有次・椎名仙卓編著 1990, 『博物館ハンドブック』 雄山閣.
- 岩井宏實編著 1991, 『博物館づくりと地域おこし』 ぎょうせい.
- 広瀬鎮 1992, 『博物館社会教育論』 学文社.
- 朝日町エコミュージアム研究会編著 1992, 『国際エコミュージアムシンポジウム報告書 エコミュージアム～地球にやさしい朝日町から～』 国際エコミュージアムシンポジウム実行委員会.
- 上田篤編著 1992, 『都市のミュージアム - 未来をかんがえる環境言語博物館』 学芸出版社.
- Kathleen Regnier・Michael Gross・Ron Zimmerman 1992, The Interpreter's Guidebook-Techniques for Programs and Presentations, UW-SP foundation press, Inc. (日本環境教育フォーラム監訳 1994, 『インタープリテーション入門』 小学館)
- John H. Falk・Lynn D. Dierking 1992, The Museum Experience, Whalesback Books, Washington D.C., (高橋順一訳 1996, 『博物館体験—学芸員のための視点—』 雄山閣出版.)
- ライフデザイン研究所 1993, 『ミュージアムとのこころよい関係づくり - 美術館・博物館の利用に関する調査』 ライフデザイン研究所.
- 朝日新聞マリオン編集部編著 1993, 『美の裏方 学芸員からのメッセージ』 ペリかん社.
- 木村健一編著 1993, 『民家の自然エネルギー技術』 彰国社.
- Kathleen Mclean 1993, Planning for People in Museum Exhibitions, Association of Science-Technology Centers, Inc. (井島真知・芦谷美奈子訳 2003, 『博物館をみせる - 人々のための展示プランニング』 玉川大学出版部.)
- 出井洋一郎 1993, 『美術館学入門』 明星大学出版部.
- 諸岡博熊 1993, 『ミュージアムマネジメント 産業文化施設の運営』 創元社.
- 関秀夫 1993, 『日本博物館学入門』 雄山閣.
- 伊藤寿朗 1993, 『市民のなかの博物館』 吉川弘文館.
- 長谷川栄 1994, 『新しい美術館学 エコ・ミュージアムの実際』 三交社.
- David Dean 1994, Museum Exhibition-Theory and Practice, Routledge. (北里桂一監訳)

- 2004, 『美術館・博物館の展示 - 理論から実践まで』 丸善)
- 湯本豪一編著 1994, 『美術館・博物館は「いま」 現場からの報告 24 篇』 日外アソシエーツ.
- 日比野秀男 1994, 『美術館学芸員という仕事』 ペリかん社.
- 日本・ドイツ美術館教育シンポジウムと行動 1992 報告書編集委員会 1994, 『街から美術館へ美術館から街へ - 日本・ドイツ美術館教育シンポジウムと行動 1992 報告書』 日本文教出版.
- 新井重三編著 1995, 『実践エコミュージアム入門 - 21 世紀のまちおこし - 』 牧野出版.
- 村上義彦 1995, 『新しい地域博物館活動』 雄山閣.
- 長谷川栄 1995, 『美術館都市への旅 - 新しい時代を拓くミュージアロジーを求めて』 グラフ社.
- 江戸東京たてもの園・スタジオジブリ編著 1995, 『江戸東京たてもの園物語』 東京都江戸東京博物館.
- 西野嘉章 1995, 『博物館学 フランスの文化と戦略』 東京大学出版会.
- 諸岡博熊 1995, 『企業博物館 ミュージアム・マネージメント』 東京堂出版.
- 大堀哲・小林達雄・端信行諸岡博熊編著 1996, 『ミュージアム・マネージメントー博物館運営の方法と実践』 東京堂出版.
- 染川香澄・吹田恭子 1996, 『ハンズ・オンは楽しい - 見て、さわって、遊べるこどもの博物館』 工作舎.
- 西野嘉章 1996, 『大学博物館 理念と実践と将来と』 東京大学出版会.
- 湯本豪一編著 1996, 『続美術館・博物館は「いま」 機構・運営の理想と現実』 日外アソシエーツ.
- 石渡美江・熊野正也・松浦淳子・矢島國雄編著 1996, 『博物館学事典』 東京堂出版.
- 加藤有次 1996, 『博物館学総論』 雄山閣.
- 並木誠士・吉中充代・米屋優編著 1998, 『現代美術館学』 昭和堂.
- 大堀哲編著 1997, 『教師のための博物館の効果的利用法』 東京堂出版.
- 大島清次 1997, 『美術館とは何か』 青英舎.
- 長谷川栄 1997, 『新しいソフト・ミュージアム - 美術館運営の実際』 三交社.
- 諸岡博熊 1997, 『博物館経営論』 信山社出版.
- 増田洋 1997, 『学芸員のひとりごと 昨今美術館事情 (増補新装版)』 芸艸堂.
- 段木一行 1997, 『学芸員の理論と実践』 雄山閣.
- 井上和衛・中村攻・宮崎猛・山崎光博 1999, 『地域経営型グリーンツーリズム』 都市文化社.
- 浮田典良編著 1997, 『地域文化を生きる』 大明堂.
- 谷口汎邦編著 1997, 『美術館 - 建築計画・設計シリーズ 18』 市ヶ谷出版社.
- 美術館メディア研究会編著 1997, 『美術館革命』 大日本印刷 IOC 本部・トランスアート.
- 大堀哲編著 1997, 『日本博物館総覧 - ミュージアムへの招待』 東京堂出版.

- 琵琶湖博物館編 1997, 『琵琶湖博物館開館までのあゆみ』 琵琶湖博物館.
- 倉田公裕・矢島國雄 1997, 『新編博物館学』 東京堂出版.
- 日本エコミュージアム研究会 1997, 『エコミュージアム・理念と活動 - 世界と日本の最新事例集 - 』 牧野出版.
- 村上義彦 1997, 『地域博物館概論』 雄山閣.
- 根木昭・枝川明敬・垣内恵美子・溝上智恵子・栗原祐司編著 1998, 『美術館政策論』 晃洋書房.
- 馬淵浩一 1998, 『21世紀の科学館像 - 展示・運営に関する提言』 ミュージアム出版.
- Philip Kotler・Neil Kotler 1998, Museum Strategy and Marketing-Designing missions, building audiences, generating revenue resources, John wiley & Sons, Inc. (井関利明・石田和晴訳 2006, 『ミュージアム・マーケティング』 第一法規.)
- Tim Caulton 1998, Hands-on exhibitions-managing interactive museums and science centres, Routledge, London. (染川香澄・芦谷美奈子・井島真知・竹内有理・徳永喜昭訳 2000, 『ハンズ・オンとこれからの博物館 - インタラクティブ系博物館・科学館に学ぶ理念と経営』 東海大学出版会)
- 戸尾任宏・佐々木雄二編著 1998, 『博物館 - 建築計画・設計シリーズ 19』 市ヶ谷出版社.
- 馬場憲一 1998, 『地域文化政策の新視点 - 文化遺産保護から伝統文化の継承へ』 雄山閣.
- 水藤真 1998, 『博物館を考える 新しい博物館学の模索』 山川出版社.
- 瀬沼克彰 1998, 『生涯学習と地域活性化』 大明堂.
- 佐藤一子 1998, 『生涯学習と社会参加 - おとなが学ぶことの意味』 東京大学出版会.
- Catherine Hughes 1998, Museum Teatre: communicating with visitors through drama, Heinemann. (安井亮・松本栄寿・小浜清子訳 2005, 『ミュージアム・シアター - 博物館を活性化させる新しい方法』 玉川大学出版部.)
- 武内和彦・林良嗣編著 1998, 『岩波講座地球環境学 8 地球環境と巨大都市』 岩波書店.
- 高橋裕・武内和彦編著 1998, 『岩波講座地球環境学 9 地球システムを支える 21世紀型科学技術』 岩波書店.
- 小林達雄 1999, 『ミュージアムの思想小林達雄対談集』 アム・プロモーション.
- 大原一興 1999, 『エコミュージアムへの旅』 鹿島出版会.
- 小松光一編著 1999, 『エコミュージアム 21世紀の地域おこし』 家の光協会.
- 金山喜昭 1999, 『地域博物館のソーシャル・マーケティング戦略 - 童謡作曲家山中直治を復活させた野田市郷土博物館』 アム・プロモーション.
- 有元修一編集 1999, 『博物館学シリーズ2 博物館資料論』 樹村房.
- 小原巖編著 1999, 『博物館学シリーズ3 博物館展示・教育論』 樹村房.
- 大堀哲編著 1999, 『博物館学シリーズ4 博物館経営論』 樹村房.
- 坂井知志編著 1999, 『博物館学シリーズ5 博物館情報論』 樹村房.
- 加藤有次・鷹野光行・西源二郎・山田英徳・米田耕司編著 1999, 『新版博物館学講座 5 博

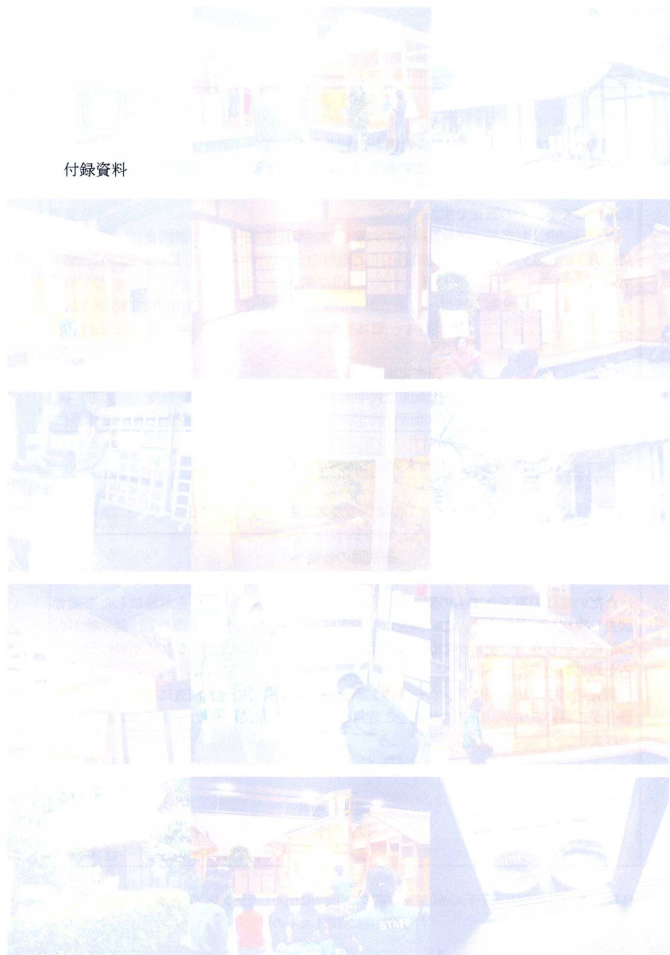
- 物館資料論』雄山閣.
- 加藤有次・鷹野光行・西源二郎・山田英徳・米田耕司編著 1999,『新版博物館学講座 10 生涯学習と博物館活動』雄山閣.
- 加藤有次・鷹野光行・西源二郎・山田英徳・米田耕司編著 1999,『新版博物館学講座 11 博物館情報論』雄山閣.
- 加藤有次・鷹野光行・西源二郎・山田英徳・米田耕司編著 1999,『新版博物館学講座 12 博物館経営論』雄山閣.
- 淡交社美術企画部編著 1999,『私も美術館でボランティア』淡交社.
- 日比野秀男 1999,『美術館と語る』ペリかん社.
- 日本博物館協会 1999,『日本の博物館の現状と課題 - 博物館白書平成 11 年度版』日本博物館協会.
- Judy Diamond 1999, Practical Evaluation Guide-Tools For Museum & Other Informal Educational Settings, Altamira press.
- Karsten Schubert 2000, The Curator's Egg-The evolution of the museum concept from the French Revolution to the present day, Curatorial Services Limited. (松本栄寿・小浜清子訳 2004,『進化する美術館 - フランス革命から現代まで』玉川大学出版部.)
- 西野嘉章 2000,『二十一世紀博物館 博物館資源立国へ地平を拓く』東京大学出版会.
- 坂上英彦編著 2000,『ビジター産業に進路をとれー日本・都市再生への提言』日刊工業新聞社.
- 川那部浩哉 2000,『博物館を楽しむ琵琶湖博物館ものがたり』岩波書店.
- 椎名仙卓 2000,『図解博物館史 (改訂増補)』雄山閣.
- 大堀哲編著 2000,『博物館学シリーズ 6 博物館実習』樹村房.
- 嘉田由紀子・古川彰編著 2000,『生活再現の応用展示学的研究 - 博物館のエスノグラフィーとして - 』琵琶湖博物館研究調査報告第 16 号.
- 琵琶湖博物館・滋賀県博物館ネットワーク協議会編著 2000,『ワークショップ&シンポジウム博物館を評価する視点』琵琶湖博物館研究調査報告第 17 号.
- 加藤有次・鷹野光行・西源二郎・山田英徳・米田耕司編著 2000,『新版博物館学講座 1 博物館学概論』雄山閣.
- 加藤有次・鷹野光行・西源二郎・山田英徳・米田耕司編著 2000,『新版博物館学講座 3 現代博物館論』雄山閣.
- 加藤有次・鷹野光行・西源二郎・山田英徳・米田耕司編著 2000,『新版博物館学講座 4 博物館機能論』雄山閣.
- 加藤有次・鷹野光行・西源二郎・山田英徳・米田耕司編著 2000,『新版博物館学講座 9 博物館展示法』雄山閣.
- 浜口哲一 2000,『放課後博物館へようこそ - 地域と市民を結ぶ博物館 - 』地人書館.
- 杉本尚次 2000,『世界の野外博物館 環境との共生をめざして』学芸出版社.

- 博物館と学校をむすぶ研究会 2000, 『学ぶ心を育てる博物館「総合的な学習の時間」への最新実践例』 アム・プロモーション.
- 大堀哲編著 2001, 『博物館学シリーズ7 博物館活動事例集』 樹村房.
- 加藤有次・鷹野光行・西源二郎・山田英徳・米田耕司編著 2001, 『新版博物館学講座6 博物館調査研究法』 雄山閣.
- 金山喜昭 2001, 『日本の博物館史』 慶友社.
- 加藤哲弘・喜多村明里・並木誠士・原久子・吉中充代編著 2001, 『変貌する美術館 現代美術館学2』 昭和堂.
- 石川宏之 2001, 『地域資産を活かすためのミュージアム活動による地域運営に関する研究』 平成12年度博士論文, 横浜国立大学大学院工学府.
- Susan M. Stockmayer・Michael M. Gore・Chris Bryant edited 2001, Science Communication In Theory and Practice, Kluwer Academic Publishers. (佐々木勝浩他訳 2003, 『サイエンス・コミュニケーション - 科学を伝える人の理論と実践』 丸善プラネット.)
- 嶋崎吉信・清水直子編著 2001, 『がんばれ美術館ボランティア』 淡交社.
- 水藤真 2001, 『博物館を考える2 博物館実習とこれからの博物館』 山川出版社.
- 村山皓編著 2001, 『施策としての博物館の実践的評価 - 琵琶湖博物館の経済的・文化的・社会的効果の研究』 雄山閣.
- 日本展示学会編著 2001, 『地域博物館への提言』 ぎょうせい.
- 北俊夫・埼玉県博学連携推進研究会 2001, 『博物館と結ぶ新しい社会科授業づくり』 明治図書出版.
- 金子淳 2001, 『博物館の政治学』 青弓社.
- 秋田県博物館等連絡協議会 2001, 『秋田県博物館叢書～博物館からのおくりもの～1 秋田県立博物館解説員テーブル』 秋田県博物館等連絡協議会.
- 深川雅文 2002, 『学芸員になるには』 ペリかん社.
- 四宮敏行 2002, 『学校が美術館 - 発想から実現までの記録』 美術出版社.
- 暮沢剛巳 2002, 『美術館はどこへ? - ミュージアムの過去・現在・未来』 広済堂出版.
- 建築思想研究所編著 2002, 『拡張型博物館 - 規模と機能の拡張 建築設計資料 88』 建築資料研究社.
- 小泉成史 2002, 『おすすめ博物館』 文春新書.
- 大堀哲編著 2002, 『司書・学芸員をめざす人への生涯学習概論』 樹村房.
- 徳島博物館研究会編著 2002, 『地域に生きる博物館』 教育出版センター.
- 村井良子編著 2002, 『入門ミュージアムの評価と改善 - 行政評価や来館者調査を戦略的に活かす -』 アム・プロモーション.
- 岡部あおみ・神野善治・杉浦幸子・新見隆 2002, 『ミューゼオロジー入門』 武蔵野美術大学出版局.

- 嘉田由紀子 2002, 『環境学入門 9 環境社会学』岩波書店.
- エコ・コミュニケーションセンター編著 2002, 『ファシリテーター入門 - 環境教育から環境まちづくりへ』つげ書房新社.
- 藤森一好 2002, 『はみだし学芸員の NY 留学 - 美術館からの脱出』ペリかん社.
- 並木美砂子 2002, 『展示観覧体験の理解 - 動物園来園者のコミュニケーション分析を中心に -』平成 13 年度博士論文, お茶の水女子大学大学院人間文化研究科.
- 金山喜昭 2003, 『博物館学入門地域博物館学の提唱』慶友社.
- 石森秀三 2003, 『博物館概論 (改訂版)』放送大学教育振興会.
- 水藤真 2003, 『博物館を考える 3』山川出版社.
- 諸岡博熊 2003, 『みんなの博物館 マネジメント・ミュージアムの時代』日本地域社会研究所.
- 岡部あおみ監修 2003, 『ミュゼオロジー実践篇 - ミュージアムの世界へ』武蔵野美術大学出版局.
- (財) 東京都歴史文化財団 2003, 『江戸東京たてもの園解説本 - 収蔵建造物のくらしと建築』
(財) 東京都歴史文化財団.
- (財) 東京都歴史文化財団江戸東京たてもの園 2003, 『江戸東京たてもの園ガイドブック』
(財) 東京都歴史文化財団江戸東京たてもの園.
- 上山信一・稲葉郁子 2003, 『ミュージアムが都市を再生する - 経営と評価の実践』日本経済新聞社.
- 溝上智恵子 2003, 『ミュージアムの政治学 - カナダの多文化主義と国民文化』東海大学出版会.
- 青木豊 2003, 『博物館展示の研究』雄山閣.
- 松宮秀治 2003, 『ミュージアムの思想』白水社.
- 出島二郎 2003, 『長浜物語 町衆と黒壁の 15 年』NPO 法人まちづくり役場.
- 山木朝彦・仲野泰生・菅章編著 2003, 『美術鑑賞宣言』日本文教出版.
- 全国重文民家の集い編著 2003, 『重文民家と生きる』学芸出版社.
- 廣瀬隆人編著 2004, 『博物館学シリーズ別巻 博物館学基礎資料』樹村房.
- 石森秀三 2004, 『博物館資料論 (改訂版)』放送大学教育振興会.
- 石森秀三 2004, 『博物館経営・情報論 (改訂版)』放送大学教育振興会.
- 水嶋英治編著 2004, 『博物館学を学ぶ人のためのミュージアムスタディガイド - 学習目標と学芸員試験問題 (改訂増補版)』アム・プロモーション.
- 鈴木真理編著 2004, 『博物館学シリーズ 1 博物館概論 (改訂)』樹村房.
- 岩渕潤子 2004, 『美術館で愛を語る』PHP 新書.
- 環瀬戸内地域 (中国・四国地方) 自然史系博物館ネットワーク推進協議会編著 2004, 『「地域の自然」の情報拠点 自然史博物館 - 科学系博物館活用ネットワーク推進事業報告集』高陵社書店.

- 塚原正彦 2004, 『ミュージアム集客・経営戦略 - 人を呼ぶ知的ふれあい見世物館づくりのノウハウ (増補改訂版)』 コミュニティ・ブックス.
- 安村敏信 2004, 『美術館商売 - 美術なんて…と思う前に』 勉誠出版.
- 花木啓祐 2004, 『環境学入門 10 都市環境論』 岩波書店.
- 長谷川栄 2004, 『深化するエコ・ミュージゼ - 超領域の環境づくり』 芸術書院.
- 井出洋一郎 2004, 『新版・美術館学入門』 明星大学出版部.
- 三木美裕 2004, 『キュレーターからの手紙 - アメリカ・ミュージアム事情』 アム・プロモーション.
- 国立歴史民俗博物館編 2004, 『歴史展示のメッセージ』 アム・プロモーション.
- 清水久夫 2005, 『博物館学 Q&A 博物館・美術館のウラ・オモテ』 慶友社.
- 布谷知夫 2005, 『博物館の理念と運営 利用者主体の博物館学』 雄山閣.
- 関秀夫 2005, 『博物館の誕生 町田久成と東京帝室博物館』 岩波書店.
- 小泉雅弘 2005, 『下町の学芸員奮闘記 - 文化行政と生涯学習の最前線』 文芸社.
- 神奈川県博物館協会編 2005, 『学芸員の仕事』 岩田書院.
- 鈴木克美・西源二郎 2005, 『水族館学 - 水族館の望ましい発展のために』 東海大学出版会.
- 椎名仙卓 2005, 『日本博物館成立史 - 博覧会から博物館へ』 雄山閣.
- 美馬のゆり・山内祐平 2005, 『「未来の学び」をデザインする - 空間・活動・共同体』 東京大学出版会.
- 井出洋一郎 2005, 『世界の博物館なぞの収集』 青春出版社.
- 徳村丞 2005, 『ミュージアム (図書館、博物館、美術館) の紛争を考える』 近代文芸社.
- 中村元 2005, 『水族館の通になる - 年間 3000 万人を魅了する楽園の謎』 祥伝社新書.
- 岡部あおみ編著 2005, 『アートが知りたい - 本音のミュージゼオロジー』 武蔵野美術大学出版局.
- 清水慶一・三浦彩子編著 2006, 『建築「見どころ」博物館ガイドブック - 課外授業へようこそ』 彰国社.
- 青木豊編著 2006, 『史跡整備と博物館』 雄山閣.
- 小笠原喜康・チルドレンズ・ミュージアム研究会編著 2006, 『博物館の学びをつくりだす - その実践へのアドバイス』 ぎょうせい.
- 長谷川栄 2006, 『美術館学ツーリズム - 24 時間のミュージゼオロジー』 鹿島出版会.
- 並木誠士・中川理 2006, 『美術館の可能性』 学芸出版社.

付録資料



ご来館の皆様へ

ただいま日本科学未来館 MeSci では、環境共生型住宅の「茅葺住宅」を対象にした来館者調査を実施しております。この調査は、お客様の茅葺住宅内での行動を調査し、展示物がもつ情報の伝わり方を明らかにして、よりよい展示物をつくり、ミュージアム活動に役立てるための調査です。

調査期間中、お客様にアンケートのお願いや、茅葺住宅内での行動調査にご協力いただく場合がございますが、調査の目的をご理解のうえ、何卒ご協力賜れますようお願い申し上げます。

平成 15 年 12 月

日本科学未来館 (MeSci)

館長 毛利 衛

調査実施者

横浜国立大学大学院建築計画研究室 助教授 大原一興

横浜国立大学大学院博士後期課程 (調査責任者) 江水是仁

日本科学未来館にて観覧者に配布したチラシ

御来園の皆様へ

ただいま江戸東京たてもの園では、「八王子千人同心組頭の家」を対象にした来園者調査を実施しております。この調査は、お客様の住宅内での行動を調査し、展示物がもつ情報の伝わり方を明らかにし、よりよい展示物をつくり、ミュージアム活動に役立てるための調査です。

調査期間中、お客様にアンケートのお願いや、住宅内での行動調査にご協力いただく場合がございますが、調査の目的をご理解のうえ、何卒ご協力賜れますようお願い申し上げます。

平成 18 年 5 月

調査実施者

横浜国立大学大学院工学府 教授 大原一興

横浜国立大学大学院博士後期課程 江水是仁

江戸東京たてもの園八王子千人同心組頭の家にて観覧者に配布したチラシ (寒冷期・温暖期、なお日付は温暖期に実施したもの)

御来園の皆様へ

ただいま江戸東京たてももの園では、「八王子千人同心組頭の家」を対象にした来園者調査を実施しております。この調査は、住宅内での行動を調査し、展示物がもつ情報の伝わり方を明らかにし、よりよい展示物をつくり、ミュージアム活動に役立てるための調査です。

調査期間中、お客様には、「建物に興味があるので、解説をして欲しい」「当時の人々の暮らしに興味があるので、解説をして欲しい」「自分のペースで観覧したいので、声をかけないでほしい」といった、お客様のリクエストに合わせたシールを貼っていただき、住宅内での行動調査やアンケート調査などにご協力いただく場合がございますが、調査の目的をご理解のうえ、何卒ご協力賜れますようお願い申し上げます。

平成 18 年 5 月

調査実施者

横浜国立大学大学院工学府 教授 大原一興

横浜国立大学大学院博士後期課程 江水是仁

江戸東京たてももの園八王子千人同心組頭の家にて観覧者に配布したチラシ（温暖期・観覧者の意思表示をお願いした際に配布したもの）

調査日 2005年3月13日

調査時間 1:04 ~ 終了 1:43

男1=幼児 シブコ=小学校低学年 (1~3年)

シロコ=小学校高学年 (4~6年) 中=中学生

1]=高校生 U]=大学生 2=20歳代 3=30歳代

4=40歳代 5=50歳代 6=60歳代 E=それ以上

調査場所 江戸東京たてももの園八王子千人同心組頭の家

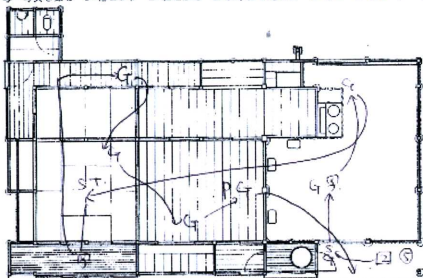
調査者 W P

調査対象 (調査 父 (母) 子ども (名) 准父母と孫 (祖父 祖母 孫 名) 夫婿 カップル 友人以上 一人 学校など団体

□=男性 ○=女性 ▲=ボランティア (男性) △=ボランティア (女性)

S=立ち止まる R=パネルを読む 写=写真を撮る P=腰をさす L=膝ががる B=指示板を鳥見る W=歩く T=話す ノ=ノートをとる

○△=ボランティアの話を聞き取る



No	時間(秒)	行	動	詳	細
S/G	20"			入ロのとこで、ボランティアに声をかけられ、案内を依頼する。	
女児	7"			かまぼこを写すところ。	
G	110"			かまぼこの中を覗き込む。	
S+	2"			かまぼこの前を立ち止まる。	
写	11"			外の写真を撮る。	
G	43"			医の机について説明を受ける。	
G	10"			客の入ロについて説明。	
P/G	52"			柱や梁の材木について、説明を受ける。	
家族全体を、ボランティアの人と同行して、説明を受けた。					

江戸東京たてももの園八王子千人同心組頭の家 (寒冷期) 調査票記入例

調査日 2006年5月21日

陣地 12:29 ~終了

:36

B-幼児 シア-小学校低学年(1~3年)

調査場所 江戸東京たてももの園八王子千人同心組頭の家

25"

シニ-小学校高学年(4~6年) ジ-中学生

採集者



H=高校生 U=大学生 2=20歳代 3=30歳代

シールの色 blue + yellow

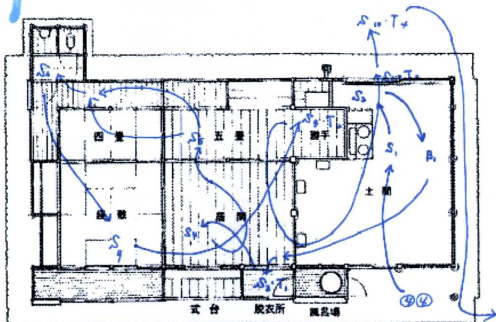
4=40歳代 5=50歳代 6=60歳代 E=それ以上

親子連れ(両親 父 母 子ども 名) 祖父母と孫(祖父 祖母 孫 名) 夫婦 カップル 一人暮らし 一人 学校など団体

□=男性 ○=女性 ▲=ボランティア(男性) △=ボランティア(女性)

S=立ち止まる H=パネルを読む 写=写真を撮る P=指をさす L=資料を見る B=展示物を見る W=座る T=話す N=ノットをとる

□=ボランティアの話を聞き入る



No	時間(秒)	行	動	詳	細
S ₁	7"	右まわしを見る			
S ₂	9"				
B ₁	5"	パネルを見る			
S ₃	32"	風呂を見たり二人で話す			
T ₁					
S ₄		寝るの姿を見る			
S ₅	5"				
S ₆	7"	トイレの外を見る			
S ₇	8"	茶室を見る			
S ₈	16"	くわを手に取りに行き、勝手に道具に興味を示す			
T ₂	20"	それについてボランティアの人と話す			
S ₉	51"	戸外へ少し出て屋根裏を見上げる			
T ₃					
S ₁₀	13"	外へ出る木を見たりそれについて話す			
S _T					

江戸東京たてももの園八王子千人同心組頭の家(温暖期) 調査票記入例

調査日時 2003年12月22日 10:25 ~ 10:47

調査場所
調査者

12

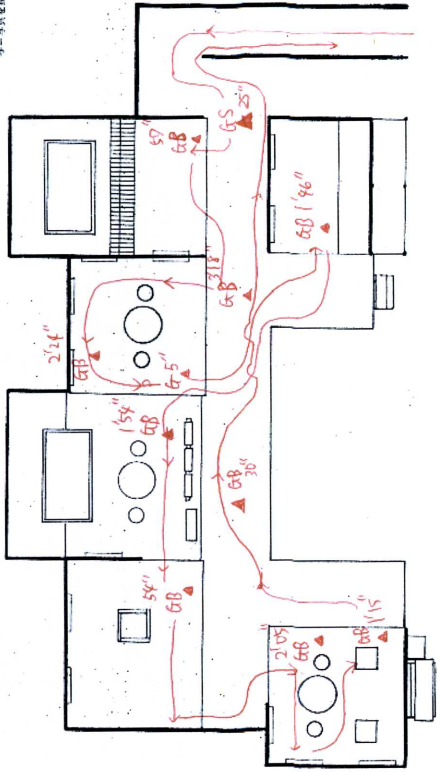
行動観察調査票

別室のカメラの
電源は自由なコンセント
カプセル

親子連れ(両親) 父 子 ども 名) 祖父母之孫(祖父 祖母 孫 名) 夫婦
友人同士 一人

□=男性 ○=女性
△=ボランティア(男性) △=ボランティア(女性)
★=展示解説員(男性) ☆=展示解説員(女性)

印=幼児 シテ=小学校低学年(1~3年生) シコ=小学校高学年(4~6年生)
J=中学生 H=高校生 U=大学生
2=20歳代 3=30歳代 4=40歳代 5=50歳代 6=60歳代 8=それ以上
S=立ち止まる P=階をさす B=展示物を見る W=語る T=話す
R=パスカードを掲げ L=撮影がる O=ボランティアや解説員の話を聞き入る
写=写真を撮る ノ=ノートをとる

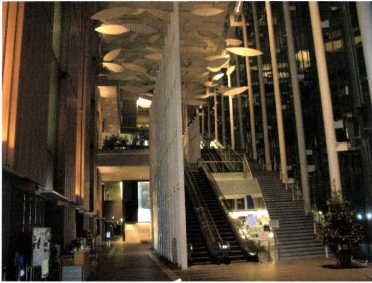


採集日
採集場所
採集者
採集番号

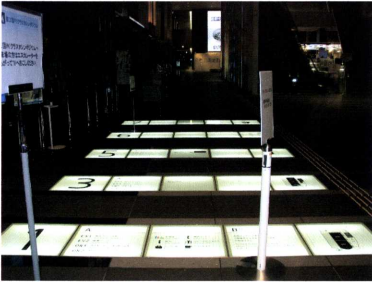
No	動作記号	行	動	特	徴
	GS	農作物全体を採る			25"
	GB	植栽を採る			59"
	GB	木全体を採る			木を採る 3'18"
	GB	草を採る			草を採る
	P	木に(木の)を採る			2'24"
	GE	土壌に採る			5"
	GB	木の断面を採る			断面を採る 1'46"
	GB	木の断面を採る			断面を採る 1'54"
	GB	天井を採る			天井を採る 54"
	GB	植栽を採る			植栽を採る 2'05"
	GB	木を採る			木を採る 1'15"
	GB	木を採る			木を採る 30"



日本科学未来館正面入口



日本科学未来館エントランス



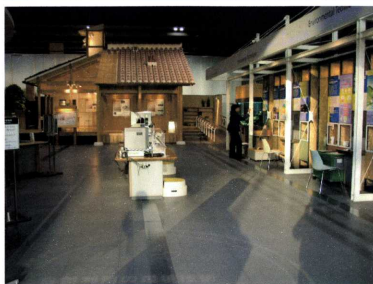
日本科学未来館エントランス



1階展示場入口付近



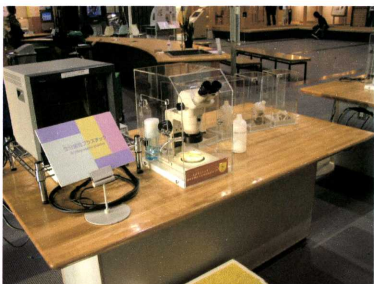
KAZ（電気自動車）



1階展示場内その1



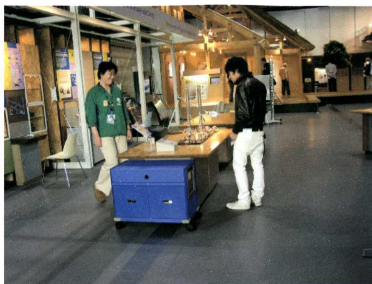
1階展示場内その2



1階展示場内その3



1階展示場内その4



1階展示場内その5



1階展示場内その6



1階展示場内その7



Geo-Cosmos (地表面温度)



Geo-Cosmos (30日間雲画像)



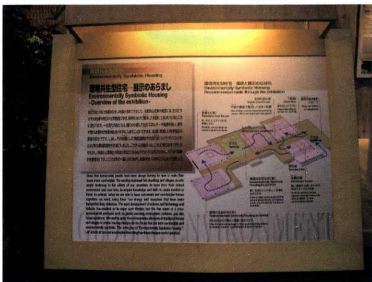
Geo-Cosmos (火星)



環境共生型住宅その1



環境共生型住宅その2



展示のあらましパネル



環境共生型住宅下駄箱付近



京都・町屋その1



京都・町屋その2



京都・町屋の解説パネル



沖縄の間



沖縄の間・解説パネルその1



沖縄の間・解説パネルその2



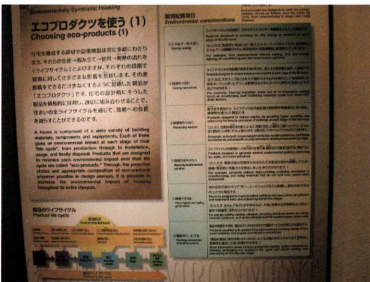
夏間その1



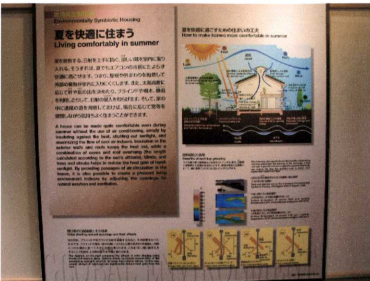
夏間その2 (屋根緑化)



夏間・解説パネルその1



夏間・解説パネルその2



夏間・解説パネルその3



夏間・窓の様子



テラス



テラス・解説パネル



茅葺



茅葺・解説パネルその1



茅葺・解説パネルその2



茅葺・解説パネルその3



冬間・その1



冬間・その2



冬間・解説パネルその1



冬間・解説パネルその2



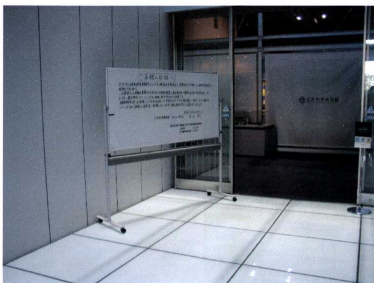
冬間・解説パネルその3



冬間・蓄熱層



環境と共生するまちをつくる



調査を告知する掲示板



江戸東京たてもの園入口



江戸東京たてもの園内その1



江戸東京たてもの園内その2



江戸東京たてももの園内その3



江戸東京たてももの園内その4



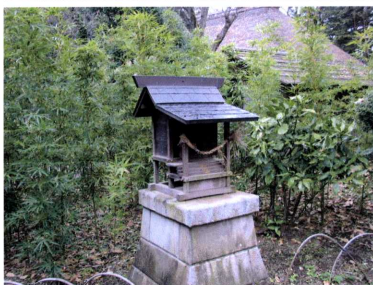
江戸東京たてももの園内その5



江戸東京たてももの園内その6



江戸東京たてももの園内その7



江戸東京たてももの園内その8



組頭の家その1（玄関付近）



組頭の家その2（縁側付近）



組頭の家その3（西側から撮影）



組頭の家その4 (北側・便所)



組頭の家その5 (北側)



組頭の家その6 (入口)



組頭の家その7 (解説パネル)



組頭の家その8 (カマド)



組頭の家その9 (土間)



組頭の家その 10(カマド・土間)



組頭の家その 11 (天井)



組頭の家その 12 (居間)



組頭の家その 13 (勝手)



組頭の家その 14 (五畳)



組頭の家その 15 (四畳)



組頭の家その 16 (便所)



組頭の家その 17 (座敷・四畳)



組頭の家その 18 (座敷・床の間)



組頭の家その 19(縁側)



組頭の家その 20 (式台)



組頭の家その 21 (居間)



組頭の家その 22 (風呂場)



組頭の家その 23 (軒)



組頭の家その 24 (お手玉実演)



組頭の家その 25 (パネル 1)



組頭の家その 26 (パネル 2)



組頭の家その 27 (パネル 3)



組頭の家その 28 (パネル 4)



組頭の家その 29 (パネル 5)



組頭の家その 30(パネル 6)



組頭の家その 31 (調査の様子)



組頭の家その 32(調査の様子)



組頭の家その 33 (調査の様子)

研究業績



研究業績一覧

■ 学術論文

論文題目	共著者	掲載誌	巻号頁	発行日
ミュージアムが周辺地域に与える影響—長谷川町子美術館来館者分析を例に		日本ミュージアム・マネジメント学会 研究紀要	No.8 pp.53-63	2004.3
ミュージアムにおける民家の室内展示に対する来館者の観覧行動に関する研究—日本科学未来館・環境共生型住宅の事例	大原一興	日本建築学会計画系 論文集	No.600 pp.41-48	2006.2
屋外民家展示施設における来園者の観覧行動に関する研究—江戸東京たてもの園「八王子千人同心組頭の家」の事例より	大原一興	日本建築学会計画系 論文集	No.609 pp.33-39	2006.11
屋外展示民家における興味が異なる来場者の観覧行動に関する研究—温暖期における江戸東京たてもの園「八王子千人同心組頭の家」の事例	大原一興	博物館学雑誌	No.32-1 pp.13-43	2006.12

■ 学会発表

発表題名	共著者	発表学会	巻号頁	実施日
博物館が周辺地域に与える影響—長谷川町子美術館の事例		第60回2001年度日本地理学会秋季学術大会	No.60 p.142	2001.9
ミュージアム来館者が周辺地域に与える影響—長谷川町子美術館の事例	大原一興	2003 年度日本建築学会 大会学術講演	E-1 pp. 305-306	2003.9
理工系博物館における民家展示に対する来館者の観覧行動		第30回全日本博物館学会研究大会	学会ニュース No.68	2004.6
理工系博物館における民家展示に対する来館者の観覧行動	大原一興	2004 年度日本建築学会 大会学術講演	E-1 pp. 209-210	2004.8
理工系博物館・民家展示の空間把握行動に関する考察	大原一興	2005 年度日本建築学会 大会学術講演	E-1 pp. 553-554	2005.9
屋外民家展示施設における来園者の観覧行動	大原一興	第32回全日本博物館学会研究大会	学会ニュース No.77	2006.6
屋外民家展示施設における来園者の観覧行動に関する研究	大原一興	2006 年度日本建築学会 大会学術講演	E-1 pp. 455-456	2006.9

■ 著書

著書名	共著者	担当項目	出版社	発行年月
地球のために人はなにができるの？(未来をひらく最先端科学技術2)	毛利衛監修 小山彩子・山科太加美・鈴木淑恵・竹中利明	環境共生住宅 - 環境を考えた建物ってどんなもの？ pp.30-35	岩崎書店	2004.4
知識から語りへ - エデュケーターの役割と変わりゆくミュージアム (From Knowledge to Narrative-Educators and the Changing Museum) 翻訳	藤谷哲編訳 住田朋久・岩崎公弥子・岡橋毅	主に第1章	高陵社	20079 予定
博物館学事典	博物館学事典編纂委員会	まちかど博物館 まちじゅうまるごと博物館	雄山閣	20083 予定

■ 寄稿

寄稿名	共著者	掲載誌	巻号頁	発行年月
2001 年度第7回日本エコミュージアム研究会 in あさんライブミュージアム基調講演「伝統の継承とALMづくり」報告		日本エコミュージアム研究会ニューズレター	No.19	2001.8
〈江戸東京博物館・江戸東京たてもの園企画展〉「東京建築展」見学記		住宅会議	No.54	2002.3
三浦半島エコミュージアム・住民が魅力を感ずるまちづくり		三浦半島エコミュージアムかわら版	第2号	2003.1

■ 通訳

発表講演	発表者	講座名	主催者	発表年月
チェコにおけるエコミュージアムプロジェクト	ヤクブ・チェルニ	2006 三浦半島まるごと博物館連絡会フォーラム～エコミュージアム活動団体の集い～	三浦半島まるごと博物館連絡会・神奈川県横須賀三浦地域県政総合センター	2006.3.18
チェコにおけるエコミュージアムプロジェクト	ヤクブ・チェルニ	公開講座「市民参加と博物館～世界・アジアそして三重のエコミュージアム～」	三重県立博物館・三重県地域振興部資源活用室・宮川流域ルネッサンス協議会	2006.3.21

■ 在学中のミュージアムなどにおける業績

業務名	実施機関	業務内容	実施日
日本科学未来館新規展示物を用いたデモンストラーション教材開発	日本科学未来館	展示物の持つ情報を来館者に伝え、科学技術に関するコミュニケーションを図るために、日本科学未来館展示物「燃料電池」「触れる地球」を用いた、ワークショップを企画・開発し、運営	2002.5
日本科学未来館展示物に関する展示解説マニュアル作成	日本科学未来館	日本科学未来館展示物の解説マニュアルを作成。開館してからそのときまで存在しなかったマニュアルを作成し、新年度入社する解説員や、異動して他の展示場を担当する解説員の教育に活用	2003.2
横浜美術館企画展「サビーヌ・デルクール展」運営参画	横浜美術館・横浜国立大学	フランスの写真家サビーヌ・デルクール氏、横浜美術館・横浜国立大学が共同で展示計画などの運営に参画した初めての試みに参加。美術館での勤務経験を活かし、照明計画・展示計画を担当	2005.6
第49回全国特別活動研究協議会における講演	日本科学未来館 全国特別活動研究協議会	全国の小・中・高校教員が集まる研究協議会において、日本科学未来館館長毛利衛氏講演会が開催された。館長講演の一部を使って、学校機関とミュージアムの連携を自分の研究と重ねて講演	2005.8
2005年度日本科学未来館夏休み特別実演「発見！いろんな未来館」企画運営	日本科学未来館	先端の土木・建築技術を用いて造られた日本科学未来館自体を一つの展示物と見立て、地盤改良・免震構造・ランドスケープ・デザインに纏わる研究成果を来館者に伝える館内ツアーを企画運営	2005.8
サイエンスカフェ「理想のミュージアムへの挑戦 - 未来館を舞台とする研究者」企画運営	日本科学未来館	日本科学未来館をフィールドワークとした研究から、ミュージアム・マネージメントや来館者研究の魅力を、私自身が講師となり、カフェという、堅苦しくない場で話す機会を企画運営	2006.8

後書きと謝辞



1997年6月、私は長谷川町子美術館で学芸員実習を行いました。ミュージアムの現場で、様々な実務を経験してみたところ、私が今までミュージアムに対して漠然と思っていたこととは全く違い、新鮮な驚きの連続でした。収集してある「モノ」を資料とするために、様々な研究がなされていること、資料をできるだけ最良の条件で保存すること、資料運搬の心得、展示資料の見せ方、マスコミへの企画展の告知など、そこには実践という教材の宝がころがっていました。そして一番驚いたのは、ミュージアム来館者は、実に多様なコンテクストを持った人が来ており、展示物を見て、十人十色の反応をする、ということを知ったことでした。また同様に、ミュージアム来館者が最寄り駅からぞろぞろと歩き、商店街をウィンドウショッピングしている様子などを見たことで、周辺の地域社会に来館者は大きな影響を与えていることにも驚きました。ミュージアムは、資料に関する研究、すなわち資料の収集、保管、調査研究、展示する活動も大切ではありますが、展示物を観覧する人たちのことを中心にすえたマネジメントが大切になると、その時直感いたしました。

私の研究の原点は、この学芸員実習を通して経験したことから端を発しています。展示物を通して、十人十色のものとのとらえ方や価値観が見えてくる。それらを比較することで、今度は自分の価値観が相対化してくる、そして多様な価値観の面白さを感じる…こんな経験ができるのは、ミュージアムしかないだろう。だったら、多くの人に多様なものの見方や多様な価値観を感じるために、どうしたらいいのだろう、また、そういった活動が、ミュージアムの周辺地域に広がることで、ミュージアムをきっかけにして、地域社会とミュージアムの関係性をもっと機能的にするにはどうしたらいいのだろう…このようにして、ミュージアム研究に傾倒していきました。実際、学芸員実習の後、博士前期（修士）課程に進学し、長谷川町子美術館に非常勤で勤務をしながら、同館来館者に対するアンケート調査の分析し、「長谷川町子美術館が周辺地域に与えた影響」というタイトルで、修士（地理学）を取得いたしました。また修士課程在学中、偶然にも「エコミュージアム」というものを知る機会がありました。従来の概念とは異なる、極めて斬新な視点に惹かれました。「エコミュージアム」の概念を下にしたミュージアムに関する研究を進めたい思いはありましたが、修士修了後、某歴史系博物館に就職が決まっていたので、その思いを抑えて、博物館に就きました。

しかしながら、勤めたところの博物館は、1日の来館者よりも、職員の数が多い博物館でした。ある意味、日本のミュージアムの現状を、長谷川町子美術館と、この歴史系の博物館を比較することで、ミュージアム自体を相対化することができた経験でした。おかげで、ミュージアム研究の深化を痛感することができました。このような経緯があり、日々の業務の中で、押さえ込んでいた思いが爆発し、「エコミュージアム」の概念に基づく研究をされており、来館者に関する研究を進めている大原先生の門を叩くことができました。地理学という異なる分野をコンテクストに持つ私を、辛抱強くご指導いただきました大原一興先生には、感謝の念でいっぱいです。また、研究環境を改善し、研究へのご支援をいただきました、小滝一正横浜国立大学名誉教授に感謝申し上げます。

本研究を進めるにあたり、ミュージアムの現場に身を置き、そこで感じた疑問や問題点を常に感じる必要があると感じました。歴史系の博物館の職を辞し、大原先生の研究室に研究生として入学した年の5月、偶然にも、宇宙飛行士の毛利衛氏が館長を勤める、新しいタイプの科学館がお台場に開館するので、その際、来館者と展示物を媒介としながらコミュニケーションをとる展示解説

員（インタープリター）を募集するというを知りました。幸か不幸か採用されたことで、再びミュージアムの現場で働く機会を得られたのと同時に、美術館、歴史系博物館、理工系博物館での勤務経験を有することとなり、文系・理工系の壁を超えてミュージアムを比較し、相対化する機会を得ることとなりました。このように私は、人生の進路の要所要所に、ミュージアムに関する研究を運命づけられるような出来事が起こっております。今後、私の研究で得た知見は、ミュージアムに関係する分野に還元していく所存です。

論文をまとめるにあたり、多くの方々からご助言やご指導を頂きました。東海大学の西源二郎先生には、博物館学的視点から適切にご助言ご指導を賜りました。また横浜国立大学の田村明弘先生、吉田綱市先生、佐土原聡先生、大野敏先生には、論文審査において、環境工学、建築史、都市環境の視点から、貴重なご意見を賜りました。その他、國學院大學の内川隆志先生、桜美林大学の浜田弘明先生、玉川大学の菅野和郎先生、現滋賀県知事（前京都精華大学）の嘉田由紀子先生、法政大学の馬場憲一先生、NPO 法人環境文化のための対話研究所の嵯峨創平先生、千葉市動物公園並木美砂子先生、海の中道海洋生態科学館館長高田浩二先生から、研究会や学会などで、励ましのお言葉をいただきました。そして本研究にご理解いただき、調査にご協力いただいた、江戸東京たてもとの園専門調査員高橋英久氏ならびに同園関係者の皆様、日本科学未来館館長毛利衛氏ならびに同館関係者の皆様、横浜国立大学建築計画研究室の皆様には、心から感謝いたします。またお互いに励ましあい、苦楽を共にしました金守美さん、黄文さん、佐藤哲さん、松橋圭子さんと共に博士後期課程を修了できることは、この上ない喜びです。また國學院大學の須藤友章さん、お茶の水女子大学の菅井薫さんは、大学は違えども、ミュージアム研究する仲間として、大変心強い存在でした。そして私の研究を、ことあるごとにサポートいただき、また博士論文作成過程を共にした、藤岡泰寛先生にも感謝いたします。

最後になりますが、自宅から研究室に通えたこと、身の回りのことを気にせず研究を進められたのは、両親の支援があつてこそです。したがって本研究の成果は、両親の支援の上に成り立っており、本書を捧げることで感謝の意を表したいと思います。

なお、本研究で取り上げた環境共生型住宅が含まれる日本科学未来館1階展示場は、特別展示場の拡張により、2007年1月8日をもって閉鎖されました。あるときは研究者の立場で、またあるときは未来館インタープリターという立場で、どちらの立場でも主体的にかかわっただけに、万感交至る思いがあります。しかし研究成果という形で残ること、そしてその成果が活かされることで、その思いに報いたいと思います。

2007年3月

みなとみらいの夜景と夕闇に染まる富士山がみえる横浜国立大学建築棟7階より

江水是仁